

三加和町文化財調査報告 第11集

田中城跡

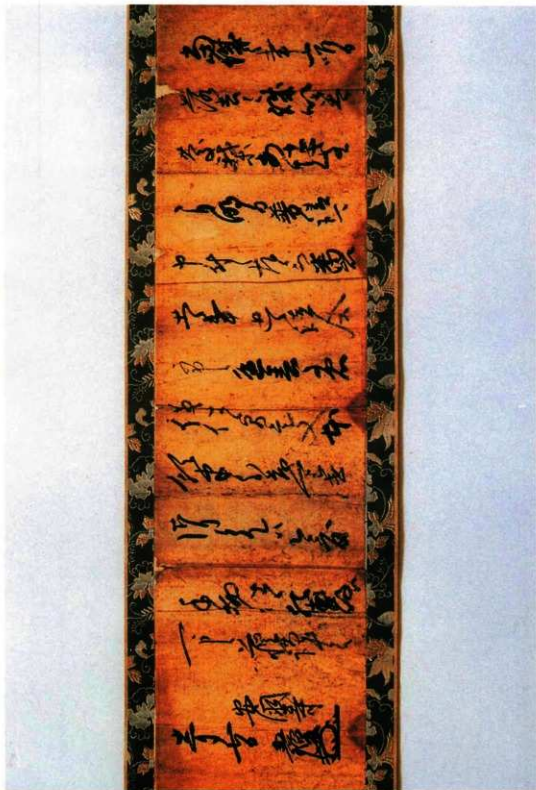
XI

— 10年間の調査報告 —

1997

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会





田中城落城を伝える安国寺惠瓊の書簡
(袖留木文書)





発掘状況（上：主郭、下：空堀）



出土遺物



整備状況（上：主郭、下：空堀）

序

教育委員会では、県内の中世城を代表する「田中城跡」の重要性を考え、城の解明を行い、その保存と活用を目的として、昭和61年度から国庫・県費の補助を受けて発掘調査を継続してきました。

その調査も平成7年度に記念すべき10年目を迎えましたが、この10年間には、専門調査委員も驚く程の大土木工事を想定させる空堀（V字堀）をはじめ最近類例が報告されつつある連棟式兵舎跡・県内の中世城では初めての発見となった石倉など当時の城の様子を彷彿とさせるような様々な遺構が発見されてきました。また、平成元年に「迎春・和仁仕寄陣取図」が山口県立文書館で発見されたことも大きな成果です。

最近では、各地で中世城の調査・整備が行われるようになりましたが、当時県内では、本町の田中城跡が最初で、その結果全国から注目されるようになり、視察や見学も年々増加してきており、中世城研究の先駆けになったのではないかと自負しています。

今回、10年間の成果をまとめるに当たり、東京大学名誉教授の石井進先生、鶴見大学の大三輪龍彦先生を始め4名の専門調査委員の先生方に玉稿をいただき感謝しております。

しかし、「田中城跡」の調査が10年目を迎えたといっても、全体計画のようやく折り返し点に達したところであり、まだまだ先の長い調査になると思います。今後とも、専門調査委員の先生方をはじめ関係者および地元の皆様方の、これまで同様のご指導・ご協力をお願い致します。

この報告書が、これからの中世城研究の一助になれば幸いに存じます。

平成9年3月

三加和町教育長 今村 憲夫

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、昭和61年度～平成7年度まで第Ⅰ次5ヵ年、第Ⅱ次5ヵ年の計10年計画で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

すでに、三加和町文化財調査報告書第1～10集として刊行しているが、発掘成果の全てを記載することが無理であったため、ここに改めて報告することにした。

なお、昭和61年度調査の成果については、前調査者の池田氏の原稿をそのまま引用した。(第Ⅲ章 第2節)

2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、田添夏喜・池田道也(以上昭和61年度)・黒田裕司(昭和62度～平成7年度)がその任にあたった。
3. 遺物・遺構の実測・製図は池田・居石裕臣・杉村恵美・小林亜紀・坂本由美(以上昭和61年度)・浦田信智(昭和62・63年度)・北原美和子(平成元年度)・黒田(昭和62年度～)が行い、拓本は小山正子(昭和62年度)・笠間いつ子(昭和63・平成元年度)・塩田喜美子(平成2年度)・黒田(平成3年度～)が行った。
4. 調査時の写真撮影は黒田が、遺物写真は浦田(昭和62・63年度)と黒田が行った。
5. 調査の方法および遺構・遺物については、専門調査員のご教示を得た。
6. 本書で使用した略記号は次のとおりである。
SB-掘立柱建物跡 SD-溝遺構 SK-土墳
SX-不定形土墳 SI-竪穴住居跡(弥生時代後期)
7. 出土遺物は、三加和町教育委員会が保管し、一部三加和町公民館に展示している。
8. 本書の執筆・編集は黒田が行った。

本文目次

第I章 序 説	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査の組織	3
第3節 調査経過	4
(1)昭和61年度調査	4
(2)昭和62年度調査	5
(3)昭和63年度調査	5
(4)平成元年度調査	6
(5)平成2年度調査	7
(6)平成3年度調査	8
(7)平成4年度調査	9
(8)平成5年度調査	11
(9)平成6年度調査	13
(10)平成7年度調査	13
第II章 遺跡の立地と環境	15
第1節 遺跡の立地	15
第2節 歴史的環境	15
第3節 田中城の歴史	22
第4節 国衆一揆	23
第5節 隣接市町の国衆一揆関連中世城	24
(1)城村城跡	24
(2)西付城跡	27
(3)葛嶽城跡	28
(4)腰部館跡	32
第III章 調査の成果	38
第1節 調査の概要	38
第2節 昭和61年度調査の成果	39
1. 周囲の環境と調査経過	39
2. 遺構・遺物	42
3. 小結	49
第3節 昭和62年度調査の成果	50

1. 檢出遺構.....	50
(1)掘立柱建物跡.....	50
①1号掘立柱建物跡 (SB-01)	50
②2号掘立柱建物跡 (SB-02)	50
③3号掘立柱建物跡 (SB-03)	57
④4号掘立柱建物跡 (SB-04)	58
⑤5号掘立柱建物跡 (SB-05)	58
⑥6号掘立柱建物跡 (SB-06)	61
⑦7号掘立柱建物跡 (SB-07)	62
⑧8号掘立柱建物跡 (SB-08)	62
⑨9号掘立柱建物跡 (SB-09)	63
⑩10号掘立柱建物跡 (SB-10)	64
⑪11号掘立柱建物跡 (SB-11)	65
⑫12号掘立柱建物跡 (SB-12)	65
⑬13号掘立柱建物跡 (SB-13)	66
⑭14号掘立柱建物跡 (SB-14)	67
(2)溝遺構.....	67
①1号溝遺構 (SD-01)	71
②2号溝遺構 (SD-02)	71
③3号溝遺構 (SD-03)	71
④4号溝遺構 (SD-04)	71
(3)土塋.....	71
①1号土塋 (SK-01)	71
②2号土塋 (SK-02)	72
③3号土塋 (SK-03)	72
④4号土塋 (SK-04)	72
⑤5号土塋 (SK-05)	72
⑥6号土塋 (SK-06)	72
(4)竪穴住居跡.....	73
①1号竪穴住居跡 (SI-01)	73
②2号竪穴住居跡 (SI-02)	74
2. 出土遺物.....	74
3. 小結.....	81

第4節	昭和63年度調査の成果	82
1.	検出遺構	82
	(1)土壌(SK-01)	82
	(2)不定形土壌	85
	①1号不定形土壌(SX-01)	86
	②2号不定形土壌(SX-02)	86
	③3号不定形土壌(SX-03)	86
	(3)溝遺構	86
	(4)空堀	86
2.	出土遺物	89
3.	小結	105
第5節	平成元年度調査の成果	106
1.	検出遺構	106
	(1)空堀	106
	①北側断面について	106
	②南側断面について	114
	(2)土壌	114
	①1号土壌(SK-01)	114
	②2号土壌(SK-02)	114
	③3号土壌(SK-03)	115
2.	出土遺物	116
3.	小結	117
第6節	県営園場整備事業(春富地区)の試掘調査の成果	120
第7節	平成2年度調査の成果	122
1.	検出遺構	125
	(1)欄列	125
	(2)堀跡	125
	①A-A'断面	125
	②B-B'断面	125
	③C-C'断面	125
2.	出土遺物	127
3.	小結	127
第8節	トイレ建設および登城道整備に伴う試掘調査の成果	130

(試掘－Ⅰ)	130
1. 検出遺構	130
(1)掘立柱建物跡	130
①1号掘立柱建物跡 (SB-01)	130
②2号掘立柱建物跡 (SB-02)	131
(2)堀跡	131
2. 出土遺物	131
3. 小結	131
(試掘－Ⅱ)	132
1. 出土遺物	132
2. 小結	133
第9節 平成3年度調査の成果	133
1. 検出遺構	133
(1)掘立柱建物跡	134
(2)柵列	134
①柵列Ⅰ	134
②柵列Ⅱ	134
2. 出土遺物	141
3. 小結	142
第10節 平成4年度調査の成果	145
1. 検出遺構	145
2. 出土遺物	152
3. 小結	153
第11節 平成5年度調査の成果	154
1. 検出遺構	154
(Ⅰ区)	154
(1)柱列	154
(2)石切り場	160
(3)石倉	160
①1号石倉	160
②2号石倉	160
(Ⅱ区)	160
(1)溝	160

①1号溝 (SD-01)	162
②2号溝 (SD-02)	165
③3号溝 (SD-03)	165
(2)集石	165
2. 出土遺物	165
(1)Ⅰ区	165
(2)Ⅱ区	165
3. 小結	167
第12節 平成6年度調査の成果	168
1. 検出遺構	168
2. 出土遺物	168
3. 小結	170
第13節 平成7年度調査の成果	173
1. 検出遺構	173
(Ⅰ区)	173
(1)掘立柱建物跡 (SB-01)	173
(2)溝	173
(Ⅱ区)	173
(1)井戸跡	173
(2)溝	175
①1号溝 (SD-01)	175
②2号溝 (SD-02)	176
③3号溝 (SD-03)	176
④4号溝 (SD-04)	176
⑤5号溝 (SD-05)	176
⑥6号溝 (SD-06)	176
(3)柱列	176
①柱列1	176
②柱列2	176
③柱列3	176
④柱列4	178
2. 出土遺物	178
3. 小結	181

第Ⅳ章 考 察	183
第1節 掘立柱建物跡について	183
第2節 その他の遺構について	183
第3節 まとめ	194
【付 論】	
〈付論1〉 石井 進 「[刃春・和仁仕寄陣取図]について」	201
〈付論2〉 大田 幸博 「田中城跡の出土遺物について」	214
〈付論3〉 大三輪龍彦 「平成4年度調査で検出された柱列について」	239
〈付論4〉 北野 隆 「田中城の建築について」	244
和仁・刃春氏関係史料	307
報告書抄録	323

挿 図 目 次

第1図 田中城測量図・遺構図	1
第2図 三加和町遺跡分布図	17
第3図 西付城遺構配置想定図	25
第4図 葛嶽城地形測量全体図	29
第5図 葛嶽城建物1実測図	31
第6図 隈部館全体測量図	33
第7図 隈部館遺構全体図	35
第8図 田中城地形図(グリッド配置図)	40
第9図 昭和61年度調査遺構実測図	43
第10図 出土遺物実測図	47
第11図 昭和62年度調査遺構配置図	51
第12図 1号掘立柱建物跡実測図	53
第13図 2号掘立柱建物跡実測図	55
第14図 3号掘立柱建物跡実測図	57
第15図 4号掘立柱建物跡実測図	58
第16図 5号掘立柱建物跡実測図	59

第17图	6号掘立柱建物跡実測図	60
第18图	7号掘立柱建物跡実測図	61
第19图	8号掘立柱建物跡実測図	62
第20图	9号掘立柱建物跡実測図	63
第21图	10号掘立柱建物跡実測図	64
第22图	11号掘立柱建物跡実測図	65
第23图	12号掘立柱建物跡実測図	66
第24图	13号掘立柱建物跡実測図	67
第25图	14号掘立柱建物跡実測図	68
第26图	1号溝遺構実測図	69
第27图	2号溝遺構実測図	69
第28图	1号土壙実測図	71
第29图	2号土壙実測図	72
第30图	3号土壙実測図	73
第31图	主郭出土遺物実測図 1	75
第32图	主郭出土遺物実測図 2	76
第33图	主郭出土遺物実測図 3	78
第34图	土錘実測図	80
第35图	土錘出土状況実測図	81
第36图	昭和63年度調査遺構配置図	83
第37图	土壙実測図	85
第38图	1号不定形土壙 - I 実測図	87
第39图	1号不定形土壙 - II 実測図	89
第40图	1号不定形土壙 - III 実測図	90
第41图	2号不定形土壙実測図	91
第42图	3号不定形土壙実測図	91
第43图	空堀断面実測図	92
第44图	1号土壙出土遺物実測図	93
第45图	1号不定形土壙 - I 出土遺物実測図 1	95
第46图	1号不定形土壙 - I 出土遺物実測図 2	96
第47图	1号不定形土壙 - I Pit 内出土遺物実測図	97
第48图	1号不定形土壙 - II 出土遺物実測図	98
第49图	1号不定形土壙 - III 出土遺物実測図 1	99

第50図	1号不定形土壌－Ⅲ出土遺物実測図2	100
第51図	1号不定形土壌－Ⅲ出土遺物実測図3	101
第52図	2号不定形土壌出土遺物実測図	102
第53図	3号不定形土壌出土遺物実測図	103
第54図	4号不定形土壌出土遺物実測図	104
第55図	1号溝出土遺物実測図	104
第56図	遺構に伴わない遺物実測図	104
第57図	平成元年度調査空堀測量図	107
第58図	空堀北側断面実測図	109
第59図	空堀南側断面実測図	111
第60図	3号土壌断面実測図	115
第61図	出土遺物実測図	116
第62図	高城跡Ⅳ郭北側斜面遺構実測図	118
第63図	高城跡Ⅳ郭北側斜面土層断面図	119
第64図	田中城跡と和仁川の河道	121
第65図	堀跡・櫓列実測図	122
第66図	平成2年度調査遺構配置図	123
第67図	堀跡土層断面図	126
第68図	出土遺物実測図	127
第69図	試掘Ⅰ調査区全体図	129
第70図	試掘Ⅰ－Ⅰ区遺構配置図	130
第71図	試掘Ⅱ出土遺物実測図	132
第72図	平成3年度調査遺構配置図	135
第73図	櫓列Ⅰ実測図	137
第74図	櫓列Ⅱ実測図	139
第75図	掘立柱建物跡実測図	141
第76図	出土遺物実測図	142
第77図	平成4年度調査遺構配置図	143
第78図	出土遺物実測図	152
第79図	平成5年度Ⅰ区遺構配置図	155
第80図	石切り場実測図	157
第81図	1号石倉実測図	159
第82図	2号石倉実測図	161

第83図	集石実測図	162
第84図	平成5年度Ⅱ区遺構配置図	163
第85図	Ⅰ区出土遺物実測図	165
第86図	Ⅱ区出土遺物実測図	166
第87図	Ⅱ区集石出土遺物実測図	166
第88図	平成6年度調査全体図	169
第89図	出土遺物実測図	170
第90図	平成7年度調査遺構配置図	171
第91図	掘立柱建物跡実測図	174
第92図	井戸跡実測図	175
第93図	Ⅱ区遺構配置図	177
第94図	出土遺物実測図1	178
第95図	出土遺物実測図2	179
第96図	出土遺物実測図3	180
第97図	井戸跡出土遺物実測図	181
第98図	掘立柱建物跡略図1	183
第99図	掘立柱建物跡略図2	184
第100図	連棟式兵舎跡実測図(志水A遺跡・田中城跡)	192
第101図	七戸城跡北館1991～1993年度発掘区遺構配置図	193

表 目 次

第1表	三加和町遺跡一覽表Ⅰ	16
第2表	三加和町遺跡一覽表Ⅱ	19
第3表	主郭掘立柱建物跡一覽表	68
第4表	土錘計測表	79
第5表	空堀北側断面土層観察表(平成2年度調査)	108
第6表	空堀南側断面土層観察表(平成2年度調査)	113
第7表	欄列Ⅰ-1柱穴計測表(平成3年度調査)	137
第8表	欄列Ⅰ-2柱穴計測表(平成3年度調査)	138
第9表	欄列Ⅱ-1柱穴計測表(平成3年度調査)	139
第10表	欄列Ⅱ-2柱穴計測表(平成3年度調査)	139

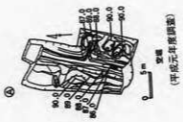
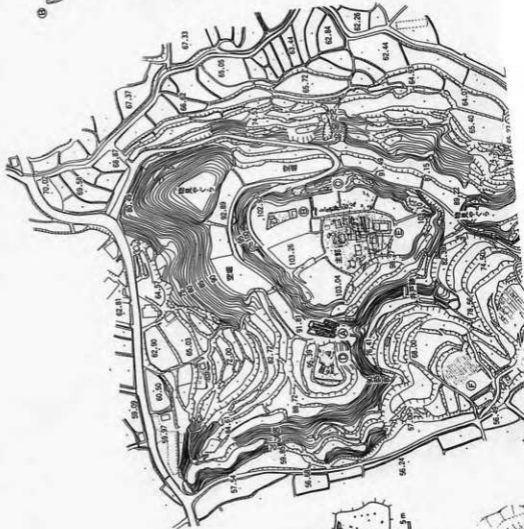
第11表	横列Ⅱ-3柱穴計測表(平成3年度調査)	140
第12表	柱穴計測表Ⅰ(平成4年度調査)	146
第13表	柱穴計測表Ⅱ(平成4年度調査)	147
第14表	柱穴計測表Ⅲ(平成4年度調査)	148
第15表	柱穴計測表Ⅳ(平成4年度調査)	149
第16表	柱穴計測表Ⅴ(平成4年度調査)	150
第17表	柱穴計測表Ⅵ(平成4年度調査)	151
第18表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅰ	185
第19表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅱ	186
第20表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅲ	187
第21表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅳ	188
第22表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅴ	189
第23表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅵ	190
第24表	掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅶ	191

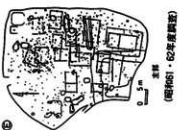
写真図版目次

図版1	(1)田中城跡遠景(北東より)	(2)田中城跡遠景(西より)	259
図版2	(1)主郭遺構全景(北より)	(2)1号掘立柱建物跡(西より)	260
図版3	(1)2・3号掘立柱建物跡・1号溝(西より)		261
	(2)1・3・4・5号掘立柱建物跡(北より)		
図版4	(1)6~11号掘立柱建物跡(北より)	(2)12・13号掘立柱建物跡(北西より)	262
図版5	(1)1号土塋(北より)	(2)3号土塋	263
図版6	(1)1号溝	(2)1号溝断面	264
図版7	(1)土錘出土状況	(2)青磁出土状況	265
	(3)土師器皿出土状況		
図版8	(1)昭和62年度調査区調査前状況(南西より)(2)遺構検出状況(南西より)		266
図版9	(1)1号土塋発掘状況	(2)1号不定形土塋全景	267
図版10	(1)1号不定形土塋遺物出土状況		268
図版11	(1)1号不定形土塋遺物出土状況		269
図版12	(1)2号不定形土塋検出状況	(2)2号不定形土塋遺物出土状況	270
図版13	(1)3号不定形土塋発掘状況	(2)3号不定形土塋遺物(すり鉢)出土状況	271

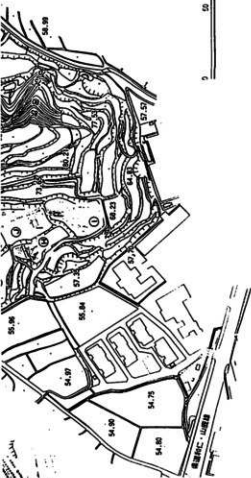
図版14	(1)3号不定形土壌遺物(小札)出土状況(2)3号不定形土壌遺物(前立)出土状況 (3)3号不定形土壌遺物(刀子)出土状況	272
図版15	(1)平成元年度調査区調査前状況(北より)(2)表土剥ぎ終了状況(北より)	273
図版16	(1)空堀南側断面	(2)空堀北側断面…………… 274
図版17	(1)空堀東側壁面状況	(2)空堀西側壁面状況…………… 275
図版18	(1)土壌(西より)	(2)空堀底面状況…………… 276
図版19	(1)平成2年度調査区調査前状況	(2)遺構検出状況…………… 277
図版20	(1)柵列・堀跡検出状況(北より)	(2)柵列・堀跡発掘状況(北より) …… 278
図版21	(1)柵列発掘状況	(2)堀跡土層断面(A-A') …… 279
	(3)堀跡土層断面(B-B')	
図版22	(1)試掘Ⅰ-I区調査前状況	(2)試掘Ⅰ-I区遺構検出状況…………… 280
	(3)試掘Ⅰ-I区遺構検出状況	(4)試掘Ⅱ区発掘状況
図版23	(1)平成3年度調査区遠景(北より)	(2)近景(北より) …… 281
図版24	(1)柵列Ⅰ検出状況(南より)	(2)柵列Ⅰ発掘状況(南より) …… 282
図版25	(1)柵列Ⅱ検出状況(南より)	(2)柵列Ⅱ発掘状況(南より) …… 283
図版26	(1)平成4年度調査区遠景(西より)	(2)近景(北より) …… 284
図版27	(1)遺構検出状況(北より)	(2)遺構検出状況(南西より) …… 285
図版28	(1)遺構確認全体写真(北東より) …… 286	
図版29	(1)平成5年度Ⅰ区調査前(東より)	(2)柵列検出状況(北東より) …… 287
	(3)柵列発掘状況(北東より)	
図版30	(1)1号石倉(南西より)	(2)2号石倉(南より) …… 288
図版31	(1)2号石倉と石切り場(南より)	(2)石切り場(西より) …… 289
図版32	(1)石切り場の切り出し状況	(2)壁面状況 …… 290
図版33	(1)工具痕	(2)工具痕 …… 291
	(3)調整痕	(4)調整痕
図版34	(1)Ⅱ区調査前(北より)	(2)遺構検出状況(北より) …… 292
	(3)集石検出状況(北より)	
図版35	(1)平成6年度調査前(南より)	(2)調査前(北東より) …… 293
図版36	(1)発掘状況(南西より)	(2)発掘状況(南西より) …… 294
図版37	(1)平成7年度調査前遠景(北より)	(2)Ⅰ区調査前近景(北東より) …… 295
	(3)Ⅱ区調査前近景(南東より)	
図版38	(1)Ⅰ区遺構検出状況(北より)	(2)Ⅰ区遺構発掘状況(北より) …… 296
	(3)掘立柱建物跡(東より)	

図版39	(1)Ⅱ区遺構検出状況（北東より）	(2)Ⅱ区遺構発掘状況（北東より）…	297
	(3)1号溝発掘状況		
図版40	(1)井戸跡検出状況（北より）	(2)井戸跡発掘状況（北東より）……	298
	(3)井戸跡石組み状況（北東より）		
図版41	(1)出土遺物		299
図版42	(1)出土遺物		300
図版43	(1)出土遺物.....		301
図版44	(1)『迎春・和仁仕寄陣取図』全体	(2)田中城主郭部	302
図版45	(1)連棟式兵舎跡想定部分	(2)南側「ヤグラ」想定部分	303
図版46	(1)小早川秀包陣		304
	(2)安国寺恵瓊・栗屋四郎兵衛・古志・日野陣		
図版47	(1)立花左近陣	(2)筑紫（広門）陣	305
図版48	(1)鍋島（直茂）陣	(2)肥前衆陣	306





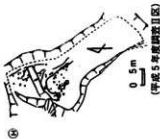
(天明62年 本宮)



道橋式兵衛尉
(平成4年 調査)



石倉・石切川場
(平成5年 調査Ⅰ区)



(平成5年 調査Ⅱ区)



真正遺跡跡
(平成7年 調査)



副宮遺構跡跡?
(平成3年 調査)



第1図 田中城測量図・遺構図

第I章 序 説

第1節 調査に至る経過

田中城は熊本県玉名郡三加和町大字和仁字古城に所在する“和仁”一族の居城で、県内に約600残るといわれている中世城の中でも、ほぼ原形を留めているところからその価値が高く評価され、昭和61年4月15日付けで中世城としては県下で3番目の県史跡に指定された。

町では、この貴重な文化遺産である田中城跡を保存・活用するため、熊本県が提唱している日本づくり運動の一環として、城周辺環境整備及び史跡公園化を目指しての基本構想策定にはいった。町としては、当時の様子が想定される、事実即した整備を行いたいという考えであったが、田中城の構造がどうなっているか全くわかっていなかったため発掘調査を実施し、その実体を明らかにする必要性がでてきた。そこで、昭和59年に遺構の確認を目的とした試掘調査を行い、その結果、柱穴など城に関係あると思われる遺構が検出されたため、昭和61年から国・県の補助を受け、本格的な調査にとりかかることになった。平成元年からは調査と並行して、調査結果に基づいた整備も始められ、現在に至っている。

第2節 調査組織

調査主体	三加和町教育委員会
調査責任者	上原 松柏（教育長： ～昭和63年9月） 蒲池龍一郎（◇：昭和63年10月～平成3年9月） 坂梨五十鈴（◇：平成3年10月～平成7年9月） 今村 憲夫（◇：平成7年10月～ ）
調査事務	牛島 茂生（社会教育課長：昭和61年 ～平成3年6月） 小山 暁（◇：平成3年7月～ ） 藤木 住人（社会教育課長補佐：昭和61～平成3年度） 竹下 康一（社会教育主事：昭和61～62年度） 高木洋一郎（◇：昭和62～平成2年度） 荒木 和富（◇：平成3～ ）
調査担当者	田添 夏喜（◇：昭和61年度） 池田 道也（元菊水町教育委員会：昭和61年度） 黒田 裕司（社会教育課主事：昭和62～ ）

専門調査員	石井 進（東京大学文学部名誉教授・国立歴史民俗博物館館長） 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館教授） 大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授） 原口 長之（元熊本県立装飾古墳館館長・平成6年9月逝去） 田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長） 白木原和美（元熊本大学文学部教授） 工藤 敬一（熊本大学文学部長） 北野 隆（◇ 工学部教授） 阿蘇品保夫（八代市立博物館館長） 桑原 憲彰（熊本県立装飾古墳館副館長） 大田 幸博（熊本県文化課主幹）
発掘作業員	福原 房子・福原 艶子・福原 忍・福原スミ子・國武ミチ子・霧 加代子・霧 オワリ・霧 サカエ・霧 浅代・霧 邦代・辺原 絹代・ 高木ツヤコ・中尾 健照・北原美和子
整理作業員	居石 裕臣・杉村 恵美・小林 亜紀・坂本 由美（昭和61年度） 小山 正子（昭和62年度）・笠間いつ子（昭和63・平成元年度）・ 塩田喜美子（平成2年度）
遺物整理	人吉・遺跡調査事務所
協力者	江崎 正（元熊本県文化課長）・隈 昭志（元熊本県文化課審議員）・ 松本 健郎（熊本県文化課主幹）・西澤 八朗（元熊本県文化課主幹）・ 前川 清一（熊本県文化課参事）・中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長） ・浦田 信智（西合志町教育委員会）・坂本 重義（南関町教育委員会） ・木下 洋介（宇土市教育委員会）・大倉 隆二（熊本県立美術館参事） ・坂田幸之介（玉東町史・南関町史編纂委員）・五嶋 竜山（鹿山焼竜 山窯）・服部 英雄（九州大学大学院助教授）・伊藤 正義（文化庁文 化財調査官）・山崎 龍雄（福岡市立博物館）・楠本 義嗣（福岡市教 育委員会）・小山 彦逸（七戸町教育委員会）・市村 高男（中央学院 大学助教授）・藤木 久志（立教大学教授）・北垣 聰一郎（中世城郭 研究会）・福原 宗茂・霧 正巳・福原 五夫・霧 明春・吉永 武福 （以上地権者）・田中城保存整備協議会

第3節 調査経過

(1) 昭和61年度調査

昭和59年度に実施した試掘調査の結果、田中城関係のものに違いないと思われる柱穴が多数確認できたため、国庫・県の補助を受けて本格的な調査に取りかかった。

8. 1 幅2mのトレンチを設け、調査を開始。多くの柱穴を確認。
9. 2 表土剥ぎおよび東側の柱穴の再検出。
9. 5 表土剥ぎを行った部分に、5×5mグリッド設定のための基準杭を設ける。
9. 9 5×5mのグリッドを38面設定。
10. 6 柱穴の発掘を行う。空堀状の遺構を2本検出。

(2) 昭和62年度調査

昨年度に引き続き、主郭の調査を行う。

9. 21 昨年度調査区のグリッドに従い、杭打ちを行う。
9. 22 表土剥ぎ、遺構検出。晴天が続き、散水しながらの調査。5棟の掘立柱建物跡を確認。(一部は昨年度調査区に延びる。)
10. 13 遺構の発掘を始める。
10. 28 遺構実測を開始。当初予定していた範囲の発掘が終わったため、調査区を拡大し表土剥ぎを行う。
11. 5 遺構確認。
11. 14 遺構発掘。SK-02から多量の炭化物・焼土を検出。
11. 21 国衆一揆400周年記念シンポジウム関係者視察。
11. 28 服部英雄文化庁調査官視察。
11. 30 弥生時代後期の竪穴住居跡1基を確認。
12. 4 遺構実測開始。
12. 14 専門調査委員会。
12. 22 町区長会視察。
12. 26 主郭の全体写真撮影のため、昨年度調査区に置いていた排土を除去。
1. 13 町コスモス学級生見学。

(3) 昭和63年度調査

主郭を取り巻くように、西側を除く三方に曲輪が巡らされている。現況で、五筆の畑に分かれており、今回は、東側の畑の調査を行った。

8. 1 表土剥ぎ開始。
8. 15 晴天続きで、昨年に引き続き散水しながらの調査となる。焼土の集中を確認。
8. 26 「三加和町史」編集委員視察。
8. 30 遺構検出。長方形プランの土壇(1.93×0.88m)1基確認。地山が西側3分の1ぐらいしか確認できず、東側は整地された可能性がある。

- 10. 5 鈴木健二熊本県立劇場館長視察。
- 10. 11 専門調査委員会。
- 10. 13 石井 進・大三輪龍彦教授講演会。
- 10. 14 遺構発掘。遺構ラインが確認しにくく、焼土集中部から掘り始める。
- 10. 31 網野善彦神奈川大短大学部教授視察。
- 11. 7 長崎県長与町議会議員視察。
- 11. 25 球磨郡深田村村長・議会議員視察。
- 12. 6 地山の落ち込みラインを確認するため、調査区の北端にトレンチを入れてみたところ、幅1.78m、深さ0.6mの空堀と思われる遺構を確認。中央部にもう1本トレンチをいれ、延び具合を見てみると幅1.74m、深さ0.4mと次第に細くなっている。

1. 12 宮崎県佐土原町議会議員視察。

(4) 平成元年度調査

主郭を取り巻くように、西側を除く三方に約300mにわたって空堀が巡らされている。この空堀の対岸には、西・南・北の三ヶ所に物見やぐらと呼ばれている高台が残されており、これとの関連を探る目的で調査区を設定。

- 8. 1 表土剥ぎ。
- 8. 21 約3mまで掘り下げ、堀の壁面の凝灰岩は確認できたが底面は未確認。
- 8. 22 南関町古小代焼窯跡発掘調査団見学(8名)。
- 8. 24 鹿本郡市退職教頭会見学(16名)。
- 8. 29 工藤敬一熊本大学文学部教授視察。
雨が降るたびに、かなりの量がたまり、水対策を考える必要が出てきた。
- 9. 4 遺構発掘。
- 9. 8 調査区が狭くてベルトコンベアーが使えず、一輪車での排土のためかなりの重労働となり作業員2名リタイア。
- 9. 12 郷土史講座受講生見学。
- 9. 18 約5mまで掘り下げたが、まだ、堀底は確認できず、これ以上一輪車での排土が困難と思われるため、バックホーを入れる。
- 9. 27 現地表面から約6m下方で、ようやく堀底を確認。
- 9. 28 光岡 明熊本近代文学館館長見学。
- 10. 5 鹿児島県日置郡東市来町農業委員会見学(16名)。共同通信社取材。
- 10. 16 石井 進・原口長之・田邊哲夫・高濱幸敏・大田幸博氏視察。
- 10. 17 南関町古小代焼窯跡発掘調査団見学(7名)

玉名事務所見学（3名）

10. 25 測量用杭打ち。
10. 27 熊本日日新聞社取材。
11. 3 玉東町歴史探訪会見学（49名）。
11. 8 北側断面実測。
11. 13 隈 昭志熊本県文化課審議員・富田紘一熊本市立博物館学芸員見学。
11. 20 T K U取材。
11. 21 熊本市立博物館友の会見学（40名）。
11. 25 天草東高校教師見学（8名）。
11. 28 球磨郡山江村の高城跡で確認され、タコ壺状土壇と名付けられた遺構と類似の遺構を確認。
11. 29 山鹿市城村城発掘調査団見学（9名）。
12. 1 土壇発掘。
12. 4 三加和町議会議員見学。
菊鹿町教育委員会見学（4名）。
12. 12 現地説明会（70名）。
12. 14 南関町文化財懇話会見学（25名）。
1. 11 山鹿市陶芸教室生見学（17名）。
2. 7 肥後国衆一揆顕彰会議員見学（33名）。
2. 16 南側断面実測。
鳥田真裕鳥田美術館館長見学。
2. 23 松村恵司文化庁技官・桑原憲彰熊本県文化課第2係長見学。
2. 27 鹿児島県曾於郡輝北町議会議員・教育委員会見学（7名）。
3. 23 森山恒雄熊本大学文学部教授見学。
3. 26 菊池市ふるさと学級見学（43名）。
玉東中学校教諭見学（8名）。
3. 28 熊本市鈴史会見学（100名）。
3. 30 活力と個性ある地域づくりシンポジウム 【豊臣秀吉軍勢と田中城攻防戦】開催
(5) 平成2年度調査
昨年度調査した空堀および主郭との関連を調べるため、西側にある物見やぐらと呼ばれているところを調査。
8. 1 調査予定地が荒れていたため、草刈りや伐採後の杉の後片付けから始める。
8. 7 表土剥ぎ。

- 8. 17 長崎県松浦市教育委員会視察（5名）。
- 9. 4 愛媛県北宇和郡松野町教育委員会視察（3名）。
- 9. 14 岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授から、遺構がはっきりしないため、もう少し掘り下げてみてはということと、西側にある土色の異なる部分は掘跡かもしれないとのアドバイスを受ける。
- 10. 4 遺構検出をほぼ終了。南北方向に歩幅間隔で並ぶ柱穴が検出され、おそらく櫓列と思われる。
- 10. 11 長崎県北松浦郡吉井町視察（11名）。
- 10. 16 遺構発掘にかかる。
- 11. 2 西側の土色の異なる部分の発掘を行い、約1mで底部を確認。掘跡と判断。
- 11. 7 南関第一小学校遠足（100名）。
- 11. 8 菊池市文化財保護委員視察（11名）。
- 11. 16 専門調査委員会。
- 11. 20 凝灰岩が土壌化したものを埋土とする土壌を掘るが、内部は袋状になっており、崩壊の恐れがあるため約2.5m掘り下げた時点で底部を確認しないまま中断。
矢部町文化財保護委員視察（6名）。
- 12. 4 寺本重美鹿央町文化財保護委員長見学。
- 12. 7 遺構実測。
- 12. 25 古財誠也植木町文化財保護委員見学。
- 2. 1 三段目の表土剥ぎ。遺構は全く確認できず。
- 2. 13 西側だけに残る二段目の表土剥ぎ。
- 2. 21 遺構検出。若干の柱穴を確認。
- 3. 7 天草郡河浦町教育委員会・文化財保護委員視察（7名）。
- 3. 10 昨年開催したシンポジウムの収録集が完成した記念に講演会を開催。（300名）
「中世武士団の合戦と歴史について」 石井 進 東京大学名誉教授
「中世城跡の保存・整備について」 岡田 茂弘 国立歴史民俗博物館教授

(6) 平成3年度調査

平成元年12月に「刃春・和仁仕寄陣取図」と呼ばれる1枚の絵図が山口県立文書館で発見された。そこで今年度からは、この陣取図に基づき、城の西側にある平坦面から調査を行うこととした。

- 5. 22 排土場が確認できなかったため、調査区を南北に二分割して南側半分から調査を開始。
- 6. 7 遺構確認。

- 6. 17 ほぼ南北方向に並ぶ二列の柱列を確認。
- 6. 21 西 健一郎九州大学文学部助手見学。
- 7. 10 雨が降らず、散水しながらの調査となる。
- 7. 16 高知市役所視察（4名）。
- 7. 22 調査区の南東隅から幅約1.5mでほぼ平行に走る二列の柱穴をはっきりと確認。
- 8. 6 調査区中央部で確認された柱穴を検討し、2×3間の掘立柱建物跡を推定。
- 8. 9 遺構発掘にかかる。
三加和史跡愛好会見学（14名）。
- 8. 26 遺構実測。
- 9. 2 玉名郡市保健婦会見学（17名）。
- 9. 6 南側半分の調査を終了。
- 9. 9 北側の調査開始。
- 9. 27 遺構確認。
- 10. 18 南側調査区で確認した柱列の延長を確認。また、これよりも東側で三列に並ぶ柱列も確認。
- 11. 7 南関第一小学校遠足。
- 11. 12 山鹿市立鶴城中学校遠足。
- 11. 18 遺構実測開始。
- 12. 3 専門調査委員会。現地説明会（40名）。
- 1. 23 国衆一揆顕彰会議視察（14名）。
- 2. 3 大分県玖珠郡九重町視察（12名）。
- 2. 25 熊本市立博物館ボランティアグループ見学（41名）。
- 2. 27 玉名市公民館石貫支館運営委員会視察（20名）。
- 3. 8 南関町東豊永地区婦人会見学（30名）。
- 3. 13 佐賀県千代田町自治公民館長視察（21名）。
- 3. 23 長崎県西彼杵郡長与町視察（3名）。
- 3. 29 北九州市八幡郷土史会見学（28名）

(7) 平成4年度調査

【迎春・和仁仕寄陣取園】によると、主郭部直下に和仁側の建物跡と推定されるものが多数描かれている。今年度は昨年度調査区の北側に広がる平場を、この場所と想定し、調査を行った。

- 6. 1 調査区が二筆に分かれているため、狭い方（Ⅱ区）を排土場として、広い方（Ⅰ区）から調査を開始。

6. 25 表土剥ぎとあわせて遺構確認を行っていたが、全く遺構は見られない。
瀬高町老人会見学（56名）。
6. 28 植木町歴史研究会見学（18名）。
6. 30 学習グループ「ふるさと」見学（28名）。
7. 1 遺構確認が困難なため、四分割して調査を行うこととする。
7. 8 西合志町史跡愛好会見学の下見（4名）。
8. 1 静岡市で開催された第9回全国城郭研究者セミナー（シンポジウム「中世城郭の保存と活用」）で田中城について報告。
8. 4 菊池神社を守る会見学（28名）。
8. 6 田中祥彦氏（中世城郭研究会）見学。
8. 15 北垣聡一郎氏（中世城郭研究会）見学。
8. 19 ようやく地山と思われる面が現われ、柱穴も若干確認される。
8. 21 約1m間隔で整然と並ぶ柱穴を11列確認。
8. 26 全面の遺構確認を大まかに終了。柱穴は17列となる。
ちくご歩こう会見学（40名）。
8. 28 8個目の鉄砲玉が出土。
8. 30 晴天が続き、散水して作業を行っても遺構確認が全く困難となったため、一時作業を中断することにする。
立花町文化連盟郷土史部見学（20名）。
9. 8 西合志町郷土史愛好会見学（77名）。
9. 10 南関郷J A婦人部姑会なでしこ会見学（15名）。
10. 13 三加和町郷土史講座生見学（17名）。
10. 27 西合志町中央コミュニティ委員会見学（36名）。
10. 29 鳥栖から見学（大型バス2台）。
11. 4 ようやく雨が降り作業を再開したが、まだほとんどガチガチの状態。
11. 16 中村幸史郎山鹿市立博物館副館長視察。
11. 21 昨日からの雨で、ようやく遺構確認がしやすくなる。以前確認していた柱列の間に小さな柱列を確認。
三加和町成人学級生見学（8名）。
12. 1 遺構の発掘に取りかかったが、10～25cmと比較的浅く、上部をかなりカットされていると思われる。
12. 13 北野 隆熊本大学工学部教授から、柱穴の並び、主郭との位置関係、井戸が近いことなどから和仁軍勢が寝起きしていた高床式の掘立柱建物跡ではないかと指摘

を受ける。

12. 16 山鹿市西付城発掘調査団見学（16名）。
12. 19 森山恒夫熊本大学文学部教授視察。
1. 18 現地説明会（60名）。
鹿児島県知覧町教育委員会・文化財保護委員会視察（7名）。
1. 19 遺構実測を終えた部分から埋め戻しにかかる。
球磨地方町村教育委員会連絡協議会見学（14名）。
2. 5 長崎県長与町視察（8名）。
隈 昭志県教育審議員・前川清一参事視察。
2. 11 第16回戦国肥後国衆まつり
バスツアー一行・まつり見学者多数見学。
2. 15 多良木町公民館分館長見学（43名）。
2. 24 玉名郡内議長・副議長会見学（20名）。
3. 5 II区の調査にかかる。
熊本市ボランティアセミナー見学（55名）。
春富小学校探検クラブ見学（12名）。
3. 9 玉名市婦人健康教室見学（30名）。
3. 11 遺構は全く確認できず、埋め戻しを始める。
3. 14 第31回生涯学習推進大会で発掘成果を報告（250名）。
3. 17 春富小学校3年生「郷土学習」で見学（26名）。
3. 20 専門調査委員会。
国衆一揆顕彰会議参加市町の文化財保護委員など17名参加。
鳥栖市教育委員会市民学級講座生見学（30名）。
3. 23 鹿本町文化財保護委員視察（6名）。

(8) 平成5年度調査

昨年度の調査区の南側に、以前から「ドンドンと音がする」とか「雪が積もらない」などと地権者から聞いていた場所がある。井戸などの空洞があるのではないかと推測し、調査を行った。

4. 19 玉名郡退職教員見学（8名）。
5. 10 横島町文化財保存顕彰会見学（60名）。
5. 22 春富小学校PTA委員研修（24名）。
6. 8 熊本大学国史研究室見学（20名）。
8. 9 調査区が二筆あるため、北側をI区、南側をII区とし、I区から調査を開始。た

だし、Ⅰ・Ⅱ区が離れているため、Ⅰ区の西半分を掘り、東半分は排土場とする。

9. 1 玉東町健康づくり推進委員・健康を守る婦人の会見学（80名）。
10. 12 三加和史跡愛好会10月例会で、昨年度までの調査結果報告（19名）。
10. 19 1列の柱列と数基の不定形土壌を確認。
10. 25 西合志町高齢者学級見学（30名）。
10. 26 遺構を掘り終えたが、約20cmで岩盤の凝灰岩となり、さらにこの凝灰岩にも土壌状の凹が見られるため、もう一段掘り下げて遺構を確認することにする。
11. 4 Ⅱ区南側を排土場として北側の表土剥ぎ開始。
11. 9 松本健郎県文化課主幹・前川清一県文化課参事、現地指導。
11. 26 Ⅰ区の遺構の縁や土層断面を取るために残っていた部分が壊されたため、Ⅱ区は後回しにしてⅠ区を清掃し、凝灰岩に掘り込んでいた遺構の確認を行う。
11. 27 山鹿市立博物館考古学講座生見学（5名）。
12. 2 矢部町公民館支館長見学（18名）。
12. 3 北側斜面下にある遺構は内部が二段構造になっている。
12. 6 宇城文化財研究会視察（9名）。
12. 15 Ⅱ区北半分の遺構確認終了。溝・柱穴などを確認。
12. 16 遺構発掘開始。
1. 6 Ⅰ区遺構実測開始。
1. 19 田邊哲夫氏現地調査。
1. 20 大田幸博県文化課参事、杉村彰一県立北高校教諭見学。
1. 21 北野 隆熊本大学工学部教授現地調査。
大田・北野先生から、崖面に掘られている横穴は何らかの宗教施設ではないかと指摘を受ける。
2. 7 Ⅰ区東側表土剥ぎ。
2. 17 田浦町教育委員会視察（11名）。
2. 18 松橋町教育委員会・文化財保護委員視察（10名）。
2. 25 出宮徳尚・乗岡 実（岡山市教育委員会）両氏視察。
2. 28 芦北町議会議員視察（4名）。
3. 8 大三輪龍彦鶴見大学教授視察。崖面に掘られている横穴二基は竈と思われ、手前に掘られている二段構造の遺構は石切り場との指摘を受ける。
3. 10 岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授視察。大三輪先生同様、竈と石切り場と考えていいのではないかと指摘を受ける。
久木野村教育委員会・文化財保護委員視察（5名）。

- 3. 21 熊本史跡探訪会見学（20名）。
- 3. 27 山崎龍雄福岡市教育委員会文化財主事視察。
- 3. 28 木下 良國学院大学大学院講師、坂本重義南関町教育委員会主事視察。

(9) 平成6年度調査

城の西側一帯は、割合広めの平坦部があり、昨年までの調査でいろいろな遺構が確認されてきた。今年度は以前、ブドウ畑を作る際に多数の鉄砲玉が出土したと地権者に聞いていたため、遺構自体は傷んでいる可能性はあったが、何らかの痕跡は残っているのではないかと思い、調査区に選んだ。

- 4. 19 作業の段取りを考え、全体を四分割して調査を開始。
- 5. 10 鹿本地区郷土史研究会視察（13名）。
- 5. 12 ブドウを植えた痕を確認。
- 5. 16 城に伴う遺構は全く確認できず、遺物を採集する目的でブドウを植えた痕（幅約4m、長さ約10m）を掘る。
- 6. 1 遺物もほとんど出土せず、埋め戻してⅡ区の表土剥ぎを始める。
- 6. 3 ブドウを植えた痕を2条確認。
- 6. 15 掘り下げると、弥生～中世にかけての遺物が出土。
- 6. 16 玉名市文化財保護委員視察（10名）。
- 7. 5 Ⅲ区の表土剥ぎ。
- 7. 13 伊藤正義文化庁文化財調査官・藤木久志立教大学教授・村上豊喜県文化課文化係長視察。
- 7. 21 遺構は確認できず、ブドウを植えた延長のみ確認。
- 8. 3 最終区の表土剥ぎ。
- 8. 25 やはり遺構は確認できず、ブドウを植えた延長のみ確認。
- 9. 12 都城市歴史公園整備計画策定プロジェクト視察（9名）。
- 9. 22 作業終了。
- 11. 29 相良村教育委員・文化財保護委員視察（8名）。
- 3. 22 牛深市郷土史教養セミナー学級生見学（19名）。
- 3. 25 永原慶二一橋大学名誉教授・田邊哲夫玉名歴史博物館館長・西田道世同副館長視察。

(10) 平成7年度調査

昭和61年に国・県の補助を受け、調査を始めてから10年目を迎えた今年度は、古くから地元で「彈正屋敷跡」と伝えられている場所を調査することにした。彈正とは、城主の和仁勘解由親実の弟である和仁彈正親範のことであると思われ、落城時には兄弟で籠城し、

豊臣秀吉軍と戦い、戦死したといわれている。

5. 10 洒水町教育委員会見学 (19名)。
5. 12 植木町平木老人会見学 (20名)。
5. 31 洒水町教育委員会見学 (31名)。
6. 1 山鹿市下吉田老人会見学 (20名)。
6. 28 石川県美川町教育委員見学 (6名)。
8. 1 調査区を南北に二分割し、半分を排土場として、北側 (Ⅰ区) から調査を開始。
8. 3 長崎県長与町地域公民館連絡協議会見学 (49名)。
8. 24 ふるさと学習「草雲塾・固庵塾」生見学 (8名)。
8. 25 Ⅱ区との境をやや深めに削ったところ、地山と思われる肌色がかかった土が現れたため、この土を基準として掘り進めることとする。
9. 4 永田征夫山鹿市文化課課長・中村幸史郎山鹿市立博物館副館長視察。
9. 25 遺構の最終確認を行い、検出状況写真を撮影。
9. 26 9.3×4.1mの掘立柱建物跡を確認。遺構を掘り始める。
10. 4 コスモス学級生見学 (67名)。
10. 20 Ⅰ区の実測が終わったところから埋め戻し、Ⅱ区の表土剥ぎを始める。
12. 12 大きな柱穴を確認。つながりを検討して、2×2間の総柱の建物跡を想定。しかし、まだ、延びる可能性があるため、精査の必要あり。
12. 13 五嶋竜山氏、山鹿市立博物館陶芸教室生見学 (3名)。
12. 25 不明遺構は井戸跡の可能性がでてきた。
1. 27 市村高男中央学院大学助教授視察。
2. 1 北野 陸熊本大学工学部教授・町文化財保護委員 (3名) 視察。
大型建物跡については、柱穴の組合せをもう少しじっくりと考えたが良さそうとの意見。
2. 7 発掘調査終了。
2. 8 洒水町シルバーヘルパー見学 (48名)。
2. 11 熊本厚生年金会館文化サークル生見学 (40名)。
「戦国肥後国衆まつり」見学者が多数訪れる。
3. 2 RKKニュースキャッチャー・熊本日日新聞取材。
3. 9 石井 進・大三輪龍彦・田邊哲夫先生視察。現地説明会 (40名)。
3. 10 発掘調査10周年記念シンポジウム「検証：田中城跡」開催 (100名)。
3. 18 佐賀県千代田町文化財保護審議委員視察 (6名)。
3. 26 埋め戻し完了。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

三加和町は熊本県の北部に位置し、東は鹿本郡鹿北町及び山鹿市、西は玉名郡南関町及び福岡県山門郡山川町、南は玉名郡菊水町、北は八女郡立花町と隣接しており、町の中央部を西より和仁川・十町川・岩村川と三本の川が北から南に流れ、菊池川に合流している。

田中城跡は、玉名郡三加和町大字和仁字古城に所在し、国土地理院発行2万5千分の1の地形図「関町」の北より3.6cm、東より10.1cmの地点（中心部で北緯33° 4′ 31″、東経130° 35′ 53″）に位置している。

城の北及び東側の背後には、福岡県境から延びるやまなみが迫っており、この裾部に小田・田中という二つの集落がみられる。城の約200m西側を北から南方向に和仁川が流れており、この流域に発達した水田地帯を臨むように、和仁川と並行して舌状の台地が延びこの台地の根元を断ち切るにより独立した丘陵を形成して城としている。中央部に長径約50m、短径約42mの平坦部がありこれを主郭とし、西側を除く三方の約1～2m下に幅約10～50mの曲輪を設けている。この曲輪は現状で五筆に分かれており、それぞれわずかの段差があるが、築城当時からこの状態であったかどうかは定かではない。これより約10m下がったところに幅約10mの空堀を、西側を除く三方に約300mにわたって巡らしている。この空堀は北側では、部分的に幅約20mと広がっており、この部分は馬場と呼ばれている。また、南・北・西の対岸三ヶ所には以前から物見やぐらと呼ばれている高台もみられる。

全体的な地形をみると、空堀より下方は非常に狭い帯曲輪状の、段々畑状を呈しているが、西側斜面には比較的大きな平坦面があり、その一部は弾正屋敷跡という伝承が残っている。

水田面と主郭部（標高104m）との比高差は約47mある。

第2節 歴史的環境

町内を南流する和仁川・十町川・岩村川流域に多くの遺跡が点在している。町史編纂作業の一環である悉皆調査で多くの遺跡が新たに確認され、以前の遺跡台帳と比較するとかなりの増加になっている。

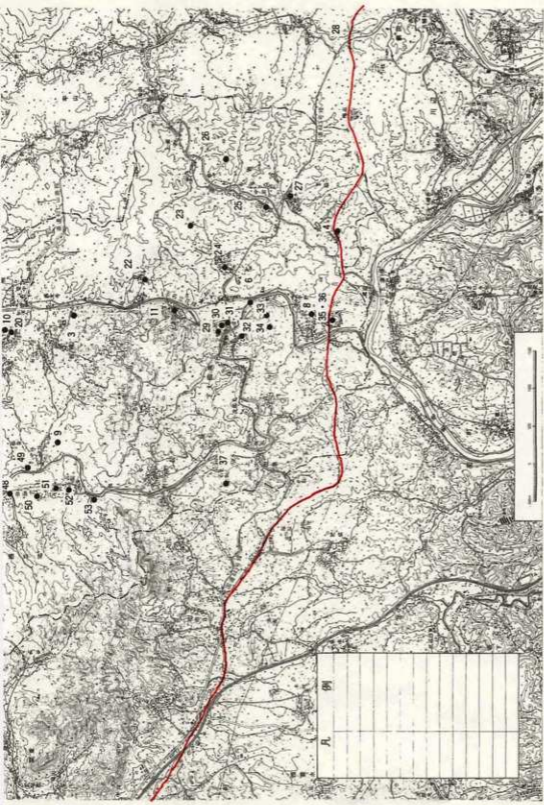
以前から旧石器・縄文時代の遺跡は希薄であり、三加和町の黎明期についてはほとんどわかっておらず、今回の悉皆調査でも、残念ながら旧石器時代の遺跡の確認はできなかった。縄文時代の遺跡は、昭和43年5月に縄文土器や石斧などが発見された上津田遺跡や金

No.	名 称	所 在 地	備 考
1	猿懸権現のイチイガシ	上十町字猿懸	県指定天然記念物、推定樹齢 800年
2	山森阿蘇神社の樟	西吉地字山森	◇ ◇
3	西光寺薬師如来坐像	板楠字九田	県指定、平安末期の檜の一本造り
4	下岩官軍墓地	岩字河井ヶ浦	◇ 将兵133名、軍夫16名を葬る
5	田中城跡	和仁字古城	◇ 和仁一族の居城 天正15年(1587)12月5日落城
6	北原松右衛門堰	津田字下津留	町指定 享和3年(1803)～文化6年(1809)で築造
7	佐藤固庵・草野潜溪墓	山十町字橋上	◇
8	中原地藏	平野字片峯	◇
9	金栗瀬助翁の墓	中林字杉谷	◇
10	広徳寺の地藏	上板楠字門出	◇
11	亭生田の六地藏	上津田字陣内	◇ 文明8年(1476)丙申12月24日の文字が刻まれている
12	田中城岩地藏	和仁字古城	◇ 7体の地藏尊を彫刻 文明3年(1471)3月の銘あり
13	坂本城跡	山十町字坂本	筑後の立花町一帯に勢力を振った辺春氏の居城
14	桜町横穴群	板楠字桜町	3基
15	三登神社と眼鏡橋	上板楠字宮前	文政・天保ごろ架設? 長さ3.6m、幅1.1m
16	上東の六地藏	◇ ◇	奉建立文政三歳(1820)正月吉日陶山新工門講中と刻まれている
17	岡原城跡	◇ 字岡原	天文年間板楠豊後守平景貞とその子景次などが在城したといわれる
18	陣内横穴群	◇ 字陣内	2基
19	岡の横穴群	◇ 字岡	3基
20	岡の六地藏	◇ ◇	奉造立六地藏菩薩檀那平景貞、景次その他數十名の法名がきざまれている
21	城の平城跡	◇ 字浦部	
22	上津田遺跡	津田字東ノ前	昭和43年5月、縄文式土器や磨製石器などが発見されている
23	伊勢ヶ原遺跡	◇ 字伊勢原	弥生時代後期の土器が出土している
24	本村の六地藏	◇ 字室園	肥後国誌に文明13年(1481)辛巳3月14日の記事あり、元治・大正に再建
25	中岩の六地藏	岩字尾畑	
26	前城跡	◇ 字立山	
27	孫九大師堂の古塔群	岩字桑ノ木田	室町時代の板碑および室窟印塔の一部が残存している

第1表 三加和町遺跡一覧表 I



三加和町全図



第2図 三加和町遺跡分布図

No.	名 称	所 在 地	備 考
28	豊前街道(金剛の通 百廻)	岩～上大田黒	町の南端を約5kmにわたり通っている。水ノ原は、西南戦争の際激戦地となった
29	神尾城跡	大田黒字東川	城平の小名を獲す逆三角形の独立山塊。大津山系の城であったと思われる
30	神尾山墓地	◇ ◇	吉弘加左衛門尉源正直、正業の墓。三加和町で最大の五輪塔
31	高畑の六地藏	◇ ◇	奉寄進六地藏、文政3年(1820)吉日左三次の銘記あり。座像1体、立像5体
32	小屋敷の六地藏	◇ 小屋敷	奉寄進六地藏、大田黒黒原三右衛門、享保19年(1734)11月の銘あり
33	松尾遺跡	平野字松尾	押型文土器・縄文後～晩期・弥生後期
34	睦の前支石墓	◇ 字睦の前	まだ未調査のため詳細は不明
35	城ノ原遺跡	◇ 年ノ神	弥生時代の甕棺が数基出土
36	年神城跡	◇ ◇	
37	石坂城跡	大田黒字石坂	
38	中村伊賀の墓	上和仁犬ヶ蔵	元禄十丁、暦四月十五日、妙法中村伊賀實備居士…菩提也との銘記あり
39	草野準人の墓	◇ ◇	天正十六年戊子八月十日、和仁藩解由頼実家老草野準人塔との銘記あり
40	東照寺(現・東陽寺)	◇ 西遊寺	大永元年(1521)和仁胤賢が創立、天正15年(1587)和仁氏没落の際焼失
41	鬼丸眼鏡橋	中和仁字鬼丸	大正5年架設。長さ10.7m、幅4.4m、高さ4.1m
42	金敷原遺跡	和仁字金敷原	縄文・弥生時代の土器・石器が採集されている。箱式石棺も発見されたと伝えられる
43	田中城下横穴群	◇ 字古城	現在11基が確認されている。線刻がある横穴も1基確認された
44	柳川由布大炊助の墓	東吉地字高倉	田中城攻めに参加した武将。墓前に大炊竹が供えられ、耳の神様といわれている
45	六四郎の眼鏡橋	西吉地字福田	大正4年3月架設。長さ4.85m、幅4.15m、高さ3.40m
46	簾置城跡	◇ 字簾置	
47	今古閑城跡	◇ 字竹本	
48	山森横穴	◇ 字山森	1基
49	中林横穴群	中林字辻	8基。1基の内部には六地藏の破片がある
50	辺春能登守親行の墓	西吉地字村	山十町の坂本城主。和仁氏の崩壊にあたり国衆一帯に加担。城主を殺害し蒸城させた
51	村遺跡	◇ ◇	弥生時代後期の遺物が表採されている
52	大津山河内守家後の墓	◇ 字古閑	八代日大津山城主。国衆一帯に加担し神隠しに遭ったが、詭計で逃れられた
53	七郎神	◇ 塩井谷	坂梨七郎右衛門を祀り、子孫繁栄・五穀豊穡・夫婦和合の神として崇められている

第2表 三加和町遺跡一覧表Ⅱ

敷原遺跡があがっているが、遺物の所在がはっきりせず、詳細についてはいずれも不明である。しかし、平成2年田中城跡の西斜面に刻まれている岩地蔵の横にゲートボール場が作られることになり、その整地の際に貝殻・獣骨とともに土器片が出土した。馬場田遺跡と名付けられたが、土器は縄文時代中期の様相を呈しているが、総合的に判断すると後期の初頭といったほうがよさそうで、現況では、直立する崖面の直下になるが、地形的に見ると岩陰遺跡になる可能性もある。平成5年度になると「三加和温泉ふるさと交流センター」の裏山に「ふれあいの森」計画が持ち上がり、まず、特別養護老人ホーム「和楽荘」の建設計画が進められた。しかし、この一帯は県の遺跡台帳に松尾遺跡として登録されていたため、「和楽荘」を遺跡範囲外に移し、どうしても遺跡内にかかってしまう調整池の調査のみを実施した。従来は、弥生時代の遺跡として登録されていたが、実際に調査を行ってみると縄文時代晩期の遺物の方が多く見られ、本町では初めて押型土器も出土した。

弥生時代になると甕棺を出土する遺跡が多く見られるようになってくる。松尾遺跡は、昭和43年5月開田工事中に黒髪式の単棺3基が出土し、県文化課の上野辰男氏により調査が実施された。甕棺は熊本市立博物館に保存されている。城原遺跡からも甕棺が数基出土している。当時の山鹿高校原口長之教諭が調査し、現物は鹿本高校に保存されている。田中城からは、昭和61・62年度の調査で弥生時代後期の竪穴住居跡が各1基確認され、また、金敷原遺跡にも後期の集落があったといわれる。このほか昭和43年5月には畦の前遺跡で数基の支石墓が見ついている。平成6年、町史編纂事業の一環として現地踏査を実施してみると、その数は20基を越え、精査すればまだかなり増えそうである。

古墳時代には、さらに遺跡数が増え田中城下横穴群・中林横穴群・桜町横穴群・岡横穴群などの横穴が多くみられる。平成3年には、町史編纂事業の一環として横穴の実測調査を実施したが、その際田中城下横穴群から町内では初めての装飾古墳が発見された。壁面に横線と斜格子の線刻で三角文と菱形文を刻んでいる。床は石を敷きつめた礫床で、壁も磨かれており非常に丁寧な作りである。また、新たに山森地区から1基・陣内地区から2基の横穴が発見された。さらに平成8年6月初旬、防空壕を作るため一部壊されてはいるが、上棚田地区にも2基の横穴があることが確認された。墳丘をもつ古墳も桜町古墳群(幽霊塚古墳・火の出塚古墳・第三号墳)があったが、昭和58年に行われた基盤整備で消滅してしまった。現在のところ、このほかに墳丘をもつ古墳が確認されていないので三加和町にとって数少ない貴重な遺跡が失われたことになる。

古墳時代以降になると、中世城が多くみられる。春富地区には田中城をはじめ今古開城・簾置城、神尾地区は神尾城・石坂城・年神の城・前城、緑地区は岡原城・坂本城・城の平城と10箇所が確認されている。しかし、田中城以外はまだ本格的な調査が行われてお

らず、詳細は不明である。田中城関連のものとしては、菩提寺といわれる東照寺（現東陽寺）、落城時一緒に立籠もった姉婿の迎春親行（坂本城主）の墓、秀吉軍と戦った中村伊賀・草野隼人の墓、耳が不自由だったため和仁側の矢を受け討死にし、後に「耳の神様」として祀られている柳川由布大炊助の墓、大津山城主（南関町）で、本町の浄満院に呼び出され謀殺されたといわれる大津山家後の墓など多数見られる。六地藏も岡・上東・小屋敷・学生田・本村など町内各所に点在している。なかでも田中城跡の西斜面に刻まれている六地藏は、中央部に主尊として閻魔大王を彫み、その左右に六地藏を三体ずつ彫刻している。この左側に「年月」の二字が見え、さらにその右上には「明」と見られる文字があり、「肥後國誌」の記載事項から「文明三年三月」と思われる。また、右側には「随仏」（随は陀の俗字）とあり、「南無阿弥随仏」と彫られていたものと思われる。神尾城の中部にある神尾山墓地には町内で最大の五輪の塔がある。源頼朝から鎮西奉行、豊前豊後守護を命じられ豊後に下向した大友能直の子孫である吉弘加左衛門尉源正直の墓である。大田黒字小次郎丸からは40基を越える五輪の塔・宝篋印塔・宝塔が見つかった。地中にはまだ多数埋もれており、かなりの数に上ると思われる。玉名郡誌によるとこの地区に二つの寺があったということで、その一つになる可能性が強い。また、板楠には建立年代は不明だが西光寺跡がある。現在は薬師堂だけが残っており、木造の薬師如来坐像が安置されている。桧の一本造りで身高84～85cm、秘仏として元旦にだけ開帳される。平安時代末期の作で、昭和41年1月31日に県の指定文化財となっている。西吉地には阿蘇氏の家臣坂梨弥吾助が、正治二年（1200）十一月阿蘇五宮を奉持して祀った山森阿蘇神社があり、その近くに、男女とも腰から下の病に靈験があるとされている「七郎神」（通称「七郎さん」）がある。町の南端には参勤交代の道である豊前街道が走っている。神尾地区の永ノ原から平野経由六本松までの約5.5kmの起伏に飛んだ道である。途中には郡境の碑、はぜ並木、腹切り坂、ヒジ曲がりの里数木跡（八里木跡）、宿屋のあった窪園、旅人のオアシスといえる茶店の六本松などがある。

このほか石像物として中原地藏がある。長祿二年（1458）に子供達が母親の二十五回忌の追善供養のため造立したものである。また、眼鏡橋が3箇所に残っている。上板楠神社のものは裏参道に架けられた長さ3.6m、幅1.1mと小さな橋で架橋年代（文政・天保ごろという説もある）・石工などは不明である。鬼丸橋は矢部谷川に架かる長さ10.7m、幅4.4mの橋で大正5年（1916）に小山世作らにより架けられたという。もうひとつが大正4年（1915）に小山世作・一松により、六四郎川が和仁川に合流するところに架けられた長さ4.85m、幅3.65mの六四郎橋である。この六四郎橋は、平成6年度に県道玉名八女線改良工事に伴い解体され、翌7年度、近くの「歴史と文化のふれあい広場」に復元された。

明治時代になると西南戦争関係の跡地がある。豊前街道の永ノ原から腹切り坂にかけて

激戦が繰り返され、今でも鉄砲玉が出土することがある。窪園には仮設された陸軍病院窪園包帯所があり、田原坂・植木方面で負傷者を敵味方の区別なく収容・手当した日本赤十字社と同様の役割を果たした。

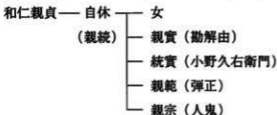
このように町内の遺跡も様々なものが新たに見つかり、その数も増してきた。しかし、詳細については、まだ不明のものが多く、今後の調査を待たねばならない。

第3節 田中城の歴史

田中城の落城に関してはいろいろ書かれているが、築城については定かではない。現段階で確実な最古の記述と見られるのは、『廣瀬文書』の暦應三年(1340)十一月十日大宰少貳が中村弥五郎に宛てた文の中にある「肥後國凶徒等桶籠同國鯉城侯之由・・・」であるといわれている。また、城の西斜面には閻魔大王を中央にして左右に各3体の地藏が彫られた一尊六地藏があり、これについて『肥後國誌』には「岩地藏傍ニ文明三年三月ト銘アリ 里俗云此地蔵ハ田中城ノ岩壁ニアリ昔日 邊滄海ナリシ時 船ヨリ此地蔵ヲ彫タリト云 一笑ニ堪タリ而ルニ此地蔵朔望満潮ノ時ハ濕リ流ル甚タ靈驗アリト云」との記事がある。この岩地藏については、田中城の安泰を祈願して彫られたという説もある。

落城については、『肥後國誌』に「天正十五年十二月六日田中城落城の折り、親實の妻を東勝寺の住職清長坊が三池の小野某に預け」と記してある。また、『袖留木文書』(砥用町指定文化財)には安国寺恵理が佐々成政に宛てた書状があり、それには十二月七日付けで「當城之事一昨日落去候誠以御太慶自明日普請可付候・・・」と書かれており、一昨日(五日)に落城したことが解る。両者には落城日にズレがあるが、後者の五日の方が事実のように思われる。このほか『和仁軍談』には田中城合戦之事ということで、和仁三兄弟のこことや一揆の際の守りのこと、戦いのことなど詳しく書かれている。『中原雜記』にも和仁之城落城之覚とあり、一揆のことが書かれている。また、『佐佐傳記』には田中城合戦事・刃春親行公交附嵩藏人殺和仁親實併落城事・和仁彈正同人鬼勇力事などいろいろ書いてある。

和仁氏に関しての資料はさらに少ない。『小野家文書』に「図書亮和仁式部大輔、親貞足利義隆公征夷大將軍復時の際、九州諸將と共に防州を發して京師に向かう永正五(1508)本領宛行う」とあるのが今のところの初現で、以後三代79年しかわかっていない。



第4節 国衆一揆

天正十年（1582）、全国統一を目指していた織田信長が本能寺の変で倒れると、豊臣秀吉が次第に勢力を伸ばし、島津氏を征伐するため九州に進攻してきた。当時、島津氏に従っていた肥後の国衆たちも、秀吉側に付き島津攻めに参加している。九州を平定した秀吉は、朝鮮・明国出兵のための兵站体制を整えるため、大坂に帰る途中、富山城主であった佐々成政を肥後の国主に任命した。当時、肥後には50数名の国衆がいたが、成政は城久基がいた隈本城を居城に定め、肥後を治めることにした。秀吉は、成政の肥後統治に際して肥後の国衆には秀吉が定めたとおりに知行を渡すことや三年間は検地をしてはならないことなど「五カ条の制書¹⁾」をもって命じていたが、成政は秀吉の意に背いて勝手に所領宛行をし、また、検地を実施しようとしたといわれている²⁾。これに反旗を翻したのが隈府城主であった隈部親永であり、隈府城の戦いで敗れると、嫡子親安の城村城（山鹿市）に逃れてともに籠城することになった。これが世に云う「肥後国衆一揆」の始まりで、これに呼応するように肥後の国衆たちが次々と加わっていき、肥後中に広がっていった。当時、田中城主であった和仁親実を筆頭に和仁三兄弟も、姉婿の迎春親行とともに籠城し、この一揆に加担することになった。こうしたなか、秀吉は一揆の首謀者格のひとりとして、和仁・迎春氏の名を挙げ皆殺しを命じ、一万の兵で田中城を包囲させ、他の一万を久留米に待機させている。そのことを証明するがごとく平成元年12月に山口県立文書館から発見された「迎春・和仁仕寄陣取図」には、田中城を取り巻くように二重に巡らされた櫓列が描かれ、その外側には小早川秀包・安国寺恵瓊のほか立花・鍋島・筑紫など九州の諸将の陣が見られる。このような状況の中、和仁軍は38日間の籠城の後、迎春氏の裏切りもあり12月5日に落城してしまった。この翌年に秀吉は、農民に武器の所持を禁じる「刀狩り令」を出し兵農分離を進めていった。この一揆平定により、熊本の中世は終焉をむかえ加藤清正・小西行長が入国することになった。

注1 御制書

- 一、肥後国五十二人之国人に、先規の如く知行相渡すべき事
 - 一、三年検地有るまじき事
 - 一、百姓等、痛まざる様に肝要の事
 - 一、一揆をこさざるように遠慮あるべき事
 - 一、上方普請三年免許せしめ候事
- 右の条々相違無く此の旨を相守るべく也。仍 件の如し

天正十五年六月六日

朱 印

佐々内蔵助殿

注2 このことに関しては、「五カ条の制書」の原本がないなどと、疑問を示す人もいる。

第5節 隣接市町の国衆一揆関係中世城

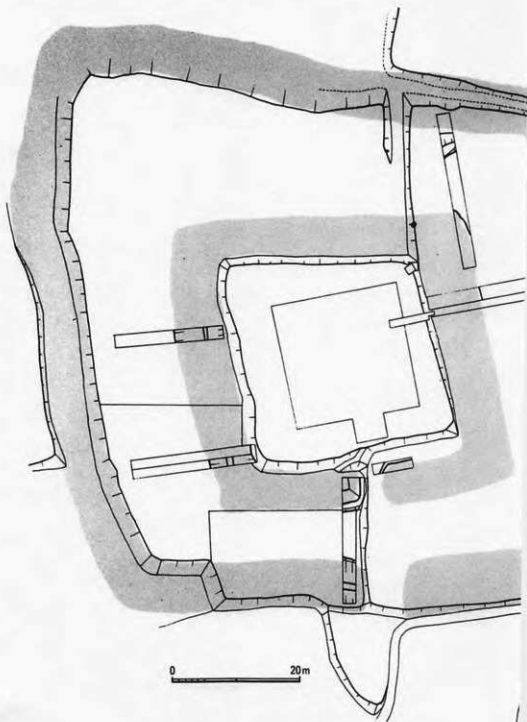
昭和62年(1987)12月5日、山鹿市民会館において、国衆一揆400年を記念したシンポジウムが、約700人の聴衆の参加を得て開催された。これを機会に、「国衆一揆」という共通の基盤を持つ1市3町(山鹿市・鹿央町・菊鹿町・三加和町)により国衆一揆顕彰会議が設立され(平成4年に南関町が加わり1市4町となる)、お互いの地域の活性化、さらには、行政区を越えた広域観光振興の促進を計りながら、各地の中世城の保存・活用を進めてきた。

本町の田中城跡は、昭和61年から調査を行っているが、山鹿市でも城村城跡・西付城跡の試掘調査、南関町では葛嶽城跡の調査、また、菊鹿町では隈部館跡の中心部の調査が昭和49年に既に行われていたが、町史編纂作業の一貫として平成5年に測量調査が実施され相次いで報告書が発刊されたため、ここにその要点をまとめておく。

(1) 城村城跡

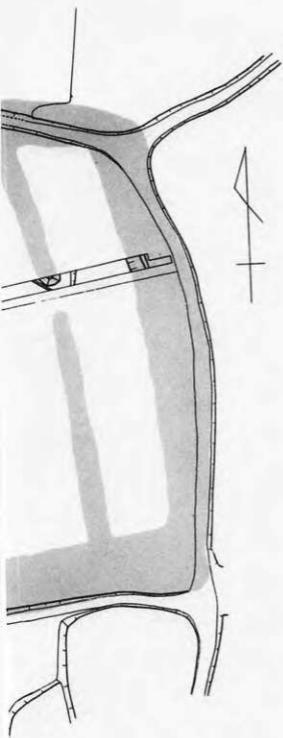
天正十五年(1587)の国衆一揆の中心になった城で、山鹿市大字城字城に所在する。岩野川の右岸に形成された丘陵の末端部にあり、主郭・二郭・三郭からなり、主郭部の南側には空堀が残っている。『肥後國誌』によると城の規模は、二町八反九畝九歩とある。城氏は、菊池能隆の四男隆經を祖とし、文永五年(1268)山鹿郡城村を拝領したことから名乗るようになったもので、城村城はその居城であったが、城氏が隈本城に移ったあとは隈部親永の子の親安の居城となった。天正十五年の国衆一揆の際には、隈府城を追われた親永を加え約15,000人が立籠もり佐々成政軍と戦ったといわれている。

平成元年度には、主郭部分の確認調査が行われ、ほぼ東西方向に伸びる掘立柱建物跡が1棟確認された。また、主郭の北側斜面からは、多数の瓦片が確認され注目された。これを伝える新聞によれば、森山恒雄熊本大学教授は「温度が低いとみられる焼き具合、文様が粗いこと、色合などから中世の瓦に間違いない。破砕された形跡がある。」と説明されまた、阿蘇品保夫県立美術館主幹(現・八代市立博物館館長)も「瓦は中世の物らしい。しかし、中世城は板ぶきで、瓦を使った例は聞いたことがない。」と指摘の上「伝統的に寺では瓦が使われたが、それも有力な寺に限られる。例がないだけに城跡そのものの詳細な検討が必要では。」と述べられており、調査した山鹿市立博物館では「瓦の量は1棟分は十分ある。周囲は急な崖で、別の場所から運んで捨てた可能性はない。本格調査をすれば年号銘や原料土の出所など明らかになって、城郭史の定説を覆す発見になるのでは」とあり、今後の本格的な調査が待たれるところである。



第3図 西付城遺構配置想定図

(「西付城跡」山鹿市教育委員会より)



(2) 西付城跡

西付城は、山鹿市大字城字院の馬場に所在し、国衆一揆の際に隈部親永・親泰親子が籠城した城村城の抑えのために、佐々成政が築いた城である。

城が作られている台地は、菊池川の支流である岩野川の右岸に形成された阿蘇溶結凝灰岩台地で東西500m、南北3kmにもおよぶ大きなものである。この台地の西端に西付城は作られており、小さな谷を挟んだ向い側の台地には、東付城も作られている。西付城一帯は、現在畑地として利用されており、城のほぼ中央部には城床と呼ばれる方形（一辺約30m）の台地状の盛土（東側で70cm、西側で2m）が見られる。城の西側にある山林の中には、堀跡が残っており、この堀跡の位置が城村城の反対方向に当たるところから、本来は城村城の出城として作られたものを、佐々軍が占拠して付城としたと考えられてきた。

このような歴史を持つ、西付城の中心部の一部が完りに出されようとしたため、山鹿市では、公有化を図るとともに、平成4年度には遺構確認のための調査を実施されている。

調査は、城床と呼ばれている部分に20m四方のグリッドを設け、周囲に6本のトレンチが入れられている。その結果、堀跡などが確認されているが、これらの遺構から調査者は西付城の構造を検討して「堀については、これまで城村城とは反対方向の西側の林に残る空堀だけが知られていたが、今回新たに確認されたものとして、城床の周囲に内堀が巡らされ、さらに外側に外堀を配していることが明らかになった。また、これらの入口は城床の南側に位置し、土橋を築いていたことも明らかになった。外堀は、現在、西側に僅かに残っていたが、南側、東側、さらに北側でその存在が明らかになった。これらは完全な姿での確認ではなかったが、現在の道路と重複している可能性が高い。また、城村城の在る東側には内堀と外堀との間に、もう一本の堀が存在していることが明らかになった。このことは、西付城が本来的に城村城に対して防御を強化していたことに外ならず、文献に記されているように佐々成政によって天正十五年八月十三～十四日にかけて築かれたものと理解すべきであろう。」と述べられている。また、既に消滅しているが小さな谷を挟んで作られている東付城についても、地籍図から西付城との共通性を指摘され、同じく佐々成政によって同時期に作られたとされている。さらに、これら両付城は、城村城とは連続する同じ平坦に作られていることから、城村城に対して本当に睨みが効いたのかとの疑問の呈示もされ、「城村城から鉄砲や弓で討って出られた場合、守りきれなかったのではないかと考えた。従って城村城からも簡単に討って出ることができない別の要因が存在したものと推察された。この戦も初期の段階で成政は山鹿に出兵し、日輪寺に斥候を出し、城村城の様子を窺っている。また、戦も城村城と日輪寺との間の岩野川沿いで行われており、日輪寺もしくはその近くに本陣を構えたものと考えられることができる。・・・この本陣が城村城の東側に位置し、東西付城が南及び西側に位置するように配されていればこそ、そ

それぞれの場所が機能的に城村城に対して威圧感を与えたのではと考えられる。城村城との間には何ら障害物が無く、敵の動きが手に取るように見られる状態では、隈部勢が容易に攻撃できなかつたのではなからうか。」とまとめられている。

いずれにしても、この調査で西付城の構造や規模が明らかになった上に、確認された虎口の位置から佐々成政が築いた城であることが立証されたことは大きな成果と言えよう。

(3) 葛嶽城跡（大津山城）

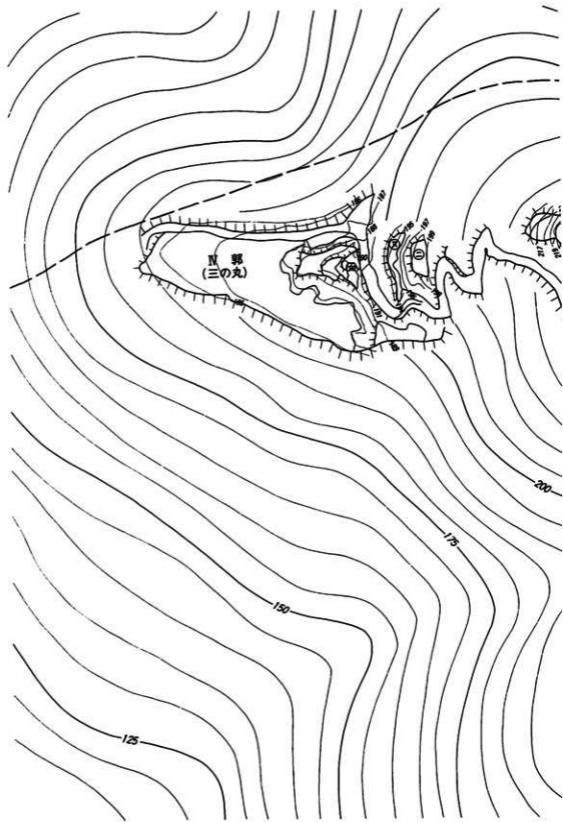
大津山資基により築かれ、以後、代々大津山氏の居城となった葛嶽城は、玉名郡南関町大字関東字城平に所在する中世城であり、平成4年度から取り組んでいる町史編纂事業の一環として調査を実施し、また、成果を基にした史跡公園整備が目指されている。

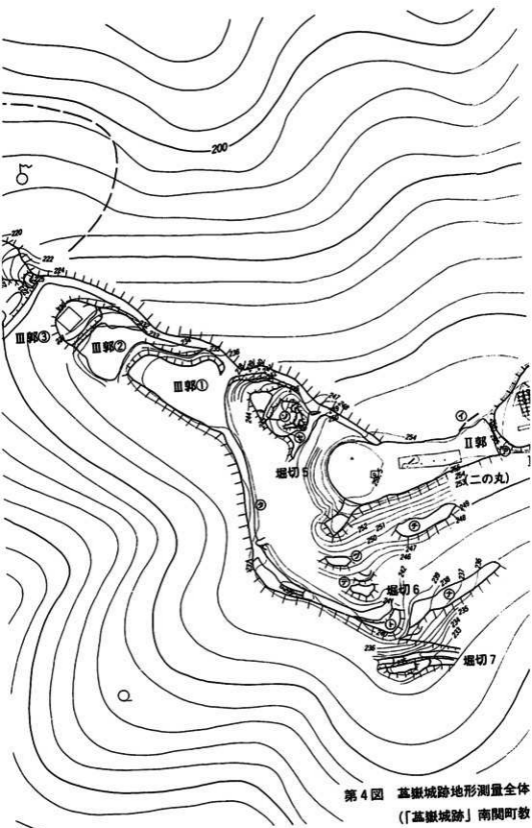
城は、標高256.4mの大津山に築かれており、山頂部分を削平して二段の平場を作り、主郭・二郭となし、南西および北東側に延びる尾根筋には平坦地・堀切などの城関係の遺構が残っている。これらの遺構や地形から、この城は南西側を大手、北東側を搦め手と判断されている。

調査は平成6年度に実施され、城域の測量調査および主郭・二郭と呼ばれている山頂部分の発掘調査が行われている。

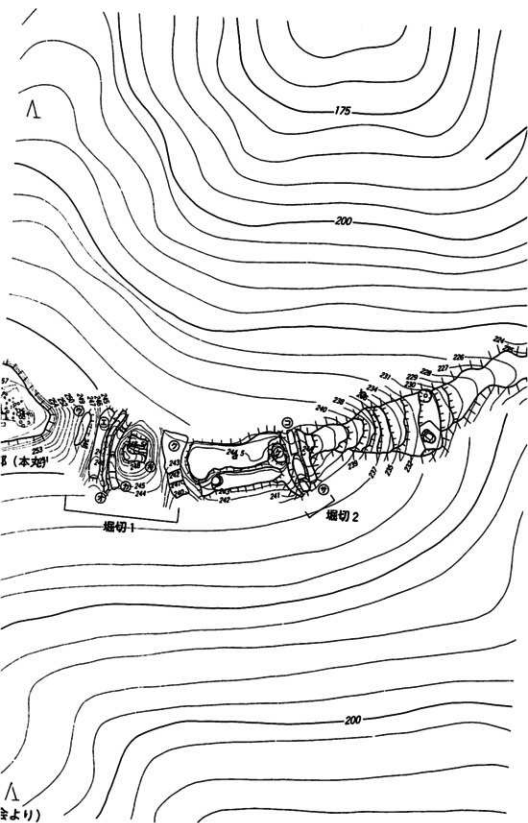
主郭部の南側と西側には、粗い整形の切り石を用いた石垣が積まれているが、現況から判断して、周囲を取り巻くものではなく、部分的なものと思われる。また、平坦面からは、礎石建物跡も確実なものが1棟、可能性があるものが2棟確認されている。確実な建物跡は、2×6間分の建物は確実としながら、最終的には4×6間と想定されている。梁行5.6m、桁行6.3mの礎石建物跡で桁行方向をN62°Wに取り、柱間は梁行1.4m、桁行1.05mである。他の2棟については、部分的な確認でもあり確実なものではない。二郭では平場の中央部にトレンチを入れ、遺構の確認が図られたが、全く確認されていない。しかし、地権者によると終戦直後に開墾を行った際、主郭部で確認されたような石列が出土したということであり、二郭にも礎石建物があったと推定されている。また、測量調査で堀切が7ヶ所確認されている。特に、主郭の東下には岩盤を大きくカットした大規模な土木工事を思わせる二重の堀切があり、部分的には土塁も残っている。

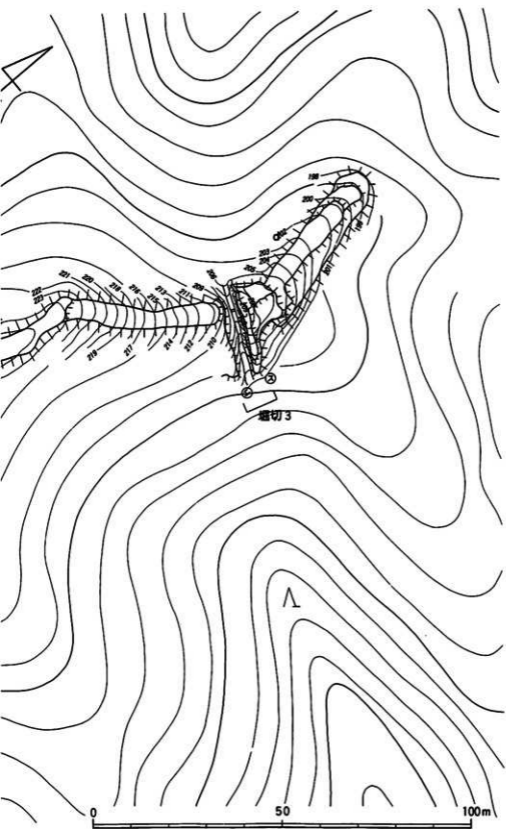
出土した遺物は、いずれも16～17世紀初頭のものと思われ、陶磁器類は全て輸入品であり、ほとんどは中国からのものであったが、朝鮮からのものもわずかに含まれている。共伴遺物として火舎・すり鉢・土師器などの日常品がまとめて出土しており、高所にもかかわらず、山頂で一定規模の生活が営まれていたことが裏付けられたとしており、また、これら出土遺物のなかに戦国時代以前の物が全く含まれておらず、極端な遺構の重なりも無いところから、この城の実年代を16世紀後半～17世紀初頭に限定されたことは大きな成



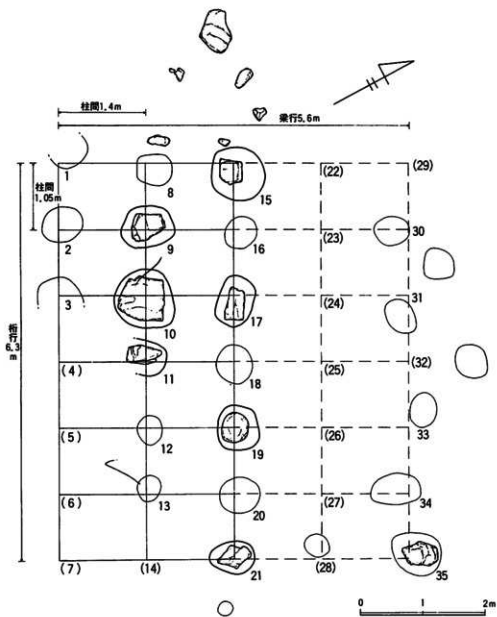


第4図 基嶽城跡地形測量全体
 (「基嶽城跡」南関町教)





果といえよう。



第5図 基麻城跡建物1実測図（「基麻城跡」南関町教育委員会より）

(4) 隈部館跡

隈部館は、鹿本郡菊鹿町大字上永野字高池に所在する、県下を代表する城館跡である。

昭和49～51年にかけて、発掘調査およびその成果に基づき、検出された礎石建物・庭園などの整備が行われていたが、平成2年度から進められてきた町史編纂事業の一環として平成5年度に、館全体の測量調査が実施された。

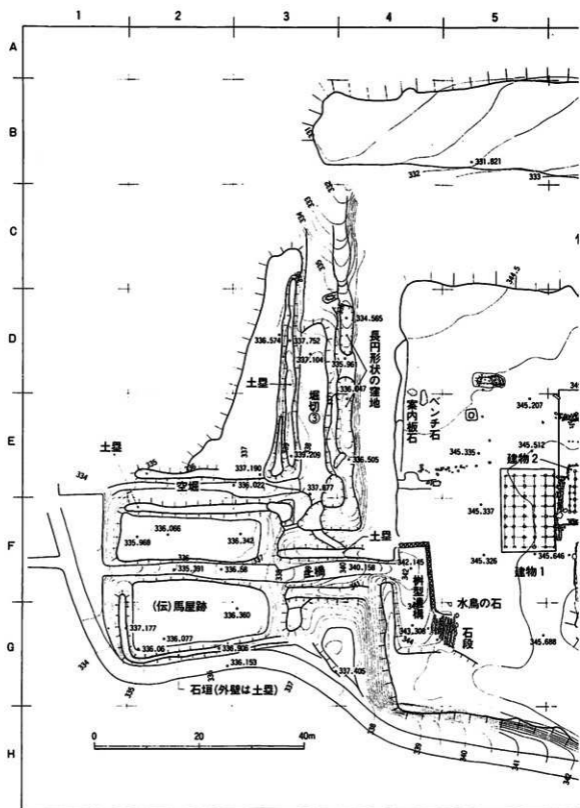
館跡は、標高340～370mの高所に築かれており、麓の桑原・高池集落とは110～140mの比高差がある。背後には猿返城(682m)・米の山城(775m)を控え、左右は木野川と五郎丸川源流の深い谷でさえぎられた、現在の菊鹿町ではかなり奥まった部分に作られている。

発掘調査は、南北60m×東西85m程の平場の中央部を中心に行われている。この平場は北東側をかなり削平して作り出されており、尾根続きの北側以外は急峻な崖に囲まれている。館は山腹に築かれているが、背後には極めて小規模な堀切があるだけなど、礎石建物・庭園などが確認されているが、地形的に見れば城館にはふさわしい地形とはいえないようである。確認された礎石建物は2棟で、1棟(建物1)は5×7間で対面所と考えられ、他の1棟(建物2)は基本的には3×3間の茶室と考えられている。建物1は、桁行方向をN22°Wにとり、梁行9.25m、桁行13.65mで、柱間寸法は桁行では1.95mと一定であるが、梁行は1.95mと1.70mに分かれている。このことから1.95mの柱間を持つ建物の北東側と南西側に縁側が付くと想定されている。建物2は、3×3間の建物の東側以外の三方に縁側を持つと想定され、桁行7.8m、梁行7.7mのほぼ正方形を呈す。建物1と建物2の間および建物2の南東側には、床面に小さな川原石を敷き詰めた雨落ち遺構も見られる。また、建物2の南東側には「心」字形をした庭園も確認されている。北側の山の緩斜面とその裾部の平地を利用して作られており、大半が小岩で縁取りされている。地形的には枯山水とも見えるが、池の南東端部が細長にくびれて呑み口と思われるところから、泉水の可能性が高いとのことである。

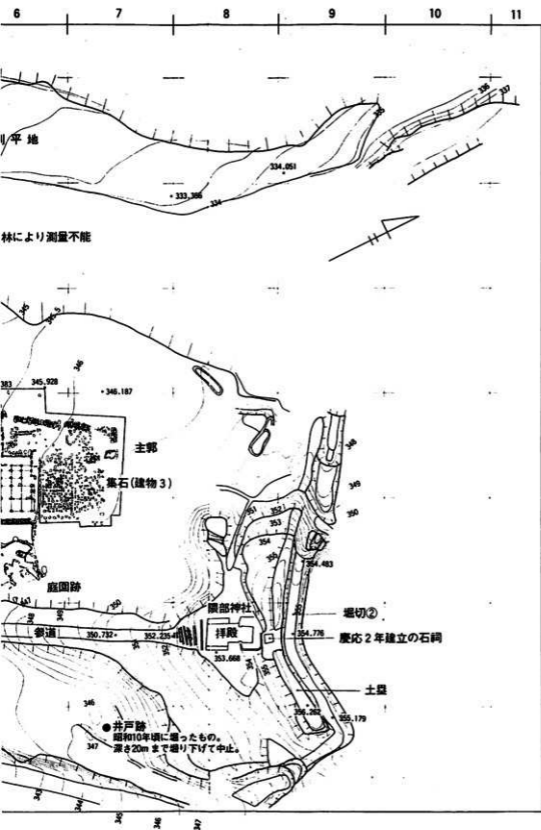
城の年代については、入り口に残る榊型遺構から戦国末期と思われるが、構造上は単純な単郭形式の古いタイプに属すると思われる、現在確認されている礎石建物跡の下に古い遺構が眠っているのではとの指摘もなされているようである。

遺物に関しては、発掘調査ではほとんど出土しておらず、また、麓集落にも館から出土したというような品も伝わっていない。庭園を有することから、従来言われていたように非常時のみ立て籠もるだけの城ではなく、一定期間生活を営んでいたことが推測されるだけに、遺物の出土量が少ないことは疑問点となっている。

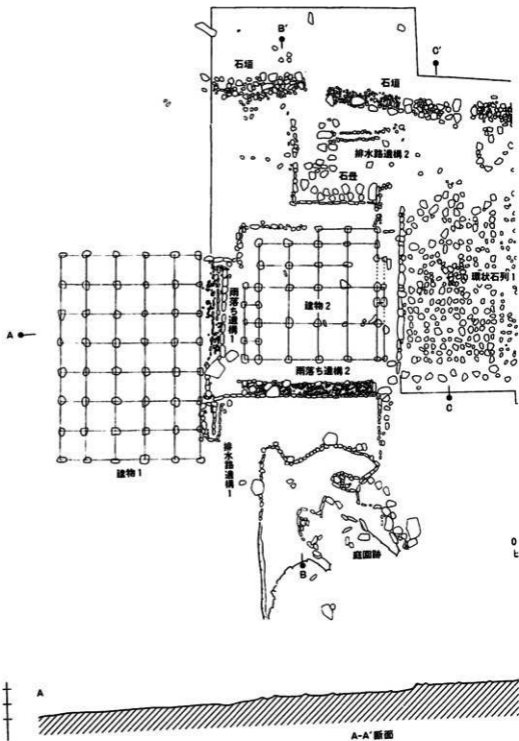
また、この他にも有力豪族にもなると琢磨地方の上相良氏のように戦国期には山付きから平野部に城館を移す事実があるが、隈部氏の場合、戦国末期までいたことは確実である



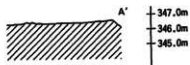
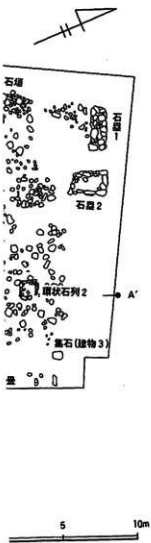
第6図 隅部館全体測量図 (「隅部館跡



(葡鹿町教育委員会より)



第7図 廣部館遺構全体図 (1)



3館跡」菊鹿町教育委員会より)

のに、何故、山付きに居館を構えたままであったのかとの疑問もあげられている。

県下に多数ある中世城の中でも、特異な構造をもつ城だけに今後検討する事柄がいろいろあるようだ。

【参考・引用文献】

- ・「熊本県の中世城跡」 熊本県教育委員会 1978年
- ・「西付城跡」 山鹿市教育委員会 1993年
- ・「葦嶽城跡」 南関町教育委員会 1995年
- ・「隈部館跡」 菊鹿町教育委員会 1993年
- ・「肥後国衆一揆シンポジウム」 肥後国衆一揆顕彰会議 1987年
- ・戦国夢幻 ～肥後国衆一揆の舞台～ 肥後国衆一揆顕彰会議 1995年

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

田中城跡は、総面積約80,000㎡にもおよぶ独立した舌状台地に造られている。中央部に約1,700㎡の平坦面を設けてこれを主郭となし、その周囲には西側を除く三方に曲輪を設けている。さらに、約10mの急斜面が続きやはり西側を除く三方に約300mにわたって空堀を巡らしている。

調査は、まず城の中心部を確認するという事で、主郭の調査から始めることになった。昭和61・62年度の2年間で主郭の調査を終わったが、掘立柱建物跡14棟を始め、多くの遺構を検出することができた。また、弥生時代後期の竪穴住居も2基検出され、古くからこの台地が生活の場として利用されていたことが確認された。

昭和63年度になると、主郭の周囲に巡らされた曲輪の調査にかかり、焼土・炭化物を多量に含んだ土壌が検出されたが、建物跡などは確認できなかった。遺物としては、鏝の幹・兜の前立・刀子などの金属製品をはじめ、多量の土器片も出土した。

平成元年度には空堀の調査に取りかかり、その結果幅9.42m、深さ約4.5mにもおよぶ大規模な空堀を確認した。遺物は、鉛製の鉄砲玉3発のほか若干の土器片しかみられなかった。

平成2年度になると、元年度に調査を行った空堀との関連性を見いだす目的で、対岸に残る、以前から物見やぐら跡と呼ばれていた箇所への調査にかかった。しかし、物見やぐら跡を想定させる遺構は一切確認できず、堀跡と柵列を思わせる柱穴がセットで確認された。これらのことから、この高台は従来言われていた物見やぐら跡ではなく、捨て曲輪跡と判断してよさそうである。北側にもこれと同じような高台が残っており、そこも、捨て曲輪跡になる可能性が出てきた。

平成元年12月に山口県立文書館の毛利家関係資料の中に、田中城攻めの絵図『刃春・和仁仕寄陣取図』があることが判り、平成3年度からの調査は、この絵図に基づいて行うこととした。この絵図は西側から描かれているため、西側斜面の調査から始めていったが、平成3年度の豊臣軍のものと思われる5列の柵列、平成4年度の和仁軍の連棟式の兵舎跡と思われる23列にもおよぶ柱列、平成6年度には宗教的な意味合いを持つと思われる石倉および石切り場など新しい発見が相次いだ。さらに、平成7年度は和仁三兄弟のひとりである弾正親範の屋敷跡ではないかと地元で言い伝えられている箇所の調査を行い、9.52×4.17mの掘立柱建物跡のほか井戸跡も確認され、生活の拠点のひとつであろうと推測された。

第2節 昭和61年度調査の成果（主郭）



写真1 田中城跡全景

1. 周囲の環境と調査経過

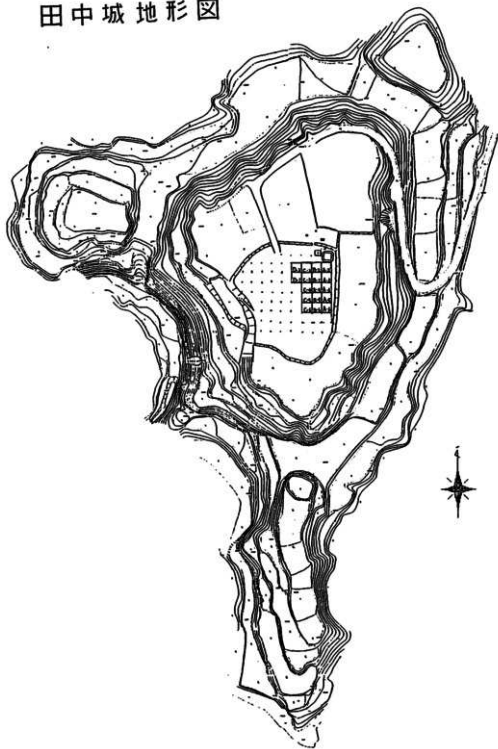
①周囲の環境

三加和町は、熊本県の北部に位置し、東は鹿本郡鹿北町及び山鹿市、南は玉名郡菊水町、西は玉名郡南関町及び福岡県山門郡山川町、北は八女郡立花町と隣接し、町のほぼ中央部を和仁川、十町川、岩村川が南流している。総面積59.46平方キロメートル、人口6394人の町である。（三加和町町勢要覧'87より）。

調査対象の田中城跡は、三加和町のやや西寄りを南流する和仁川東岸に位置する。田中城は、戦国時代末、肥後国人52人衆に数えられる和仁親実を城主とする一族の居城であった。天正15年（1587）、豊臣秀吉の征西後、国守佐々成政の大軍に2か月余も籠城抗戦したが、城内の謀反により12月6日（一説には13日）落城したという。現在、本丸、二の丸、三の丸、空堀等が残っており、中世から近世への過渡期の城跡として、貴重な遺跡である。（三加和町文化財ガイドブック・昭和59年3月発行より）。

田中城は、凝灰岩を基盤とする台地の特殊な地形（第8図参照）を利用して造られている。そして、その南西に面した凝灰岩の崖面に、14基の横穴群があり、また西に面する岸壁には、7体の地藏尊の彫刻と文明3年（1471）3月の銘が残されているなど、古くからさまざまな形で住民生活と深いかわりを保ち続けてきたことが推察される。

田中城地形図



第8図 田中城地形図・グリッド配置図

②調査結果

現地調査は8月1日に始まり、10月18日に終了した。その概要は次の通りである。

○8月1日～8月31日

幅約2mのトレンチを南北に設定し、表土剥ぎを行う。この時点で、おびただしい数量のピット群を検



写真2 調査風景

出。ただし、すべてのピットが田中城跡に関連するものかどうかは、この時点では不明。雨が少なく、乾燥した日が続く。表土を剥いだ後の表面が、堅く乾燥してヒビが入る。

○9月2日～9月4日

表土剥ぎ及び東側ピットの再検出を行う。ピットに規制なし。

○9月5日

表土剥ぎを行った部分に、5×5mグリッド設定のための基準杭を設ける。表面の風化乾燥が著しいため、グリッドごとにピット再検出を行うことにする。

○9月9日～9月13日

5×5mのグリッドを38面設定。東西にA→G、南北に1→7のナンバーを付け、グリッドの区別をする。A列から調査を再開する。

○9月16日～10月2日

B列及びC列のピット再検出。ピットは、3種に大別できると判断。9月22日県文化財保護審議員の視察がある。中世のピットと考えられるものにも2種あると推定。大半は中世のピットと考えてよさそうである。



写真3 調査風景

○10月6日～10月18日

D列のグリッドを2面再検出する。A列～D列のピット掘りあげを行う。A-6からC-6のグリッドにかけて、空堀状の遺構を検出。さらに、A-4からB-4にかけても、やや浅いが同様の溝状遺構を検出。この期間に、実測・写真撮影を行い現場での発掘調査は終了。

以上が調査経過のあらましであるが、設定したグリッド38面のうち、実際に終了したのは、A-2～A-6、B-2～B-6、C-2～C-6、D-2～D-3グリッドの17面、広さにして425㎡であった。これは、予定の半分弱で、本丸の3分の1程の広さである。

2. 遺構・遺物

①遺構（第9図）

○ピット群

検出したピットは多数で、350個を超える。大きさは径20～30cmのものが大半を占め、相互間の関連を見きわめることが、きわめて困難であった。

ピットは、その内部の土色により、大まかに次の四種に分類できるが、大半はどちらとも判別がつけがたいものであった。

- (A) 褐色土……………中世以前のもの。やや硬い土である。
- (B) 暗褐色土……………中世のピットと考えられるもの。
- (C) 極暗褐色土……………中世のピットと考えられるが、(B)との切合い関係で(B)より新しいと思われるもの。
- (D) 暗褐色土……………(B)とも(C)とも区別がつけ難いもの。

量的には、(D)が最も多く(C)→(B)→(A)の順に少なくなる。遺構実測図を見ればわかるように、直線的なつながりが感じられるのは、グリッドB-4・5、C-5の一部にすぎず、

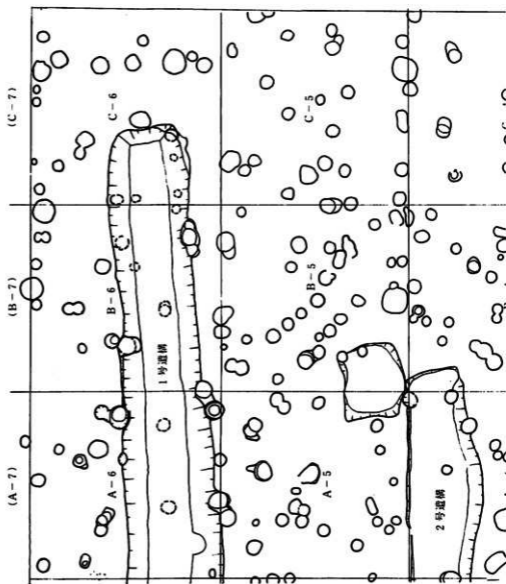
現時点でピット群の配列による構築物の配置を読み取ることはきわめて困難といわざるをえない。

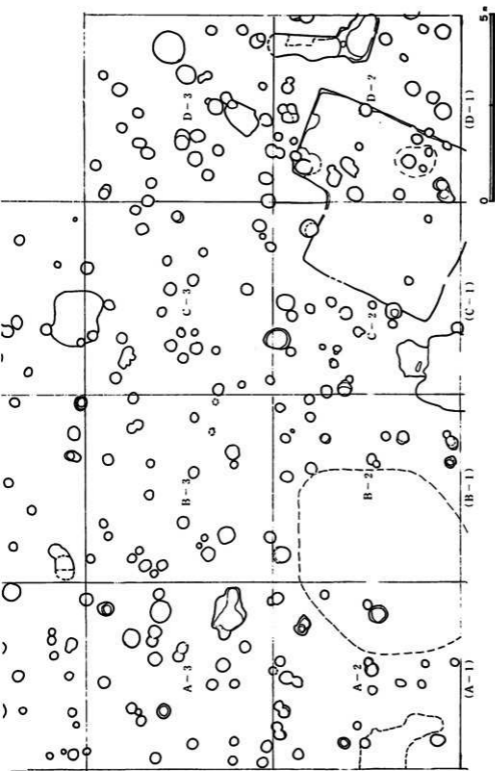
○溝状（空堀状）遺構

ほぼ東西に並行して設けられた2つの溝状遺構を検出した。北側にあるほうを1号遺構とし、もうひとつを2号遺構と呼ぶことにする。



写真4 ピット群出土状況





第9図 通構実測図 ※番号はグリッド番号

< 1号遺構 >

西端は、グリッド設定の都合上、検出していないが、そのまま一段下の畑地まで切り通していると推定される。東端はグリッドC-6で途切れている。検出部分の全長は11.48mで、幅約2m、深さ約1mを計る。壁はかなり急な立ち上がりで、



写真5 1号遺構検出状況

きわめて平坦な仕上げを施し、底面も壁面同様に平坦である。ごくわずかではあるが、東から西へ傾斜しており、その比高差は約10cmである。これらの形状から、1号遺構の機能を考えると、空堀あるいは塹壕として設けられたものと推定できる。

1号遺構の時期は、ピットB群と同時期のものと考えられ、この1号遺構が埋めもどされた後、新たにピットが掘られている。埋めもどした後に掘られたピットはC群に属するものである。なお、この1号遺構をピットB群と考えた根拠として、遺構内部に落ち込んだ土がB群ときわめて近いこと、中世の遺物を伴うこと、また、短時間で一気に埋めもどした痕跡が認められ、その直後に設けられたピットC群との前後関係が、ピット間の切合い関係と一致することなどがあげられる。

< 2号遺構 >

1号遺構と同様、西端は検出していないが、これも一段下の畑地まで切り通しになっていると思われる。東西の長さ5.61m、幅約2m深さ約0.5mで、壁面、底面ともにやや凹凸が認められる。底面は、東から西へ傾斜しており、その比高差は26cmである。また底面までの深さは、1号遺構に



写真6 2号遺構検出状況

比べて浅く、底面も傾斜があり、段下の畑地から本丸への一時的な通路として設けられた可能性もある。

②遺物（第10図）

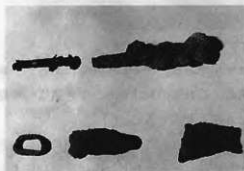
出土した遺物には次のようなものがある。

○金具類（写真7）

明らかに用途のわかるものはなかったが、鉄製品・銅製品など数点出土した。

○食器類（写真8）

青磁皿や白磁皿、染付の鉢、碗、皿などの小片ではあったが多数出土した。



▲ 写真7 金具類



▲ 写真8 食器類

○調理具類（写真9・10）

すり鉢や石鍋などが出土した。点数は少ないが、すり鉢を1点復元できた。また石鍋は、小片であったが、滑石製で外面にスガが付着しており、その用途は明らかである。他に、石臼と思われる破片なども出土した。

○貯蔵具類（写真11）

甕や壺の破片が出土したが、復元可能なものはなかった。



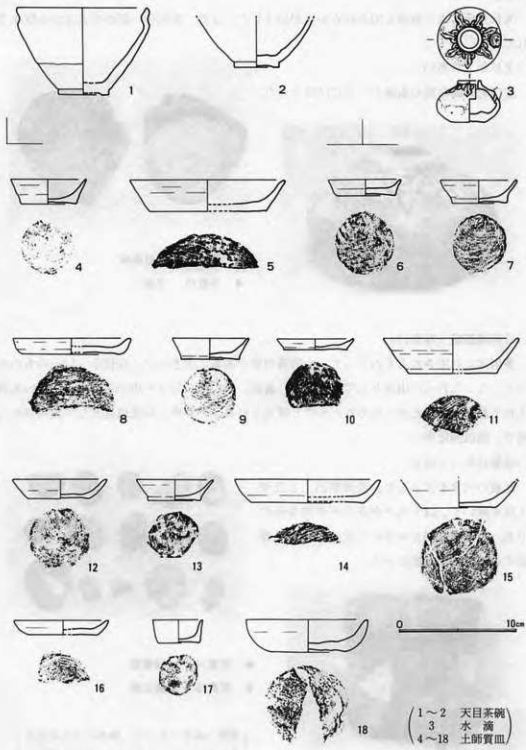
▲ 写真11 貯蔵具類



写真9 ▲
すり鉢

写真10 ▶
(石鍋)
すり鉢片)





(1 ~ 2 天目茶碗)
 (3 水滴)
 (4 ~ 18 土師質皿)

第10図 出土遺物実測図

○茶器（写真12）

天目茶碗2点と茶壺と思われる小片が出土した。また、茶臼の一部が本丸上から採集されている。

○文具類（写真13）

注口形の陶器製の水滴が一点だけ出土した。



▲ 写真12 天目茶碗

◀ 写真13 水滴

○日用雑器類（写真14）

多用途に利用されるものとして、土師質の皿がある。大きさは、底径5～13cmのものが出土した。これらの用途として、灯明皿、食器、中には、ピット中から出土したものも含まれており地鎮のために使われたものと推定される。いわゆる祭祀用具として使用された例で、類似例は多い。

○暖房具類（写真15）

瓦質の火舎が出土した。数種類出土したが1点を除いて、ほとんどが復元不可能な小片であった。遺存部分の多い1点の火舎から推定すると、脚は3個である。



▲ 写真14 土師質皿

◀ 写真15 瓦質火舎

遺構・遺物の項では、熊本県文化課参事
桑原憲彰氏からさまざまな御教示を賜わ
りました。

3. 小結

田中城の調査は、昭和59年の試掘に続き2度目である。昭和59年の試掘の際に、遺構までの深さや遺物の年代などが確認された。それによると、現在の表土（耕作土）の下に、ピットを主体とする遺構があり、桑の根などによる攪乱を被った部分もかなりあることが判明した。また、出土した遺物の中には、中世末の陶磁器に混じり、石鍬や弥生式土器なども含まれており、当地がかなり古い時代から生活の場として利用されていたことが明らかになった。

今回の調査は、以上のような調査結果をふまえてのもので、本丸上の構築物を確認することにあつた。結果を先に述べれば、本丸上の構築物の規模や配置を確認するには至らなかつた。そこで本項では、現時点で把握できる事項と今後の課題を次に提起しまとめとする。

○本年度の調査面積は425㎡で、本丸全体から見れば、およそ3分の1程度の広さである。

○遺構の大半は、径20～30cmほどのピットで、調査部分だけでも350個を越える。

○ピット相互間の配列は、確定できない。

○ピットは、大まかに四種に分類できる。

○2つの溝状（空堀状）遺構が検出された。

○年代の手がかりとして、多数の中世の遺物の他、各時代の遺物が出土した。

以上の事柄から、本丸上の構築物は、複数存在し、一戸の規模はかなり小さいものと推定される。また、その特殊な地形を人類が生活の場（あるいは活動の場）として利用しはじめたのは縄文時代に遡る。そして、中世に入り恒常的利用の住居でなく、非常の際の建物が構築され、いよいよ緊迫した事態（天正15年の戦乱）がせまりつつあるとき、ある部分は取り壊して新築したり、あるいは補強したりしたものと推定される。その根拠として数種類の異常に多くのピット群が存在することや、塹壕の目的で造られたとしか考えられない空堀が埋められ、その上に新たにピット群が残されていることなどをあげることができる。短期間のうちの度重なる建て替えや補強によって、おびただしい数のピットが残され、その結果として、構築物の柱の配列を読み取ることが困難となっている。また、今回の調査が本丸全体の約3分の1程度であつたことも、構築物の全体的な配置を考察する上で、まだ資料不足と言わざるを得ない。そこで今後の課題であるが、本丸の全面発掘がまず第一にあげられる。これは、何度も述べているように、未解決の構築物の規模と配置を明らかにするためには、是非とも必要である。次に、二の丸・三の丸と呼ばれている箇所調査、さらに曲輪、古井戸の調査など、田中城を究明するためには、慎重かつ長期的な展望に立った調査が望まれる。

〔 本稿は、概報でありいろいろ不備な面が多い。これらを補うために、田中城跡の調査が完了した時点で全体を総括した報告書を刊行する予定である。 〕

第3節 昭和62年度調査の成果（主郭）

前年度の調査成果に基づき、本年度は、主郭の残り部分の調査を行い、主郭の全体像を明らかにすることを目的とした。本年度の調査でも、多数の柱穴が検出された。柱穴の並びを検討してみると、前年度の調査区にも延びているように思われたため、埋め戻していた部分を再び掘り返してみるようになった。その結果、14棟の掘立柱建物跡を確認し、焼土を埋土とする土壌も1基検出した。そのほか弥生時代後期の竪穴住居跡も1基検出された。前年度の検出遺構の中にもこれと同様のものがみられ、やはり同時代の竪穴住居跡と推測される。

1. 検出遺構

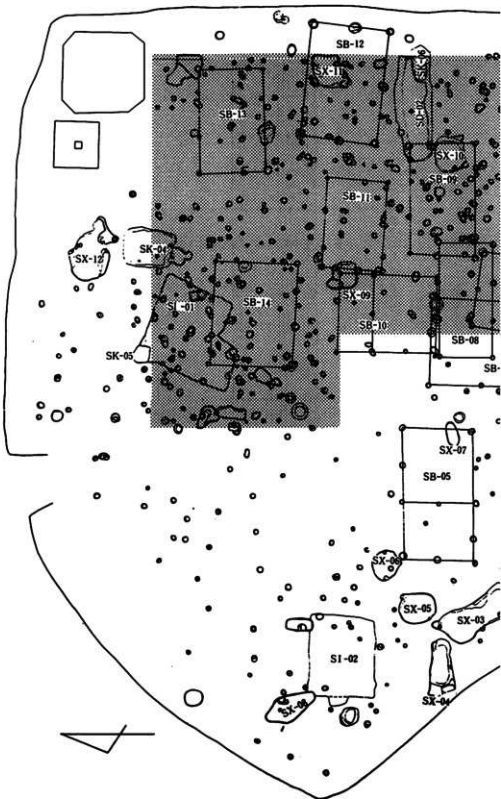
(1) 掘立柱建物跡

① 1号掘立柱建物跡（SB-01・第12図）

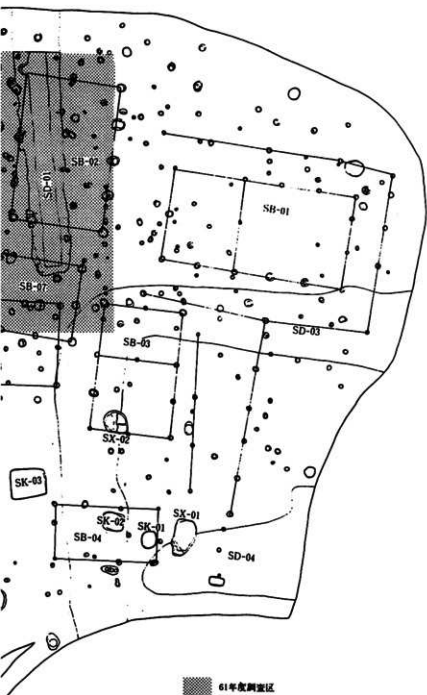
検出した掘立柱建物跡のうち最大規模のもので、主郭の最南部に建っている。桁行5間＝9.74m（32.5尺）、北梁行2間・南梁行3間＝4.84m（16.1尺）で、北より2間目に間仕切りの柱がある。柱間寸法は桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4 \sim P_5 \sim P_6$ で1.97・1.88・1.91・1.99・1.99mであり、 $P_8 \sim P_9 \sim P_{10} \sim P_{11} \sim P_{12}$ は $P_8 \sim P_9$ の補助柱が不明で3.77・1.99・1.99・1.99mである。梁行は $P_8 \sim P_7 \sim P_6$ で2.38・2.46m、 $P_{11} \sim P_{12} \sim P_{11} \sim P_7$ で1.12・1.79・1.93mであり、間仕切り $P_4 \sim P_{11} \sim P_8$ は2.60・2.24mとなる。桁行方向は $N 8^\circ E$ である。柱穴はほぼ直線的に並び、大きさは P_2 が最大（45×39cm）、 P_{12} が最小（21×18cm）で平均28.7×26.1cm、深さは P_2 が最深（52.0cm）、 P_{12} が最浅（24.3cm）で、平均38.2cmである。また、この建物を取り囲むように北側を除く三方に柱穴が並んでいる。縁の可能性も考えたが、最終的には櫛列として取り扱った。当初は、北側も考えていたが建物本体と近すぎるため、はずして考えることとした。これらは、直線的な部分も見られるが、ほとんど千鳥であり、柱穴の最大は P_{11} （34×33cm）、最小は P_{12} （22×18cm）で平均28.9×25.4cm、深さは P_{11} が最深（61.8cm）、 P_{12} が最浅（9.1cm）で平均28.4cmである。

② 2号掘立柱建物跡（SB-02・第13図）

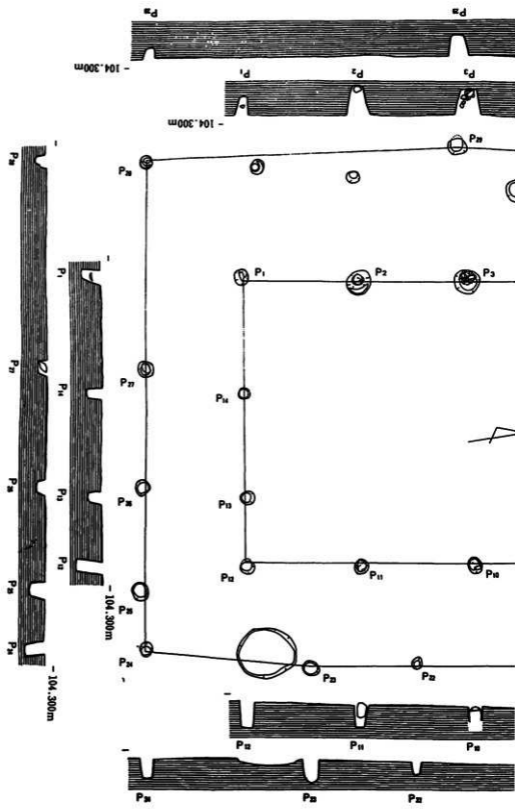
SB-01の北側で確認された桁行4間＝7.77m（25.9尺）、梁行2間＝5.13m（17.1尺）の建物で、桁行方向を $N 83.5^\circ W$ にとる。柱間寸法は桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で $P_2 \sim P_4$ の補助柱が不明であるが2.42・1.98・3.40mで、 $P_6 \sim P_7 \sim P_8 \sim P_9 \sim P_{10}$ で2.10・1.97・1.90・1.83mである。梁行は $P_{10} \sim P_7$ の補助柱が不明で5.13m、 $P_4 \sim P_5 \sim P_6$ は2.53・2.60mである。柱穴の最大は P_7 （69×56cm）、最小は P_5 （33×25cm）で平均55.8×45.3cm、深さは P_5 が最深（55.5cm）、 P_9 が最浅（22.9cm）で平均42.3cmである。南桁行は直線的だがほかは

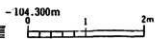
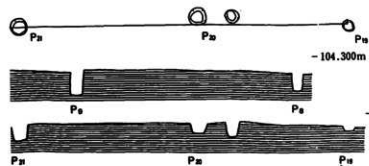
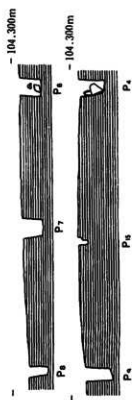
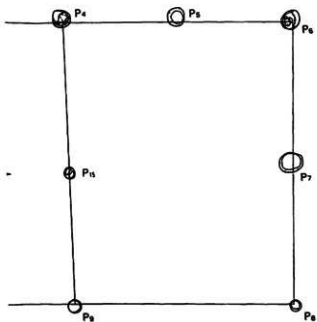
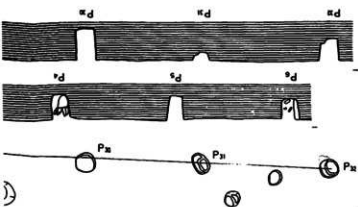


第11図 昭和62年度調査 遺

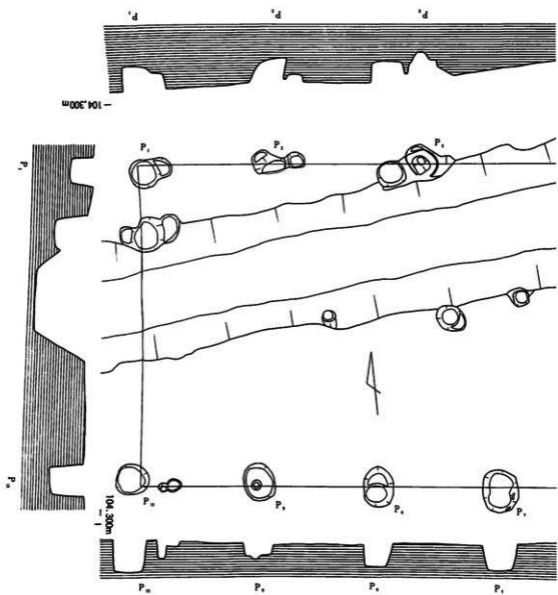


配置図

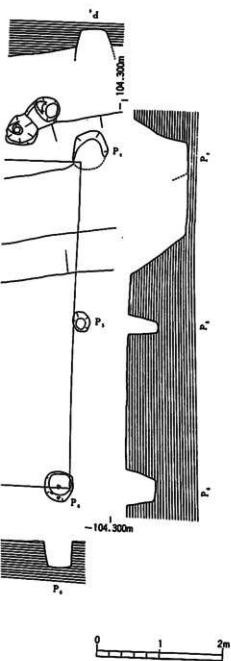




屋立柱建物跡実測図



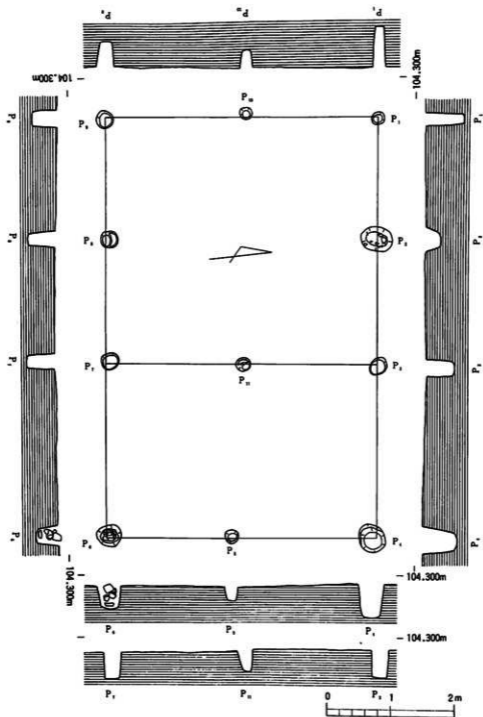
第13图 2号掘立柱建筑物跡实测图



千鳥で、溝遺構（SD-01）と切り合っている。

③ 3号掘立柱建物跡（SB-03・第14図）

SB-01の西側に、ほぼ直行するように建てられている、桁行3間=6.69m（22.3尺）

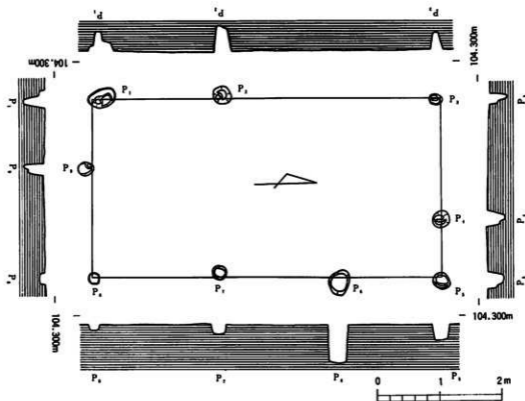


第14図 3号掘立柱建物跡実測図

梁行2間=4.30m (14.3尺)の建物で、西より2間目に間仕切りの柱がある。柱間寸法は桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で1.93・2.00・2.79m、桁行 $P_5 \sim P_7 \sim P_8 \sim P_9$ で2.80・1.97・1.95m、梁行 $P_1 \sim P_3 \sim P_5$ で2.29・2.01m、梁行 $P_7 \sim P_{10} \sim P_1$ で2.24・2.06m、間仕切り $P_3 \sim P_{11} \sim P_1$ は2.07・2.23mで、桁行方向は $N84^\circ W$ である。柱穴の大きさは P_1 が最大(50×38cm)、 P_{10} が最小(19×19cm)で平均30.4×27.1cm、深さは P_1 が最深(60.2cm)、 P_2 が最浅(24.0cm)、平均40.0cmである。柱穴の並びは $P_2 \cdot P_9$ がやや千鳥になるが、他はほぼ直線に並ぶ。

④ 4号掘立柱建物跡 (SB-04・第15図)

主郭の最も西側にある、桁行3間=5.59m (18.6尺)、梁行2間=2.85m (9.5尺)の建物で桁行方向を $N15^\circ E$ にとる。柱間寸法は桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ で $P_2 \sim P_3$ の補助柱が不明であるが2.02・3.57m、 $P_5 \sim P_6 \sim P_7 \sim P_8$ は1.64・1.92・2.03mである。梁行 $P_2 \sim P_4 \sim P_5$ は1.93・0.96m、 $P_8 \sim P_9 \sim P_1$ は1.82・1.07mである。柱穴の大きさは P_1 が最大(45×29cm)、 P_2 が最小(19×18cm)で平均28.4×24.4cm、深さは P_2 が最深(61.5cm)、 P_3 が最浅(10.4cm)で平均32.4cmである。柱穴は全て千鳥の並びである。

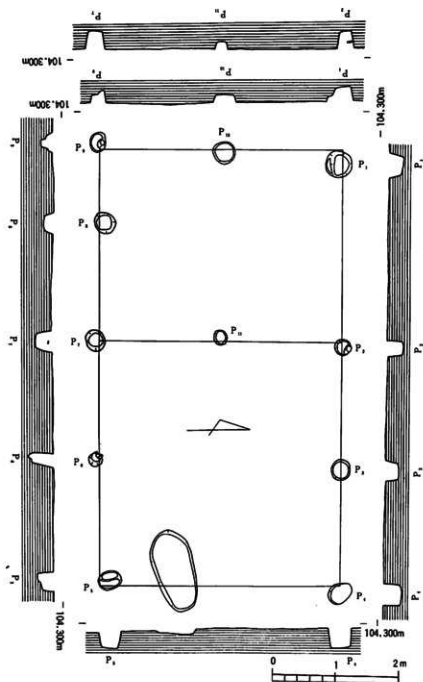


第15図 4号掘立柱建物跡実測図

⑤ 5号掘立柱建物跡 (SB-05・第16図)

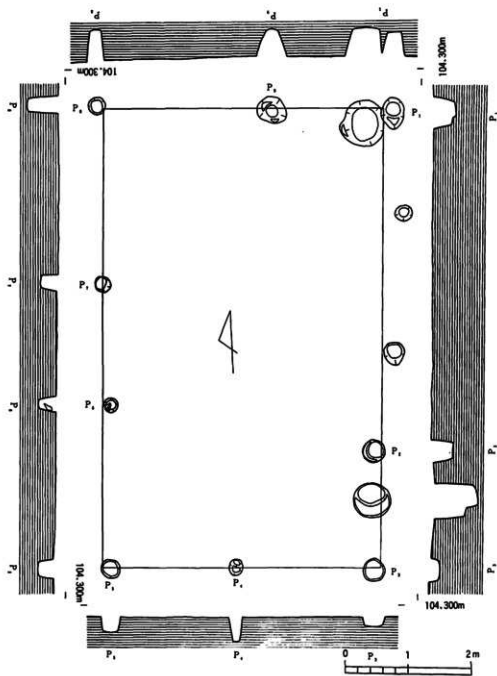
中央部の西側に1棟だけ離れて作られている。桁行4間=6.97m (23.2尺)、梁行2間=

3.87m (12.9尺) の建物で、西より2間目に間仕切りの柱があり、桁行方向をN89.5° Wにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ は $P_1 \sim P_2$ の補助柱が不明で3.08・2.04・1.85m、桁行 $P_5 \sim P_6 \sim P_7 \sim P_8$ は2.08・1.83・1.89・1.17mである。梁行 $P_1 \sim P_4$ は補助柱が不明で3.87m、梁行 $P_5 \sim P_6 \sim P_7$ は2.00・1.87m、間仕切り $P_7 \sim P_{11} \sim P_1$ は1.93・1.94m



第16図 5号掘立柱建物跡実測図

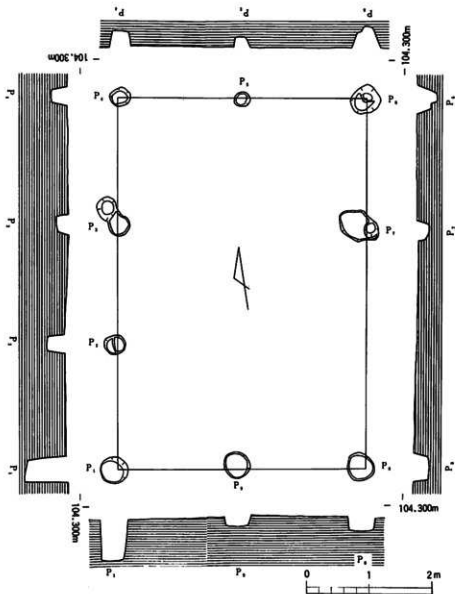
である。柱穴の大きさは P_1 が最大 (43×42cm)、 P_2 が最小 (22×22cm) で平均32.8×29.1 cm、深さは P_3 が最深 (41.1cm)、 P_{11} が最浅 (11.8cm) で平均23.5cmである。柱穴はほとんど千鳥に並ぶ。



第17図 6号掘立柱建物跡実測図

⑥ 6号掘立柱建物跡 (SB-06・第17図)

主郭の中央部で、SB-07・08・10と切り合いの状態を確認された、桁行3間=7.33m (24.4尺)、梁行2間=4.46m (14.9尺)の建物で、桁行方向をN2°Eにとる。柱間寸法は、桁行P₁~P₂~P₃でP₁~P₂の補助柱が不明であるが5.47・1.86m、P₃~P₄~P₇~P₈は2.61・1.94・2.78mである。梁行P₃~P₄~P₅は2.31・2.15m、P₆~P₉~P₁は2.70・1.76mである。柱穴の大きさはP₆が最大(48×40cm)、P₉が最小(23×22cm)、平均33.4×30.0cmで、深さはP₆が最深(51.2cm)、P₉が最浅(18.3cm)で平均34.0cmであり、P₃~P₄~



第18図 7号掘立柱建物跡実測図

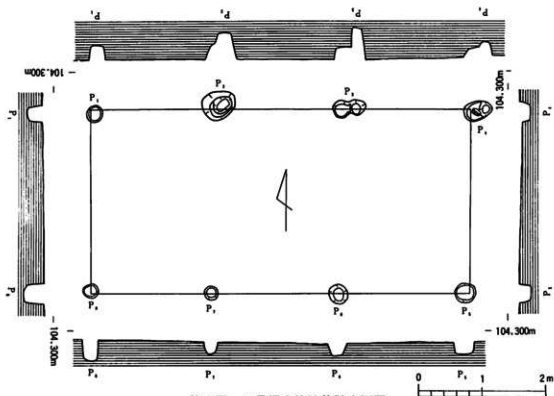
P_2 以外は千鳥に並ぶ。

⑦ 7号掘立柱建物跡 (SB-07・第18図)

SB-06・08と切り合い、SB-09と軒を接するように建てられた、桁行3間=5.93m (19.8尺)、梁行2間=3.94m (13.1尺)の建物で、桁行方向を $N8.5^\circ E$ にとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ は $2.00 \cdot 1.93 \cdot 2.00$ m、 $P_6 \sim P_7 \sim P_8$ は $P_7 \sim P_8$ で補助柱が不明であるが $2.08 \cdot 3.85$ mである。梁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ は $1.94 \cdot 2.00$ m、 $P_6 \sim P_7 \sim P_8$ は $2.05 \cdot 1.89$ mである。柱穴の大きさは P_6 が最大 (47×45 cm)、 P_7 が最小 (24×24 cm)、平均 36.3×34.0 cmで、深さは P_1 が最深 (68.3cm)、 P_8 が最浅 (17.5cm) で平均29.2cmであり、ほぼ直線的に並んでいる。

⑧ 8号掘立柱建物跡 (SB-08・第19図)

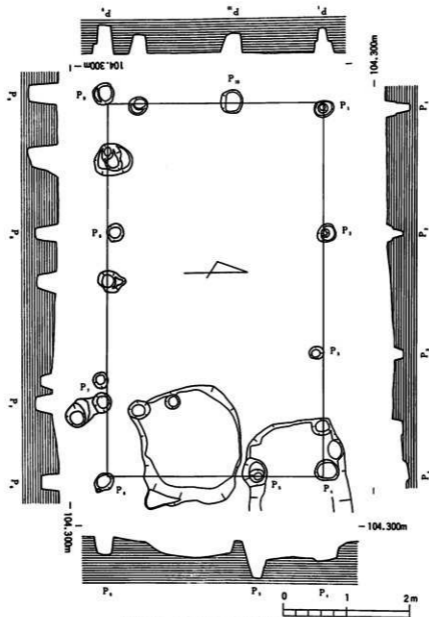
SB-06・07・09と切り合い、SB-10と軒を接し、桁行方向をE-Wにとる桁行3間=6.06m (20.2尺)、梁行1間=2.95m (9.8尺)の建物である。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で $2.08 \cdot 1.93 \cdot 2.05$ m、 $P_6 \sim P_7 \sim P_8$ で $2.10 \cdot 2.03 \cdot 1.93$ mである。柱穴の大きさは P_2 が最大 (55×46 cm)、 P_7 が最小 (22×22 cm) で平均 36.8×29.0 cm、深さは P_2 が最深 (43.8cm)、 P_7 が最浅 (18.8cm) で平均25.2cmである。柱穴の並びは、全てほぼ直線的に並ぶ。



第19図 8号掘立柱建物跡実測図

⑨ 9号掘立柱建物跡 (SB-09・第20図)

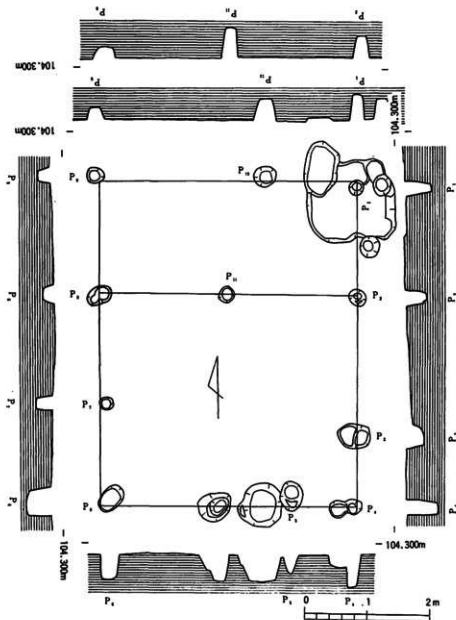
SB-08と切り合っている。桁行3間=5.97m (19.9尺)、梁行2間=3.43m (11.4尺)で、桁行方向をSB-05と同じN89.5° Eにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ は2.07・1.93・1.97m、 $P_5 \sim P_7 \sim P_8 \sim P_9$ で1.56・2.36・2.05mである。梁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ は1.04・2.39m、 $P_4 \sim P_{10} \sim P_{11}$ で2.01・1.42mである。柱穴の大きさは P_4 が最大(46×39cm)、 P_2 が最小(22×20cm)で平均32.9×28.5cm、深さは P_2 が最深(59.5cm)、 P_3 が最浅(16.3cm)で平均31.1cmである。柱穴の並びは全て千鳥である。



第20図 9号掘立柱建物跡実測図

⑩ 10号掘立柱建物跡 (SB-10・第21図)

SB-06と切り合い、SB-08・11と軒を接するように建てられている。桁行方向をN 1.5° Eにとる桁行3間=5.21m (17.4尺)、梁行2間=4.11m (13.7尺)の建物で北より1間目之間仕切りがある。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で1.83・2.27・1.11m、 $P_5 \sim P_7 \sim P_8 \sim P_9$ は1.65・1.76・1.80mである。梁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ は1.50・2.61m、 $P_4 \sim P_5 \sim P_6 \sim P_7$ は2.65・1.46mで、間仕切り $P_2 \sim P_{11} \sim P_8$ は2.07・2.04mである。柱穴の大きさは P_4 が最大(71×71cm)、 P_7 が最小(22×20cm)で平均39.2×31.5cm、深さは P_4 が最深(51.8cm)、

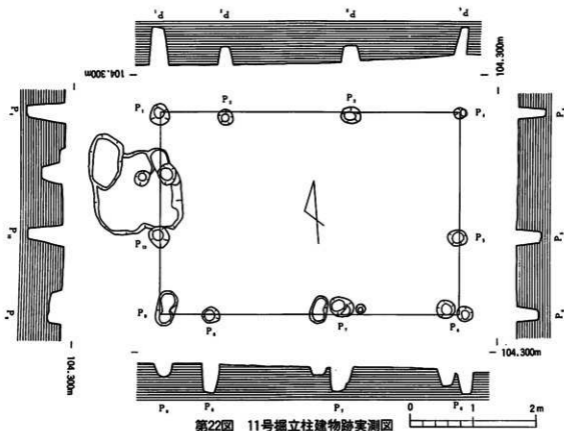


第21図 10号掘立柱建物跡実測図

P_6 が最浅(17.5cm)で平均35.6cmである。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_{11}$ は千鳥で、他は直線的に並んでいる。

⑪ 11号掘立柱建物跡 (SB-11・第22図)

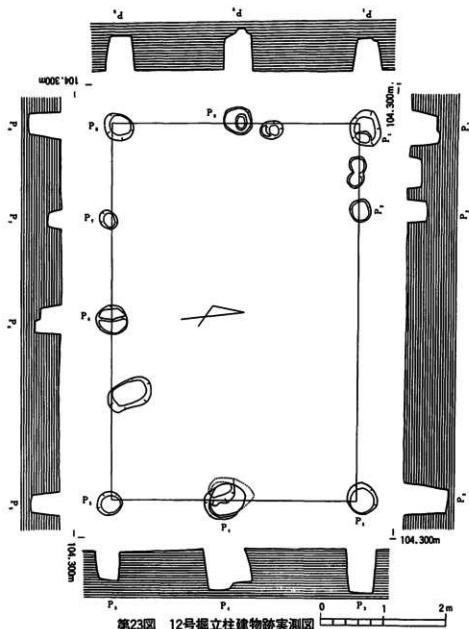
SB-10と軒を接し、桁行方向を $N86^\circ W$ にとる。桁行3間=4.78m (15.9尺)、梁行2間=3.22m (10.7尺)の建物で、柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で $1.03 \cdot 1.99 \cdot 1.76$ m、 $P_4 \sim P_7 \sim P_8 \sim P_9$ は $1.95 \cdot 2.03 \cdot 0.80$ mである。梁行 $P_1 \sim P_3 \sim P_4$ は $1.98 \cdot 1.24$ m、 $P_5 \sim P_{10} \sim P_1$ で $1.27 \cdot 1.95$ mである。柱穴の大きさは P_9 が最大(56×28cm)、 P_4 が最小(20×18cm)で平均 32.2×26.2 cm、深さは P_1 が最深(62.3cm)、 P_9 が最浅(22.2cm)で平均40.6cmである。柱穴はほとんど千鳥に並んでいる。



⑫ 12号掘立柱建物跡 (SB-12・第23図)

主郭のほぼ中央で、最も東側に建てられている、桁行3間=6.00m (20.0尺)、梁行2間=3.92m (13.1尺)の建物で、桁行方向を $N83.5^\circ W$ にとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ で $P_2 \sim P_3$ の補助柱が不明であるが $1.38 \cdot 4.62$ m、 $P_3 \sim P_4 \sim P_7 \sim P_8$ は $2.75 \cdot 1.70 \cdot 1.55$ mであり、梁行 $P_2 \sim P_4 \sim P_5$ は $2.17 \cdot 1.75$ m、 $P_6 \sim P_9 \sim P_{10}$ は $2.05 \cdot 1.87$ mである。柱穴の大きさは P_4 が最大(65×54cm)、 P_7 が最小(32×25cm)で平均 46.2×41.4 cm、深さは

P_3 が最深(70.2cm)、 P_7 が最浅(23.5cm)で平均50.0cmである。柱穴の並びは、梁行はほぼ直線的だが桁行は千鳥である。

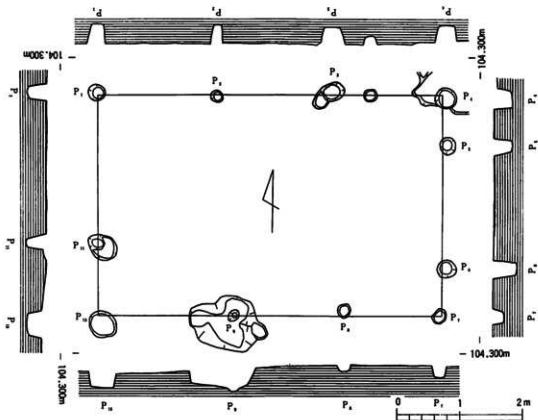


第23図 12号掘立柱建物跡実測図

⑬ 13号掘立柱建物跡 (SB-13・第24図)

主郭の北東隅にある桁行3間=5.50m(18.3尺)、梁行3間=3.51m(11.7尺)の建物で、桁行方向を $N89^\circ E$ にとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で1.92・1.80・1.78mであり、 $P_7 \sim P_8 \sim P_9 \sim P_{10}$ は1.56・1.76・2.18mである。梁行 $P_1 \sim P_5 \sim P_6 \sim P_7$ は0.79・1.95・0.77m、 $P_{10} \sim P_{11} \sim P_1$ で $P_{11} \sim P_1$ の補助柱は不明であるが1.15・2.36mである。柱穴の大

きさは P_{10} が最大(48×42cm)、 P_7 が最小(19×18cm)で平均31.0×26.8cm、深さは P_6 が最深(37.5cm)、 P_9 が最浅(4.8cm)で平均25.6cmである。柱穴の並びは千鳥である。



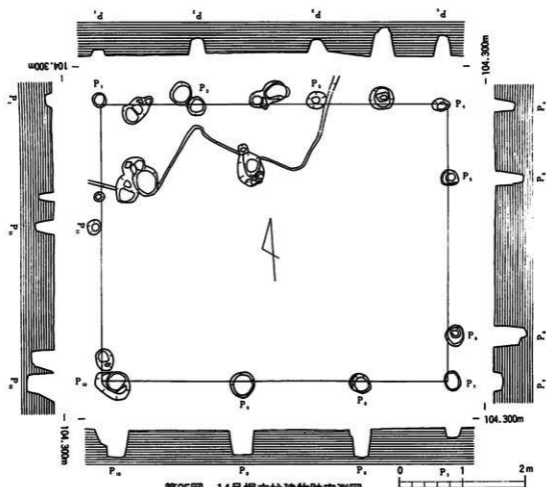
第24図 13号掘立柱建物跡実測図

⑭ 14号掘立柱建物跡 (SB-14・第25図)

桁行3間=5.55m(18.5尺)、梁行3間=4.42m(14.7尺)の建物で、桁行方向をN86°Wにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ で1.55・1.89・2.11m、 $P_7 \sim P_8 \sim P_9 \sim P_{10}$ は1.40・1.88・2.27mである。梁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_4$ は1.17・2.49・0.76mであり、 $P_{10} \sim P_{11} \sim P_1$ は $P_{10} \sim P_{11}$ で補助柱が不明であるが2.45・1.97mである。柱穴の大きさは P_{10} が最大(58×42cm)、 P_{11} が最小(17×15cm)で平均31.4×26.3cm、深さは P_6 が最深(46.0cm)、 P_1 が最浅(10.2cm)で平均28.5cmである。柱穴の並びは $P_1 \sim P_2 \sim P_3 \sim P_{10}$ は直線的であるが、他は千鳥である。

(2) 溝遺構

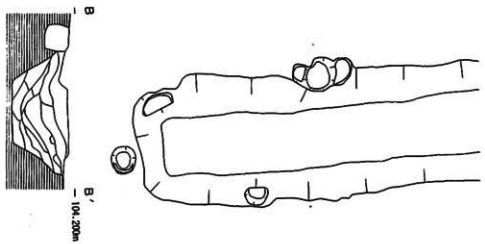
前年度の調査で2本の溝遺構が確認されていたが、今年度の調査で新たに2本の溝遺構が確認された。



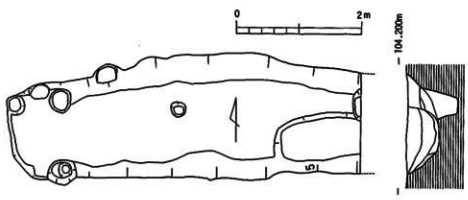
第25図 14号掘立柱建物跡実測図

建物番号	桁	行	梁	行	棟方向	備考
SB-01	5間	9.74m (32.5尺)	2間(北) 3間(南)	4.84m (16.1尺)	N 8° E	周壁に掘列 北より2間目に間仕切り
02	4間	7.77m (25.9尺)	2間	5.13m (17.1尺)	N 83.5° W	
03	3間	6.69m (22.3尺)	2間	4.30m (14.3尺)	N 84° W	西より2間目に間仕切り
04	3間	5.59m (18.6尺)	2間	2.85m (9.5尺)	N 1.5° E	
05	3間	6.97m (23.2尺)	2間	3.87m (12.9尺)	N 89.5° W	西より1間目に間仕切り
06	3間	7.33m (24.4尺)	2間	4.44m (14.8尺)	N 2° E	
07	3間	5.93m (19.8尺)	2間	3.94m (13.1尺)	N 8.5° E	
08	3間	6.06m (20.2尺)	1間	2.95m (9.8尺)	E-W	
09	3間	5.97m (19.9尺)	2間	3.43m (11.4尺)	N 89.5° W	
10	3間	5.21m (17.4尺)	2間	4.11m (13.7尺)	N 1.5° E	北より1間目に間仕切り
11	3間	4.78m (15.9尺)	2間	3.22m (10.7尺)	N 86° W	
12	3間	6.00m (20.0尺)	2間	3.92m (13.1尺)	N 83.5° W	
13	3間	5.50m (18.3尺)	2間	3.51m (11.7尺)	N 89° E	
14	3間	5.51m (18.4尺)	2間(西) 3間(東)	4.42m (14.7尺)	N 86° W	

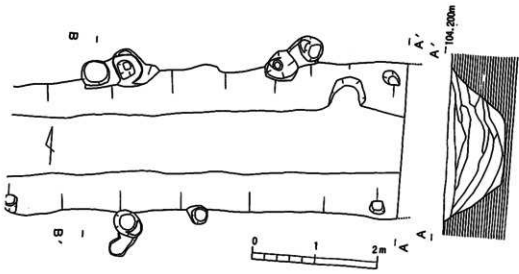
第3表 主郭掘立柱建物跡一覧表



第26图 14



第27图 2号沟实测图



溝実測図

① 1号溝遺構 (SD-01・第26図)

主郭部中央のやや南側を、ほぼ東西方向に走る。2号掘立柱建物跡 (SB-02) と切り合って、東側の一段下の畑まで切り通していると思われる。全長11.86m、幅1.61~2.43mで、深さは0.75~1.07mを測る。西から東へ12.4cmの比高差で傾斜している。

② 2号溝遺構 (SD-02・第27図)

1号溝遺構の北約5mに平行して作られている、確認した長さ7.9m、幅1.5~2.0m、深さ0.25~0.52mの溝で、西から東へ約27cmの比高差で傾斜している。東側は1号溝遺構同様一段下の畑まで切り通していると思われる。

③ 3号溝遺構 (SD-03)

主郭部の南西隅を区切るように作られている。西斜面から幅約2mで東方向に約16m延びたあと、南に方向を変え一段下の畑まで切り通していると思われる。SK-02・SX-02と切り合っており、これらを発掘したところ肩部と思われる斜面が現れ、深さは約1.5mと推測された。

④ 4号溝遺構 (SD-04)

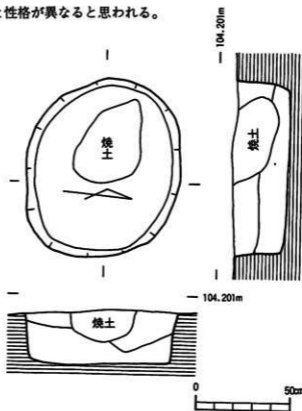
主郭の南西隅から約8.5m北方向に延びる溝で、幅は約3.5mと広いが深さは約0.4mと浅い。他の三本の溝と比較してみると性格が異なると思われる。

(3) 土壌

4号掘立柱建物跡 (SB-04) 周囲で3基、昨年度の調査区で3基の計6基が確認された。ほかに不定形土壌も12基確認されている。

① 1号土壌 (SK-01・第28図)

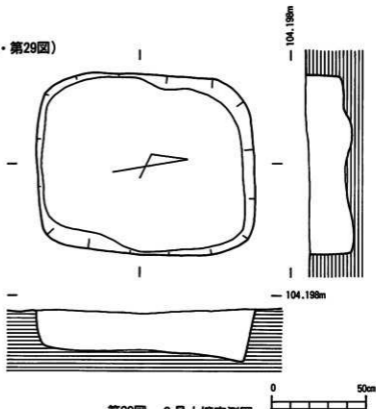
4号掘立柱建物跡 (SB-04) の南側梁行に接するように確認された土壌で、長径0.95m、短径0.81m、深さ約29cmの円形プランである。中央部の西側に44×35cm、深さ約20cmの粘性の強い焼土塊がある。



第28図 1号土壌実測図

② 2号土壌 (SK-02・第29図)

4号掘立柱建物跡 (SB-04) の東側桁行の中央部に接するように確認された土壌で、長径1.15m、短径0.95m、深さ約23cmの隅丸長方形プランである。また、3号溝 (SD-03) が埋められた後に作られているため、底面の確認が難しく、掘り過ぎてしまった。しかし、結果的にはSD-03の肩部の確認ができ、SD-03の深さが約1.5mあることがわかった。



第29図 2号土壌実測図

③ 3号土壌 (SK-03・第30図)

4号掘立柱建物跡 (SB-04) と5号掘立柱建物跡 (SB-05) の間に位置する。長径1.93m、短径1.52m、深さ約25cmの隅丸長方形プランで、長軸を南北に取る。北半分には焼土が厚く堆積しており、炭化物 (木・竹など) も多量に検出され、長期間にわたってカマド様の用途で使用していたものと考えられる。また、火舎・すり鉢片のほか小動物のものと思われる骨片も出土した。

④ 4号土壌 (SK-04)

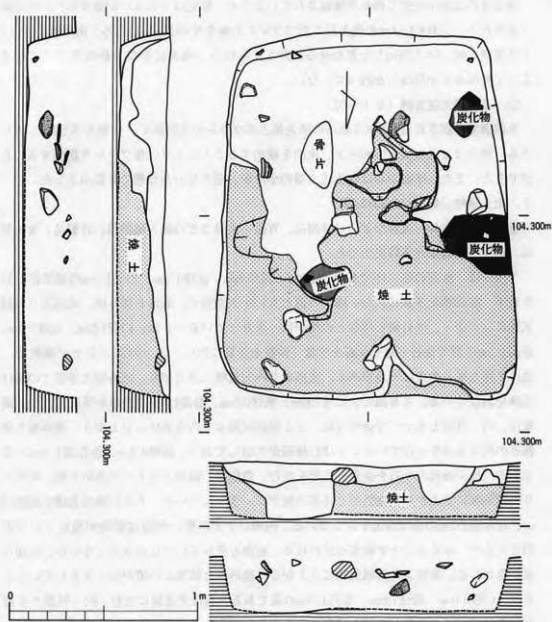
調査区の北側で確認されたSI-01に接して検出された。長径2.62m、短径2.12m、深さ約39cmの隅丸長方形プランの土壌である。土壌内には、多数の礫が埋まっており、なかには火を受けて赤褐色を呈しているものもある。また、遺物も数点出土した。

⑤ 5号土壌 (SK-05)

北側で確認された弥生時代の竪穴住居跡 (SI-01) の北西隅で、切り合う状態で確認された。0.97×0.87mの隅丸方形プランで、深さは61cmである。内部には石が詰まっており、その隙間から遺物も確認された。

⑥ 6号土壌 (SK-06)

SD-02の東隅で切り合う状態で確認された。長径1.93m、短径0.98m、深さ51.4cmの楕円形プランを呈している。SD-02の断面を観察すると、柱穴→溝→土壌の順で作られ



第30図 3号土壌実測図

ており、この土壌は最も新しい時期のものであることがわかった。

(4) 竪穴住居跡

出土遺物から、弥生時代後期と思われる住居跡が1基確認された。また、昨年度確認されている遺構も、同時期の住居跡と考えられる。

① 1号竪穴住居跡 (S1-01)

調査区の北側中央部で昨年度確認されているため、断定はできないが弥生時代の住居跡と思われる。5.00×4.54mの隅丸長方形プランで主軸をN70.5°Wにとる。南東隅にはベッド状遺構(約1.9×1.05m)を思わせる部分も見られる。後世にかなり耕作を受けているようで壁はわずか数cmしか残っていない。

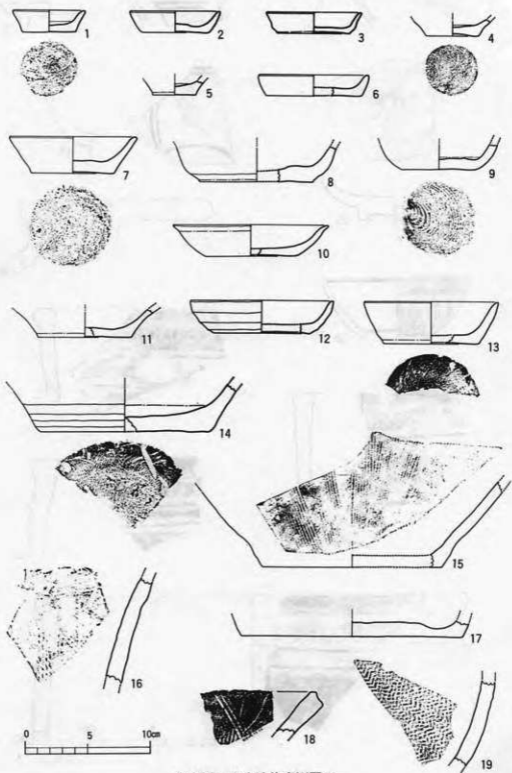
② 2号壜穴住居跡(S1-02)

北西隅で確認された4.38×3.43mの隅丸長方形プランの住居跡で、主軸をN86.5°Wにとる。壁はほとんど残っておらず、床面を検出することにより全体プランを推測することができた。また、床面からは弥生式土器の小片が、貼り付いた状態で多数出土した。

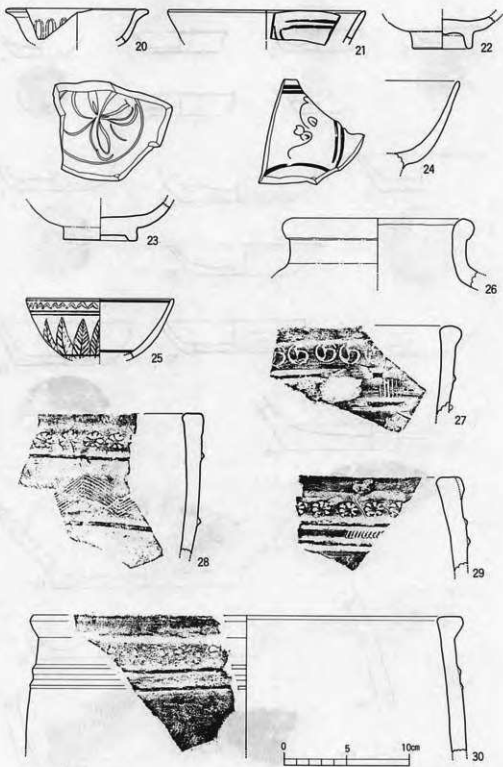
2. 出土遺物(第31・32・33・34図)

土師器・すり鉢・火舎などの日常用品、青磁・染付などの輸入磁器類、石製品、金属製品、弥生式土器など多数出土した。

1～13は土師器の皿・坏である。1は、口径5.8cm、底径4.2cm、器高1.7cmの皿で長石粒を若干、雲母粒を多量に含む。内・外面ともにナデ調整で、底は糸切り底。底部より外傾気味に立上がり、底外面と体部との境がはっきりしている。2は、口径7.2cm、底径5.4cm、器高1.7cmの皿で長石・角セン石を少量、砂粒を多量に含む。内・外面ともナデ調整で、底は糸切り底。焼成は不良である。底部より内湾気味に立上がり、底外面と体部との境は丸味をおびている。3も皿で、口径7.6cm、底径5.8cm、器高1.7cmで雲母を多量に含む。調整は、内・外面ともナデで糸切り底。2と同様底部より内湾気味に立上がり、底外面と体部との境は丸味をおびている。4は口縁部が欠損しており、底径4.2cm、現存高1.3cmの皿である。径1cm程の小石を少量と雲母を含む。調整は、両面ともナデで糸切り底。底部より外傾気味に立上がり、底外面と体部の境がはっきりしている。5も口縁部欠損で底径3.4cm、現存高1.0cmの皿で雲母を含んでいる。内面はナデ調整、外面は器面が荒れていて不明であるが、おそらくナデ調整と思われる。底面も荒れていてはっきりしないが、糸切り底と思われる。底部より外傾気味に立上がり、底外面と体部との境がはっきりしている。6は、口径8.6cm、底径7.6cm、器高1.7cmの皿である。雲母を多量に含む。内・外面とも器面が荒れていて不明だがナデと思われ、糸切り底である。底部より内湾気味に立上がり、底外面と体部の境が丸味をおびている。7は、口径10.2cm、底径6.6cm、器高2.9cmの皿である。長石を含んでおり、内・外面ともナデ調整で糸切り底。底部より外傾気味に立上がり、底外面と体部の境がはっきりしている。8は、底径9.0cm、現存高2.7cmで口縁部が欠損している。径1cm程の長石・雲母・角セン石を若干含む。器面が荒れていて、はっきりしないがナデ調整と思われる。底部より内湾気味に立上がり、底外面と体部の境が丸味をおびている。9は、雲母を多量に含む、底径6.0cm、現存高2.0cmの皿で口縁部を欠く。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。底部より内湾気味に立上がり、底外面と体部の境が丸味



第31図 出土遺物実測図1



第32图 出土遺物实测图 2

をおびている。10は、口径12.4cm、底径7.2cm、器高2.5cmで雲母や径1cm程の小石を若干含んでいる。器面が荒れていてははっきりしないがナデ調整と思われ、糸切り底である。底部より内弯気味に立上がり、底外面と体部の境が丸味をおびている。11は、底径7.4cm、現存高2.0cmで口縁部が欠損している。雲母を多量に、また、径1～1.5cm程の小石を若干含み、内・外面ともナデ調整で糸切り底。底部より外傾気味に立上がり、底外面と体部の境がはっきりしている。12は、口径11.4cm、底径7.6cm、器高2.6cmで雲母を多量に含む。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。外面には明瞭な稜が残っている。底部より内弯気味に立上がり、底外面と体部の境が丸味をおびている。13は、口径10.8cm、底径7.6cm、器高3.35cmで雲母を多量に含む。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。底部より内弯気味に立上がり、底外面と体部の境がはっきりしている。

14は、底径13.4cm、現存高3.3cmで口縁部を欠く瓦質土器で、雲母を多量に含み、焼成は良好で良く締まっている。内・外面ともナデ調整で糸切り底と思われる。

15～18は、すり鉢である。15は、底径14.2cm、現存高6cmの須恵質で、内面には8本単位の沈線が斜め方向に施してある。内・外面とも灰白色で、内面は横ナデ、外面は底部付近が横方向のヘラ削り、上部が指頭による整形の後ナデ調整が施されている。16は、内・外面とも灰白色で、内面はナデ調整で斜め方向に数条の沈線を施し、外面は指頭による整形である。17は底部で、内面にはナデ調整の後7本単位の沈線が施されている。内・外面とも灰白色。18は口縁部で、内・外面とも灰白色・ナデ調整で、内面には斜め方向に数条の沈線が残っている。

19は須恵質の甕の胴体部で、内面はヘラ状工具による削り、内面は山形状タタキと思われる。

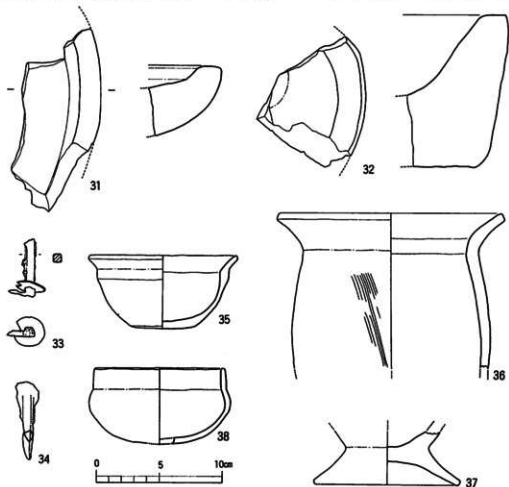
20～24は青磁である。20は、口径11.4cm、現存高2.7cmで底部欠損の皿と思われる。内・外面とも青白色の釉がかかっており、体部外面にはヘラ描きによる蓮弁文がある。21は碗の口縁部で口径15.8cm、現存高2.3cmで、青白色の釉が薄くかかっている。22は碗の高台で、高台径4.8cm、高台高1.2cm、現存高2.5cmで、内・外面とも淡緑青色の釉がかかっている。畳付き部分は削り取られており、胎土に不純物が混ざっていて、ザラザラした感じがする。器面には貫入が入っている。23も碗の高台で、高台径5.8cm、現存高2.8cmで、削り出し高台である。釉は、畳付きから部分的には高台内側にまでかかかっており、やや黄味をおびた緑青色をしている。見込み部には、草花文を思わせるヘラ描きが見られる。24は碗で、全体に薄く青緑色の釉がかかっている。体部内面には、ヘラ描きされた草花と思われる文様が見られる。

25は、口径11.8cm、現存高4.8cmの染付碗で底部が欠損している。体部外面には、口縁部近くに山形文と思われるものが、また、下部には木の葉が濃青色で描かれている。器面

全体に貫入が入っており、よく使い込まれている。

26は、備前焼きの壺の口縁部で、口径13.6cm、現存高4.3cmである。胎土は径1～2cmの石英を含み、粗くてあまり良くないが、焼成は強く締まって良好である。内・外面に鉄釉がかかっている。

27～30は、火舎である。27は瓦質で、外面に断面三角形の二条の突帯を貼り付け、その間に6本単位の縦方向の沈線を施し、口唇部と第一突帯の間に巴文の刻印を施す。内・外面ともナデ調整で、外面は火力によるものか、表面がかなり剥離している。28も瓦質で、外面に断面三角形の突帯を二条貼り付け、その間には8本単位の沈線で鋸歯文を施し、口唇部と第一突帯の間に菊花文の刻印を施している。内面はハケ、外面はナデ調整である。29も瓦質で、同様に外面には断面三角形の突帯を二条貼り付け、その間に斜め方向の沈線が施され、口唇部と第一突帯の間には菊花文が施されている。内面はハケ、外面はナデ調整である。30は土師質で、口径34.0cm、現存高10.8cmである。外面には断面三角形の突帯



第33図 出土遺物実測図 3

番号	検出遺構	現存長(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	番号	検出遺構	現存長(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考
39	SB-02 P ₁	2.9	0.8	0.25	2.33	欠損	54	SB-02 P ₁	5.2	1.1	0.30	5.67	
40	*	5.4	0.9	0.25	4.01		55	Pit-4	5.1	1.0	0.30	5.83	
41	*	5.5	1.0	0.25	5.14		56	Pit-33	5.2	1.0	0.30	4.82	
42	*	5.4	0.9	0.30	5.10		57	*	5.3	1.0	0.30	4.94	
43	*	3.2	1.0	0.30	3.17	欠損	58	一括	5.4	0.8	0.30	5.02	
44	*	6.3	1.0	0.25	5.29	接合	59	一括	3.0	1.0	0.30	1.76	欠損
45	*	5.5	1.1	0.30	6.11		60	Pit-4	4.2	1.7	0.40	11.98	
46	*	5.3	1.0	0.30	5.96		61	Pit-16	4.4	1.9	0.50	12.40	
47	*	6.3	1.1	0.30	6.83		62	Pit-31	4.1	1.8	0.50	12.56	
48	*	5.1	0.9	0.20	4.57		63	*	3.3	1.7	0.50	9.68	
49	*	6.5	1.05	0.20	5.70		64	*	4.4	1.6	0.50	11.39	
50	*	6.1	0.9	0.20	6.22		65	Pit-43	4.0	1.9	0.40	10.81	
51	*	5.8	1.0	0.30	5.66		66	SX-03	4.8	1.5	0.50	9.89	
52	*	2.8	0.9	0.30	2.26	欠損	67	*	4.4	1.6	0.40	11.10	
53	*	2.7	0.9	0.30	2.64	欠損	68	一括	3.9	1.7	0.40	8.45	

第4表 土鍾計測表

を二条貼り付けてあるが、他に比べると幅が狭く、無文である。口唇部と第一突帯の間には、はっきりしないが花と思われる刻印が施されている。内面はハケ、外面はナデ調整である。

31は安山岩製の石臼で、復元口径34.0cm。また、32は凝灰岩を削り貫いた深鉢で、底部は平底、やや内弯気味に立上がり、復元口径19.4cm、高さ11.9cm。S B-01のP₂の根固め石に転用されていた。

33は鉄製角釘に銅銭を通し、先端部を折り曲げている。釘は、長さ約6cm、6mm角。銅銭の種類は判読できず不明。34も鉄製角釘と思われるが、サビがひどく頭部は不明。

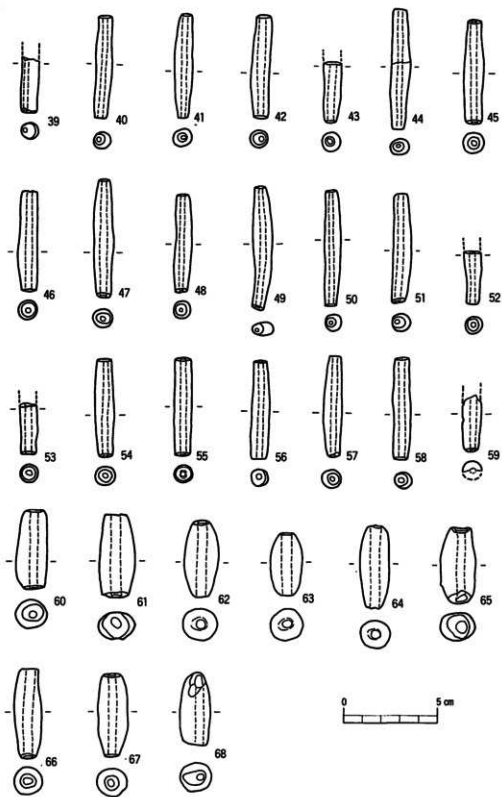
35~37は、弥生時代後期の土器である。35は、口径11.6cm、底径5.2cm、器高5.8cmの小型の壺で、長石・角セン石や径1~1.5cm程度の小石を多く含んでいる。全体的に器面が荒れてははっきりしないが、内・外面ともにナデ調整と思われ、また、底面はヘラ整形と思われる。36は壺の口縁から胴部にかけてで、下半は欠損している。口径17.6cm、現存高12.3cmで胴部最大径は15.6cmである。内・外面ともに器面が荒れているため、確かではないが、部分的にハケ目痕が残っていることから、ハケ目調整と思われる。焼成は良くない。37は壺の脚部で、底径11.6cm、現存高4.3cm。長石・角セン石および径1cm程度の小石を多量に含み、焼成は不良。器面調整は、荒れているため不明。

38は小型丸底壺で土師器か？口径10.2cm、器高6.1cm、胴部最大径11.2cmで、長石・角セン石を少量含む。内・外面ともナデ調整。

39~68は土鍾である。今年度の調査で30点が出土。全て土師質で筒状をしており、形態の違いで二分類できる。

I類一径と長さの比が大きく、直線的なもの-39~59

II類一径と長さの比が小さく、胴部の中央に最大幅をもつもの-60~68



第34圖 土錘實測圖

I類は径1cm前後、長さ5.0～6.5cm、孔径0.2～0.3cmで胎土は密、焼成は良好で赤褐色である。出土した21点のうち、完形品16点の平均重量は5.43g。特に、SB-02のP₁からは欠損品も含め16点がまとまって出土した(第35図)。II類は径1.5～1.9cm、長さ3.3～4.8cm、孔径0.4～0.5cmで胎土はI類と変わらないが、焼成に差があり黒色～赤褐色を呈している。9点が出土し、平均重量は10.92gである。いずれも両端はへら切りしている。

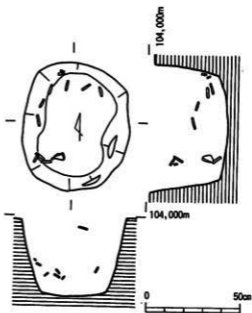
I・II類では径及び重量の比が約1:2の関係にあり、用途などの違いが考えられる。

3. 小結

昨年度・今年度の二年間で、主郭の調査を完了した。耕作土を除去して遺構の確認を行ったが、多数の柱穴・土塙・溝遺構・弥生時代の竪穴住居跡などが確認された。当初は、昨年度調査された箇所を排土場とし、それ以外の部分のみの調査を行う予定であったが、柱穴のつながりを検討すると、どうしても主郭全体を面として考える必要が生じたため、全体の土を主郭の外に持ち出し検討を行った。

柱穴について昨年度の調査者は、内部の土色によりA～Dの四種に分類し、Aは中世以前、B～Dは中世のものとして判断されている。しかし、大半はどちらとも判別がつけがたいともあり、中世以前のもは僅かのようなものである。今年度の調査でも、昨年同様多数の柱穴が確認されたが、土色の違いを判断することは困難であった。さらに、昨年度の柱穴はすでに掘られているため、どの柱穴が中世以前のAに相当するかわからず、単に並び方を検討して14棟の掘立柱建物跡を想定した。そのうちSB-06～11の6棟は切り合っており、これらの切り合い状態を観察すると、06・09・11、07・10、07・11、08・11の四時期を想定することができる。しかし、埋土の土色などでの時期判断は困難なため、一時期の全体配置を確認するまでには至らなかった。

溝遺構は、新たな2本を加え4本を確認した。SD-01・02は、約5mの間隔ではほぼ並行するよう、東西方向に作られている。前年度にすでに掘られていたため、柱穴との関係を実見することはできなかった。前年度の報告書を見てみると、埋土の土色および埋め戻した後、さらに、中世のものと思われる新たな柱穴が掘られているところから中世の



第35図 土錘出土状況実測図 (SB-02 P₁)

ものと判断されている。そこで、SD-01とSB-02との切り合いを検討すると、SB-02のP₃・P₄の確認状況から、SB-02の方が古いと思われ、また、SD-02とSB-09の切り合いを検討してみると、SB-09のP₁・P₂の確認状況から、やはり建物跡のSB-09の方が古そうである。しかし、主郭の西南隅を区切るように作られているSD-03は、埋められた後に多数の柱穴が作られた状況にあり、SB-01・03・04の3棟よりも古いことは確実である。これらのことから、SB-01～04が同時期に存在していたと仮定すると、SD-01・03は異なる時代のもと思われる。

土壌は、SK-01・03・04の3基から焼土が確認された。特に03は、長径1.93m、短径1.52m、深さ約25cmの隅丸長方形プランで、北半分には約20cmも焼土が堆積し、多量の炭化物や小動物のもと思われる骨片が検出され、また、04の埋土には、焼土のほか焼けたものも含め多数の石が含まれている。いずれにしても、土壌内で焼土や焼け石が確認されたということは、何等かの形で火が使われていたことを意味し、炉やカマドとして利用されていたと考えるのが妥当であろう。また、SK-05は弥生時代の竪穴住居跡(SI-01)の北西隅で確認された土壌であるが、内部に多数の石が詰まっており、その間から遺物も出土している。遺物から見て、中世の土壌と考えて良さそうである。

遺物は、青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器類、すり鉢・火舎・土師器などの日常生活用品、石臼などの石製品、弥生時代後期の土器など多量に出土した。田中城に関係のある中世の遺物は、16世紀後半のものが大半であり、検出遺構の時期決定をする上で考慮しなければならないだろう。

第4節 昭和63年度調査の成果

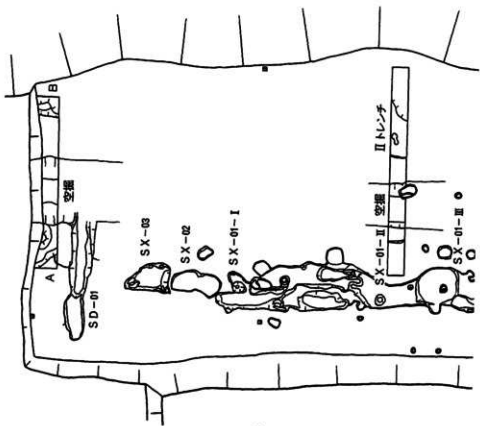
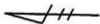
主郭の周囲には、西側を除く三方に曲輪が巡らされている。主郭とは約1.0～2.0mの段差があり、幅は10～50mで、現況では五筆の畑に分かれている。今回は、このうち東側の1筆788㎡の調査を行った。

以前、南側に隣接する畑を開墾中、多量の焼米・石臼などが出土したと聞いていたため今回の調査区が続きでもあるので、倉庫群でも確認できるのではなかろうかということで調査に取りかかった。しかし、調査の結果、土壌・不定形土壌・溝遺構が確認されただけで、構築物は確認できなかった。

1. 検出遺構

(1) 土壌(SK-01・第37図)

長径1.93m、短径0.88mの隅丸長方形プランで、深さは47cmを測る。長軸をほぼ東西方向にとる。焼土により、大まかな平面プランが確認でき、掘り進むと下方からガチガチに



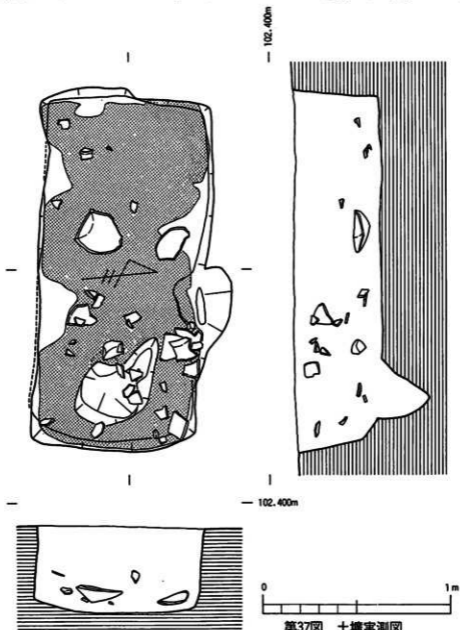


第36圖 昭和63年度調査 遺構配置図

固く締まった焼土層が約20~30cm確認された。また、中央部の西側の底面からは柱穴も確認された。深さは75cmで内部には砂が詰まっており、土壌の埋土とは明らかに異なっているため土壌に伴うものかどうか、はっきりしない。焼土中および焼土の下層から青磁・すり鉢・土師器・須恵器などの遺物が出土した。

(2) 不定形土壌

昭和63年度の調査報告書では、「9基の不定形土壌が確認されたが、遺構確認段階でのプラン検出は困難であり、焼土などでわかる部分から発掘に取りかかった」と記載していたが最終的にはS X-01~03と09は、つながったため一つの遺構として扱うこととした。



第37図 土壌実測図

① 1号不定形土壌 (S X-01・第38・39・40図)

主郭の裾部から約2mのところ、長軸を南北方向に取るように作られている。はつきりと遺構ラインが引けなかったため、前述したように4基の土壌として捉えていたが、焼土の集中域から発掘を始めて立ち上がりを確認したところ、最終的には長径14.5m、短径1.2~2.6m、深さ30~50cmの1基の土壌と考えた方がよさそうである。しかし、実測図は別々に取っているため北からⅠ~Ⅲとして載せている。南側には、特に焼土の集中が見られ、移植ゴテも通らないほどガチガチに固まった焼土が約20cmも堆積していた。底面からは数個の柱穴が確認されたが、埋土は非常に軟らかくサクサクしており、1号土壌同様、土壌の埋土とは異なっているため、土壌に伴うものかどうかは断定できない。北側で確認された柱穴は、大きさが60.5×60cmで深さが2.20mと、非常に大きなもので、埋土中には多量の遺物・炭化物を含んでいた。

遺物は、焼土中および焼土の上層からすり鉢・火舎・土師器などに混じって、青磁・白磁の破片のほか、鉄砲玉・鎧の袴・硯・猿を形どった土製品など多種多様のものが出土した。

② 2号不定形土壌 (S X-02・第41図)

1号不定形土壌の北側で確認された土壌で、長辺約2.7m、短辺1.0~1.3m、深さ30cmの長方形の中央部をやや凹めたような形状をしている。埋土は、他の土壌と異なり焼土を全く含まず、地山の土だけである。遺物は、土壌ライン確認中に染付碗のほぼ完形品などが出土した。

③ 3号不定形土壌 (S X-03・第42図)

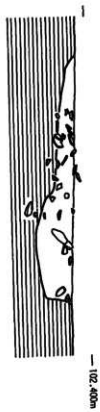
長辺2.46m、短辺1.58m、深さ約35cmの三角形に近い形状をした土壌で、1号土壌のようにガチガチに固まった焼土層は認められなかったが、底部近くには、炭化物が多量に含まれていた。埋土中からは、鎧の小札・冑の前立・刀子などの金属製品のほか、ほぼ完全に復元できるすり鉢などが出土した。

(3) 溝遺構 (S D-01)

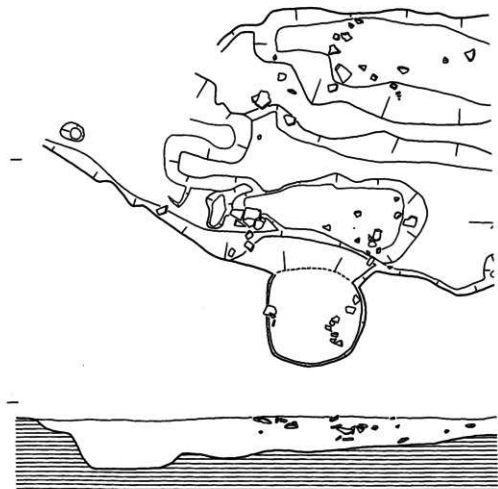
調査区の北側に東西方向に走るように作られている。長さ約4.5m、幅約1.0m、深さ27~55cmの溝で、空堀と直行している。底面は、西から東方向に傾斜しており、その比高差は63.9cmである。

(4) 空堀 (第43図)

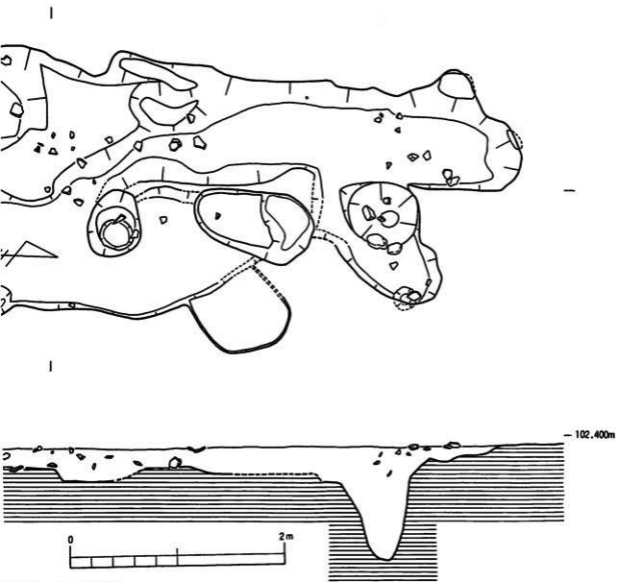
遺構確認面を精査してみると、不定形土壌が確認された付近(主郭の裾部から約5m)から東西で土色が異なっており、整地した可能性が考えられた。そのため、調査区の北側に東西方向のトレンチ(Ⅰトレ)を入れて地山の落ち込みラインを確認することにした。その結果、上縁幅3.71m、下縁幅1.23m、深さ1.21mの溝が確認され、空堀としてあつか



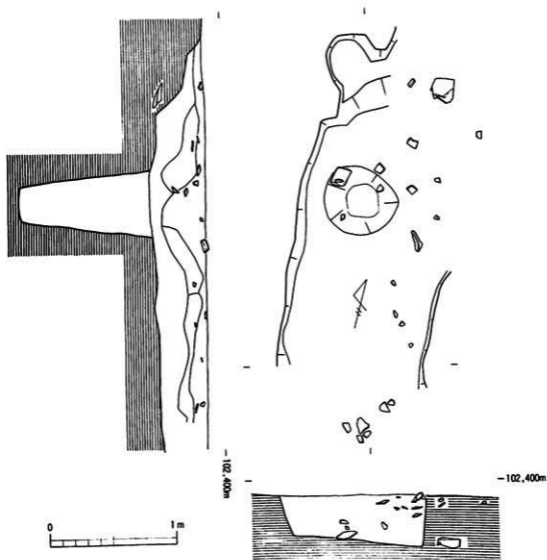
— 102.400m



第38图 1号不定



杉土壙-I 実測図



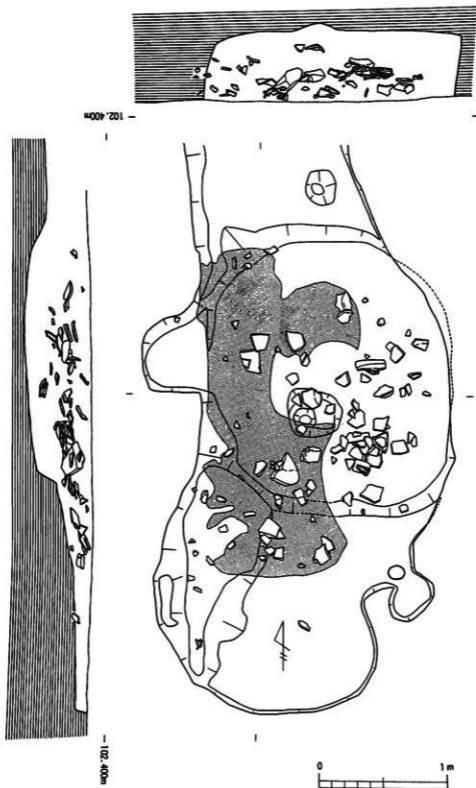
第39図 1号不定形土坑-II 実測図

うこととした。さらに中央部にもう1本トレンチ(Ⅱトレ)を入れてみたところ上縁幅2.39m、下縁幅1.36m、深さ64.5cmと上縁幅はやや小さくなり、浅くなっているが、延長していることが確認できた。比高差は、わずか3.9cmだけⅠトレンチの方が高いが、地形や大きさから判断して、やはり北から南方向に傾斜していたと思われる。

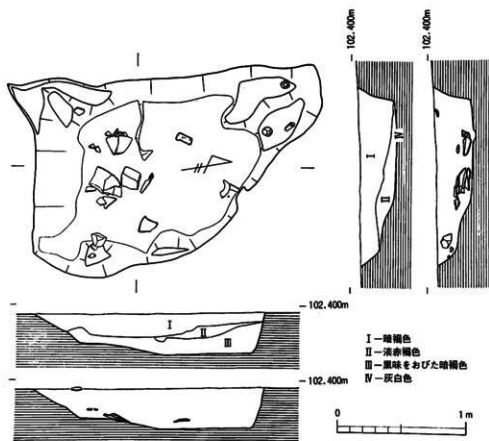
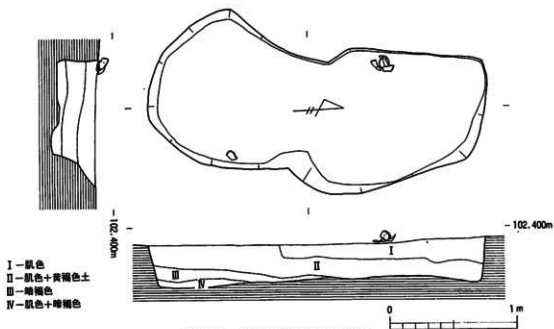
埋土の状況は、Ⅰトレンチの下部は自然に埋まった可能性も考えられるが、ほかは炭化物・焼土を含み人為的に埋められたと考えられる。そのため、ある時期にこの堀を埋め、その後、新たに土壌などを作ったものと思われる。

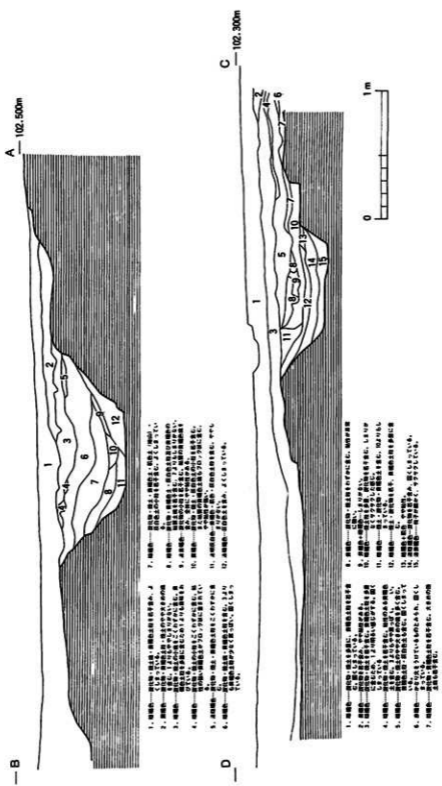
2. 出土遺物(第44~56図)

今年度の調査区からは、多くの種類の遺物が多数出土しているので、遺構ごとにまとめておく。

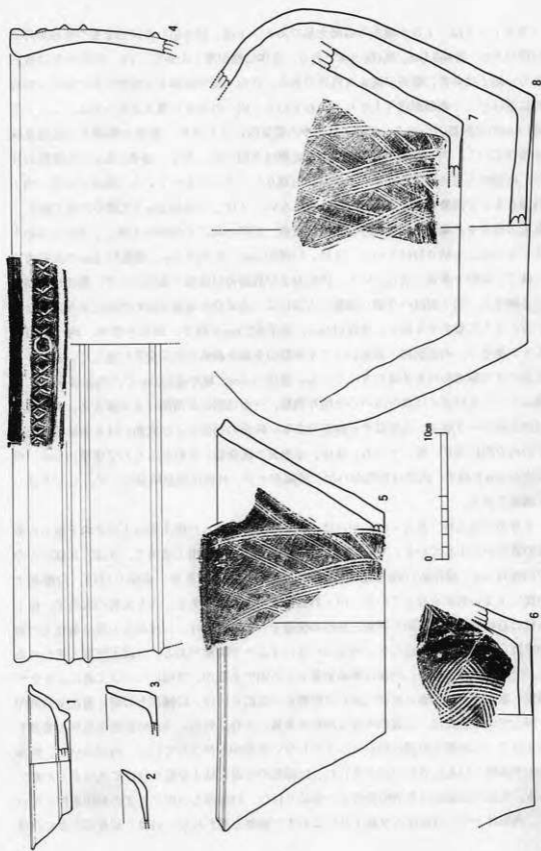


第40图 1号不定形土埴一Ⅲ 实测图





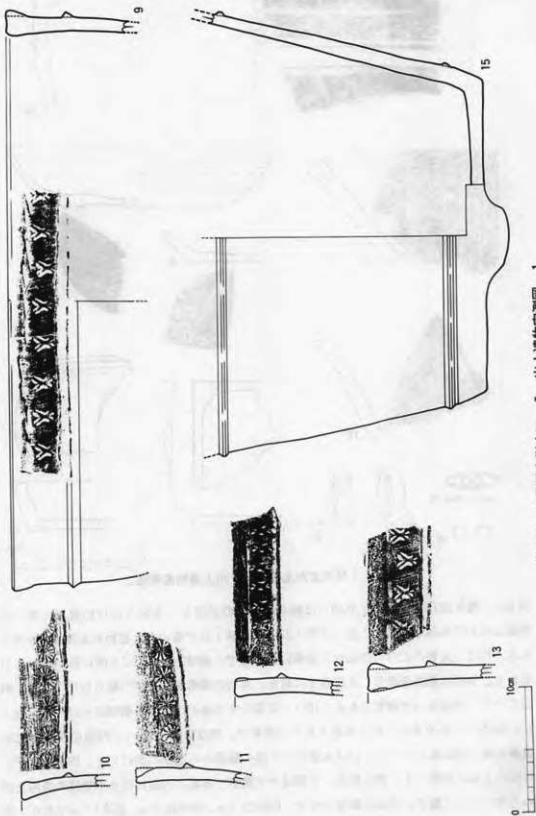
第43圖 空堀断面実測図



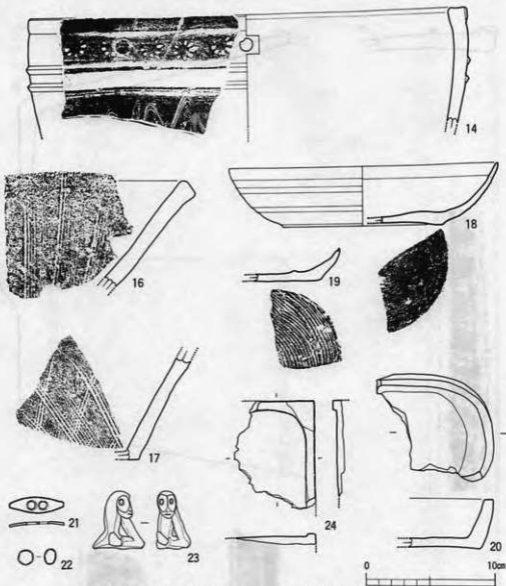
第44图 1号土坑出土遗物实测图

まず1～8は、1号土壌からの出土品である。1は、削り出しの高台をもつ青磁の坏で口径11.6cm、器高3.1cm、底径6.9cmである。全体に軸が薄くかかり、内・外面ともに青白色で、胎土は非常に緻密で焼成も良好である。高台・壘付部および底面内側の軸は、焼成時に溶けだして表面が盛り上がり、汚れている。内・外面とも貫入が見られる。2は、器高1.9cmの土師器の小皿で、底部よりやや内弯気味に立上がり、底部と体部との境は丸味を帯びている。内・外面ともナデ調整で底部は糸切り底。3は、器高3.9cmの土師器の坏で、底部から急角度で体部が立上がり、面取りして平らになっている口縁部に至る。内・外面ともナデ調整だが、底部ははっきりしない。4は、口径48.2cmの瓦質の火舎で断面三角形の突帯を三条巡らしてあり、口縁部と第一突帯の間にXの刻印を押し、径約1cmのボタン状の粘土を貼り付けている。5は、口径30.2cm、底径17.2cm、器高13.2cmの瓦質のすり鉢で、砂粒を多量に含んでいる。内面および外面の口縁部・底部はナデ、胴部は指頭による押さえ、胴下部はヘラ削り調整。内面には8条単位の条線を斜め方向に交互に施している。6も瓦質のすり鉢で、底径14.0cm、現存高3.5cmを残す。砂粒を含み、内・外面ともナデ調整で、内面胴部・底部には7本単位の条線を斜め方向に交互に施している。7も瓦質のすり鉢で砂粒を多量に含んでいる。底径15.4cm、現存高10.0cmで、内面は胴部・底部はナデ、底部近くは横方向のヘラ削り調整、外面は胴部が指頭による押さえ、底部近くは横方向のヘラ削り、底部はナデ調整である。内面の胴部および底面には8条単位の条線を斜め方向に交互に施している。8は、須恵質の蔵骨器と思われるもので底径18.5cm、現存高23.8cmを残す。内面は胴部がハケ、底部がナデ、外面は胴部中央はナデ、上・下はハケ調整である。

1号不定形土壌(SX-01)からは、ガチガチに固まった焼土内およびその下層から多量の遺物が出土している。9～26は、SX-01-Iからの出土遺物で、9は、瓦質の火舎で口径44.6cm、現存高9.5cmを残す。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間にX文の刻印を押ししている。内・外面ともナデ調整である。10も瓦質の火舎で、径1cm程の石粒を含む。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間に菊花文の刻印を押ししている。内面はハケ、外面はヘラによるナデ調整である。11は土師質と思われる火舎で砂粒を多く含む。内面は摩滅が著しく不明であるが、外面はヘラ状工具によるナデ調整と思われる。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間に菊花文の刻印を押ししている。12は、瓦質の火舎で砂粒を多量に含む。外面に一条の断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部との間に何かはっきりしないが刻印が押されている。内面はハケ、外面はナデ調整。13も瓦質の火舎と思われる、口縁部の外面に粘土を貼り付けて丸味をもたせている。外面には断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間にX文の刻印を押ししている。内面はナデ、外面はヘラ状工具によるナデ調整と思われる。14は、瓦質の火舎で口径



第45图 1号不定形土填—1 出土文物实图—1



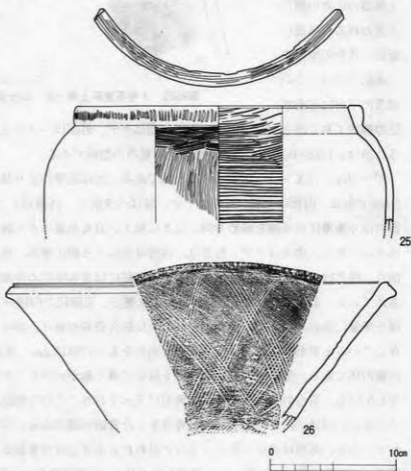
第46図 1号不定形土塊-I 出土遺物実測図2

34.2cm、現存高9.2cmを残す。外面には断面三角形の突帯を二条貼り付け口縁部と第一突帯間に花形の刻印を、また、第二突帯下部には櫛状工具で描いたと思われる波状文が見られる。15は、瓦質の火舎の体部から底部にかけてで、底径24.6cm。三ヶ所に脚が付けられており、体部に断面蒲錐型、底部直上に断面三角形の突帯を一条ずつ貼り付けている。外面はナデ、内面はハケ調整である。16は、瓦質のすり鉢の口縁から胴部にかけてで、径1~1.5cm程の小石を含む。内・外面ともナデ調整で、焼成は良くない。内面に8本単位の条線を縦方向に施している。17は瓦質のすり鉢の胴部から底部にかけてで、内面はナデ、外面の上部は指頭による押圧整形、下部はナデ調整である。内面には9本単位の条線を斜め方向に交互に施す。18は土師器の坏で、口径20.9cm、底径12.5cm、器高4.7cmである。底

部と体部との境ははっきりしており、やや内弯気味に立上がる。内・外面ともナデ調整で、糸切り底である。19は土師器の皿で、口縁部を若干欠いており、現存高2.4cm。底部からやや内弯気味に体部は立上っており、その境ははっきりしない。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。20は、瓦質の坏で器高は3.85cm。底部から急角度で体部は立上がり、面取りされ平らになった口縁部へと続いている。平面形は楕円形と推測される。21は、鍔等の幹で青銅製と思われる長径4.3cm、短径1.3cmの楕円形の両端を切ったような形状をしており、径0.7cmの紐穴が2個穿たれている。厚さは0.2cm。22は鉛製の鉄砲玉で、径0.9～1.15cmとやや潰れた感じがあり、重さは6.30g。23は猿を形取った土製品で、右足の一部が欠けている。器高は4.5cmと小さいが、目を竹管様のものでつけて鼻・口をヘラで描くなど非常に写實的に表現している。24は、全体の4分の1程度を残す硯で、裏側が剥落しており厚さは不明である。

25・26はピット内からの出土品である。

25は瓦質の壺で口径22.2cm、現存高9.3cmである。全面ナデ調整のあと口唇部をはじめ、内・外面ともヘラ調整のあとがはっきりと残っている。また、口縁部にはヘラによる刻みを入れている。26は瓦質のすり鉢で、口径31.0cm、現存高11.1cm。口唇部に浅い沈線を一条巡らし、内面には7本単位の条線を斜め方向に交互に施している。内面および外面上部はナ

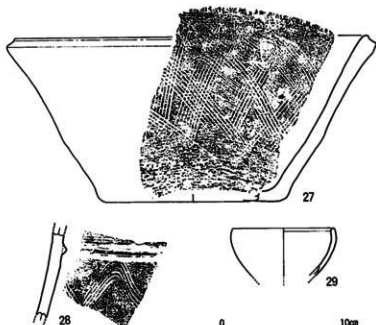


第47図 1号不定形土壌-I Pit内出土遺物実測図

デ、外面下部は指頭による押圧整形をしている。

27～29は、S X-01-IIからの出土品である。27は口径27.6cm、底径13.8cm、器高13.0cm

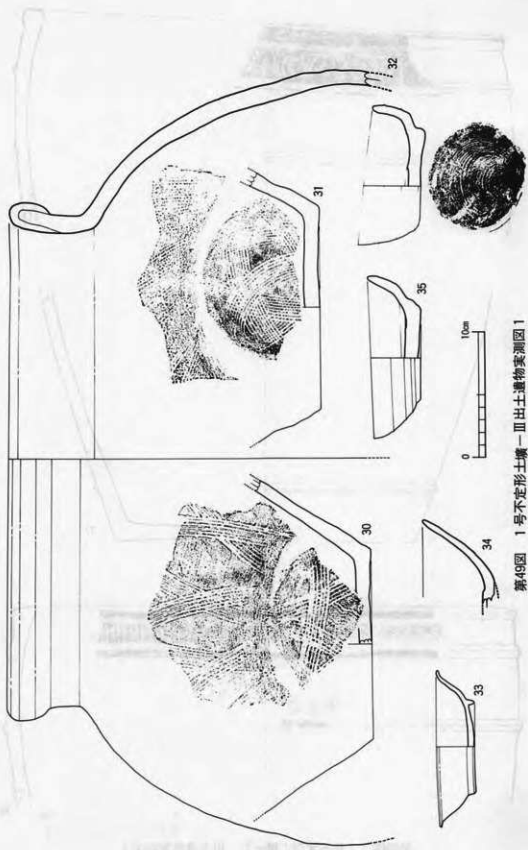
の瓦質のすり鉢である。内・外面とも体部・底部はナデ、内面下部はヘラ削り、外面下部は指頭による押圧整形の調整がなされている。内面には、8本単位の条線を斜め方向に交互に施している。28は土師器の火舎の胴部と思われる。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、この突帯の下方に6条単



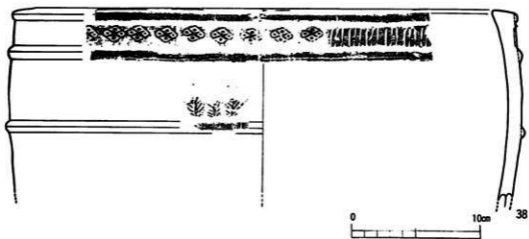
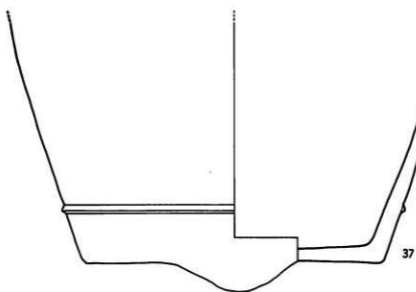
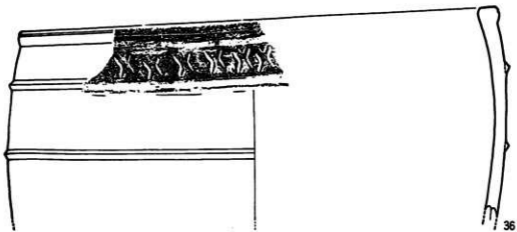
第48図 1号不定形土塊-II 出土遺物実測図

位の櫛状工具で流水文を描いている。内面はナデ、外面はヘラ状工具によるナデ調整である。29は、口径8.0cm、現存高3.8cmの土師質の小型碗である。

30～39は、S X-01-Ⅲからの出土品である。30は瓦質のすり鉢で底径15.0cm、現存高8.8cmである。内面は上部・底部はナデ、境はヘラ削り、外面はハケ目の後ナデ調整で内面には6条単位の条線を斜め方向に交互に施す。31も瓦質のすり鉢で底径16.0cm、現存高は5cmである。内面はナデ、外面は、体部は指による押圧整形、底部と体部との境はヘラ削り、底部はナデ整形で、内面体部および底部には9本単位の条線が斜め方向に交互に施されている。32は口径38.4cmの備前焼の大水甕で、玉縁状の口縁をしており、胎土には小礫を多量に含む。61・62年度の出土品の中に接合資料があり、かなりの広範囲に破片が散在していると思われる。33は、削り出し高台をもつ口径12.2cm、底径7.0cm、器高3.1cmの白磁の坏である。畳付きの外側の一部を除いて薄く釉がかかり、やや灰色を帯びた乳白色をしている。高台の畳付き部分は三角形に尖っており、この外側部分だけには釉がかかっていない。34は、内・外面とも淡緑青色をした青磁の碗である。内面は丁寧な調整が施されているが、外面は焼成の際にできたと思われる小さな穴が多数あいている。35は、長径12.9cm、短径10.7cm、底径7.3cm、器高3.7～5.0cmとやや歪曲した土師器の坏である。底部から体部への屈曲部では段をもつ。また、外部にはロクロ整形の際の稜が残っている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。36と37は同一個体と思われる瓦質の火舎である。口径36.4cm、底径23.4cmで、底部三ヶ所に脚がある。上部に断面三角形の突帯を二条、また底

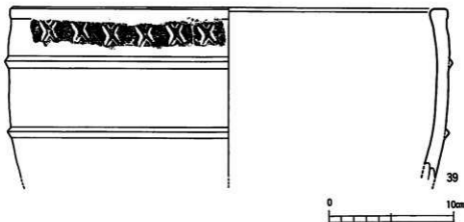


第49圖 1号不定形土壘一Ⅲ出土遺物実測図1



0 10cm

第50图 1号不定形土坑—Ⅲ 出土遗物实测图 2



第51図 1号不定形土塊一Ⅲ 出土遺物実測図3

部近くに同じく断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁直下には細い沈線が一条巡らされている。口縁部と第一突帯の間にはX状の刻印が施されている。内・外面ともナデ調整である。38は、口径40.0cm、現存高14.5cmの瓦質の火舎である。口縁直下に断面三角形の突帯を一条、さらに、その下方には断面蒲鉾型の突帯が二条貼り付けられている。第一・第二突帯間には、三本単位の条線を縦に引き、また、菱形を区画したなかに丸四つの家紋様の刻印が施され、第二・第三突帯の間には、斜線による杉状の文様が施文されている。内面は横方向のハケ、外面はナデ調整が施されている。

2号不定形土塊(SX-02)の掘り込みライン確認中に、染付碗のほぼ完形品(40)が出土した。口径12.5cm、底径5.2cm、器高6.0cm、高台高0.9cmで、体部は内弯しながら立上がり、口縁部ではやや外傾している。ヘラ削りされた畳付き部分以外は、淡青白色の釉がかかり、体部外面には龍文と花文を交互に二個ずつ配し、見込み部にも龍文を、さらに、高台の内側にも何かの記号を思わせるものが描かれている。

3号不定形土塊(SX-03)からは、41~47が出土した。41と42は鏝の小札である。41は5.0×11.4~12.7cm、厚さ1mmの鉄板で、小札をつなぎあわせるためのものと思われる2個の孔を中央上部にあげ、下部には三列にわたり多数の孔をあけている。周囲には段を設けて縁取りにしている。42は6.1×12.5cm、厚さ1.5mmの鉄板で周囲の三方を真鍮で縁取りしており、真鍮の線で鉄板に結びつけている。さらに、4本の真鍮製の紙が残っており別の小札とつないでいたと思われる。43は、切先部分が欠損しており現存長16.5cmで、約6cmの茎を持つ刀子である。柄の部分には木片が残っており、また、刀身部分にもサヤと思われる膨らみが残っているが、サビ化が激しく確認は困難である。44は、三日月型をした甬の前立と推測されるが、発掘の際に破損してしまい全体形は不明である。裏面には部分的に金箔が残っており、また、前立に紙が1本付いており、別に1本出土しているので2

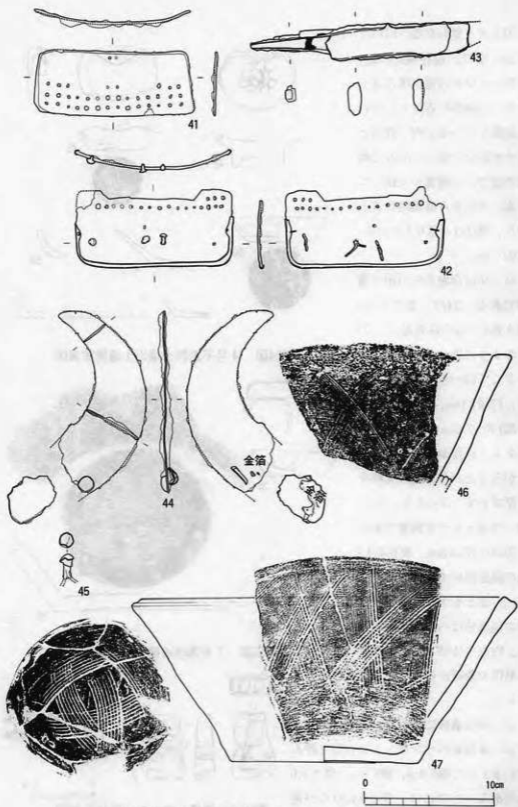
本の鉄で甬本体に留められていたと思われる。45がその鉄で、頭部径1.2cm、現存高2.0cmであり、脚部分は二股に分かれ、先端部分は欠損している。46は、土師質のすり鉢である。砂粒を多く含み、焼成も良くない。外面は粗いハケ目調整だが、内面は磨れてはつきりしない。内面に6～7本の条線が斜め方向に交互に施されている。47は須恵質のすり鉢で、口径28.4cm、底径14.8cm、器高15.0cmの完形品である。外面はハケの後指頭によるナデ、内面はハケで、底部は内・外面ともナデ調整である。さらに、底部と体部の境は外面が削り、内面はハケ及びナデの後削っている。内部



第52図 2号不定形土壌出土遺物実測図

の体部及び底部には8条単位の条線が斜め方向に交互に施されている。

48～53は、4号不定形土壌(SX-04)からの出土遺物である。48は、青磁碗の高台部で、底径は4.2cm。内・外面及び高台内側の一部にも淡緑青色の釉がかかっているが畳付き部分だけは削られている。見込み部分にはヘラ描きによる花文が描かれている。49は口径6.3cm、底径3.9cm、器高1.5～1.9cmの土師器の皿である。底部からやや内弯気味に立上がり口縁部に至る。片側の口縁部が内側に曲っており、対面する側も破損していて断定はできないが、よく観察してみるとこちら側も、内側に曲げていたように思われる。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。50も土師器の皿で、口径7.6cm、底径5.0cm、器高2.0cmである。底部からやや内弯しながら立上がり、底部と体部との境ははつきりしている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。51は器高3.0cmの土師器の皿で、体部は直線的に立上がり底部と体部との境ははつきりしている。内面及び外面の上部はナデ、下部はハケ調整で、



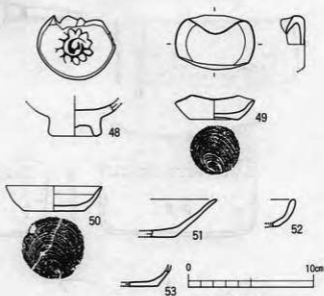
第53图 3号不定形土坑出土遗物实测图

糸切り底と思われる。52は土師器の皿で、現存高2.1cm。底部からやや内弯気味に立上がり、口縁部に近付くにつれて肥厚している。内・外面ともナデ調整である。53も土師器の皿で、口縁部が欠損している。底部から直線的に立上がり、境ははっきりしている。糸切り底。

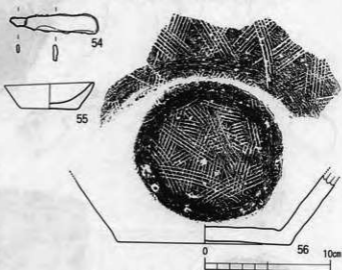
54～56は空堀からの出土遺物である。54は、長さ7.1cm最大幅1.5cmの鉄製品で、刀子のように思われるがサビがひどくはっきりしない。55は、口径7.1cm、底径4.5cm、器高1.8～2.2cmの土師器の皿である。底部からやや内弯しながら立上がり、境は丸味をおびていて、はっきりしない。内・外面ともナデ調整である。

56は底径13.8cm、現存高4.9cmの須恵質のすり鉢である。内・外面ともナデ調整で、内面の境部分はヘラ削りしており、内面の体部・底部には7本単位の条線が斜め方向に交互に施されている。

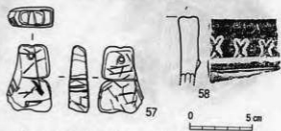
57・58は遺構に伴わない遺物である。57は、滑石製のペンダント状石器と呼んでいるもので縦5.3cm、横3.5cm、厚さ1.6cmである。上部には、径0.6cmの孔が両側から穿たれており頭頂部にも半円形の



第54図 4号不定形土壌出土遺物実測図



第55図 1号溝状遺構出土遺物実測図



第56図 遺構に伴わない遺物実測図

凹が見られる。全体に擦り傷状の痕跡が見られ、中央部は片側から深く切り込みが入っている。石鍋からの転用品かもしれない。58は瓦質の火舎である。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間にX状の刻印を押している。内・外面ともナデ調整で、口唇部には一条の沈線が施されている。

3. 小結

前述したように、主郭の周囲に広がる曲輪のうち南側の一筆から以前、多量の炭化米・石臼などが出土したと聞いていたため、倉庫跡でもあるのではないかと思っていたが、残念ながら構築物は一切確認できなかった。

確認された遺構は不定形土壌が主であるが、埋土には焼土を多量に含んでおり、特に1号土壌・1号不定形土壌の一部には移植ゴテもおおない程ガチガチに固まった焼土が約20~30cmも堆積していた。さらに、埋土中には青磁・備前焼の大甕などが多量に含まれており、また、鉄クズも多く検出され、簡単な小鍛冶を行っていたと思われる。しかし、フイゴなどこれを実証するような遺物は出土しなかった。

遺構の確認面を精査していると、調査区の西側約3分の1でしか地山が確認できず、東西で土色が異なっていたため、整地されているのではないかと推測し、旧地形を確認する意味で北隅に東西方向のトレンチを設定した。その結果、上縁幅3.71m、下縁幅1.23m、深さ1.21mの空堀が確認された。その後、中央部にもう1本トレンチを設けて延長を確認したところ、上縁幅2.39m、下縁幅1.36m、深さ64.5cmとやや小さくなっているが、続いていることがわかった。また、Iトレンチの断面を観察すると、空堀の東側の上縁部からやや傾斜しており、約2.31m離れたところから地山の落ち込みが見られるので、これが旧地形になると思われる。そこで、この空堀を埋めたあと、約15~40cmの土を盛って整地して、ほぼ平らにしてから今回の調査で確認された遺構が作られたと判断でき、少なくとも二時期があったことが推測される。

出土遺物を見てみると、遺構が少ない割には量が多く、種類もバラエティーにとんでいた。土師器・火舎・すり鉢などの日常生活用品、鍔の小札・冑の前立・鉛製の鉄砲玉・刀子などの金属製品、青磁・白磁・染付碗などの輸入磁器類、硯・砥石・石臼などの石製品、猿の造り物・土鍾などの土製品などで、多くは16世紀のものと思われる。

第5節 平成元年度調査の成果

主郭を取り巻く曲輪の外側は、急峻な斜面で約10mの比高差がある。西側を除く三方には、約300mにわたって空堀が巡らされており、その対岸の南・北・西の三ヶ所には物見やぐらと呼ばれている高台が残されている。この高台とも5.7~6.7mの比高差があり、この状態でも充分堀としての役割を果たしていると思われた。

1. 検出遺構

(1) 空堀（第57図）

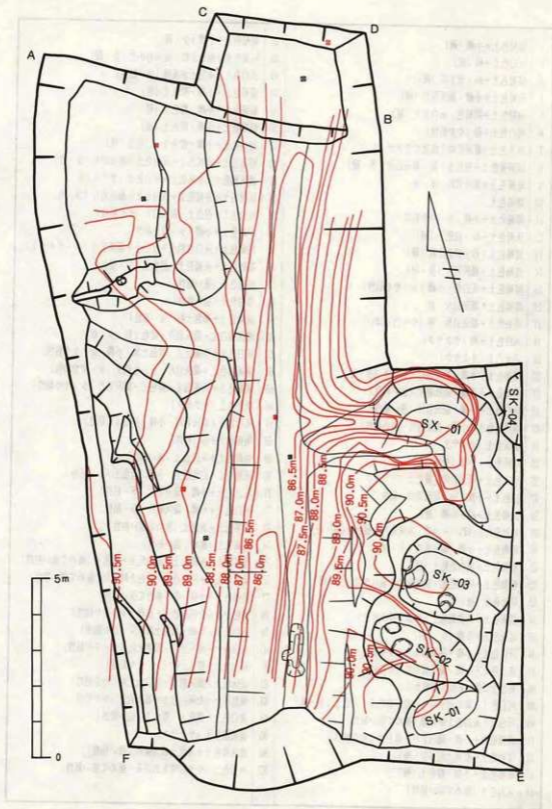
空堀の末端部は塹壕となって急激に落ちている。この塹壕を観察してみると、約2.5m下がった地点が平坦になり、ステップ状を呈している。このあたりが堀底になるのではないかと推測し、調査を開始した。物見やぐら側では、立ち上がりはすぐに確認でき、約2m掘り下げると予想通り平坦面が現れ、堀底かと思われた。しかし、掘り進めていくとグラグラと傾斜していき、約3m下がったところでようやく本物の堀底確認に至った（北壁断面）。これに対して主郭側では約5.0m立ち上がり、約3.0mの平坦面を設けてから、さらに主郭へと立上がっていく（南壁断面）。この平坦面からは4基の土壇と1基の不明遺構が確認できた。最終的に確認した堀の規模は、南側で幅9.42m、深さ4.63m、北側で幅8.47+ α m、深さ4.42mとなり、堀底の幅は北側で1.1m、南側で0.8mと非常に狭くなっており、薬研堀の形態をとっている。物見やぐら側では底部から約2.65m上方に幅16cmと非常に小さな犬走りのものが見られる。主郭側でもそれらしき痕跡は残っているが、凝灰岩の非常に脆い岩盤のため崩落したのか、はっきりとは捉えられない。現地表面からの深さでは、南北で21cmの差があるが、標高差でいくと約80cmとなり、北から南へ傾斜している。

① 北側断面について（第58図）

予想外に深くなってしまい、発掘途中に崩落の危険を感じたため、止むを得ず段掘りをすることにした。また、主郭側は、通路の確保などで調査区を拡大しなかったため、立ち上がりは底部から2.25mまでしか確認できなかった。

物見やぐら側は、地表下約50cmで空堀の上縁と思われる落ち込みを確認した。そこから約1.35m急激に落ち込んだ部分に、約3.8mのグラグラと続く平坦面を設け、さらに約2.2m急激に落ち込み底部に至る。

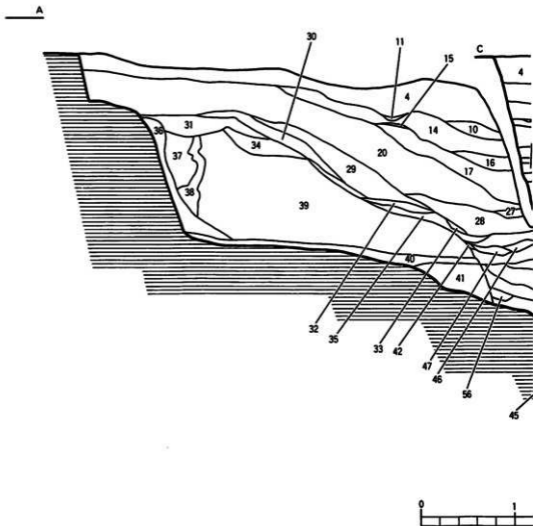
堀の埋まり具合を観察すると、底部近く約10cmは自然に埋まったものと思われるが、その上の約1.8mは粘性の強い土で、明らかに人為的に投げ入れて埋めたとと思われる。さらに、物見やぐら側から主郭部に向って自然に埋まったような堆積状態を示しており、その上を断面C-Dで観察すると、再度人為的に埋められたように思われる。また、40は地山



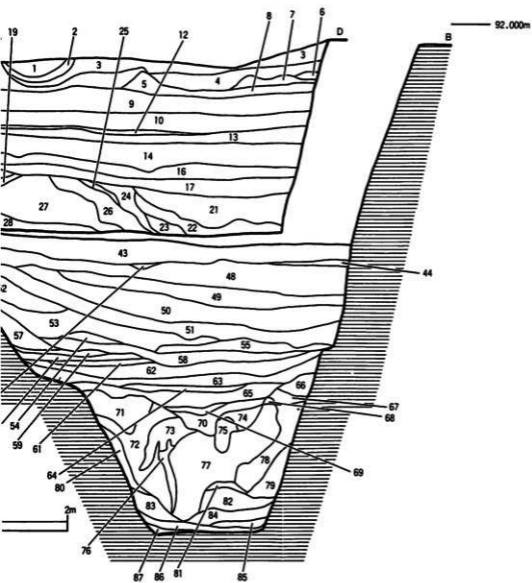
第57図 平成元年度調査 空堀測量図

1	暗褐色土+小礫(硬)	45	暗褐色土+小礫(少・硬)
2	灰白色土+砂(硬)	46	灰褐色土+褐色土粒・凝灰岩小片(少・硬)
3	暗褐色土+砂・焼土粒(硬)	47	灰白色土と褐色土が互層(強い粘性)
4	暗褐色土+小礫・凝灰岩片(硬)	48	暗褐色土+小礫・褐色土(硬)
5	暗褐色土+明褐色・灰白色土(硬)	49	暗褐色土+小礫・褐色土(硬)
6	褐白色土+砂(やや粘性)	50	暗褐色土+小礫・褐色土(硬)
7	灰黒色土(凝灰岩の土状化でサクサク)	51	暗褐色土+小礫・褐色土・白色土(硬)
8	淡暗褐色土+褐色土・砂・凝灰岩片(多・硬)	52	暗褐色土+赤褐色土+灰白色土+凝灰岩片(少・軟)
9	暗褐色土+凝灰岩片(多・硬)	53	淡灰褐色土+赤褐色土+灰白色土(サクサク)
10	暗褐色土	54	灰褐色土+赤褐色土+灰白色土+凝灰岩片(少・軟)
11	暗褐色土+小礫(少・やや粘性)	55	灰白色土+褐色土・凝灰岩片(やや粘性)
12	灰褐色土+砂・白色土(硬)	56	赤褐色土+小礫(少・強い粘性)
13	暗褐色土+砂・褐色土粒(硬)	57	暗褐色土+灰白色粘土+褐色土+凝灰岩片(少・サクサク)
14	暗褐色土+凝灰岩片(多・硬)	58	暗褐色土+灰褐色土+褐色土(少・硬)
15	暗褐色土+灰白色・小礫(少・やや粘性)	59	暗褐色土(強い粘性)
16	暗褐色土+凝灰岩片・砂	60	黄白色土(強い粘性)
17	暗褐色土+凝灰岩片・砂(やや白っぽい)	61	灰褐色土+褐色土粒(強い粘性)
18	灰白色土+砂(サクサク)	62	淡灰褐色土+凝灰岩片・褐色土粒(少・軟)
19	淡灰色土(サクサク)	63	灰白色土+赤褐色土・褐色土塊・小礫(少・やや粘性)
20	暗褐色土+小礫・凝灰岩片・褐色土(多・硬)	64	淡灰褐色土+凝灰岩片・灰白色粘土(少・やや粘性)
21	明褐色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	65	暗褐色土+灰褐色土・褐色土・凝灰岩片(少・やや粘性)
22	灰白色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	66	灰黒色土(サクサク)
23	淡明褐色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	67	灰白色土+凝灰岩片・小礫・褐色土(粘性)
24	淡灰色土(サクサク)	68	明褐色土+砂(粘性)
25	明褐色土+小礫(やや粘性)	69	明褐色土+灰白色土(強い粘性)
26	淡灰色土+凝灰岩片・黄色土(サクサク)	70	灰褐色土+白色粘土・小礫・黄色土(少・粘性)
27	白色土+小礫・砂・凝灰岩片(粘性)	71	灰白色土+小礫・凝灰岩片(多・粘性)
28	灰褐色土+砂・小礫(硬)	72	灰白色土+小礫・凝灰岩片(多・粘性)
29	暗褐色(白っぽい)+小礫・凝灰岩片・褐色土(多・硬)	73	焦茶色土+黄色土(極めて強い粘性)
30	暗褐色土+小礫・凝灰岩片(少・硬)	74	明褐色土(極めて強い粘性)
31	暗褐色土+灰白色粘土(硬)	75	焦茶色土+赤褐色土+灰白色土+褐色土(極めて強い粘性)
32	暗褐色土+灰白色土・黄褐色土・凝灰岩片(少・硬)	76	淡黄白色土+灰白色土・黄色土粒(少・極めて強い粘性)
33	暗褐色土(硬)	77	明褐色土+小礫(少・極めて強い粘性)
34	淡褐色土+淡黄褐色土(砂質でザラザラ)	78	褐色がかった灰白色土+小礫(少・やや粘性)
35	暗褐色土+小礫(少・硬)	79	灰白色土+小礫・黄色土粒(少・やや粘性)
36	灰白色土+小礫・凝灰岩小片(やや粘性)	80	灰白色土+凝灰岩片・黄色土粒(少・やや粘性)
37	黄白色土+小礫・凝灰岩小片(やや粘性)	81	灰白色土+褐色土粒(少・やや粘性)
38	褐色土(強い粘性・樹皮か?)	82	淡灰色土+凝灰岩片・灰白色土粒(やや粘性)
39	灰白色土+凝灰岩小片・小礫・黄色土・白色土(多・軟)	83	褐色がかった灰白色土+凝灰岩片(やや粘性)
40	灰色土と黄白色土が互層(極めて強い粘性)	84	黄白色土+黄色土・褐色土(強い粘性)
41	黄褐色土+小礫・凝灰岩片・黄色土(やや粘性)	85	淡灰黒色土(サクサク)
42	暗褐色土+褐色土粒(少・硬)	86	淡灰褐色土+黄色土粒(極めて強い粘性)
43	暗褐色土+小礫・褐色土(硬)	87	灰褐色土(やや白味をおびる・極めて強い粘性)
44	灰白色土(極めて強い粘性)		

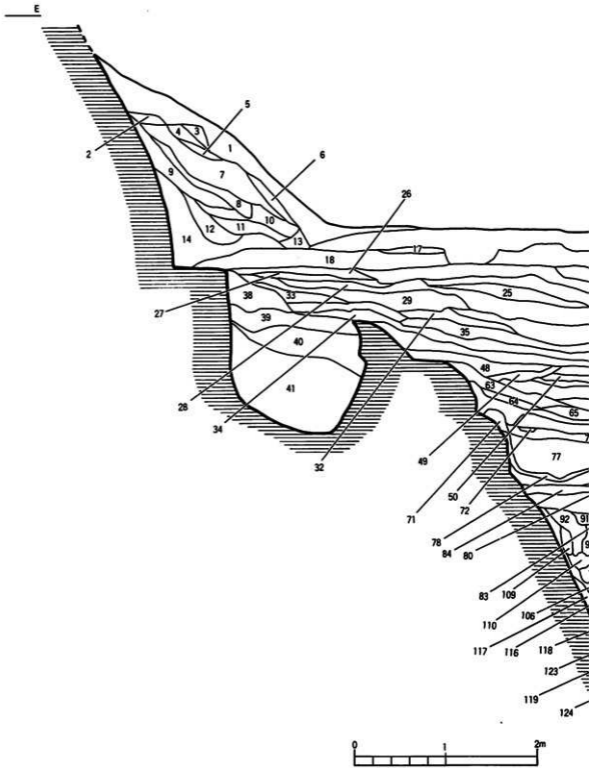
第5表 空堀北側断面土色観察表



第58圖 空堀北

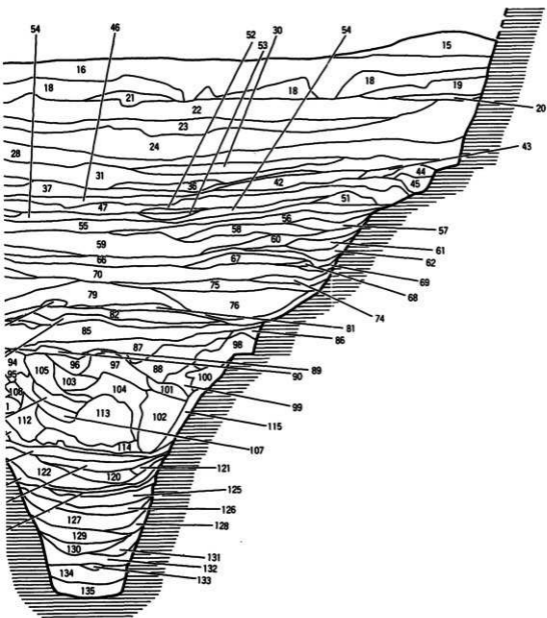


断面实测图



第59圖 空堀南

— F 94,000m



断面实测图

表6 空堀南側断面土色観察表

1	暗褐色土+黄粘土(やや粘質)		
2	暗褐色土+黄粘土(やや粘質)		
3	白色粘土(強い粘性)		
4	暗褐色土+黄粘土(強い粘性)		
5	黄粘土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
6	灰褐色土(やや粘質)		
7	暗褐色土+黄粘土(少・粘)		
8	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
9	白色粘土(粘)		
10	暗褐色土(粘)		
11	白色土+腐葉切片(粘質)		
12	暗褐色土+黄粘土(粘)		
13	暗褐色土+黄粘土(粘)		
14	灰褐色土(黄粘土+腐葉切片)		
15	暗褐色土+黄粘土(粘)		
16	暗褐色土+黄粘土(黄粘土+腐葉切片)		
17	暗褐色土+黄粘土(粘)		
18	暗褐色土+黄粘土(黄粘土+腐葉切片)		
19	暗褐色土+黄粘土(黄粘土+腐葉切片)		
20	白色粘土(粘)		
21	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
22	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
23	暗褐色土+白色粘土(黄粘土+腐葉切片)		
24	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
25	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
26	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
27	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
28	暗褐色土+黄粘土+腐葉切片(黄粘土)		
29	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
30	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
31	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
32	灰褐色土+黄粘土+腐葉切片(黄粘土)		
33	白色粘土+黄粘土+腐葉切片(少・やや粘質)		
34	灰褐色土+黄粘土+腐葉切片(少・やや粘質)		
35	暗褐色土+腐葉切片(少・やや粘質)		
36	灰褐色土+腐葉切片(少・やや粘質)		
37	灰褐色土+白色粘土(少・やや粘質)		
38	暗褐色土+腐葉切片(少・やや粘質)		
39	暗褐色土+腐葉切片(少・やや粘質)		
40	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
41	暗褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
42	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
43	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
44	暗褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
45	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
46	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
47	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
48	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
49	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
50	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
51	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
52	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
53	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
54	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
55	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
56	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
57	暗褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
58	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
59	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
60	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
61	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
62	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
63	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
64	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
65	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
66	暗褐色土+黄粘土+腐葉切片(黄粘土)		
67	暗褐色土+黄粘土+腐葉切片(少・やや粘質)		
68	暗褐色土+黄粘土+腐葉切片(少・やや粘質)		
69	黄褐色土(粘質)		
70	暗褐色土+腐葉切片+黄粘土(多・やや粘質)		
71	暗褐色土+黄粘土(やや粘質)		
72	暗褐色土+黄粘土(少・やや粘質)		
73	暗褐色土+腐葉切片(多・やや粘質)		
74	灰褐色土+腐葉切片(黄粘土)		
75	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
76	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
77	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
78	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
79	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
80	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
81	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
82	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
83	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
84	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
85	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
86	暗褐色土(粘質)		
87	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
88	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
89	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
90	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
91	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
92	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
93	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
94	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
95	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
96	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
97	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
98	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
99	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
100	灰褐色土+黄粘土+腐葉切片(少・粘質)		
101	暗褐色土+黄粘土+腐葉切片(少・粘質)		
102	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
103	黄褐色土(粘質)		
104	暗褐色土+腐葉切片+黄粘土(少・粘質)		
105	灰褐色土+腐葉切片+黄粘土(少・粘質)		
106	灰褐色土+腐葉切片+黄粘土(少・粘質)		
107	灰褐色土+腐葉切片+黄粘土(少・粘質)		
108	暗褐色土+腐葉切片(強い粘性)		
109	暗褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
110	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
111	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
112	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
113	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
114	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
115	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
116	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
117	暗褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
118	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
119	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
120	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
121	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
122	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
123	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
124	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
125	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
126	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
127	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
128	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
129	暗褐色土+黄粘土(黄粘土)		
130	灰褐色土(強い粘性)		
131	灰褐色土(腐葉が土酸化したものでササキ)		
132	灰褐色土+黄粘土(黄粘土)		
133	黄褐色土(強い粘性)		
134	灰褐色土+黄粘土(少・強い粘性)		
135	灰褐色土(強い粘性)		

の凝灰岩が土壌化した灰色土と黄白色粘質土が互層をなすように堆積しており、非常に粒子が細かく粘性の強い層で、水が溜まった時にできる土のように思われ、一時、この面が表面に出ていた時期があったように思われる。

② 南側断面について（第59図）

主郭側は急峻な凝灰岩の壁面が見られ、直下に土壌4基を設けたあと、急激に落ち込んでいる。物見やぐら側は、地表下約1.4mで空堀の上縁と思われる落ち込みを確認し、ガラガラと約3.2mの深さまで続き、幅16cmの犬走りのな平場を設けたあと、再び約2.6m急激に落ち込んで底部に至る。

断面で土層を観察すると、ほぼ水平の層とブロック状に投げ込まれたと思われる層が見られ、人為的に埋められたように思われる。全体は大きく六ブロックに分けられ、粘土質の土と岩盤の凝灰岩が土壌化したものが交互に堆積している。底部から約40cmは粘性の強い土があり、その上約1.3mには凝灰岩が土壌化したものを含むため、灰色がかってサクサクした土が堆積している。そして、北側断面では底部近くに見られた乱れた粘土層が約1mのっており、その上約90cmには粘性の強い土がほぼ水平に入っており、さらに、その上約1.2mは、凝灰岩が土壌化したものが薄く何層も互層をなしている。一応ここまでが空堀本体の埋土と思われるが、さらに約1mにわたり硬くてよくしまった土が堆積している。

(2) 土壌

主郭側の斜面下から4基の土壌が確認された。SK-04は調査区外に延びていたため、他の3基の調査を行った。

① 1号土壌（SK-01）

平場の最も南側に位置する長径2.88m、短径2.06m、深さ0.88mの楕円形プランの土壌で、長軸をN80°Eにとる。空堀側は立ち上がり急で、主郭側に向って、ガラガラと上がっていく。

埋土は、全体的に凝灰岩が土壌化したもので、サクサクして上に乗っただけで沈むように軟らかい。また、風化した凝灰岩の塊を多量に含む。

② 2号土壌（SK-02）

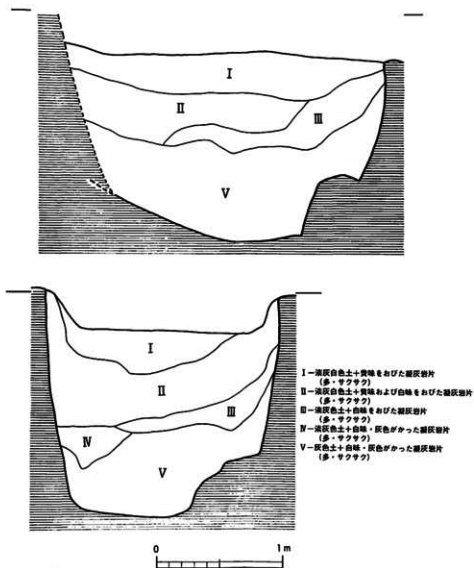
長径2.89m、短径1.50mの楕円形プランの土壌で、長軸をN49°Wにとる。深さは、空堀側からSK-01にかけては崩壊しているため、現況では上縁がかなり下がっていると思われ、残りのいいSK-03側で1.64mを測る。

埋土は、SK-01同様凝灰岩が土壌化したもので、サクサクして非常に軟らかく、風化した凝灰岩の塊を含む。また、空堀側には大きな凝灰岩が2個据えられたように確認された。

③ 3号土壇 (SK-03・第60図)

長軸をN67.5°Wにとる、長径2.94m+ α 、短径1.92m、深さ1.83mの隅丸方形プランの土壇である。壁面は、主郭側の確認ができなかったが、他の三方は急激に立ち上がっている。

埋土は他の2基同様、凝灰岩が土壌化したもので非常に軟らかで、サクサクしている。底部には、上がり下りの際の階段として利用したかのように、空堀側に2個、中央南側に1個の凝灰岩が残っている。

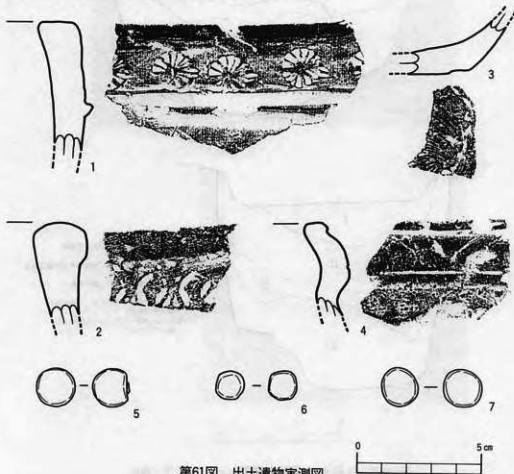


第60図 3号土壇断面実測図 (上:北側、下:西側)

2. 出土遺物 (第61図)

調査は、深さ6mにもおよぶ大がかりなものになったが、遺物はわずか数点しか出土しなかった。

1は瓦質の火舎で、外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間に菊花文の刻印を押している。口唇部は面取りがなされていて平らで、内面ハケ、外面はナデ調整である。2は土師質の火舎で、口縁部に粘土を貼り付けて丸味を持たせ、下部にX文の刻印を押している。3は土師器の皿の底部から体部にかけての破片である。底部からやや内弯しながら立上がり、境は丸味をおびている。糸切り底。4は土師質土器の口縁部である。口縁部直下と胴部に浅い沈線を一条ずつ巡らしている。内・外面ともナデ調整。5～7は鉛製の鉄砲玉である。5は地表下約1mの地点から出土したもので、一方が潰れている。径1.42～1.51cm、重量18.45g。6は地表下約4mから出土したもので、径1.11～1.45cmと昨年出土した玉とほぼ同じ大きさの小型の玉である。重量8.00g。7は地表下約5mから出土。径1.45～1.57cmとやや歪んでおり、重量19.60g。



第61図 出土遺物実測図

3. 小結

空堀は、主郭のある丘陵を取り巻くように約300m巡らされている。今回はそのうちの約20mと極わずかの面積しか調査を行わなかったが、築・改城時の大土木工事を窺わせるような、大きな成果をあげることができた。

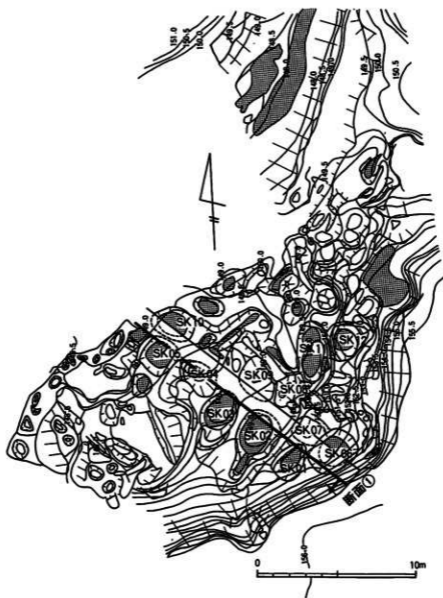
今回調査を計画した空堀は、現況で主郭側と約10m、物見やぐら側とは5.7～6.7mも比高差があり、堀として十分な役割を果たしていたと思われる。そのため当初は、せいぜい2～3mぐらいで堀底が確認できるであろうと予測して調査を開始した。しかし、なかなか底部には達せず、表土から約6m下方でようやく確認に至った。最終的に確認した堀の規模は南側で上幅9.42m、下幅0.8m、深さ4.63m、北側で上幅8.47m + α 、下幅1.1m、深さ4.42mと下幅は非常に狭くなり、人ひとりがやっと通れる幅で、典型的な薬研堀の形態をとっている。比高差は約80cmあり、北から南に傾斜している。

平面的に見ると、物見やぐら側は北側半分、主郭側は南側半分に平坦面を設けている。特に、主郭側の平坦面には4基の土壇と1基の不明遺構が作られている。土壇については主郭の丘陵と物見やぐらを結ぶ橋の橋脚ではないかとの意見も出たが、柱痕跡は確認できず、どのような性格の遺構かは判断がつかなかった。類似遺構は、熊本県文化課が昭和59～60年度にかけて調査を行った高城跡（球磨郡山江村）、平成2年度に調査が行われた河内浦城（天草郡河浦町）で確認されている。高城跡の場合は、平坦部ではなく斜面部に段々に作られており、遺構の性格については「戦闘的な施設と考える以外に用途を見いだせない」（『高城跡』熊本県教育委員会・第62・63図）と述べられている。

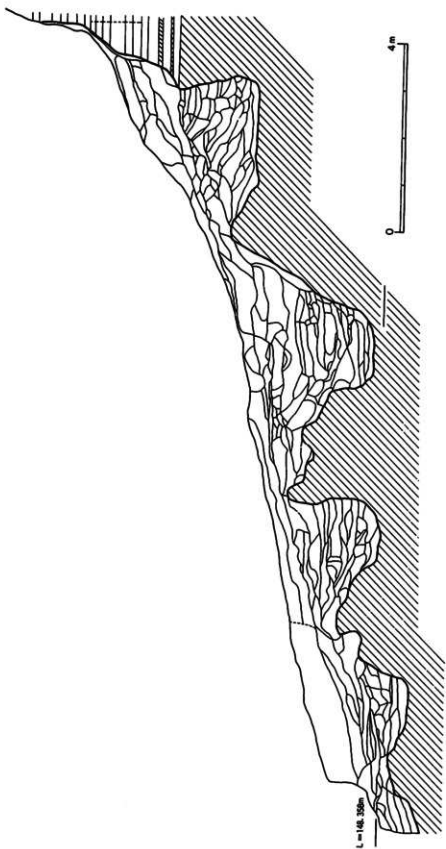
一方、断面を観察すると主郭側では南・北両壁断面とも約71°、物見やぐら側では北側で約63°、南側で60～72°の傾斜を持ち、非常にきつい傾斜で作られている。

田中城は、少なくとも約250年の歴史を持つ城であるが、文献資料がほとんどなく、このような堀がどの段階で作られたかは定かではない。今回の調査で確認した空堀の埋土を観察すると、自然に埋まったと思われるものは堀底近くのわずかであり、落城時に一気に人為的に埋められたように思われる。そのため、これ程大規模な堀が作られたのは、天正十五年（1587）の豊臣秀吉軍との戦い（いわゆる肥後の国衆一揆）を控えてであり、新たに掘り直したか、それまであった簡単な堀を大きく拡大したと考えたのが妥当であろうが、元々存在していたこのような大規模な堀の底に堆積していた土を除去したということも考えられる。

いずれにしても、この大規模土木工事により作られた空堀や急峻な斜面と城の西側水田の圃場整備が行われる際に、県文化課が行った試掘調査で和仁川の旧河道と思われる跡が確認され、これを自然の外堀として田中城との間を沼地化して防御施設としていたと思われる、守りが非常に堅固な城であったことが明らかになってきた。



第62図 高城跡Ⅳ部北側斜面遺構実測図
 「高城跡」熊本県教育委員会より



第63圖 高城跡IV部北側斜面土層断面図
 「高城跡」熊本県教育委員会より

第6節 県営圃場整備事業（春富地区）の試掘調査概要

熊本県文化課文化財調査第1係長 松本健郎

県営圃場整備事業（春富地区）の平成元年度施工予定地が、県指定史跡・田中城跡の西側に隣接した地域であったことから、平成元年5月末に現地調査を行った。現地調査は、県文化課の松本健郎（文化財調査第1係長）・坂田和弘（文化財保護主事）が行い、町教育委員会の協力を受けた。

田中城跡の西側一帯は、和仁川に面した水田地帯である。ほぼ全筆にわたる遺物採集では、ごく少量の土師器が採集されたにすぎないが、和仁熊野座神社の下流で和仁川が不自然に流れを西に変え、施工予定地の水田の中に旧河道と思われる凹地の連続があることが判明した。

上記の現地調査をうけて、平成元年6月27日～7月5日に試掘調査を行った。試掘は、松本と坂本重義（文化課嘱託）が担当し、黒田裕司（三加和町教育委員会）の協力を受けた。試掘溝は重機により掘削し、遺構・遺物の有無等を確認した。

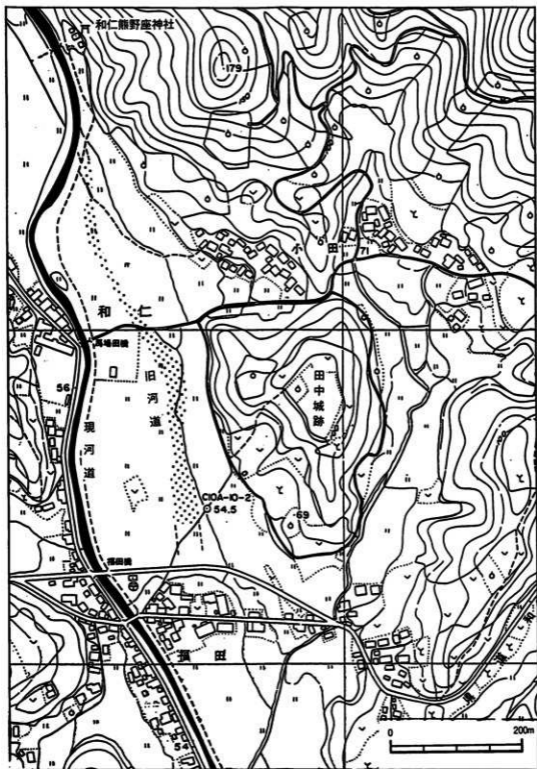
試掘調査を実施した一帯は、耕作土の下は砂礫層の部分が多く、掘り進むにつれて周囲が崩壊し、湧水も多く、断面図等の記録作成は不可能であった。

19カ所に設定した試掘溝のうち、10カ所では何ら遺構・遺物は確認されなかったが、9カ所で遺構・遺物が確認された。なかでも、7カ所で旧河道が確認され、現地調査時の推定を裏付ける結果が得られた。

旧河道は、和仁熊野座神社下流の西側への曲流点からほぼ直線的に南に延びており、現河道より40～140m東側を流れている。田中城跡の西裾から現在の和仁川まで160～200mの距離があるが、旧河道までは40～70mの距離しかない。旧河道の川幅は、部分によって異なり、狭いところでは10m、広いところでは45m以上を測る。概して下流側が広がっている。深さは現地表から1.2～1.7mで、平均的には1.5mほどである。川底には泥炭層の堆積する部分があり、その中には木片を含む部分があった。

今回確認された旧河道は、田中城跡の外濠の役目をはたすもので、田中城跡の構造を考えるうえで、きわめて重要な意味をもつ。旧河道と城跡の西裾の間は大部分が湿地であったこと、城跡の西裾部の試掘溝から柱穴が今回の試掘で確認されている。これらを総合すると、最近話題になっている「迎春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵）もより一層理解しやすくなる。

現在の河道への改修がいつ行われたのかについての資料は不明であるが、周辺の水田化等に伴って近世以降に行われたであろうことは想像に難くない。

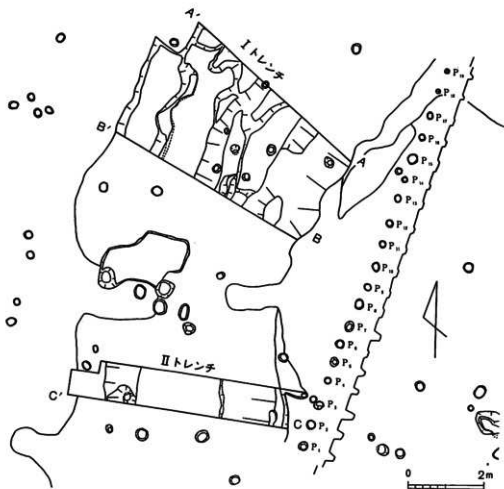


第64図 田中城跡と和仁川の河道

第7節 平成2年度調査の成果

田中城の北および東側には、福岡県境から延びるやまなみが控えており、田中城を見下ろす二ヶ所に、まだ未調査で断定はできないが以前から監視台跡、あるいは台場跡と呼ばれているところがある。しかし、これらよりかなり低いところにある田中城内にも物見やぐら跡と呼ばれている高台が、北・南・西の三ヶ所に残っている。このうち北・西の二ヶ所に関しては、単なる物見やぐらにしては面積が広すぎるように思われ、Ⅱ・Ⅲ郭の可能性も考えられた。

そこで、この高台の性格を明らかにすることおよび昨年度の調査で想像以上の大規模な土木工事により作られたことが判明した空堀との関連を調べるために、まず、西側の高台から調査することにした。



第65図 堀跡・柵列実測図



第66図 平成2年度調査遺構配置図

空堀 (平成元年調査)



10m

SX - 不明遺構

1. 検出遺構

(1) 柵列 (第65図)

調査区のほぼ中央部をN20°E方向に走る1列の柱列が確認された。整然と並んだ19個の柱穴からなり、柱穴の最大はP₇(30×23cm)、最小はP₁₉(11×10cm)で平均21.2×18.6cmである。深さはP₇が最深(27.7cm)、P₁₉が最浅(4.9cm)で平均12.0cmである。柱穴の間隔は、50~70cmで平均58.6cm、周囲に土塁の有無は確認できなかった。

(2) 堀跡 (第65・67図)

柵列の外側に弧を描くように確認されたが、柱穴と重複していたため全体を掘らずに、2本のトレンチを入れただけに止めた。平面では、約6mの幅でこの曲輪を断ち切っており、中央部が陸橋部のようにくびれている。Iトレンチ(幅3m)では、西側に幅約2.0~2.5mの平坦部を設け、幅3.0m、深さ0.9~1.4mの堀へと続き、断面は半円形をしている。IIトレンチ(幅1m)は上縁約6.0m、下縁約2.3m、深さ約1.6mとIトレンチに比べると大きくなっており、断面も逆台形となっている。

発掘範囲が狭かったため断定はできないが、Iトレンチでは南から北へ、IIトレンチでは北から南へ傾斜しており、中央部のくびれ部を境として、両側に傾斜しているのではないかと推測される。Iトレンチでは半円形、IIトレンチでは逆台形と、中央のくびれを境に傾斜同様全く異なる断面をしているのかもしれない。

① A-A' 断面 (第67図)

西側は約40cmの深さで、中央部に向ってやや傾斜する1.94mの平坦部を設けてから約80cm、掘り込んでいる。当初は、幅5.45m、深さ1.38mの堀だったと思われるが、断面で埋土を観察してみると、ある時期に7か8層まで一旦埋まり、幅約2m、深さ約1.2mの小さな堀として再利用されていた可能性も考えられる。埋土は、全体的に焼土や炭化物を含み、5~7および13はやや粘性を帯びており、他は硬く締まっている。

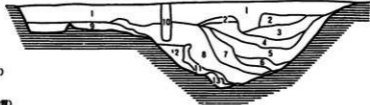
② B-B' 断面 (第67図)

A-A'同様、西側に約20cmの深さで平坦部を2.13m設け、約75cm掘り込んでいる。緩やかな傾斜で底に至るが、底部は二つに分かれており、いずれも丸味を帯びている。西側の断面と比較してみると、同様に4・5と10~14が一旦埋まって、幅約2mの小規模な堀となった時期があったと思われる。埋土は、1を除いて粘質土で、焼土・炭化物を若干含む。

③ C-C' 断面 (第67図)

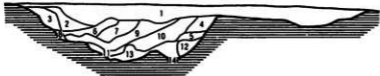
断面は上縁6m、下縁2.26m、深さ1.64mの逆台形である。斜面は削りと急傾斜で、底面は平たく整形しており、Iトレンチと比較すると非常に丁寧な作りである。埋土は、中央部に砂質の層を挟むが、全体的にはやや粘質土のもので、上部の方には炭化物・焼土を若干含んでいる。また、西側の斜面には、掘近くに埋土が砂の柱穴が作られているが、堀

A' 97.200m



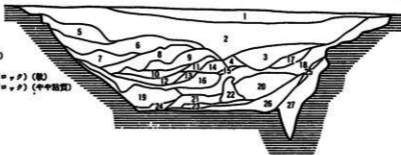
- 1 二ヶ茶色土 (硬)
- 2 灰褐色土 (中中粘質)
- 3 暗黄褐色土 (中中粘質)
- 4 洪風色土 (粘質)
- 5 灰白色土 (粘質)
- 6 赤褐色土+灰色土 (粘質)
- 7 暗褐色土 (粘質)
- 8 白→灰→暗褐色粘質土
- 9 二ヶ茶色土+暗褐色土+灰色土 (中中粘質)
- 10 暗白色粘質土
- 11 洪暗褐色土 (粘質)
- 12 暗灰褐色土 (粘質)
- 13 にごった灰白色土 (粘質)
- 14 白色粘土

B' 97.200m



- 1 二ヶ茶色土 (硬)
- 2 暗褐色土 (硬)
- 3 暗褐色土 (硬)
- 4 暗褐色土 (硬)
- 5 赤褐色土+灰色土 (粘質)
- 6 赤褐色土+灰褐色土 (粘質)
- 7 灰褐色土 (粘質)
- 8 暗褐色土 (硬)
- 9 暗褐色土 (硬)
- 10 柱穴
- 11 にごった灰白色土 (硬)
- 12 洪暗褐色土 (硬)
- 13 赤褐色土+灰褐色土 (中中粘質)

C' 97.200m



- 1 にごった灰褐色土 (硬)
- 2 暗褐色土 (硬)
- 3 暗褐色土 (中中粘質)
- 4 暗黄褐色土 (中中粘質)
- 5 にごった灰褐色土 (中中粘質)
- 6 灰褐色土 (中中粘質)
- 7 暗褐色土+灰褐色粘質土 (ブヨク) (軟)
- 8 暗褐色土+灰褐色粘質土 (ブヨク) (中中粘質)
- 9 暗褐色土 (中中粘質)
- 10 洪灰褐色粘土
- 11 黄褐色砂層
- 12 灰色粘土
- 13 洪灰褐色土+砂
- 14 灰白色土 (軟)
- 15 洪風色粘土
- 16 灰白色土+砂+灰褐色土
- 17 洪灰褐色土+砂
- 18 にごった灰褐色土
- 19 洪暗褐色粘土
- 20 灰白色土+砂 (中中粘質)
- 21 灰白色土 (中中粘質)
- 22 砂+灰白色土 (砂が多くバラバラ)
- 23 灰白色土+砂+暗褐色土 (中中粘質)
- 24 にごった暗褐色土 (中中粘質)
- 25 灰白色土+砂
- 26 洪褐色土 (中中粘質)
- 27 灰色砂層

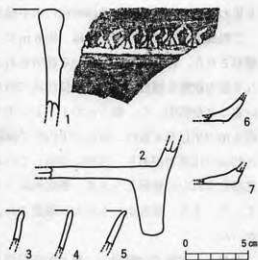


第67図 堀跡土層断面図

との関係は不明である。

2. 出土遺物 (第68図)

1は瓦質の火舎である。口縁部は、粘土を貼り付けているため丸味をおびている。外面に断面三角形の突帯を一条貼り付け、口縁部との間にX文の刻印を押している。内・外面ともナデ調整である。2は、1と同一個体と思われる火舎の脚部である。3～5は青磁碗の口縁部である。3は全体に薄く釉がかかっており、淡青白色をしている。口縁部はやや外弯し、外面には削り出しによる鮮明な蓮弁文様がみられ、花卉の先端はやや鋭角で花卉



第68図 出土遺物実測図

の中央を縦方向に、明瞭な稜線が下がっている。4は淡緑青色で、釉は口縁部近くは厚く、体部にいくにしたがって薄くなっている。口縁部は体部に比べてやや肥厚しており、外面には削り出しによる薄い花卉文様が見られる。花卉の先端はぼやけていて、はっきりしない。5は緑青色をしており、釉は4とは逆で口縁部近くは薄く、体部はやや厚くなっている。器壁は口唇部でやや外弯して薄くなっており、外面には不鮮明な花卉文様が削り出されている。花卉の稜線と思われる縦線だけが、やや明瞭に残っている。また、両面に薄く貫入が入っている。6は、土師器の皿の底部から体部にかけての破片で、やや内弯しながら立上がり、境は丸味をおびている。底部は、すり減っていてははっきりしないが糸切り底と思われる。7も土師器の皿の底部から体部にかけての破片である。底部と体部との境ははっきりしており、やや内弯気味に立上がると思われる。糸切り底。

3. 小結

主郭側から昨年度調査を行った空堀越しに今回の調査区を臨むと、三段に整形された地形が目につく。北側は腰曲輪状の小規模な平坦面が続き、西および南側は急傾斜のあと、北側同様腰曲輪状の小さな平坦面が続いている。

今回の調査では、柱穴・堀跡などの遺構が調査区全体から確認された。柱穴は、建築物を想定するような並びは認められず、中央部をN20°Eに走る柵列を1列だけ確認したにとどまった。この柵列は19個の柱穴からなり、50～70cm間隔で整然と並んでいる。柱穴の大きさは平均21.2×18.6cmとやや小さく、深さは19個のうち12個が10cm未満と浅く、平均は12.0cmである。昭和61・62年度で調査を行った主郭では、2～3m間隔で並ぶ柱穴を柵列の親柱と見なし、その間を埋めるように約50cm間隔で柱を立てた柵列の復元整備を、平成元年度に行った。今回の調査で確認されたものは、まさしくこの復元した柵列そのもの

を思わせるものであり、戦国時代の田中城を彷彿とさせた。

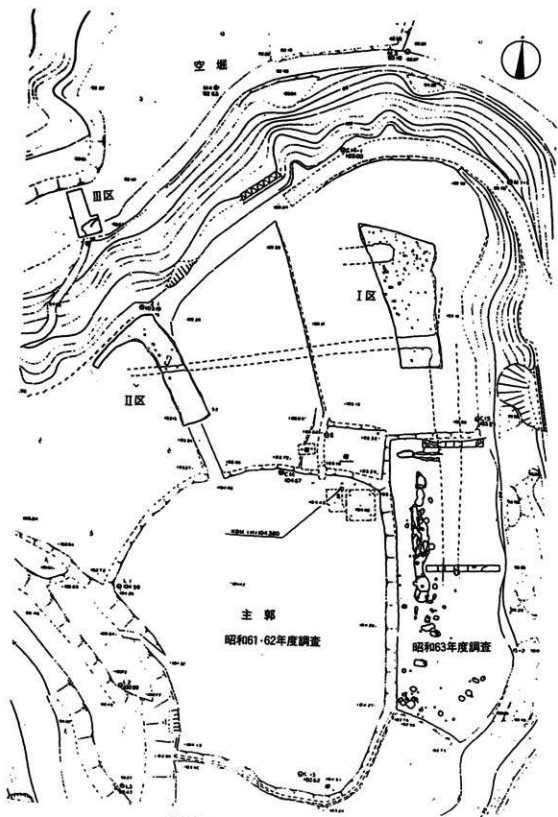
この柵列の外（西）側からは、幅6mで、中央部が外側に張りみ弧状をしている堀跡も確認された。柱穴と重複している箇所もあるため、柱穴のない部分に二本のトレンチを入れて堀の状態を観察すると、陸橋部状に凹んでいる中央を境として南北両方向に傾斜していることが判明した。幅3mのⅠトレンチで南北両方向の断面を観察してみると、西側に約2mの平坦部を設け、断面が半円形で幅約3.3mの堀を作り出しており、深さは南北で約40cmの比高差があり、急激に傾斜していることがわかる。これに対し、Ⅱトレンチは、底部をきれいに整形しており、断面形もⅠトレンチとは全く異なるきれいな逆台形を成している。また、堀底からも柱穴が確認され、この部分だけで三時期の遺構があることがわかった。

ただし、北側では柵列の一部と堀跡が切り合っているように見える部分もあり、これらがセットとして使用されたかどうかははっきりしない。

この他、調査区の東側では不定形の土壌も検出された。土壌全体が非常に脆い凝灰岩であり、さらに壁面がオーバーハングしていて危険なため、全容は確認できなかったが上縁は約2.0×1.6m、深さは約2.5mまで確認し、その時点で下縁は3.0×3.76mまで広がっている。埋土は、凝灰岩が土壌化したもので、サクサクして非常に軟らかである。性格については、主郭側にほぼ同レベルの部分があるため、この二ヶ所をつなぐための橋脚ではないかという意見もあるが、柱痕跡が確認されずはっきりしたことは言えなかった。

この後、西側だけに残る二段目と、東側を除く三方にある三段目の遺構確認を行ったが二段目からまとまりのないわずかの柱穴が確認されただけで、三段目からは全く確認されなかった。さらに、三段目に二本のトレンチを入れて土層の確認を行ったところ、半分位から旧地形が落ち込んでおり、上面を削ることにより平坦面を広め、余った土で下段を整地して平場を広めるという方法で、この高台を階段状に作ったことが推測された。

以前から、地元でこの高台は物見やぐらとか監視台と呼ばれていた訳であるが、今回の調査で、それらを想定させるような遺構は全く確認できず、柵列・堀跡という防御施設のみが確認されただけのため、捨て曲輪として使用されていたと判断した。



第69図 試掘 I 調査区全体図

第8節 トイレ建設および登城道整備に伴う試掘調査の成果

主郭の下端に広がる曲輪のうち、管理道路を上り切った箇所にトイレを建設し、これと並行して空堀から主郭部へ上る登城道（散策道）の整備が、平成2年度の企画観光課の計画としてあがってきた。この予定地は、昭和63年度に調査を行い鍛冶跡を思わせる遺構や堀跡のほか、多種多様の遺物が多量に出土した場所の北隣にあたり、今回の予定地にも遺構が広がっている可能性が推測されたため、この区域をⅠ区とし、また、登城道予定地を

Ⅱ区、空堀をⅢ区として、工事に先立ち平成2年6月22日～8月2日まで試掘調査を実施した。

（試掘Ⅰ）

1. 検出遺構（第70図）

Ⅰ区からは2棟の掘立柱建物跡のほか、南東隅から昭和63年度の調査で確認された堀跡の延長と思われるものが確認され（SD-01）、新たにこれと直行するような堀跡（SD-02）、さらにはSD-02と平行して走るSD-03も確認された。またⅡ区までSD-02が延びていることもわかり、Ⅲ区では、空堀の延長も推定された。

（1）掘立柱建物跡

Ⅰ区の北側で2棟が切り合った状態で確認された。また、SB-02はSD-03とも切り合っている。

① 1号掘立柱建物跡（SB-01）

桁行2間=4.14m、梁行1間=1.89mで主軸をN-Sにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ で $2.15 \cdot 1.99m$ 、 $P_4 \sim P_5 \sim P_6$ で $2.14 \cdot 2.00m$ である。柱穴の大きさは P_4 が最大（ $36 \times 32cm$ ）、 P_1 が最小（ $24 \times 20cm$ ）で平均 $30.5 \times$



SB—掘立柱建物跡
SD—溝遺構

第70図 試掘Ⅰ—Ⅰ区 遺構配置図

28.0cmである。柱穴は、ほぼ直線に並ぶ。

② 2号掘立柱建物跡 (SB-02)

桁行3間=4.26m、梁行2間=3.43mで主軸をN6°Wにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2$ で1.30m、その先2柱間は不明で、 $P_1 \sim P_3 \sim P_4 \sim P_7$ は1.26・1.34・1.66mである。梁行は北西隅が不明で $P_3 \sim P_4$ で1.69m、 $P_7 \sim P_8 \sim P_1$ で1.71・1.72mである。柱穴の大きさは P_2 が最大(41×35cm)、 P_4 が最小(14×11cm)で平均20.2×17.6cmで、柱穴の並びは、桁行は千鳥であるが、梁行は直線である。

(2) 堀跡

調査区の東南隅で確認されたのがSD-01で、昭和63年度の調査で確認された堀跡の延長である。東側が確認できなかったため、幅は不明であるが、おそらく同規模の堀となり北側にまだ伸びていくものと思われる。これと直行するように確認されたのがSD-02で幅約2mである。Ⅱ区の中央部でも堀跡が確認された。幅は約1mと狭くなっているが、作られている方向から考えて、SD-02の延長と考えるのが妥当であろう。さらに、Ⅰ区においては、SD-02と平行するように走るSD-03が、約12m北側に作られていることがわかった。幅約3mと大きなものと思われるが、極一部が確認されただけのため、このままⅡ区まで続くかどうかは、今後の調査を待たねばならない。

Ⅲ区は、昨年度調査を行った空堀の続き具合を確認するために設定した。主郭側では地表下約85cmで凝灰岩が確認された。断面を観察すると、土層がほぼ水平に入っていることが確認でき、人為的に埋められていることが推測されたため、空堀がこの部分まで続いていることは間違いないと思われる。

2. 出土遺物

わずかに出土したが、図化できるようなものは出土しなかった。

3. 小結

遺構確認のための試掘調査であり、調査範囲が極めて限られていて全容をつかむことはできなかった。ただ、Ⅰ区からは多数の柱穴が確認され、また、昭和63年度の調査で確認された堀跡の延長と思われるものも確認された。さらに、これと直行するように走る堀跡も確認され、Ⅱ区まで続いている模様である。これらの堀は、主郭部を取り囲むように作られており、主郭の防御施設と考えられる。北側にはSD-02と平行するようにSD-03もあり、二重の防御となっていたと思われる。

狭い調査区ではあったが掘立柱建物跡も2棟確認できた。この一帯は当然、堀以外の主郭防御のための施設・設備が設けられていたと考えられ、この曲輪全体を調査すれば新たに、いろいろな防御施設が確認できるのではなかろうか。建物の規模は、1間(1.89m)×2間(4.14m)、2間(3.43m)×3間(4.26m)と小型である。SB-01においては柱

穴の大きさはほぼ同じくらいの大きさで、柱間間隔も桁行・梁行でそれぞれ似たような数字が測られた。SB-02は、P₁以外は非常に小さな柱穴であり、北東隅の柱穴はSD-03で消滅しているため、SB-02の方がSD-03よりも新しいことがわかる。しかし、建物同志の新旧については、埋土での判断は困難であった。

Ⅲ区では、空堀の延長状況を判断するのが目的であったが、主郭側の地表下約85cmで凝灰岩の落ち込みが確認でき、埋土の状態を観察するとほぼ水平に入っており、人為的に埋められたことが推定される。このことから、平成元年度に調査を行った空堀がここまで延びていることは確実と思われるが、対岸の立ち上がりについては、今回の調査では確認できなかった。

このような調査結果から、トイレ建設は浄化槽を埋めるために遺構を壊すため、当初の予定地への設置は不適と判断した。

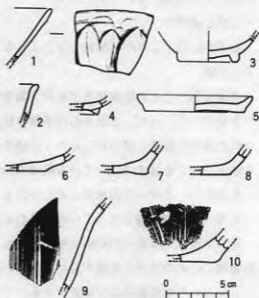
(試掘-II)

試掘-Iの結果をもとに、新たな候補地が企画観光課により検討された。その結果、城内の平坦部はほとんどの箇所遺構が出る可能性があるかと判断し、管理道路の上がり口部分に変更することになった。

調査は、設計図に基づき浄化槽を埋設するトイレ本体部分(4×7m)に限って実施した。現況は水田であったため、床土まで取り除いたあと遺構の確認を行ったが、地形が西から東方向に自然に傾斜しているだけで、遺構は全く確認できなかった。遺物は、今年度の本調査以上に出土したが、流れ込みによるものと思われた。

1. 出土遺物(第71図)

1～3は、青磁碗である。1は、全面に淡青白色の釉が均一にかかっている。器壁は口唇部でやや厚くなっており、外面には削り出しによる鮮明な蓮弁文様が見られる。花卉の先端はやや鋭角で、花卉の中央を明確な稜線が下がっている。2は、緑青色の釉が全体に薄くかかっている。器壁は口唇部でやや外弯しており、波状をしている。3は高台部で、高台の内径3.8cm、高さは0.7cmである。内・外面とも淡青白色の釉が薄くかかっているが見込み部には重ね焼きの痕跡が見られ、外面も高台部およびやや上部には釉がかかっていない。4は、白磁の高台部で、粘土を貼り付



第71図 試掘Ⅱ 出土遺物実測図

けた後で断面を三角形にしている。全体に薄く釉がかかっている。5は、口径9.2cm、底径7.9cm、器高1.3cmの土師器の皿で、底部と体部の境がはっきりしており、やや内弯気味に立上がる。糸切り底。6は、土師器の皿の底部から体部にかけての破片で、底部からかなり開き気味に立上がっている。糸切り底。7も土師器皿の底部から体部にかけてで、底部から直線的に立上がり、境がはっきりしている。糸切り底。8も土師器皿の底部から体部にかけての破片で、底部からやや内弯気味に立上がっており、境がはっきりしている。9は、瓦質のすり鉢で、器壁は薄く、胎土はきめ細かくてよくしまっている。内面の条線は、はっきりしているが破片が小さいため単位までの確認は困難であった。10も瓦質のすり鉢の底部から体部にかけての破片で、内面に5本単位の条線がくっきりと残っている。

2. 小結

当初、トイレ建設を予定していた場所から遺構が確認されたため、設置場所が城の上がり口に変更された。この場所は、福岡県境から続くやまなみから延びた、田中城が作られている台地の東側裾部に当たる。田中城は、西向きに作られたと思われる城のため、予定地は城の内側と考えられる。現況は水田であり、一帯は面積は狭いが水田地帯である。調査は、床土まで取り除いて遺構の確認を行ったが、調査範囲が浄化槽を埋設する本体部分のみと狭かったためか遺構の確認までには至らなかった。床土の下で確認された旧地形は西から東に傾斜しており、この状態から判断すると現在の道路建設の際に尾根筋を道路面までカットしていると思われる。また、水田は、以前から使用されていた可能性も考えられたが、今回の調査区ではそのような感じは得られなかったし、下層に古い水田面も確認できなかった。遺物の出土量は多かったが、流れ込みによるものと思われ、このことからこの場所へのトイレ建設は差し支えないと判断した。

第9節 平成3年度調査の成果

平成元年12月、田中城が小早川秀包・安国寺恵瓊など豊臣秀吉の家臣に加え、鍋島直茂・立花宗茂など九州の諸将により包圍されている様子を描いた『迎春・和仁仕奇陣取図』が山口県立文書館で確認されたことに基づき、以後、この陣取図に沿って城の西側を中心に調査を行うことにした。

今回の調査区は、地元で「彈正屋敷跡」と言伝えられている箇所北側に広がる814㎡の平地である。現況が栗山のため伐採ができず、木の周囲を径約2m残しての調査を余儀なくされた。また、周囲に排土場となるような場所が見当らず、南北に二分割しての調査となり、全体として遺構をみることは困難であった。

1. 検出遺構（第72図）

彈正屋敷跡と言伝えられている場所の隣接地ということで、何らかの生活臭を感じさせ

るような遺構が確認されるものと期待して調査を行ったが、残念ながら1棟の掘立柱建物跡を確認したにとどまり、確実に生活域を実証するまでには至らなかった。このほか、昨年度の調査で確認された柵列と同様の柱列が5列確認された。

(1) 掘立柱建物跡 (第75図)

調査区の南側から桁行3間=4.60m、東梁行2間・西梁行3間=3.60mの建物跡が1棟確認されたが、北東隅の柱穴(本来ならP₁に当たる)は栗の木の根元にあたり確認できなかった。柱間寸法は、桁行P₁~P₂~P₃で1.56・1.62m、P₄~P₅~P₆で1.40・1.65・1.55mである。梁行はP₁~P₂が1.98m、P₃~P₄~P₅~P₆で1.35・0.5・1.75mである。柱穴の大きさはP₁が最大(48×35cm)、P₂が最小(19×13cm)で平均33.3×29.0cm、深さはP₁₀が最深(32.0cm)、P₂が最浅(6.6cm)で平均24.9cmである。桁行方向をN78°Eにとり、桁行は千鳥、梁行は直線に並ぶ。

(2) 柵列

調査区の東側をN13.5°W方向に平行して走る5条の柵列が確認された。2条と3条に分かれており、2条の方を柵列Ⅰ、3条の方を柵列Ⅱとした。

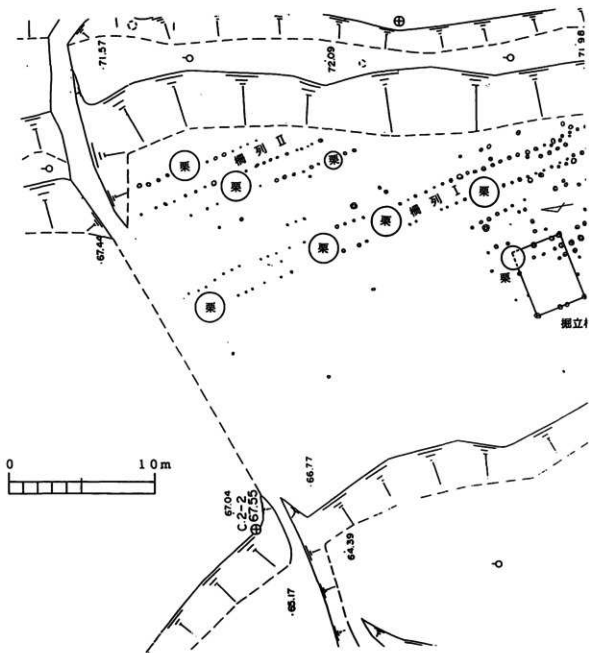
① 柵列Ⅰ (第74図)

弾正屋敷跡と呼ばれている箇所の下から延びる柵列で、約1.5mの間隔でほぼ対峙するように並んでいる。柱穴の大きさは、Ⅰ-1で長径11.0~56.5cm、短径10.5~47.0cm、と幅があり、深さも6.7~30.5cmと差がある。P₂が最大(56.5×47.0cm)、P₂₁が最小(11.0×10.5cm)で平均23.1×19.7cm、深さはP₆が最深(30.5cm)、P₂₁が最浅(6.7cm)で平均16.1cmである。Ⅰ-2でも、長径14.0~30.5cm、短径12.0~27.0cmと幅があり、深さも同様で2.6~30.0cmと差がみられる。P₂が最大(30.0×27.0cm)、P₂₁が最小(14.0×12.0cm)で平均21.1×18.3cm、深さはP₆が最深(33.0cm)、P₂₁が最浅(2.6cm)で平均16.6cmである。柱穴は、栗で調査ができずはつきりしない部分を除くと、Ⅰ-1で平均69.4cm、Ⅰ-2で平均67.4cmの間隔で整然と並んでいる。

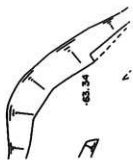
大きさは、北側に行くにしたがって小さくなっており、また、深さも浅くなっていく傾向にある。まだ北側に延びる可能性もあるが、前記のような状態にあるため、残存しているかどうか疑問である。柱穴の底部は、ほとんどが平らで柱を打ち込んだと思われるものは、ごく少数である。

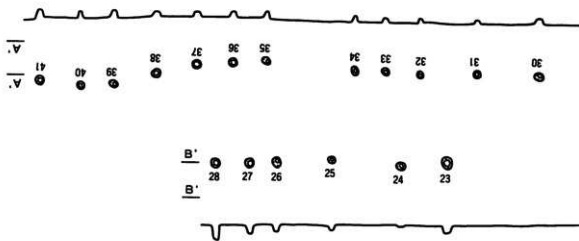
② 柵列Ⅱ (第74図)

柵列Ⅰの東側約4.5mのところを平行するように走っている柵列で、調査区の東側の中央部から延びており、北側の調査区外にも続いていると思われる。柱列の間隔は、Ⅰ同様約1.5mで、東側二列の柱穴もほぼ対峙するように作られている。柱穴の間隔も同様に栗で調査ができなかった部分を除くとⅡ-1で平均64.6cm、Ⅱ-2で平均66.0cm、Ⅱ-3で



第72図 平成3年度調査遺構配置図

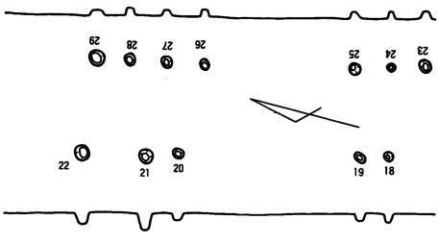




第1表 欄列1-1 柱穴計測表

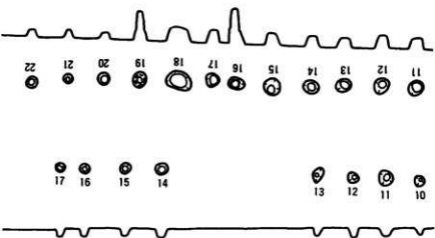
(単位: cm)

Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ
1	29.0	28.0	22.3	15	29.0	29.0	20.6	29	28.0	26.5	8.0
2	56.5	47.0	19.6	16	28.0	19.0	27.2	30	17.0	13.0	10.0
3	24.5	22.5	26.6	17	22.0	19.5	21.5	31	12.0	11.5	6.0
4	24.0	17.5	24.2	18	44.5	32.0	25.8	32	11.0	10.5	7.0
5	22.0	19.5	20.5	19	28.0	23.0	29.2	33	14.5	11.5	7.0
6	25.5	22.0	30.5	20	22.0	19.0	10.4	34	21.5	11.5	7.0
7	37.0	30.0	16.8	21	16.0	15.0	13.2	35	14.0	11.0	13.0
8	20.0	18.0	18.0	22	21.0	20.0	12.0	36	15.0	14.0	9.0
9	31.0	24.5	18.1	23	23.5	20.5	13.1	37	15.0	12.0	7.0
10	34.5	31.0	22.2	24	13.0	13.0	13.0	38	15.0	14.0	8.0
11	26.5	25.5	17.8	25	20.0	19.0	10.9	39	16.0	12.0	13.0
12	29.0	25.0	22.5	26	18.5	14.0	11.7	40	12.0	11.0	17.0
13	27.0	21.5	15.8	27	20.5	18.5	10.8	41	15.0	14.0	16.0
14	28.5	24.0	18.4	28	21.0	18.0	13.6				



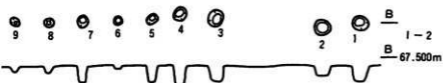
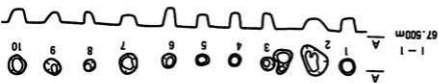
6
2
7
8
8
8
2
2
6
6
9
3
1

第73图 栅列 I 实测



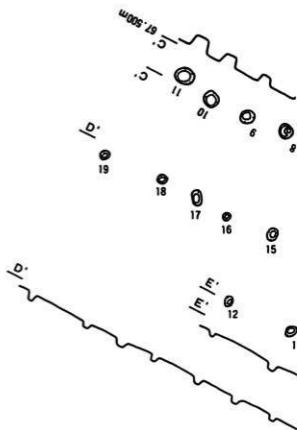
第2表 欄列1-2 柱穴計測表

Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長
1	29.5	25.5	25.9	11	28
2	30.0	27.0	18.0	12	20
3	30.5	25.0	27.2	13	22
4	25.0	22.0	33.0	14	22
5	21.0	14.0	28.3	15	19
6	14.0	14.0	4.4	16	17
7	23.0	19.5	29.1	17	16
8	18.5	17.0	13.1	18	18
9	19.0	14.0	9.5	19	24
10	19.5	18.0	13.3	20	19



(単位：cm)

No	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ
0	25.0	13.6	21	26.0	26.0	29.4
0	18.5	15.5	22	25.0	24.5	19.8
0	17.5	15.7	23	21.0	17.5	12.3
0	21.5	13.5	24	17.0	14.0	2.6
5	17.5	13.2	25	14.0	12.0	9.6
5	16.0	13.2	26	18.0	15.0	11.9
5	15.0	13.1	27	17.0	16.5	14.5
5	14.5	15.8	28	15.0	15.0	25.0
0	14.5	11.4				
0	15.5	12.4				



第3表 柵列Ⅱ-1 柱穴計測表

(単位: cm)

Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ
1	14.0	10.0	5.2	5	32.5	25.0	8.5	9	25.5	23.5	17.1
2	16.0	11.0	4.3	6	30.0	19.5	8.2	10	30.0	25.5	17.1
3	15.0	10.5	8.1	7	16.5	16.0	8.8	11	34.0	28.0	24.0
4	14.0	13.0	7.1	8	26.0	23.0	18.6				

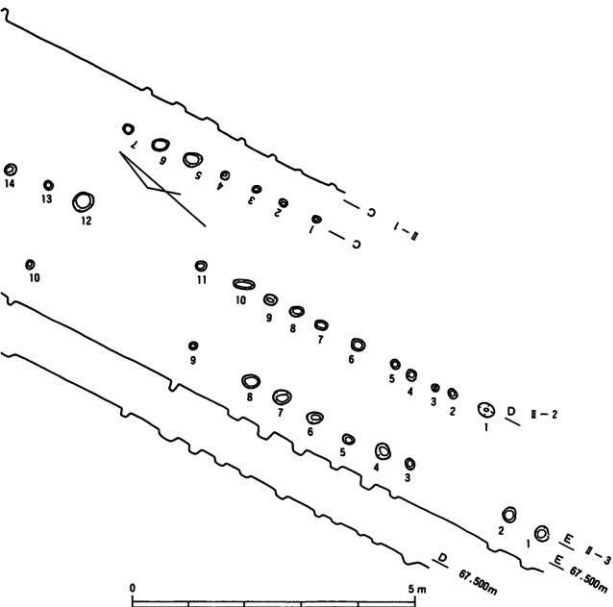
第4表 柵列Ⅱ-2 柱穴計測表

(単位: cm)

Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ
1	32.5	23.5	12.9	8	23.5	18.5	7.7	15	22.0	17.5	9.6
2	20.0	12.5	6.2	9	23.0	19.0	11.8	16	14.0	13.0	8.8
3	16.5	11.0	4.6	10	37.5	15.5	12.0	17	28.0	16.0	10.6
4	22.5	17.0	4.7	11	18.5	17.0	12.0	18	16.5	15.5	10.0
5	18.0	14.0	7.0	12	37.5	31.5	8.6	19	16.0	14.5	13.7
6	25.0	20.0	10.6	13	15.5	13.0	8.0				
7	21.0	15.5	5.4	14	20.0	18.5	10.8				

第5表

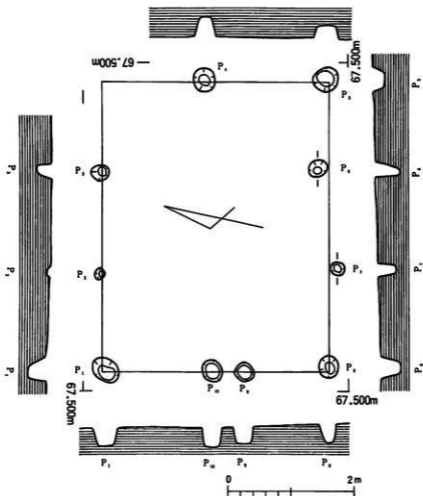
Pit-
1
2
3
4



柵列Ⅱ-3 柱穴計測表

(単位: cm)

10	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ	Pit-No	長径	短径	深さ
	27.5	23.0	9.7	5	22.0	15.0	9.8	9	14.0	14.0	16.1
	26.0	22.0	9.9	6	27.5	18.5	13.7	10	15.5	14.0	10.9
	19.0	13.5	6.6	7	31.5	24.5	18.8	11	22.0	16.5	12.2
	31.0	26.0	14.4	8	29.5	24.0	11.0	12	17.0	14.0	8.3



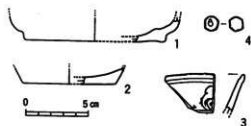
第75図 掘立柱建物跡実測図

平均77.9cmであり、整然と並んでいる。柱穴の大きさは、Ⅱ-1で長径14.0~34.0cm、短径10.0~28.0cm、深さ4.3~24.0cmと幅があり、 P_{11} が最大(34.0×28.0cm)、 P_1 が最小(14.0×10.0cm)で平均23.0×18.6cm、深さは P_{11} が最深(24.0cm)、 P_2 が最浅(4.3cm)で平均11.5cmである。Ⅱ-2は、長径14.0~37.5cm、短径11.0~31.5cm、深さ4.6~13.7cmであり、 P_{12} が最大(37.5×31.5cm)、 P_3 が最小(16.5×11.0cm)で平均22.5×17.0cm、深さは P_{12} が最深(13.7cm)、 P_3 が最浅(4.0cm)で平均9.2cmである。Ⅱ-3は、長径14.0~31.5cm、短径13.5~26.0cm、深さ8.3~18.8cmであり、 P_4 が最大(31.0×26.0cm)、 P_2 が最小(14.0×14.0cm)で平均23.5×18.8cm、深さは P_4 が最深(18.8cm)、 P_2 が最浅(6.6cm)で平均11.8cmである。櫛列Ⅰ同様大きさ・深さともバラツキがあり、また、柱穴の底部も平らで、打ち込んだと思われるものはない。

2. 出土遺物(第76図)

前年度同様、染付・青磁・土師器などの小片がわずかに出土しただけであった。

1は、口縁部を欠き、全体の5分の1程度を残す土師器の坏である。推定底径11.0cm、現存高は1.9cm。底部からやや内弯気味に立上がり、底部から立上りてすぐのところの高台を思わせるような段がついている。内・外ともハケ調整で、糸切り底。2は口縁部を欠く土師器の皿で、推定口径7.4cm、現存高1.2cm。底部から直線的に立上がり、境がはっきりしている。内・外面ともハケ調整で、糸切り底。3は、青磁碗の口縁部である。内・外面とも青緑色の釉が薄くかかっている。口唇部近くは、器壁が薄くなっており、釉も薄くなって、白っぽくなっている。4は鉛製の鉄砲玉で、径1.09~1.15cmとほぼ円形をしている。重量は5.45gで、これまでの調査で出土したなかでは、最も小さい玉である。



第76図 出土遺物実測図

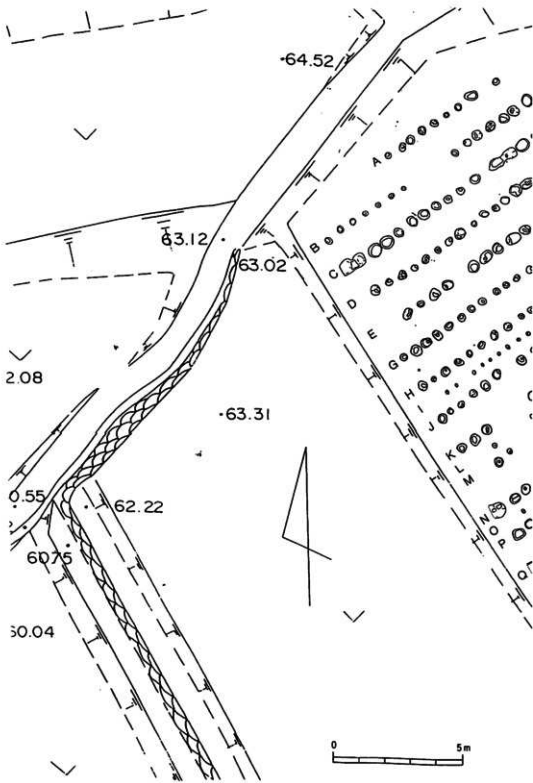
3. 小結

城の西側斜面には、他の三方と比較するとやや広めの平場が形成されている。平成元年12月に山口県立文書館で確認された「辺春・和仁仕寄陣取図」を観察してみると、この陣取図が西側から描かれており、城の構造を検討しても西向きに作られた可能性があるところから、今後は西側を中心に調査を進めることにした。

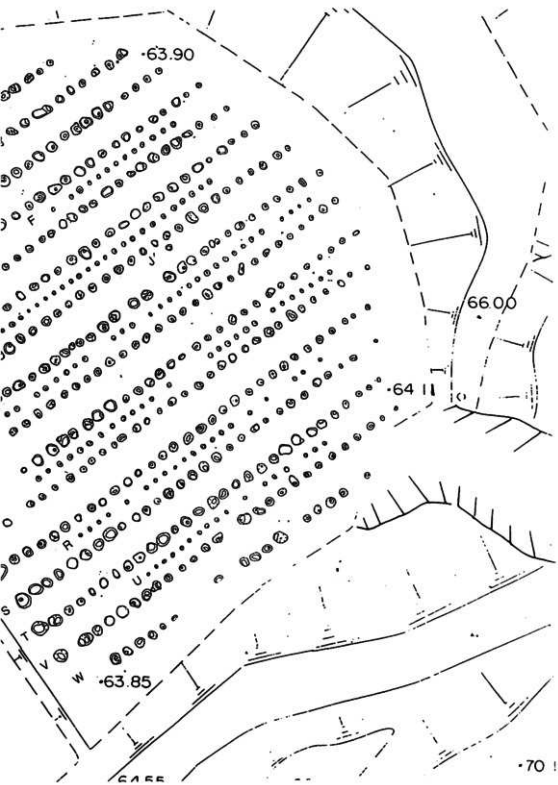
まず手始めとして、「彈正屋敷跡」と言伝えられている箇所直下の部分から調査を行ったが、栗畑のため伐採ができず遺構全体を確認するには困難で、掘立柱建物跡1棟と5条の櫓列を確認したにとどまった。

掘立柱建物跡は、主郭部で確認されたものと比較すると3分の2程度の規模(桁行3間=4.60m、東梁行2間・西梁行3間=3.60m)であり、生活用の建物としては小さいように思われる。

櫓列は5列が確認されたが、2列(櫓列Ⅰ)と3列(櫓列Ⅱ)の二つに分かれている。櫓列Ⅰは、彈正屋敷跡と呼ばれている平場の直下から始まり、Ⅰ-1の柱穴は、大きさの平均23.1×19.7cm、平均の深さ16.1cm、柱穴の平均間隔は69.4cmであり、Ⅰ-2では、大きさの平均21.1×18.3cm、深さは平均16.6cm、柱穴の平均間隔は67.4cmである。Ⅰ-2の方が若干小さめであるが、ほぼ同規模の柱穴といえる。櫓列Ⅱは、櫓列Ⅰの東側約4.5mのところを平行するように走っており、Ⅱ-1は大きさの平均23.0×18.6cm、深さの平均11.5cm、柱穴の平均間隔64.6cm、Ⅱ-2は大きさの平均22.5×17.0cm、平均の深さ9.2cm、柱穴の平均間隔66.0cmであり、Ⅱ-3は大きさの平均23.5×18.8cm、平均の深さ11.8cm、柱穴の平均間隔77.9cmである。この3列を比較してみると大きさは、ほぼ同規模であるがⅡ-3において柱穴間隔がやや広がっている。Ⅰ・Ⅱで柱穴を比較してみると、大きさ



第77図 平成4年



度調査 遺構配置図

はいずれもほぼ同規模であるが、Iの方がわずかに深くなっている。さらに、昨年度西捨て曲輪で確認された櫓列とも比較すると、昨年度の櫓列は、大きさの平均21.2×18.6cm、平均の深さ12.0cm、柱穴の平均間隔58.6cmであり、柱穴の規模は、今年度のものとあまり変わらないが、間隔がやや狭くなっている。

この櫓列に関しては、作られている位置・周囲の地形からどのような性格をもつものか判断に窮していたが、12月3日に実施した専門調査委員会において、攻め手の豊臣軍の櫓列と考えた方がいいのではないかと指摘を受けた。この櫓列が豊臣軍のものとするれば、『迎春・和仁仕寄陣取図』によると、この場所の上方にある南側監視台と呼ばれているところに「仕寄」（攻め手側の前線基地）と書かれていることとも合わせ、和仁氏側は豊臣軍にかなり攻め込まれていたと思われ、この陣取図が田中城落城寸前を描いた絵図であることが推測される。

いずれにしても、田中城において作られた櫓列は、柱を約60cmの間隔で整然と並べていたと思われる。

第10節 平成4年度調査の成果

田中城の西側には、他の三方と異なりやや広めの平地が形成されている。平成元年12月に山口県立文書館で発見された『迎春・和仁仕寄陣取図』を検討すると、城の西側に和仁側の建物と思われるものが多数描かれており、現況と比較して場所を推定し調査箇所とした。この場所は、主郭の南西側にあたり、井戸が掘られている崖面の下に広がる段々畑状の平地の一番裾部に当たる。陣取図では、建物と思われるものが描かれている場所から道を思わせる線が西捨て曲輪まで続いており、城内の通路を表しているのだろうか。

調査区は二筆の畑に分かれているため、広い方をI区、狭い方をII区として調査を実施した。

今までであれば、20cmも掘り下げると遺構確認面に達していたが、今年度はなかなか確認できず、四分割して土層を確認しながらの調査となった。しかし、それでも確認が困難であったため、さらに北西部の北隅にトレンチを入れ遺構の確認を行った。その結果、約10cm下方からガチガチに固まった面が現れ、南西―北東方向に並ぶ柱列が確認された。そこで調査区の全体を、このガチガチの面まで掘り下げると、全面から整然と並んだ柱列が確認され、その数は大きな柱列17列、小さな柱列6列の23列で、総数で約600個にもなった。

1. 検出遺構（第77図）

I区の全面から、N56°E方向に整然と並ぶ柱列が23列確認された。柱穴には、大小二通りの大きさがあり、いずれもほぼ平行に並んでいる。柱穴の大きさには二通りあり、大

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間
A				25.0	20.5	6.4	58	C'			
23.5	22.0	12.2	66	25.5	23.0	7.9		19.5	18.0	7.9	
32.5	24.5	15.7		38	C			D			
34.0	31.0	11.6	65		54.0	54.0	11.3	64	38.5	35.0	13.7
32.5	28.0	10.5		54	50.0	48.0	11.9		68	26.0	26.0
31.0	26.5	10.4	54		53.5	50.0	8.2	53		38.0	30.0
21.0	20.5	10.6		57	54.5	48.0	9.1		59	24.5	23.5
24.0	23.0	9.0	71		36.0	31.5	10.5	70		35.5	25.0
53.0	34.0	17.3		108	42.5	33.0	8.0		50	25.0	22.0
27.5	25.0	13.1	B		42.5	38.5	10.5	58		32.5	26.0
B				35.0	32.0	12.5	53		42.5	38.5	9.4
29.0	22.0	12.9	63	32.0	30.5	11.5		61	23.0	21.0	13.9
27.0	24.0	6.1		59	34.0	29.0	8.9		73	37.0	24.5
25.5	25.0	7.5	55		39.5	34.5	10.2	106		30.5	26.5
21.5	19.0	9.2		61	64.0	39.0	10.7		47	34.0	29.0
20.0	17.0	11.8	61		63.0	40.0	20.9	75		48.0	46.0
22.5	19.0	6.3		57	56.0	45.0	9.0		55	54.0	35.0
16.0	13.0	5.9	237		42.5	25.0	6.8	63		46.0	46.0
29.5	25.0	9.9		59	45.0	26.0	9.7		54	38.0	38.0
30.0	28.5	6.5	55		34.5	32.0	11.5	67		32.0	28.0
37.5	31.0	3.8		57	50.0	34.0	6.2		45	46.0	34.5
42.0	36.0	11.5	61		36.0	25.0	11.4	61		45.0	40.0
39.5	36.0	8.9		50	33.5	28.0	9.0		52	32.0	32.0
46.5	38.0	13.2	70		34.5	24.0	9.2	53		40.0	36.5
46.0	42.5	6.1		58	29.5	24.0	9.7		58	49.5	42.0
40.0	32.0	8.5	45		32.0	25.0	10.6	67		47.5	45.0
45.0	31.5	8.3		61	35.0	28.0	9.4		54	37.0	37.0
39.5	28.0	8.2	60		44.0	34.0	9.1			28.0	22.0

第12表 柱穴計測表 I (西より)

(単位: cm)

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間
28.5	22.5	9.4	53	20.0	19.0	9.0	62	28.5	27.5	17.2	50
29.5	22.5	9.5		20.0	19.0	6.8		30.0	25.0	14.1	
24.0	21.5	12.1	57	F				25.0	22.0	13.5	53
E				17.0	15.0	4.5	86	31.0	25.5	14.1	59
46.0	29.5	9.5	56	20.0	15.0	6.7		41	25.5	21.5	12.3
28.0	22.0	9.4		65	25.0	22.0	5.8	50	27.5	27.0	12.9
44.5	36.5	12.2	54	17.0	12.0	8.0	42	32.5	29.5	10.1	59
43.0	36.5	10.8		133	18.5	12.5		9.6	42	41.0	30.5
45.5	45.0	9.1	54	17.0	15.5	6.3	42	34.0	25.0	13.3	53
53.0	40.0	14.6		69	17.0	16.0		5.1	43	30.0	27.0
40.0	38.5	9.7	46	19.5	13.0	4.1	43	48.5	34.5	10.8	67
59.0	40.5	9.9		72	17.5	17.0		5.7	43	29.5	28.0
43.0	35.0	12.8	60	19.5	14.0	4.0	45	35.0	21.0	12.5	62
44.0	33.5	11.2		65	19.0	19.0		4.8	49	40.5	33.5
29.5	28.0	9.3	66	20.5	16.5	4.1	46	40.5	38.0	13.2	52
31.0	26.5	10.9		52	20.5	19.5		5.5	46	40.5	38.0
44.0	41.0	14.0	70	G				46.5	43.5	14.4	56
52.5	33.5	8.7		55	28.0	27.0	15.7	52	40.5	22.5	10.5
39.5	34.0	13.2	60	42.5	42.5	11.1	57		29.5	25.0	15.1
45.0	35.5	6.0		58	43.0	34.0	15.3	45	24.0	22.0	15.7
37.0	31.5	6.6	56	41.5	40.5	15.3	57		20.5	18.5	11.8
32.5	30.0	12.1		62	37.5	29.0	13.5	59	H		
27.5	27.5	6.6	49	31.0	30.5	14.8	51		38.5	33.5	9.7
33.5	32.0	9.7		61	32.0	28.0	12.9	52	20.0	19.5	6.3
25.5	22.0	7.8	60	32.0	28.5	16.8	67	39.0	32.5	15.5	62
34.0	26.5	10.7		49	29.0	25.0		16.0	48	38.0	28.0
23.0	21.5	10.3	65	26.0	24.0	14.6	55	28.0	24.0	10.0	57
34.0	31.5	8.3		47	28.0	22.0		17.3	56	29.0	28.0

第13表 柱穴計測表Ⅱ

(単位：cm)

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間
37.0	28.5	13.2	58	17.0	13.0	4.7	43	22.0	21.5	6.2	41
30.0	29.0	11.4		62	14.0	9.5		3.7	37	17.0	
24.0	21.0	9.5	48		14.5	13.0	3.9	41		23.0	20.0
30.0	25.5	10.5		50	14.0	13.0	2.7		43		
30.0	24.0	10.6	68		20.0	12.0	4.2	50		36.5	34.5
37.0	26.0	5.4		62	14.0	12.0	4.2		44	23.0	21.0
34.5	26.0	8.9	53		18.0	15.5	2.8	49		26.0	25.0
33.0	28.5	9.3		53	16.0	14.5	4.1		45	32.0	28.5
29.5	24.0	13.6	70		20.0	20.0	12.1	40		42.5	32.0
38.0	34.0	12.3		62	16.5	14.0	4.4		41	38.0	32.0
53.0	41.0	19.4	52		13.5	10.0	3.2	39		38.0	35.5
31.5	28.0	15.0		64	12.5	12.0	2.3		42	40.0	36.0
37.0	29.0	8.5	65		16.0	11.5	4.7	40		46.5	40.5
41.0	24.0	5.2		64	17.0	13.0	4.8		40	39.0	30.0
38.5	33.5	6.3	46		18.0	13.5	3.9	40		32.5	29.5
32.0	30.0	7.8		55	18.0	15.0	4.7		37	37.0	35.0
40.0	32.0	12.7	62		20.5	19.5	4.8	44		30.5	28.5
41.5	34.5	11.5		67	16.5	15.0	5.2		42	24.0	23.0
36.0	33.5	12.8	65		17.5	16.0	5.4	38		34.0	34.0
43.0	31.5	6.2		54	16.0	13.0	4.8		45	32.0	31.0
22.5	19.5	5.8	47		20.0	17.0	7.7	46		32.5	30.0
42.0	31.5	9.0		62	18.0	17.0	7.8		38	38.0	35.5
27.0	19.5	10.0	57		18.5	18.5	6.9	48		36.0	26.0
24.5	22.0	11.9		57	21.5	18.0	5.9		48	27.5	21.5
30.0	29.0	9.6	I		21.0	19.0	6.5	49		29.0	21.5
				19.0	14.0	8.0	53		30.5	28.0	10.4
16.0	11.5	4.9	44	22.5	21.5	9.0		42	34.0	27.0	9.4
13.5	11.0	4.0		87	23.0	20.0	11.8		49	46.0	36.0

第14表 柱穴計測表Ⅲ

(単位：cm)

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間			
35.0	32.5	12.2	60	47.0	41.0	15.9	67	18.0	11.5	5.0	47			
38.0	33.5	12.6		54	45.5	35.0		11.3	47	15.5		12.0	6.8	44
28.0	23.5	12.2			65	37.5		34.5		10.0		51	18.0	
27.0	22.5	10.7		53		35.0		32.0	9.7	46			18.0	13.0
25.5	19.0	7.6			50	29.0		18.5	5.3			23	19.0	16.0
30.0	25.5	8.2		63		21.5		17.0	13.2	53			19.5	19.0
34.0	29.5	14.4			48	24.0		21.0	11.7			58	22.0	22.0
21.0	19.5	9.3		J'		36.5		27.5	15.6	58			21.5	20.0
					24.0	24.0	10.4	60	22.0		16.5	6.2	41	
26.0	22.0	6.8					25.0		21.5	11.2	55	19.5		16.0
K				25.0	22.0	9.4	57	17.0	14.5	4.8		45		
34.0	33.5	12.9	60	23.5	22.5	8.4		53	21.5	19.5	6.1		47	
40.0	39.0	13.0		63	34.0	19.5	9.5		79	22.0	17.5	10.7		94
38.0	36.0	12.5	218		24.5	24.0	7.5	L		17.0	11.5	3.1	45	
38.0	34.5	11.0		53					14.5	12.5	3.6	38		
33.5	32.5	10.9	56		19.5	18.0	6.0	185	12.0	11.0	5.5		46	
45.0	35.0	12.1		53	18.5	17.5	7.0		46	16.0	14.5	4.0		M
30.0	26.0	12.4	57		18.5	17.0	5.4	44						
41.5	33.0	12.7		55	20.0	20.0	5.9		91	37.0	33.0	13.1	58	
38.5	38.5	13.3	49		10.5	19.0	7.4	45		23.0	17.0	10.4		169
39.0	30.0	13.7		42	20.0	18.5	7.8		53	31.5	26.0	14.8	67	
26.5	24.0	9.5	28		18.5	17.5	6.9	50		30.0	28.0	15.8		56
32.0	29.5	13.9		59	22.0	21.0	5.6		41	36.5	24.5	10.4	57	
36.5	31.0	13.4	53		16.0	15.5	7.2	46		36.0	29.0	10.5		78
43.0	40.5	16.7		81	22.0	22.0	6.3		137	29.5	25.5	10.3	52	
48.5	40.5	11.4	100		18.0	15.0	4.3	44		28.0	25.0	10.4		48
43.5	38.0	10.7		68	20.5	16.0	5.9		45	27.0	23.5	10.6	55	
43.0	38.5	13.0	99		22.0	18.0	8.1	82		31.5	28.0	7.8		52

第15表 柱穴計測表IV

(単位: cm)

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間			
35.0	34.0	13.0	59	37.0	36.5	12.9	75	23.0	16.0	6.6	49			
28.0	27.0	9.0		62	43.0	40.0		11.6	64	24.0		21.5	8.2	51
29.0	26.5	9.2	53	45.0	43.0	10.5	47	23.0	22.5	7.5	44			
36.0	27.0	13.5		58	49.0	44.5		7.2	67	26.0		17.5	8.0	55
28.0	26.0	12.1	63	28.0	24.5	9.3	59	18.5	16.5	5.6	54			
32.0	26.5	13.1		50	35.5	31.0		11.3	57	19.0		16.5	5.0	52
28.0	24.5	13.2	59	37.5	32.0	8.4	49	20.0	19.0	6.6	42			
23.5	22.0	14.4		56	38.5	36.5		10.3	56	19.5		17.0	6.0	44
44.0	34.0	10.6	62	33.0	30.5	9.7	51	16.0	13.0	4.2	47			
34.0	26.5	10.0		49	28.5	19.0		6.2	67	18.0		17.0	5.8	82
24.5	22.0	15.8	61	32.0	29.5	7.3	56	17.5	16.0	6.1	200			
45.0	20.0	12.9		57	25.0	23.5		8.1	60	20.0		19.0	6.7	40
25.0	24.0	11.5	48	25.0	22.5	10.5	65	19.0	18.0	8.0	40			
31.5	23.0	10.1		60	34.0	30.0		9.3	49	22.0		20.0	7.8	41
26.0	24.0	9.1	54	24.5	20.0	10.0	58	23.0	16.0	8.3	46			
22.0	20.0	8.6		57	29.5	21.5		9.2	59	23.5		22.0	9.5	43
19.0	16.5	8.7	54	37.0	25.0	8.5	55	19.0	18.0	6.7	84			
20.0	18.0	8.1		54	24.0	22.0		9.0	59	17.0		16.0	4.5	45
31.5	29.5	16.8	57	25.0	24.0	10.4	65	16.0	14.5	5.9	44			
24.0	24.0	14.4		61	23.5	19.5		9.9	61	16.5		16.5	5.8	42
N				20.0	16.0	6.3	53	16.5	12.0	5.8	43			
59.5	55.0	28.6	96	24.0	19.0	8.9		56	18.0	13.5		3.8	45	
42.5	36.0	16.6		52	24.5	21.0	8.9	61	18.5	16.0	6.4	39		
39.0	35.0	7.5	160	26.0	15.5	5.0	O				P			
23.0	18.5	6.7		65				244	45.0	40.0	9.0	57		
45.0	37.0	8.4	76		17.5	12.5	4.6		36.0	34.5	6.4		56	
47.5	41.5	11.9	52	20.0	20.0	6.4	47	35.0	29.0	5.0	120			
48.0	44.0	10.9		41	17.0	16.5		4.6	52					

第16表 柱穴計測表V

(単位：cm)

長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間	長径	短径	深さ	柱間
30.0	24.5	12.6	50	18.0	16.5	4.0		31.5	27.5	10.3	60
27.0	23.5	12.4		Q				24.0	22.5	11.8	
24.0	19.5	9.8	58	58.0	58.0	10.8	69	22.0	21.5	8.7	65
32.5	30.0	11.0	71	36.0	36.0	13.8		64	18.0	16.5	
26.0	22.0	6.1	60	40.0	32.0	10.8	57		19.5	18.5	7.3
26.0	25.0	11.8	44	32.5	32.0	9.5		R			
25.0	22.5	10.9	58	38.0	34.5	11.1	60	15.0	13.5	4.1	44
23.5	20.0	11.9	51	38.0	36.0	10.1	56	18.5	14.0	5.0	
36.5	22.5	7.3	39	29.0	28.0	6.8	61	15.0	15.0	4.0	44
32.0	29.5	7.6	63	32.0	30.0	10.7	67	15.5	15.0	5.7	46
25.0	20.5	7.1	53	31.0	30.0	8.6	48	17.0	16.0	4.9	86
20.5	17.0	9.8	63	36.0	32.0	7.8	62	18.0	16.0	4.9	95
35.0	27.0	9.6	55	33.0	32.0	8.5	64	14.5	14.0	5.0	45
22.5	20.0	7.9	62	27.5	25.0	5.2	53	16.0	16.0	4.9	45
33.5	28.0	9.0	71	24.5	22.5	8.2	61	14.0	10.5	5.5	46
25.0	25.0	6.4	48	30.5	30.0	8.8	51	16.0	12.0	4.0	45
34.0	31.0	7.8	55	35.5	34.0	9.9	59	21.5	15.0	6.4	44
33.5	31.0	5.5	56	44.5	33.5	10.2	65	18.0	18.0	5.0	44
26.5	25.0	6.7	62	40.0	34.5	13.0	59	20.0	17.0	7.0	44
31.0	24.0	9.4	54	36.0	30.0	10.2	57	19.5	18.5	6.4	45
36.0	36.0	12.3	56	31.0	30.0	8.2	58	20.0	20.0	6.8	46
30.0	28.0	9.1	47	41.0	35.0	9.2	59	16.5	16.0	4.0	87
42.5	32.0	7.0	61	27.0	25.0	7.9	59	15.0	12.5	3.4	83
29.5	23.5	8.5	48	25.5	24.0	8.9	61	16.5	15.0	5.1	133
25.0	21.0	13.2	58	30.5	26.0	9.8	53	15.5	15.5	3.3	41
20.5	17.5	9.7	54	34.0	30.0	8.6	51	14.0	12.0	4.1	81
32.0	21.5	8.1	61	30.0	24.0	11.1	57	S			
20.0	18.0	5.1	53	27.5	24.0	9.5	59	60.6	56.0	18.5	67
			72				54				

第17表 柱穴計測図Ⅵ

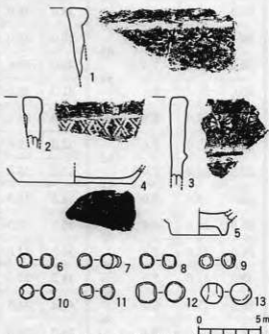
(単位：cm)

大きいものが17列、小さいものが6列である。大きい方は、長径16.0～66.5cm、短径10.5～58.0cm、深さ3.8～28.6cm、柱間間隔54.0～60.3cmで、平均径34.5×29.3cm、深さ10.8cm、柱間間隔57.5cmであり、小さい方は、長径12.0～26.0cm、短径9.5～22.5cm、深さ2.3～12.1cm、柱間間隔43.2～48.8cmで、平均径18.2×15.8cm、深さ5.7cm、柱間間隔44.4cmである。大きい柱列の間隔は、1.24～1.42mで平均1.33mであり、この間に小さな柱列が挟まれた状態で確認された。

2. 出土遺物 (第78図)

染付・青磁・土師器などの小片が多数出土したが、図化できるような遺物はほとんどなかった。しかし、鉛製の鉄砲玉が8個出土した。

1は、土師質の火舎で、口縁部の丸味が大きく、体部との接合がうまくできていないようである。そのためか口唇部が焼成時にかなり剥落している。口縁直下に菊花文の刻印が押されている。2も土師質の火舎で、口縁部は角張っており、わずかなくほみで体部との境をなしている。この直下にX文の刻印を押している。3は、瓦質の火舎で口縁部に若干の丸味が見られ、外面には断面台形の突帯が一条貼り付けられている。口縁部と突帯の間には菊花文の刻印が押されている。4は口縁部を欠く土師器の皿で、全体の6分の1程度を残している。推定底径9.2cm、現存高1.1cmで、底部からやや内弯気味に立上がり、境ははっきりして



第78図 出土遺物実測図

いる。糸切り底。5は、青磁碗の高台部で、非常に淡い青緑色の釉が高台以外の部分に薄くかけられている。高台径4.2cm、高台高0.9cm。6～13は鉛製の鉄砲玉で、直径1cm前後で重量10g以下の小さなものと直径1.5cm以上で重量22g以上の大きなもの的大小二種類に分けられる。6～11が小さい方で、6は、径1.10～1.11cmとほぼ球形をなし重量5.2gと今まで出土したものでは最小である。7は、径1.02～1.16cmで、重量6.2g、8は径1.06～1.08cmとほぼ球形で、重量6.5g、9は、径0.97～1.11cmで、重量7.1g、10は、径1.09～1.15cmで、重量7.2g、11は、径1.04～1.12cmで、重量7.5gである。大きい方は12・13で、12は径1.54～1.56cmとほぼ球形で、重量22.3g、13は径1.61～1.70cmで重量25.7gと今まで出土した中では最も大きい。

3. 小結

『刃春・和仁仕寄陣取図』を検討すると、主郭部分の下方に田中城に立て籠もった和仁軍の建物跡と思われるものが多数描かれている。一方、実際の田中城主郭の西南側直下には、段々畑状に広がる平地が見られる。この双方を比較してみると、ほぼ同部分に当たるのではないかと推測されるため、主郭で確認されたような掘立柱建物跡が多数確認できるものとの思いで、調査を開始した。

調査の結果は、これまでの様相と全く異なり、従来確認されていたような掘立柱建物跡は一切確認できず、23列の柱列が調査区全面に広がって確認された。柱穴の大きさには大小二通りがあり、大きい柱穴が17列、小さい柱穴が6列である。大きい方の柱穴は、平均 $34.5 \times 29.3\text{cm}$ 、深さ 10.8cm 、柱間間隔 57.5cm 、小さい方の柱穴は、平均 $18.2 \times 15.8\text{cm}$ 、深さ 5.7cm 、柱間間隔 44.4cm である。また、大きい柱穴の列間の間隔は $1.24 \sim 1.42\text{m}$ で平均 1.33m である。遺構の確認面は、ガチガチに硬い面であり柱穴内の埋土とは明確な違いが認められた。このガチガチ面は、調査区の奥（北東）では地表から約 80cm も下がっており後世に耕作を受け、さらに上部からの崩落があったのかもしれない。

専門調査委員の意見は、大まかのところでは和仁軍の連棟式長屋（兵舎）跡ではないかということでは一致している。しかし、大きな柱列の間隔が $1.24 \sim 1.42\text{m}$ で、平均でも 1.33m しかなく、また柱間間隔も $54.0 \sim 60.3\text{cm}$ で平均 57.5cm と非常に狭く、数が多すぎるため、どの柱列とどの柱列を組合せればいいのかという点で意見の相違が見られ、当初は、大2・小1または大2・小2をセットとする二通りの組合せが考えられていた。しかし、その後の専門調査委員会などで検討した結果、現在では基本的に小さい柱穴の列を間に挟む大2・小1の3列を小さなセットとすると、これを2セットで大きなセットとなし、屋根を被せていたと考えるのが一番良さそうであるとの結論に達した。内部は、小さなセットと小さなセットの間には、小さな柱穴の列が無いのでこの部分を通路として両側の大きな柱列の間に板を張って床とし、小さな柱列は床板の束柱と考えられる。また、大きな柱穴も数が多すぎるため床板が貼られていたとすると全ての柱が天井部まで延びていると上がり下りが困難となるので、天井部まで延びるものは何本か置きで、残りはやはり束柱として床を支えていたと考えざるを得ない。この遺構を連棟式の兵舎と考えると柱穴の多さ、また、地表下約 $50 \sim 80\text{cm}$ と今までにない深さで確認されたにもかかわらず、これまでの調査で確認されたどの柱穴の直径よりも大きいことなどから、多数の人々を入れるために、主郭で確認された建物跡より頑丈に作られたのかもしれない。

柱列は、整然とほぼ並行に並んでおり、切り合いは全く見られない。このことから柱列は一時期に一気に作られたものと思われ、『刃春・和仁仕寄陣取図』に描かれているものが、この柱列を用いた建物遺構と考えれば、落城直前に作られた可能性が強くなるのでは

なかろうか。この一帯は、主郭直下にあたり、絵図によると豊臣軍の総大将小早川秀包などの陣と対峙する重要な位置に当たるので、和仁軍としても護りを固める必要があったのではなかろうか。

しかし、遺物は図化できるようなものはほとんどなく、青磁・染付・土師器などの小片が多く、後世にかなりカットされたためかもしれないが、生活感あまり感じられなかった。ただ、鉛製の鉄砲玉が8発出土したことは、注目されるのではなかろうか。大きさに大小二種類あり、数種類の鉄砲が使用されていた可能性も考えられ、このことから兵舎跡との推測もできるのではなかろうか。

第11節 平成5年度調査の成果

今年度は、兵舎跡と思われる遺構が確認された昨年度の調査区の隣接地になるため、何等かの関連性のある遺構の検出を期待しての調査であった。

調査区は昨年同様、二筆に分かれているため、Ⅰ・Ⅱ区として調査を行うことにしたが二筆が離れているため両調査区とも半分を調査し、残りを排土場にするという方法を取らざるを得なかった。

Ⅰ区の西半分は、以前から「ドンドンと音がする」とか「雪が積もらない」と地権者から聞いていたので、井戸のような空洞部があるのではないかと推測していた。表土下約30cmで、柱列と数基の不定形土壌が確認されたが、建物跡や井戸などは確認できなかった。この時点で確認された遺構は、約20cmも掘ると凝灰岩に達し、この凝灰岩からは別の遺構も確認された。特に、中央部の北側壁面直下で確認された遺構は、掘り下げていくと岩盤の凝灰岩を切りだした跡であることが判明し、また、崖面には竈が掘られていることも確認できた。

Ⅱ区は、南北に二分割し、北側半分のみ調査を行った。

1. 検出遺構（第79図・84図）

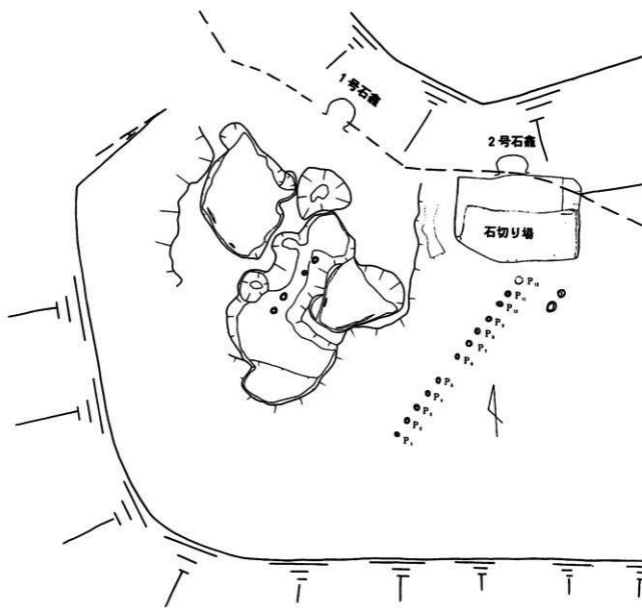
Ⅰ区からは、柱列・石倉・石切り場・不定形土壌などが確認された。しかし、切り合い状態を観察すると、それぞれ時代が異なるように思われる。

また、Ⅱ区からは、3本の溝と多数の柱穴が確認されたが、Ⅱ区の半分しか調査しなかったため、柱穴には建物を構成するようなつながりは見られなかった。

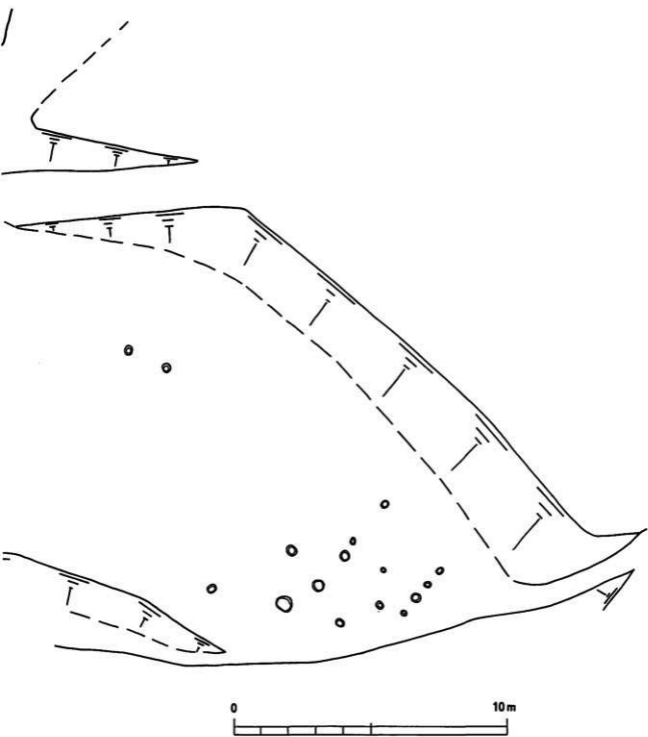
・Ⅰ区

(1) 柱列

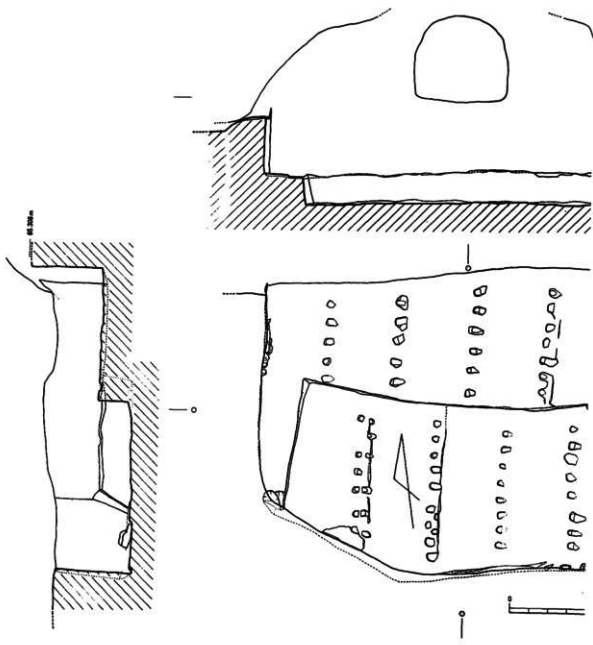
12個の柱穴からなり、石切り場の前方から、ほぼ北東—南西方向に延びている。柱穴の大きさはP₁₁が最大(26×22cm)、P₁が最小(15×14cm)で平均20.1×17.0cm、深さはP₁₁が最深(30.5cm)、P₆が最浅(10.4cm)で平均18.6cmである。



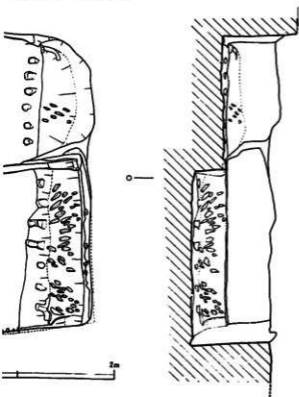
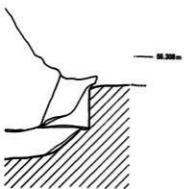
赤一古い遺構



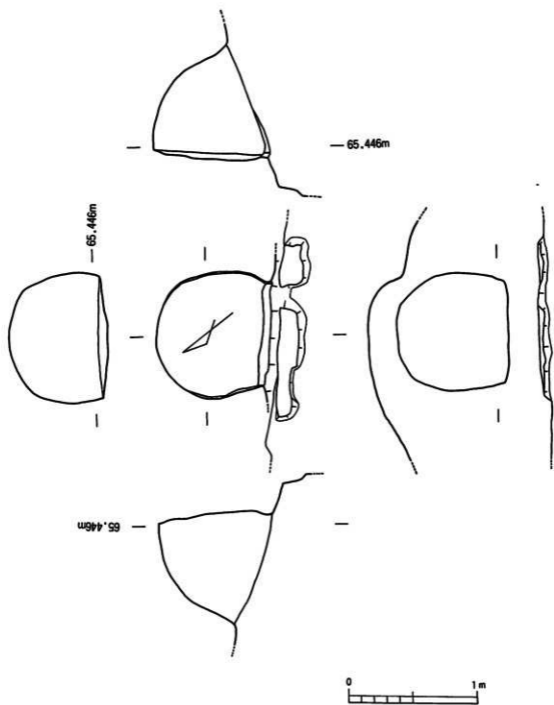
5年度I区遺構配置図



第80図 石切り場実測図



— 0.200 m —



第81圖 1号石龕实测圖

(2) 石切り場 (第80図)

2号石倉の前面で確認された遺構で、東西(長辺)4.47m×南北(短辺)3.22mのほぼ長方形で、底面は二段に分かれており、深さは上段で56~60cm、下段で73~93cmである。上・下段とも底面には5列に並ぶクサビ痕が残っており、上段は5~7個、下段は6~9個の痕跡が見られる。工具痕は、幅約7cmのものが約15cm間隔で整然と並んでおり、ツルツルとして光沢がある。これは、岩盤から切り離すために斜めに打ち込まれたもので、その際の摩擦によってできた痕跡と思われる。また、上下段とも東側には、最初に切り出すために調整されたと思われる、斜めになっている部分があり、ここにはツルハシ状の先の尖った工具痕が残っている。さらに、上段の西隅や下段の南隅には、角を調整したような工具痕も見られる。下段に残るクサビ痕列のうち、一番西側の列の南側には、うまく切り出せなかったのか、凝灰岩の小さな固まりが底面に付いたまま残っている。切り出された石は、幅約70cm、厚さ約30cmで、長さは上段でははっきりしないが下段で約1.5m程度の大きさと推測され、5回程度切り出されているようである。

(3) 石 倉

主郭から南西方向に小さな尾根が延びている。この尾根の裾部分は凝灰岩が露出しており、崖面には以前から地元で「イモ穴」と言われている穴が2基見られた。現状では、半ば埋まってゴミ捨て場となっており、周囲は草に覆われていたため、全く注意を払っていなかったが専門調査委員視察の際、石倉ではないかとの指摘を受けたため確認のための調査を行い、西側から1号・2号とした。

① 1号石倉 (第81図)

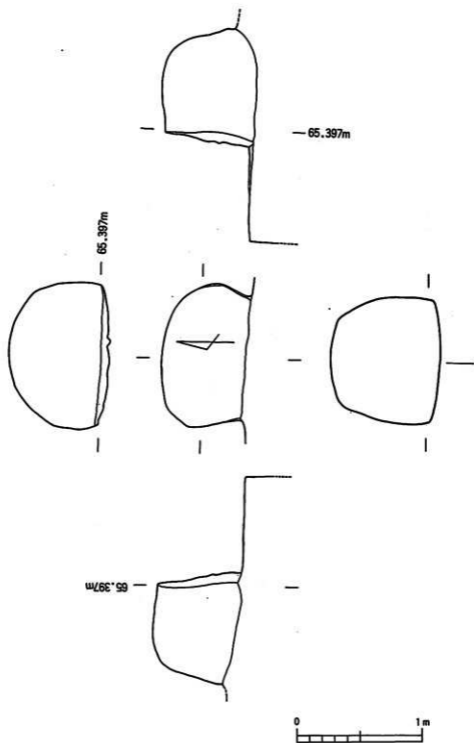
奥行89cm、最大幅98cm、最大高90cmで平面形は円形に近く、断面はドーム型であり、主軸をN38°Eにとる。最大幅は中央部に、また、最大高は開口部にもち、床面はほぼ平らで、開口部でやや上がっており、はっきり区切っているようである。内部は細かく整形されており、非常に丁寧な作りとなっている。開口部から24cm下がったところに、幅15cm、長さ1.35m、高さ5~8cmの段が一段設けられている。一見すると祭壇を思わせるが、これが祭壇になるのか、後世に作られたかの判断はつかなかった。

② 2号石倉 (第82図)

残存奥行66cm、最大幅101cm、残存最大高87cmで平面形は楕円形に近く、断面は蒲鉾型で、主軸はほぼN-Wにとる。開口部は、後世の石切りのため削られたと思われる、実際はもう一回り大きく、1号石倉と同規模のものであったと推測される。床面は、開口部に向ってやや傾斜している。内部調整は、1号同様非常に丁寧な作りとなっている。

・ II 区

(1) 溝



第82图 2号石龕实测图



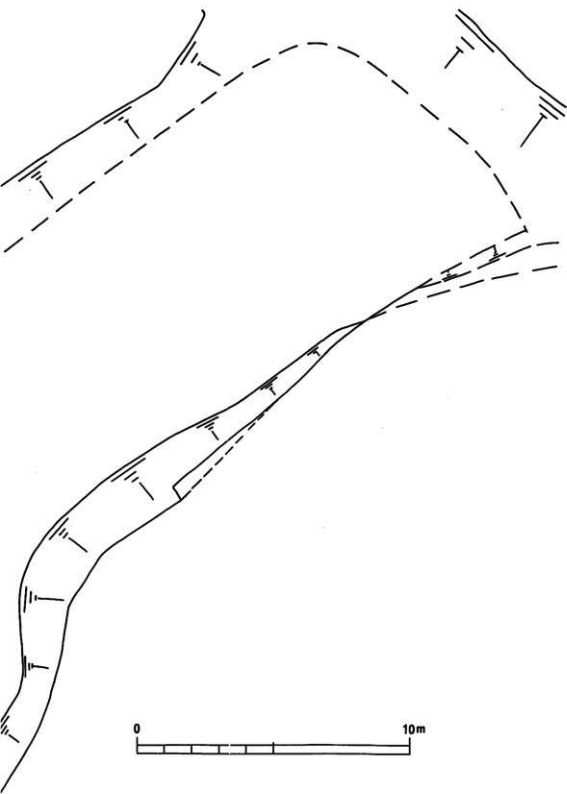
第83図 集石実測図

① 1号溝 (SD-01)

調査区の北側を北東-南西方向に走る溝で、幅1.72~2.04m、深さ38.0~52.5cmで、長さ8.70mまで確認できた。底面は、凝灰岩を丁寧に整形して平らにしており、法面はほぼ



第84図 平成5年度



Ⅱ区道路配置图

垂直に立っている。埋土中から青磁の高台・染付・火舎の脚部・すり鉢などが出土した。

② 2号溝 (SD-02)

南東方向からひらがなの「し」状に延びる溝で、幅0.7~1.5mで深さは11.0~26.4cmと非常に浅い。埋土中から土師器・染付・すり鉢などの小片がわずかに出土。

③ 3号溝 (SD-03)

1号溝と直交するように確認されたが、両側とも栗の木が植わっており、全容を確認することは困難であった。深さも約5cmと浅く、北側では集石が確認された。

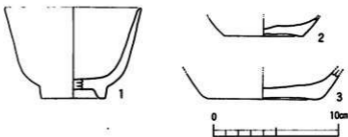
(2) 集石 (第83図)

3号溝が1号溝に切られて残った北側の部分で確認された。南北約1.9m×東西約1.2mの範囲に約70個の礫が集中していたが、掘り込みは確認できなかった。ほとんどが角礫だったが、なかには自然面を残すものも見られた。礫の間から、土師器・青磁・瓦器などの小片が出土した。

2. 出土遺物

(1) I区 (第85図)

図化できるような遺物は、3点しか出土しなかった。1は白磁碗で、約半分を残す。口径10.7cm、器高7.3cm 高台径5.0cm、高台高1.0cmで畳付き部以外には薄く白色の釉がかかっている。胎土にはやや大きめの砂粒を含み、焼成の際に溶



第85図 I区出土遺物実測図

けたのか、器面に多数の小さなくぼみがある。全面に貫入が見られる。2は、口縁部をわずかに欠く土師器の皿で、底径6.3cm、現存高1.4cmである。底部から直線的に立上がり、境がはっきりしている。底部の整形は不明。3も口縁部を欠く土師器の皿で、底径8.6cm、現存高2.0cmである。底部から丸味をおびて立上っており、底部整形は不明。

(2) II区 (第86・87図)

溝や集石の中から白磁・青磁・土師器・瓦質土器などが出土した。

1は、青磁碗の高台部である。見込み部および畳付き部から高台の内側以外には、淡い青白色の釉がかけられている。畳付き部分は面取りされていて平らになっている。高台径4.6cm、高台高0.5cmである。2は推定口径11.4cm、器高3.1cm、高台径6.4cm、高台高0.4cmの白磁碗で、全体の5分の1を残している。外面には焼成の際にできたと思われる気泡が多く見られる。高台部は、接合が悪かったのか、内側にヒビが入っている。高台は断面が

三角形に近く、畳付き部分以外には全体に薄く釉がかかっている。

3は瓦質のすり鉢の体部で、内面には6本単位の条線が施されている。4も瓦質のすり鉢である。内面に条線が施されているが、破片が小さいため単位までははっきりしない。

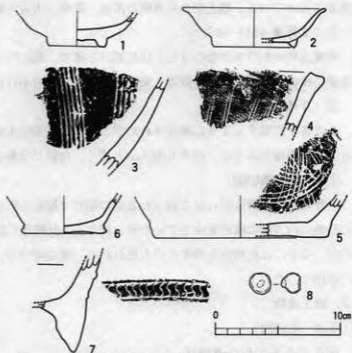
5は瓦質のすり鉢の底部の破片である。推定底径14.0cmで、内面には6本単位の条線が交差するように深く刻まれている。6は土師器の碗と思われる。底径6.2cm、現存高2.5cmで、底部と体部との境の成形が成されておらず、凸凹している。

内・外面ともナデ調整で、底部の整形は不明。7は瓦質の火舎の脚部で、断面は三角形をしている。外面の底部近くにはS字状の刻印が押されている。8は鉛製の鉄砲玉で、片方が潰れており径1.50~1.70cm、重量17.5g。

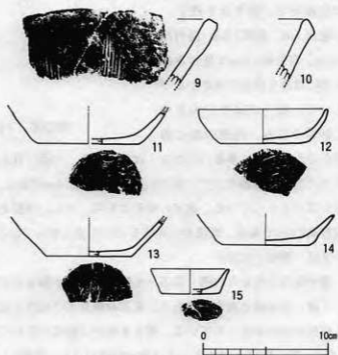
9からは、集石中よりの出土遺物である。

9は、瓦質のすり鉢の口縁部で、内面には6本単位の条線が施されている。10も瓦質のすり鉢で、9と同様、内面に6本単位の条線が施されている。

11は土師器の皿で、推定底径6.8cm、現存高2.5cmである。口縁部と底部の中央部を



第86図 II区出土遺物実測図



第87図 II区集石出土遺物実測図

欠き、底部から直線的に立上がり境は丸味をおびている。糸切り底。12は、口径10.3cm、底径6.6cm、器高2.7cmの土師器の皿である。底部から丸味をおびて立上がり、境ははっきりしない。糸切り底。13は、推定底径6.8cm、現存高2.7cmの土師器の皿で口縁部を欠いている。底部から直線的に立上がり境ははっきりしている。糸切り底。14も土師器の皿で、口縁部をわずかに欠いている。底径6.8cm、現存高2.3cmで底部から丸味をおびて立上がっている。底部は不明。15は、口径6.2cm 底径4.4cm、器高2.0cmの土師器の皿である。底部から直線的に立上がり、境ははっきりしている。糸切り底。

3. 小 結

前年度の調査で23列もの柱列が確認され、連棟式の兵舎跡ではないかと推測された。『迎春・和仁仕寄陣取図』によると、この部分に当たるとされる箇所には、建物を思わせるようなものが多数描かれており、この絵図の正確さがうかがわれた。

今年度の調査区は、前年度の調査区とは主郭から西南方向に延びる尾根を挟んだ南側の位置に当たり、その上、以前から「ドンドンと音がする」とか「雪が積もらない」と言われており、何らかの遺構が眠っている可能性は十分考えられた。結果的には、前年度までの調査で確認された遺構と類似するものとして2列の柱穴や溝があるが、新たに石倉・石切り場など、予想に反した遺構も確認された。

主郭から延びる尾根の末端部の崖面には、「イモ穴」と言われている小さな横穴が2基掘られており、ゴミ捨て場になっていた。当初は、全く無視していたが、専門調査委員に何らかの遺構ではないかと指摘を受け、調査・検討していただいた結果、石倉という宗教的色彩を持つ遺構であることが判明した。これは、県内に約600あると言われている中世城では、初めての事例と思われる。大きさは、2号の開口部が若干カットされていると思われるため、奥行約90cm、幅約100cm、高さ約90cm程度で、同規模と推測された。平面・断面形は、1号が円形・ドーム型、2号が楕円形・蒲葺型と若干の違いは見られるが、いずれも作りは非常に丁寧である。壁面には、仏像などの彫刻は見られず、床面をほぼ平らに整形しているところから、木造の仏像などを入れて裏鬼門の護りとしたのではなかろうかと思われた。

2号石倉の前部では、石切り場が確認された。4.47×3.22mのほぼ長方形で、数回石を切り出したのか、内部は二段になっている。床面には、岩盤から切り離す際のものと思われる幅約7cmの工具痕が、上段は5～7個、下段では6～9個、約15cm間隔で整然と並んでいる。表面は、斜めに打ち込む際の摩擦で磨いたように、ツルツルとして光沢がある。さらに東側には、最初に切り出す際の調整をしたと思われるツルハシ状の鋭い工具痕も見られる。床面の工具痕の間隔は約70cmあり、これが切り出された石の幅になるものと思われる。厚さは、上段が50数cm、下段が約30cmあるため、これから判断すると上段は二度にわ

たって切られていると思われる。切り出された回数は、二段に分かれていることから考えて、おそらく5回程度と推測され、その大きさは幅約70cm、厚さ約30cmで、長さは下段の状況から1.5m前後と思われる。しかし、これまでの調査で凝灰岩を使用した遺物や遺構は何も確認されておらず、何の目的で切り出されたのかは不明のままである。

これら遺構は、切り合い関係から判断して石倉→石切り場→柱穴の順に作られたと思われる。時期については、石倉は形状から古代までは遡らないということであり、柱穴は昨年までの調査で確認されたものと同様と思われるため、いずれも中世の遺構と考えて良さそうである。

また、Ⅱ区とした調査区からは、約70個の礫からなる集石が確認された。自然面を残す大きい石も若干見られるが、大半は掌に入る程度の角礫であり、投石用の石とも考えられる。

遺物は、青磁・白磁・土師器・瓦質土器などの小片がわずかに出土しただけであった。

第12節 平成6年度調査の成果

城の西側一帯は、連棟式の兵舎跡と思われるものや石倉・石切り場など思いもよらない遺構の発見があり、また、『刃春・和仁仕寄陣取図』によっても、特に重要な地区に当たるのではないかと考えられた。今年度の調査区も、以前、地権者がブドウ畑として耕作した際、数十発の鉄砲玉が出土したということで、何か重要な遺構が眠っている可能性が強いと判断された。

調査は、作業の段取りを考え、調査区を四分割して実施した。今回の調査区は、地権者が以前ブドウ畑として使用する際、幅約4m、深さ約1mの溝を数本掘られているため、かなり傷んでいる可能性も考えられたが、鉄砲玉が数十発も出たとのことであったので、遺物が残っていると判断して調査を行った。

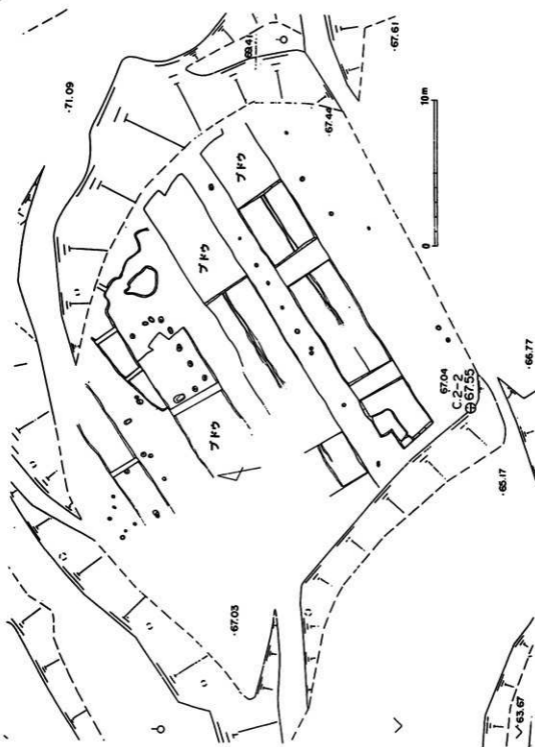
1. 検出遺構(第88図)

調査前に予想していた以上に遺構の傷みが激しく、城関係の遺構はほとんど残っておらず、柱穴がわずかに確認できただけであった。

2. 出土遺物(第89図)

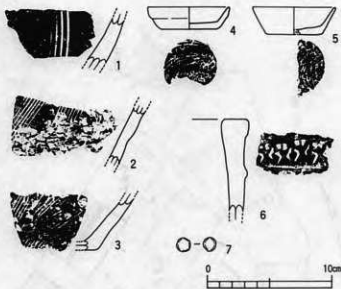
調査区の大半がブドウ畑として使用されていたため、遺物の出土もわずかであった。

1は、瓦質のすり鉢の体部片である。内部には4条の条線が施されている。2も瓦質のすり鉢の体部で、内面はナデ、外面は指頭によるナデ調整である。内面に7～8条の条線が施されている。3は、瓦質のすり鉢の底部近くの破片である。外面は、焼成時に剥げたとと思われる痕跡が見られ、内面には5条程度の条線が施されている。4は、口径6.4cm、底径4.4cm、器高1.8cmの土師器の皿である。底部からやや内弯しながら立上がり、境は丸



第88図 平成6年度 調査区全体図

味をおびている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。5も土師器の皿で、口径6.6cm、底径4.6cm、器高2.2cmである。底部から直線的に立上がり、境がはっきりしている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。6は瓦質の火舎で口縁部の外面は膨らんでいて丸味をおびているが、口唇部は面取りしてあり平らである。また突帯を一条貼り付けており、口縁との間にX文の刻印を押している。7は、鉛製の鉄砲



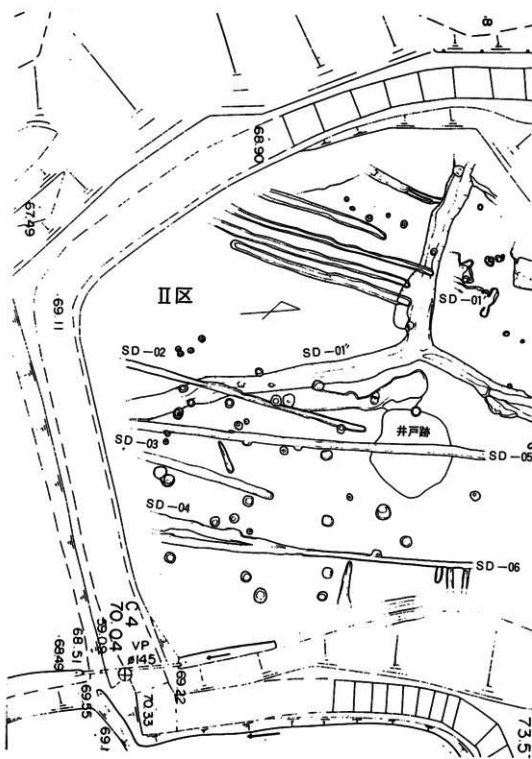
第89図 出土遺物実測図

玉で、径1.0~1.1cmとほぼ球形で重量は5.7gである。

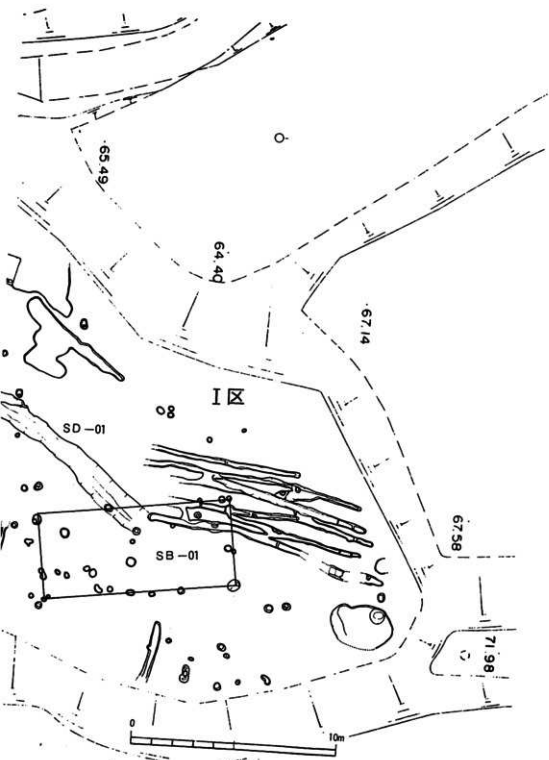
3. 小 結

田中城の地形を観察すると、西側については他の部分に比べて広い平場が見られ、何らかの構築物が設けられていたであろうと推測された。これに加えて、平成元年に確認された『迎春・和仁仕寄陣取図』が城の西側から描かれているため、この絵図と現地を対応させながら平成3年度から調査を継続してきた。その結果、連棟式の兵舎跡と思われる建物跡が絵図からの推定位置と考えられる箇所から確認され、また、併せて石倉・石切り場などの新たな遺構も確認された。このように西側斜面一帯には、まだまだ様々な遺構が眠っているものと思われ、今後の調査に大きな期待が寄せられていた。

今年度の調査区は、ブドウ畑である程度の破壊は受けているものと覚悟はしていたが、以前に鉄砲玉が多数出土したということで、どちらかといえば遺構よりも遺物の方で期待を抱かせた。調査が進むと城に伴う遺構は予想どおり壊滅状態で、調査区の北側で確認された柱穴のみであった。しかも遺物についても予想に反し、弥生・中世の土器・磁器類が若干出土しただけで、鉄砲玉もわずかに1個しか出土しなかった。



第90図 平成



度調査 遺構配置図

第13節 平成7年度調査の成果

主郭・主郭周囲の曲輪・空堀・西捨て曲輪と調査を続け、『迎春・和仁仕寄陣取図』の発見後はこの絵図に添って西側に広がる平場へと移行してきて、10年目を迎えた。その結果、主郭では14棟の掘立柱建物跡、主郭周囲の曲輪ではガチガチに固まった焼土が約20cm詰まり小鍛冶を思わせる土壌、現地表面から6m掘り下げてようやく堀底に達する大土木工事が確認できた空堀、当初は監視台と言われていたが欄列と堀だけしか確認できず捨て曲輪と判断した西側に残る高台、連棟式の兵舎と思われる23列の柱列、石倉、石切り場など様々な遺構が確認された。

10年目を迎えた今年度は、城の南側に残る「弾正屋敷跡」との言い伝えのある平場の調査を行い、生活域の確認を目的とすることにした。

1. 検出遺構（第90図）

掘立柱建物跡・井戸跡・数条の溝・多数の柱穴などが確認された。

（Ⅰ 区）

（1）掘立柱建物跡（第91図）

調査区の北側で確認された桁行3柱間（9.52m）×梁行2柱間（4.17m）の建物跡で、主軸をN2°Wにとる。柱間寸法は、桁行 $P_1 \sim P_2 \sim P_3$ で $P_1 \sim P_2$ の補助柱は不明で6.00・3.52mであり、 $P_3 \sim P_4 \sim P_7 \sim P_8$ は4.30・2.50・2.72mである。梁行 $P_3 \sim P_4 \sim P_5$ は2.90・1.27mであり、 $P_6 \sim P_9 \sim P_{10}$ は2.57・1.60mである。柱穴はほぼ直線的に並び大きさは P_9 が最大（64×52cm）、 P_4 が最小（23×19cm）で平均39.8×29.9cmである。深さは P_9 が最深（44.4cm）、 P_4 が最浅（4.8cm）で、平均18.5cmである。

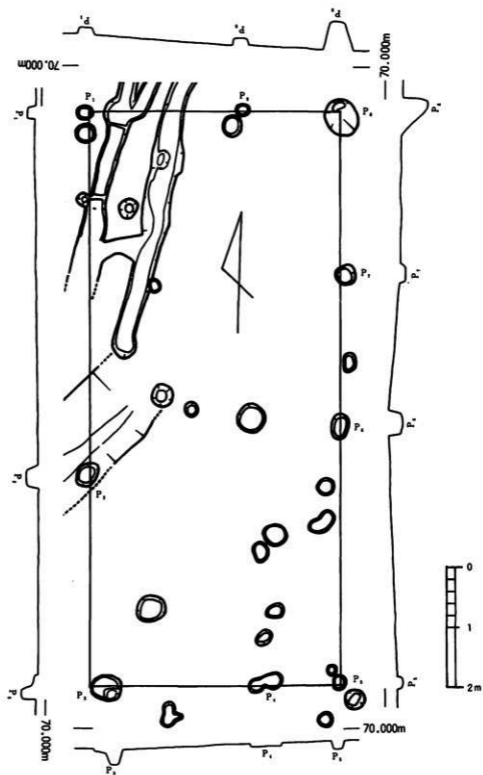
（2）溝

調査区の中央部を南北方向に走る数条の溝が複雑に切り合っており、入り組んでいる。幅約40cm、深さは約1mと細くて深い溝であり、南側に延びてくると確認が難しくなって約12mしか確認できなかった。

（Ⅱ 区）

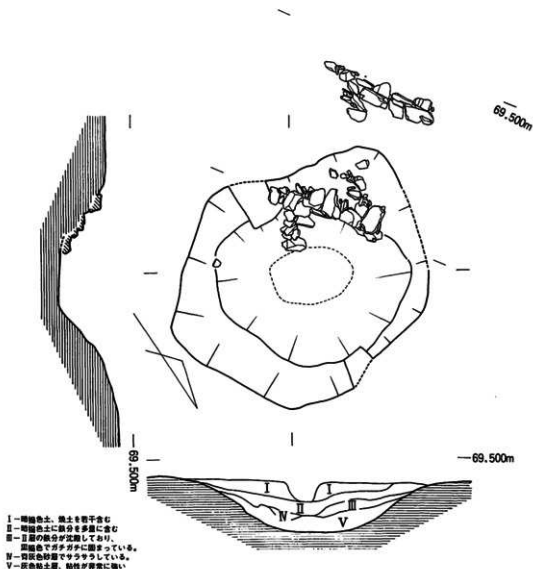
（1）井戸跡（第92図）

調査区のほぼ中央部で確認された。掘り込みラインは丸味をおびた五角形をしているが井戸本体の掘り込みは、約3.1×2.5mの楕円形をしている。しかし、深さは遺構確認面から約80cmしかなく、平面プランの大きさに比べて非常に浅いように思われる。底から約30cmは、青白色の粘質土層が見られ、水が溜まっていたことを窺わせる。井戸本体の掘り込みの西南部には、二段の石積みが残っている。内部に落ち込んでいる石も数個あったが、西南部に集中しており、その数からいって周囲を取り巻くように組まれていたとは考えら



第91图 掘立様建物跡実測图

れず、もう数段、上部に組まれていたと考えたほうが良さそうである。また、この石積み
の後方には、裏込め状に凝灰岩が並んで確認された。



第92図 井戸跡実測図

(2) 溝

① 1号溝 (SD-01・01'・01'')

調査区を三分割するように走る溝で、北東から南西方向に約15m続き (SD-01)、西
方向 (SD-01') と南方向 (SD-01'') に分かれており、01' は約9m、01'' は約15
m確認された。01から01' 方向、また01から01'' 方向に傾斜しており、01' は崖面に落ち
るようになる。幅0.8~1.3m、深さ15.3~46.9cmで断面は逆蒲鉾型をしている。調査
区内で確認された遺構の切り合い関係を検討してみると、最も古い時期のものと考えられ

る。

② 2号溝 (SD-02)

Ⅱ区のほぼ中央部を南西-北東方向に走る溝でSD-01と切り合っている。確認された長さは約12.2m、幅30~39cm、深さ3.11~6.9cmである。

③ 3号溝 (SD-03)

2号溝の約3.8m東側を、ほぼ平行するように走っている。確認できた長さは6.55m、幅約40cm、深さ10.4~16.9cmである。

④ 4号溝 (SD-04)

3号溝の約2.2m東側を、2・3号溝とほぼ平行するように走っている。SD-06に切られているため、約6mの長さしか確認できなかった。幅35~50cm、深さ13.6~21.7cmである。

⑤ 5号溝 (SD-05)

Ⅱ区の中央部をほぼ南北方向に走る溝で、約17mの長さを確認した。幅約40cm、深さ32.5cm~46.0cmで、壁面は底からほぼ垂直に立ち上がる。「布掘り」の可能性はある。

⑥ 6号溝 (SD-06)

5号溝の約5m東側を、平行するように走っている。約15mが確認され、幅25~45cm、深さ30.8~40.8cmで、壁面は5号溝同様、底からほぼ垂直に立ち上がる。この溝も、「布掘り」の可能性はある。

(3) 柱列

多数の柱穴が確認されたが、調査区の南側からは、これまでの調査では確認できなかった、直径が50cmを越えるような大きな柱穴が確認された。並びを観察すると南西-北東方向に、ほぼ平行して並ぶ四列である。

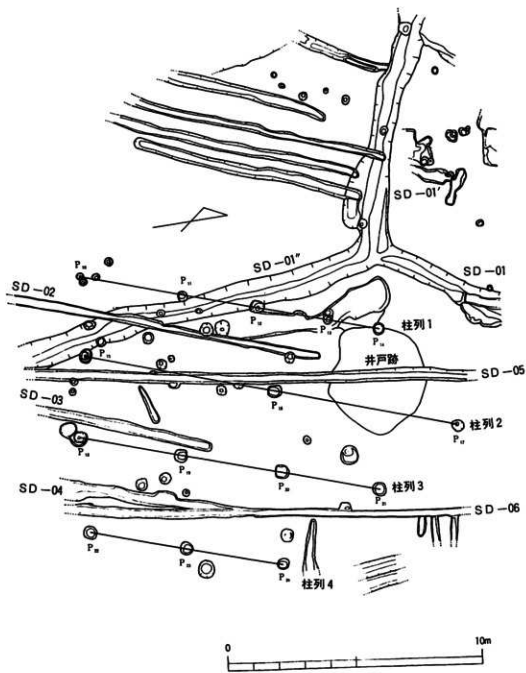
① 柱列1

5個の柱穴からなり、柱間寸法は南から4.05・3.00・2.85・2.05mである。柱穴の大きさはP₁が最大(55×47cm)、P₂が最小(30×28cm)で平均41.2×37.2cmである。深さはP₁が最深(37.7cm)、P₂が最浅(7cm)で平均22.1cmである。

② 柱列2

3個の柱穴からなり、柱間寸法は南から7.55・7.40mである。それぞれ間隔が有りすぎるので、P₁とP₂間の柱穴は5号溝に切られ、また、P₂とP₃間の柱穴は井戸跡との切り合いで分かりにくくなっているのかもしれない。柱穴の大きさはP₁が最大(55×45cm) P₂が最小(48×46cm)で平均52.3×45.0cmである。深さは、P₁が最深(61.0cm)、P₂が最浅(15.8cm)とバラツキがあり、平均31.2cmである。

③ 柱列3



第93图 II区排水配置图

4個の柱穴からなり、柱間寸法は南から4.10・3.95・4.00mである。柱穴の大きさはP₁₀が最大(61×58cm)、P₁₃が最小(50×50cm)で平均55.25×52.5cmである。深さはP₁₀が最深(19.3cm)、P₁₂が最浅(13.0cm)で平均16.9cmである。

④ 柱列4

3個の柱穴からなり、柱間寸法は南から3.91・3.80mである。柱穴の大きさはP₁₃が最大(54×50cm)で、P₁₅が最小(47×45cm)で平均51.0×48.7cmである。深さはP₁₃が最深(18.3cm)、P₁₅が最浅(17.4cm)で平均18.0cmである。

2. 出土遺物(第94・95・96・97図)

I・II区とも青磁・白磁・染付・土師器などの小片および石臼などの石製品が出土したが、図化できるようなものは少なかった。

1は、瓦質の火舎の口縁から胴部にかけての破片で、今まで出土した火舎とは異なり、

胴部は丸味をおびている。口

唇部には浅い沈線が、また、

胴部には断面が三角形と蒲鉾

型の突帯が一条ずつ貼り付け

られており、口唇部と第一突

帯の間には花文の刻印が施さ

れている。2は、瓦質のすり

鉢で指頭による調整のためか

内・外面とも凹凸が激しい。

内面には、6~7条単位の条

線が施されている。口唇部は

面取りされていて平らである。

3も瓦質のすり鉢で、内面

には8本単位の条線が施され

ている。口唇部は面取りされ

て平らであり、内・外面とも

ナデ調整である。4は、瓦

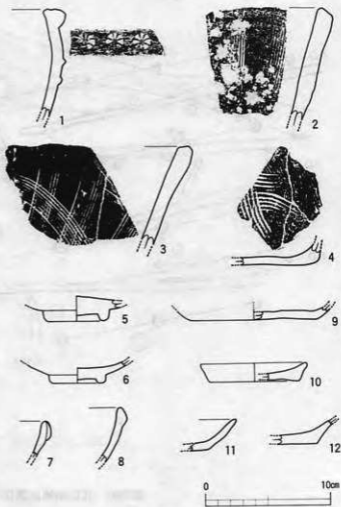
質のすり鉢の底部であり、丸

味をおびて立上がっている。

内面には、5本単位の条線が

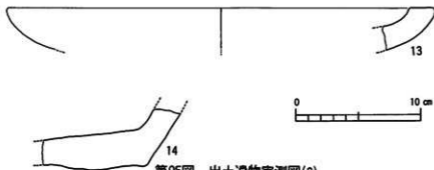
施されている。5は青磁の高

台部である。内・外面とも青



第94図 出土遺物実測図(1)

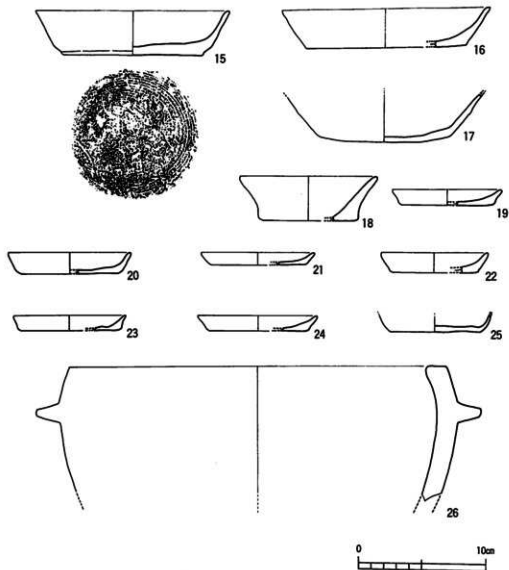
緑色の釉が、やや厚めにかけられているが、畳付き部分にかかった分は削り取っている。内面に薄い貫入が見られる。高台径は5.0cm。6も青磁の高台で、高台径は4.5cm。内・外面とも淡青白色の釉が薄くかかっている。畳付き部分にもかかっていたが、部分的には削り取られている。7は青磁の口縁部である。内・外面とも淡緑白色の釉が薄くかかっているが、口唇部には釉溜りがみられ、外面に厚く垂れている。また、口縁部は一度整形したあと、もう一度貼り付けて厚くしている。全面に貫入が見られる。8は、白磁の口縁部である。内・外面とも、やや濁った白色の釉が薄くかかっている。胎土に砂粒が多く含まれており、外面は、その砂粒がはずれたようなブツブツが見られる。9は、推定底径10.0cmの土師器の皿である。底部からやや内弯気味に立上がり、底部と体部の境がはっきりしている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底と思われる。10は推定口径8.4cm、推定底径7.2cm、器高1.5cmの土師器の皿である。底部からやや内弯気味に立上がり、境は丸味をおびてはっきりしない。内・外面ともナデ調整で、底部ははっきりしない。11も土師器の皿である。底部からやや内弯気味に立上がり、境がはっきりしている。内・外面ともナデ調整である。12は、底部から外傾気味に立上がり、境がはっきりしている土師器の皿である。内・外面ともナデ調整で糸切り底と思われる。13は、推定口径34cmの石臼で、内・外面とも非常に丁寧に仕上げられている。14は、石鍋と思われる破片で、内・外面とも大まかな整形を施されているが、底部は荒削りのままで、まだ、未製品と思われる。



第95図 出土遺物実測図(2)

15～26は、調査区の西端で出土した遺物で、15～25は土師器の皿で、26は石鍋である。土壌か溝に破棄されたのではないと思われるが、遊歩道の下に延びているためはっきりした遺構確認までには至っていない。

15は、口径15.4cm、底径11.0cm、器高3.4cmの皿で底部から内弯気味に立上がり、境は丸味をおびてはっきりしている。内・外面ともナデ調整で、糸切り底。16は、口径16.3cm、底径12.6cm、器高2.9cmの皿で底部から直線的に立上がり、境ははっきりしている。内・外面ともナデ調整で、底部は不明。17も皿で、口縁部がわずかに欠損している。底径10.4cmで現存高3.6cm。底部から直線的に立上がり、境は丸味をおびてはっきりしない。

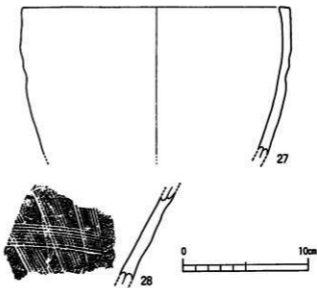


第96図 出土遺物実測図3

内・外面ともナデ調整であるが、整形がまずく凹凸が激しい。18は坏で、口径11.0cm、底径7.4cm、器高3.5cm。底部から外弯気味に立上がり、境は丸味をおびてははっきりしない。内面はナデ、外面は指頭による押圧調整である。19は、口径8.6cm、底径7.2cm、器高1.2cmの皿で、底部から直線的に立上がり、境は丸味をおびてははっきりしない。内・外面ともナデ調整で、底部は不明。20も皿で口径9.6cm、底径7.6cm、器高1.7cm。底部から内弯気味に立上がり、境は丸味をおびてははっきりしない。内・外面ともナデ調整である。21は、口径8.9cm、底径7.6cm、器高1.0cmの皿で、底部から直線的に立上がり、境ははっきりしている。内・外面ともナデ調整。22は、口径8.4cm、底径6.4cm、器高1.6cmの皿で、底部からやや内弯気味に立上がるが、底部に粘土のはみ出しが見られ、境ははっきりしな

い。内・外面ともナデ調整。23も皿で、口径8.8cm、底径7.4cm、器高1.2cm。底部からやや外弯気味に立上がり、境は丸味をおびていてはっきりしない。内・外面ともナデ調整。24は、口径9.4cm、底径7.6cm、器高1.2cmの皿で、底部からやや外弯気味に立上がり、境は丸味をおびていてはっきりしない。内・外面ともナデ調整。25も皿であるが、口縁部を欠く。底径7.0cm、現存高1.3cmで底部からやや内弯気味に立上がり、境ははっきりしている。内・外面ともナデ調整。26は、滑石製の石鍋で口径30.0cm、現存高10.6cm。割れたあとと再利用したのか、割れ口は調整し直している。

27～28は井戸跡からの出土遺物である。27は、口径21.2cm、現存高11.8cmの土師質土器で、外面は指頭による押圧、内面はナデ調整が施されている。外面は火力が強かったのか部分的に剥落している。28は、瓦質のすり鉢で、外面は指頭による押圧内面はナデ調整で、内面に8本単位の条線が施されている。



第97図 井戸跡出土遺物実測図

3. 小 結

発掘調査10周年を迎え、以前から地元で「弾正屋敷跡」と言い伝えられている場所の調査を実施した。「弾正」とは、天正十五年の国衆一揆の際に豊臣秀吉が派遣した約一万人の兵に取り囲まれて籠城した、和仁三兄弟のひとり和仁弾正親範のことではないかというのが大方の見方である。

調査区は、城の南西隅に当たるが、この城が西向きに作られていると思われるため、今回の調査区に「館」が構えられていてもおかしくはないと推測された。そこで、何らかの構築物が確認できるものと期待を持って調査を開始した。

城全体を見渡して見ると平地は多数見られるが、それぞれ段差があるため例年どおり排土場の確保が困難であった。そのため調査区を二分割しての調査を余儀なくされた。

確認された遺構は、掘立柱建物跡1棟・井戸跡・多数の溝などである。

掘立柱建物跡は、大きさだけから考えれば9.52×4.17mとこれまでの調査で確認された建物跡の中では一番目の大きさであった。しかし、柱穴の大きさは63×52cm～24×19cm、また、深さも4.8～44.4cmと差が大きくて規格性も見られないところから、「館」としての可能性には疑問が残る。これと比較すると、調査区の南東部分で確認された柱列1～4と

した柱穴は、平均の大きさで50cm前後と、これまでの調査で確認された柱穴の中では最も大きく、大型の建物跡が想定された。柱穴の並びを検討すると南西—北東方向には、ほぼ平行する四列が確認されたが、北西—南東方向の並びはこれらと直交せず、かなり歪みが大きくて建物跡を形成するのは難しいようであり、柱列として取り扱うことにした。しかし、主郭の調査でも確認できなかったような大きな柱穴の並びを、単なる柱列として片付けることはできないが、現段階では、他に該当するような遺構は考えられない。

また、この柱列1・2および5号溝と切り合った状態で確認された井戸跡は、これまで確認されていた主郭の西斜面に残るもの以外では、初めての確認となった。約3.1×2.5mの楕円形プランで、深さ80cmの井戸が掘られており、南西の一面には二段に積まれた石積みが残っている。深さから判断すると、東斜面からしみ出る水を溜めるためだけの「溜め井戸」程度のものではないかと思われる。しかし、いずれにしても井戸跡が確認されたということは、この地区が生活の拠点のひとつであったことを物語っており、「弾正屋敷跡」の確証は得られなかったが、その可能性は依然として残されたことになろう。

溝については大きく四時期に分けられると思われる。最も古い溝は、SD-01で調査区を三分割するように掘られている。傾斜は、01→01' および01→01" 方向に向っており、水が流れる場合は城下に流れ落ちるようになっている。次いで古いのは、ほぼ平行するように掘られているSD-02~04の三本である。専門調査委員の大三輪龍彦先生によると、柱列1~4とはほぼ並行しているところから、この両者を関連付けて考えてもいいのではなからうかと指摘を受けた。次がSD-05・06で、これらの溝は「布掘り」の可能性も考えられるが、底部から柱穴などの遺構は確認できなかった。いずれも、壁面は底部からほぼ垂直に立ち上がっており、I・II区の境界までは確認できたが、I区では確認できず、I区までは延びていないように思われる。西側にある四本の溝は、作りや埋土の色などから新しいものと思われる。問題になるのが、多数の溝が切り合っているI区の北側で確認された溝で、他の溝とは趣を異にしている。幅は約40cmだが、深さは約1mと他に比べて非常に深くなっている。SD-02・03・04とほぼ同方向に走る溝と、これと切り合う溝とがあるが、II区の溝との関連性についてははっきりしなかった。

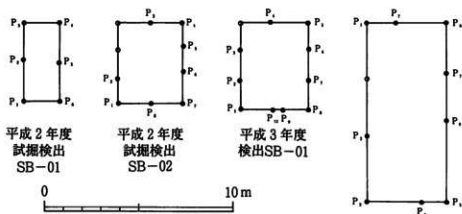
遺物は、青磁・白磁・染付・土師器などが出土したが、調査区中央部の西隅では多数の土師器の皿に混じって石鍋も出土した。この部分は、遊歩道の下に延びておりまだ多くの遺物が眠っている可能性は大である。

第IV章 考 察

第1節 掘立柱建物跡について

主郭で14棟、主郭周囲の曲輪の試掘で2棟、平成3年度の調査で豊臣秀吉軍の櫓列が確認された平場で1棟、伝・弾正屋敷跡で1棟の計18棟が確認されている。

内訳は、18棟のうち13棟が3間×2間の掘立柱建物跡で、5間×3間・4間×2間・3間×1間・3間×3間・2間×1間の建物跡が各1棟である。主郭部14棟の平均の大きさは6.36×3.92mであるが、弾正屋敷跡で確認されたもの以外の3棟の平均は4.28×3.05mと約3分の2程度の大きさである。柱穴は、概ね径30cm前後の大きさが主であり、ほとんどが素掘りである。その上、10年間の調査で瓦片が一片も出土していないことから、簡単な掘立柱建物であったことが推測される。また、柱間寸法などの規格性を考えるものもない。主郭で確認された中では、柱筋の並びから同時期に存在した可能性が想定されるものもあるが、全体の配置を確認するまでには至っていない。建物跡を想定したほかにも、多数の柱穴が見られるため、まだ多数の建物が建っていた可能性はあるが、現在のところ再確認までは行っていないのが現状である。

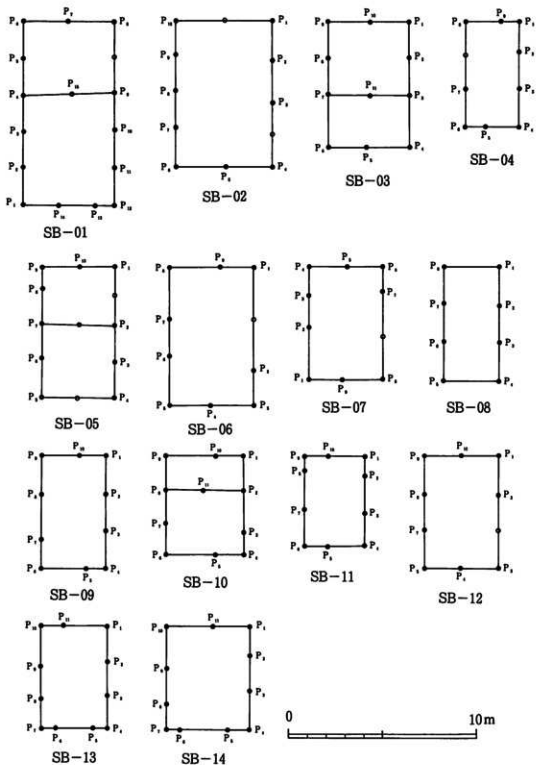


第98図 掘立柱建物跡略図1 (主郭以外で確認されたもの)

第2節 その他の遺構について

平成4年度の調査で確認された連棟式兵舎跡と思われる遺構については、各地でここ数年間に類例の報告がなされている。

まず志水A遺跡C地区(福岡市早良区小笠木所在)で検出されたSB111があげられる。確認されたのは平行する7列の柱列であるが、柱列の間隔は1.4~1.5m、柱間50~70cm、



第99圖 掘立柱建物跡略圖（主郭確認分）

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	棧行柱間 (m)	棧行間 (m)	Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	1.97	} 9.74	6~7	2.38	} 4.84	1	27	23	34.9
3	1.88		7~8	2.46		2	42	39	52.0
3~4	1.91					3	45	39	44.8
4~5	1.99					4	28	27	42.0
5~6	1.99					5	31	28	43.9
						6	32	30	37.4
8~9	3.77	} 9.74	12~13	1.12	} 4.84	7	40	33	36.2
9~10	1.99		13~14	1.79		8	20	20	32.6
10~11	1.99		14~1	1.93		9	23	23	44.3
11~12	1.99					10	26	23	44.3
						11	23	22	20.0+ ^a
				4~15	2.60	11	23	22	39.0
				15~9	2.24	12	26	24	47.9
						13	25	23	24.3
						14	21	19	28.6
						15	21	18	26.4

Pit No	桁行柱間 (m)	Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
16~17	2.58	16	23	19	9.1
17~18	3.15	31	31	29	19.9
18~19	1.99	17	29	29	30.0
19~20	1.82	18	22	18	23.7
20~21	2.84	20	29	24	43.2
21~22	1.07	21	22	21	35.8
22~23	1.79	22	32	27	29.5
23~24	2.04	23	25	24	17.0
24~25	3.62	24	28	27	21.3
25~26	5.31	25	23	21	21.3
26~27	2.57	26	35	27	32.5
27~28	2.05	27	34	33	61.6
28~29	2.20	28	38	24	18.7
		29	34	32	38.4

第18表 獨立柱建物柱間寸法計測表 I

主郭検出SB-02

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	2.10	} 7.77	4-5	2.49	} 5.13	1	63	48	38.9
2-3	2.28		5-6	2.64		2	47	38	37.8
3-4	3.39					3	61	48	55.5
6-7	2.12	} 7.77	10-1	5.13	} 5.13	4	61	52	50.4
7-8	1.95		5	33		25	46.7	41.9	41.9
8-9	1.90		6	46		42	69	56	38.8
9-10	1.80		7	65		47	65	47	38.9
						8	61	48	22.9
						9	52	49	51.3
						10			

主郭検出SB-03

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	1.91	} 6.69	4-5	2.29	} 4.30	1	21	19	60.2
2-3	2.04		5-6	2.01		2	50	38	24.0
3-4	2.74					3	29	25	45.2
6-7	2.81	} 6.69	9-10	2.22	} 4.30	4	48	41	55.6
7-8	1.94		10-3	2.08		5	22	20	25.1
8-9	1.94					6	39	35	37.5
						7	29	27	44.9
						8	27	26	45.5
						9	27	27	39.2
						10	19	19	27.3
						11	23	21	35.4

主郭検出SB-04

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	2.02	} 5.59	3-4	1.89	} 2.85	1	45	29	34.8
2-3	3.57		4-5	0.96		2	28	16	43.6
						3	20	16	35.9
5-6	1.65	} 5.59	8-9	1.79	} 2.85	4	27	27	27.7
6-7	1.90		9-1	1.06		5	29	27	27.2
7-8	2.04					6	41	32	61.5
						7	23	22	18.4
						8	19	18	10.4
						9	24	21	32.1

第19表 掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅱ

主郭検出SB-05

Pit No	桁柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	3.13	} 6.97	4-5	3.87	3.87	1	43	42	23.3
2-3	1.97						26	25	25.5
3-4	1.87						34	29	22.8
5-6	2.09	} 6.97	9-10 10-1	1.98 1.89	} 3.87	4	40	32	30.9
6-7	1.83						37	29	28.3
7-8	1.87						22	22	41.1
8-9	1.18						35	29	27.4
			2-11 11-7	1.92 1.95	} 3.87	10 11	33	32	15.6
							32	24	19.9
							36	35	12.1
							23	21	11.8

主郭検出SB-06

Pit No	桁柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	5.44	} 7.33	3-4 4-5	2.30 2.14	} 4.44	1	48	36	35.9
2-3	1.89						36	35	33.7
5-6	2.62	} 7.33	8-9 9-1	2.67 1.77	} 4.44	4	37	35	18.3
6-7	1.94						26	22	40.0
7-8	2.77						30	29	26.4
						6	23	22	29.1
						7	25	24	28.3
						8	28	27	51.2
						9	48	40	43.5

主郭検出SB-07

Pit No	桁柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	2.00	} 5.93	4-5 5-6	1.94 2.00	} 3.94	1	44	42	68.3
2-3	1.93						34	30	30.3
3-4	2.00						33	33	21.8
6-7	2.08	} 5.93	8-9 9-1	2.05 1.89	} 3.94	4	30	29	26.6
7-8	3.85						24	24	17.5
							47	45	33.1
							26	22	19.6
						8	45	42	25.8
						9	44	39	19.5

第20表 掘立柱建物跡柱間寸法計測表Ⅲ

主郭検出SB-08

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	梁柱間 (m)	梁行間 (m)	Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	2.08	} 6.06	4~5	2.95	2.95	1	27	25	24.6
2~3	1.93						55	46	43.8
3~4	2.05						53	26	20.1
5~6	2.10	} 6.06	8~1	2.95	2.95	4	47	30	19.2
6~7	2.03						33	30	20.3
7~8	1.93						32	31	19.7
						6	22	22	18.8
						7	22	22	18.8
						8	25	23	35.2

主郭検出SB-09

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	梁柱間 (m)	梁行間 (m)	Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	2.07	} 5.97	4~5	1.04	3.43	1	32	25	38.6
2~3	1.93						30	27	26.8
3~4	1.97						2.39	22	20
						4	38	33	20.2
						5	46	39	59.5
6~7	1.56	} 5.97	9~10	2.01	3.43	6	38	26	29.3
7~8	2.36						25	22	20.9
8~9	2.05						1.42	28	26
						8	33	33	31.8
						9	33	33	31.8
						10	37	34	31.4

主郭検出SB-10

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	梁柱間 (m)	梁行間 (m)	Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
1~2	1.83	} 5.21	4~5	1.50	4.11	1	24	24	42.6	
2~3	2.27						2.61	29	27	34.2
3~4	1.11						2.61	54	37	32.0
						4	53	27	51.8	
6~7	1.65	} 5.21	9~10	2.65	4.11	5	71	71	42.7	
7~8	1.76						1.46	46	31	41.7
8~9	1.80						1.46	22	20	27.6
						7	43	27	17.5	
						8	43	27	20.1	
						9	36	25	35.1	
						10	36	32	35.1	
						11	26	25	46.8	

第21表 獨立柱建物跡柱間寸法計測表IV

主郭検出SB-11

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	桑行柱間 (m)	桑行間 (m)	Pit No	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	1.03	4.78	4~5	1.98	3.22	1	33	31	62.3
2~3	1.99		5~6	1.24		2	25	23	30.0
3~4	1.76		6~7	1.95		3	31	26	26.9
6~7	1.95	4.78	9~10	1.27	3.22	4	20	18	44.0
7~8	2.03		10~1	1.95		5	31	25	40.0
8~9	0.80		6	25		33	34.8	31	40.1
						7	39	25	47.7
						8	28	25	22.2
						9	56	28	58.1
						10	34	32	

主郭検出SB-12

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	桑行柱間 (m)	桑行間 (m)	Pit No	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	1.38	6.00	3~4	2.32	4.12	1	55	47	48.1
2~3	4.62		4~5	1.80		2	34	32	33.8
5~6	2.75		8~9	2.03		3	49	45	70.2
6~7	1.70	6.00	9~1	2.09	4.12	4	65	54	67.1
7~8	1.55		6	39		38	48.2	47	42.8
			7	50		32	25	23.5	22.3
						8	47	41	63.6
						9	45	44	

主郭検出SB-13

Pit No	桁柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit No	桑行柱間 (m)	桑行間 (m)	Pit No	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1~2	1.92	5.50	4~5	0.79	3.51	1	28	26	32.6
2~3	1.80		5~6	1.95		2	19	18	30.0
3~4	1.78		6~7	0.77		3	35	28	29.5
7~8	1.56	5.50	10~11	1.15	3.51	4	35	33	26.6
8~9	1.76		11~1	2.36		5	27	25	31.2
9~10	2.18		6	31		28	37.5	31	28
						7	25	21	20.3
						8	21	21	10.6
						9	22	16	4.8
						10	48	42	25.9
						11	50	39	33.6

第22表 獨立柱建物跡柱間寸法計測表V

主郭検出SB-14

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1~2	1.54	} 5.51	4~5	1.17	} 4.42	1	23	22	10.2
2~3	1.87		5~6	1.94		2	30	28	26.6
3~4	2.10		6~7	1.31		3	33	27	21.3
7~8	1.38	} 5.51	10~11	2.95	} 4.42	4	29	20	33.0
8~9	1.88		11~1	1.47		5	28	24	46.0
9~10	2.25					6	21	20	11.6
						7	31	25	12.7
						8	34	28	45.0
						9	41	38	37.9
						10	58	42	44.9
						11	17	15	24.2

平成2年度検出SB-01

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1~2	2.15	} 4.14	3~4	1.89	} 1.89	1	36	32	—
2~3	1.99					2	32	30	—
4~5	2.14	} 4.14	6~1	1.89	} 1.89	3	32	29	—
5~6	2.00					4	24	20	—
						5	30	28	—
						6	29	29	—

平成2年度検出SB-02

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁行柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1~2	1.30	} 4.26	3~4	1.74	} 3.43	1	20	19	—
2	2.96					1.69	2	41	35
4~5	1.26	} 4.26	7~8	1.71	} 3.43	3	21	16	—
5~6	1.34					1.72	4	14	11
6~7	1.66					5	13	11	—
						6	15	14	—
						7	19	18	—
						8	19	17	—

第23表 獨立柱建物跡柱間寸法計測表VI

平成3年度検出SB-01

Pit No	桁柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	1.56	} 4.60	4	1.62	} 3.60	1	48	35	28.3
2-3	1.62		4-5	1.98		2	19	13	6.6
3	1.42					3	28	26	24.4
5-6	1.40	} 4.60	8-9	1.35	} 3.60	4	37	35	31.5
6-7	1.65		9-10	0.50		5	40	37	20.3
7-8	1.55		10-1	1.75		6	31	27	19.9
						7	23	21	28.5
						8	36	31	29.7
						9	30	29	27.4
						10	41	36	32.0

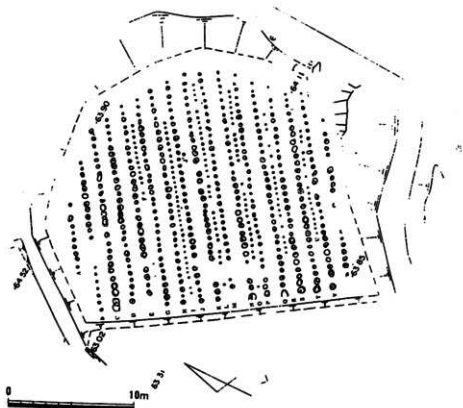
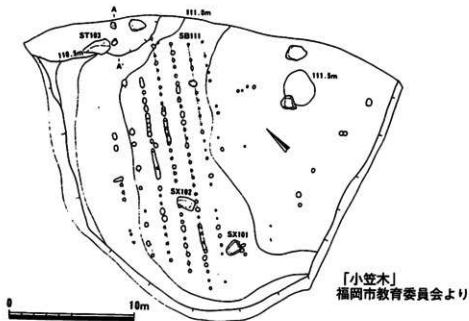
平成7年度検出SB-01

Pit No	桁柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁柱間(m)	梁行間(m)	Pit No	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1-2	6.00	} 9.52	3-4	2.90	} 4.17	1	27	21	17.7
2-3	3.52		4-5	1.27		2	41	30	21.0
						3	49	40	27.3
5-6	4.30	} 9.52	8-9	2.57	} 4.17	4	56	24	5.8
6-7	2.50		9-1	1.60		5	24	21	15.9
7-8	2.72					6	41	29	17.0
						7	33	33	7.6
						8	64	52	44.4
						9	23	19	4.8

第24表 独立柱建物跡柱間寸法計測表

深さ10cm前後と遺存状況が悪いようで、調査区全体にこの柱列が広がっていた可能性も考えられており、田中城で確認された遺構のうち大きな柱列の方に非常に良く似ているように思われる。また、この遺構が確認された平場の形・面積も見方によれば良く似ている。調査者の榎本義嗣氏（福岡市教育委員会）も類似遺構と認識されており、田中城同様に兵舎と考えた場合の解釈として「SB111を田中城例に準えると想起されるのはC区の北西約3kmに位置する安楽平城との関係である。標高394.9mの荒平山頂に築城された山城で、室町時代には大内氏の早良郡支配の拠点であった。しかし、大内氏滅亡後には筑前を支配下に入れた大友氏の被官である小田部氏が居城することとなる。『筑前国続風土記』によると小田部紹叱が天文22年（1552）に入城し、郡内を支配するが、天正7年（1579）に肥前龍造寺氏が5,000余人の軍勢を率いて侵入する。激戦の末紹叱父子は討死にし、安楽平城は落城している。この記事では小田部軍は、一定期間の籠城後に城外での合戦の末、戦死しており、SB111を田中城同様に兵舎と理解すると、龍造寺軍の施設として解釈するほうがこの記事には合致する。龍造寺軍の拠点はC区西方約2kmの内野山中にあるが、紹叱戦死後、城中に残された女童を兵糧攻めにしようと城外の各所に龍造寺の諸軍が陣を設置している。SB111は時期的にも矛盾がないことから、それらの施設の一つであった可能性をここでは提示したい。」と報告書で述べている。また、いずれの場合も建替えをしたような痕跡は見られず、おそらく最後の段階で短期的に使用する目的で作られた施設になるものと思われる。

次に、七戸城跡（青森県上北郡七戸町所在）がある。七戸城跡は、本城・北館・角館・西館・下館・宝泉館からなり、昭和16年に国指定史跡となっている。将来の環境整備を実施するために必要な基礎資料を得るという目的で、北館の調査が平成3年度から行われている。この城跡の調査担当者の小山彦逸氏（七戸町教育委員会）から「第19回全国遺跡環境整備会議資料集」に載せた田中城関連の資料を見たが類似遺構があるとの連絡が入ったのは平成6年秋であった。送られてきた報告書によると、平成4年度の調査で重複するSB2と3掘立柱建物跡に想定された柱列のうち、数列が翌5年度の調査区まで延びていることから、類似性に注目されたのではないと思われる。田中城・志水A遺跡C地点の検出例と比べると、この二例が切り合いもなく、短期間使用されたものと推測されるのに対し、七戸城例は、調査区全体に広がる多数の柱穴の中からの抽出だけに、見た目だけでは何か違和感が感じられた。小山氏の指摘では、約1.5m間隔で北西―南東方向に走る5列の柱列が比定されている。図面での検証のため、時代的な関係は全く分からないが、よく観察してみると、小山氏が指摘されている柱列の両側にも、さらに数列広がっているようにも思える。これだけでいえば、非常に類似しているようにも思えるが、柱間隔が1m強とやや広いこと、また、横方向の柱筋が概ね通っていることなど、九州の二例とは異なる



第100図 連棟式兵舎跡実測図(上:福岡市・志水A 遺跡、下:田中城跡)

点も見られる。もう少し時間をかけて、じっくりと調べる必要がありそうである。この他平成6年度の調査で確認されている、方形柱穴タイプと呼ばれている掘立柱建物跡が注目される。連棟式の建物跡ではないが、梁行が1または2間と狭い割には、桁行が長く、長屋風の建物跡と想定され、数棟の建物が建っていたと思われる。性格的には、まだはっきりしないようであるが、前の例と併せて今後の研究対象となりそうである。

この他、まだ図面などを手に入れていないが、二例の情報があるため、今後も類似遺構は増えそうである。

第3節 まとめ

昭和61年、田中城跡が県指定史跡となったのを機会に、国(50%)・県(9%)の補助を受けて始められた調査も、早いもので10年目の調査が終了した。当初は、主郭部から順に発掘を進めていき、10年程度で終了する予定であったが、平成元年に『迎春・和仁仕寄陣取図』が山口県立文書館で発見されたため、現地と対応させながら調査を進めることとなり、調査期間も20年に延長して行うことになった。

これまでの成果については、この報告書にまとめているので重複することになるが、ここでもう一度簡単にまとめておく。

まず、地形についてだが、福岡県境から続くやまなみから延びる舌状台地の根元を断ち切ることにより、独立丘陵となして田中城を形成している。このことは、護りを固めることでは非常に有利になるが、逆に、この場所を敵に抑えられると完全に孤立してしまうことになる。城の表側に目を向けてみると、こちら側は現況では和仁川流域に広がる水田地帯となっており、平成元年度に圃場整備に先立ち試掘調査が行われた。その結果、現在の和仁川より約40~140m田中城よりのところを旧河道が流れていたことが判明し、自然の堀として利用していたと思われる。また、この旧河道の外側は床土を除けると礫層になるが、内側は粘性が強いガタ土状態であり、通常から湿地状態であったこともわかった。

これまでの調査で掘立柱建物跡・溝・土塙・堀跡など多くの遺構が確認された。主郭で確認された掘立柱建物跡の切り合いから、現在確認されている田中城の初現である暦応三年(1340)から落城した天正十五年(1587)までの約250年間に数度の建替えが想定され、周囲に巡らされている比高差16mにもおよぶ空堀の確認および空堀の対岸に残されている捨て曲輪からは、前述した旧河道・湿地帯と併せて田中城の護りの堅さが窺われた。その後、城の西南部(裏鬼門)からは宗教的な施設である石倉の発見、これまで城内での使用例は確認されていないが凝灰岩の石切り場の検出、また、『迎春・和仁仕寄陣取図』との対比による調査で確認された連棟式兵舎跡と思われる建物群、弾正屋敷跡との言伝えのある地区から井戸跡が確認されたことで生活の拠点のひとつと推測されるなど調査を重ねる



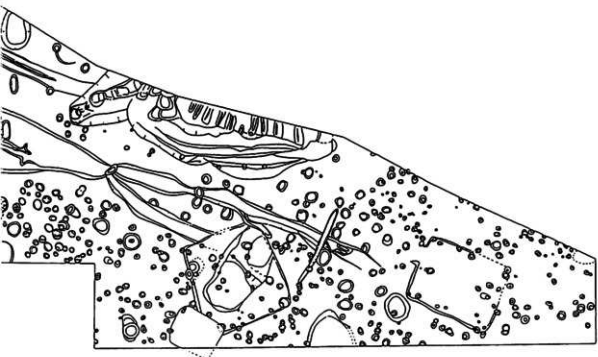


図101 七戸城跡北館 1991～1993年度発掘区遺構配置図

毎に、田中城の実体が明らかになってきたように思われる。遺物の面から言えば16世紀のものも多く見られるが、小片が多いため、図面が取れて復元可能なものがもう少し増えて欲しいものである。長年にわたって使われていた城であるので、落城後の普請の際にどこかにまとめて埋められている可能性も考えられ、今後の楽しみにしたい。

今後は、もう数年田中城の本体部分の調査を行った後、周囲を約1万人で取り囲んだ豊臣軍の陣跡の調査を実施し、『辺春・和仁仕寄陣取図』の信憑性をさらに高めるとともに時の権力者豊臣秀吉が直々に派遣した1万にもおよぶ軍勢と戦った、田中城最後の戦いの様子や和仁一族についてを明らかにし、後世に伝えていきたいと考えている。

【参考・引用文献】

- 【高城跡】 熊本県文化財調査報告第95集 熊本県教育委員会 1988
- 【史跡七戸城跡北館Ⅰ】 七戸町埋蔵文化財調査報告書第6集 七戸町教育委員会 1992
- 【史跡七戸城跡北館Ⅱ】 七戸町埋蔵文化財調査報告書第8集 七戸町教育委員会 1993
- 【史跡七戸城跡北館Ⅲ】 七戸町埋蔵文化財調査報告書第10集 七戸町教育委員会 1994
- 【史跡七戸城跡北館Ⅳ】 七戸町埋蔵文化財調査報告書第12集 七戸町教育委員会 1995
- 【史跡七戸城跡北館Ⅴ】 七戸町埋蔵文化財調査報告書第14集 七戸町教育委員会 1996
- 【龍田陣内城館跡】 株式会社ハウベスト・陣内遺跡調査団 1993
- 【小笠木】 福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集 福岡市教育委員会 1995
- 【田中城】 三加和町田中城跡調査概報(1) 三加和町教育委員会 1987
- 【田中城跡Ⅱ】 三加和町文化財調査報告第2集 三加和町教育委員会 1988
- 【田中城跡Ⅲ】 三加和町文化財調査報告第3集 三加和町教育委員会 1989
- 【田中城跡Ⅳ】 三加和町文化財調査報告第4集 三加和町教育委員会 1990
- 【田中城跡Ⅴ】 三加和町文化財調査報告第5集 三加和町教育委員会 1991
- 【田中城跡Ⅵ】 三加和町文化財調査報告第6集 三加和町教育委員会 1992
- 【田中城跡Ⅶ】 三加和町文化財調査報告第7集 三加和町教育委員会 1993
- 【田中城跡Ⅷ】 三加和町文化財調査報告第8集 三加和町教育委員会 1994
- 【田中城跡Ⅸ】 三加和町文化財調査報告第9集 三加和町教育委員会 1995
- 【田中城跡Ⅹ】 三加和町文化財調査報告第10集 三加和町教育委員会 1996

付 論

付論1

「『迎春・和仁仕寄陣取図』について」

石 井 進（東京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館長）

付論2

「田中城跡の出土遺物について」

大 田 幸 博（熊本県文化課主幹）

付論3

「平成4年度調査で検出された柱列について」

大三輪 龍 彦（鶴見大学教授）

付論4

「田中城の建築について」

北 野 隆（熊本大学教授）

〈付論 1〉

「『刃春・和仁仕寄陣取図』について」

石 井 進（東京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館長）

—

熊本県玉名郡三加和町にある田中城の旧跡は、今日もおお戦国の古城の面影をとどめ、昭和61年（1986）以来、三加和町教育委員会によって継続されてきた発掘調査は、地中から数々の興味深い遺構や遺物を明るみに出し、全国的にも注目される成果をあげてきた。

発掘調査の進行とともに田中城にかかわる様々な文書や記録などの史料の「発掘」と整理・調査が行われ、この面でも従来明らかでなかった田中城落城前後の状況がかなりはつきりしてきた。そうした新史料中、最大のものが、ここで検討の対象とする『刃春・和仁仕寄陣取図』である。この陣取図の概略については、現在、県道から田中城へととりつく駐車場に建てられた案内板（史料解説板）に、以下のように記されている。まず最初に、それを引用しよう。

「日本最古の城攻め絵図 『刃春・和仁仕寄陣取図』

田中城は、戦国末期に隆盛を誇った肥後国衆の一人、和仁氏の居城であり、和仁城・和仁古城などとも呼ばれている。天正十五年（1587）一旦は豊臣秀吉に服属した国衆たちは、秀吉から肥後一国を与えられた佐々成政の強引な支配に反抗して、同年七月から実力で抗争を始めた。いわゆる肥後国衆一揆である。

田中城は、一揆の最後の拠点のひとつで、秀吉方の一万の大軍に対し、和仁氏と親族の刃春氏の兵約九百人が二ヵ月余りもたてこもり、抗戦の末ついに落城したと伝えられている。この戦いの様子は、従来あまり明らかでなかったが、最近になって山口県立文書館の毛利家文庫のなかから当時の城攻めの絵図が発見された。

絵図の中央には、柵や深い堀をめぐらした上に、やぐらを立てた防備嚴重な田中城の姿が、西側から見たように描かれ、和仁氏・刃春氏の陣も区別されている。その周囲には二重の柵が立てまわされ、四方の丘の上などに陣を取った攻撃軍の諸将の名と、城からの距離も記入されている。小早川秀包（毛利元就の末子で、小早川隆景の養子）・安国寺恵瓊・鍋島直茂・立花宗茂などの秀吉側の大名の名がわかる。また、図には二ヶ所の「仕寄^{しよ}」（攻め口）が描かれ、攻撃の主方向が示されている。秀吉得意の兵糧攻めと直接攻撃を併用する作戦と見える。

この絵図には、さらに「軍中法度」（作戦の間、軍中で守るべき禁令）などが書き込まれており、この種の絵図としては日本最古というべきまことに貴重な史料である。

今もよく残る田中城の跡とくらべてみると、興味はいよいよ深まることであろう。

平成五年三月吉日

」

実はこの文章は私が執筆したもので、それをまた書き写すとは面映ゆい限りであるが、当時、それなりに努力して書いた思い出もあり、この陣取図の概要を簡略にまとめてあると思うので最初に再録した。以下、今少し詳しく述べよう。本図はもと長州藩主毛利家に伝来してきた絵図の一つで、現在、山口県立文書館の所蔵（毛利家文庫絵図892）である。

原本は和紙に筆で描かれており、紙は縦46.0cm、横80.0cm。八つ折にされていたようで裏には「関八州諸々城口通之内（朱書）『九劔城ノ図』と、『九州陣図』の二ヶ所の裏書がある。その位置からすると、八つ折にされた際の折り方に従って、それぞれ表紙の端に内容を摘記した、いわば端裏書に当るものであろう。

山口県立文書館には同じく毛利家に伝来した、天正十八年、豊臣秀吉による後北条氏攻略の際の「小田原陣仕寄陣取図」、「小田原陣之時黄瀬川陣取図」、「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」等の陣取図が所蔵されており、本陣取図の裏書の記載とあわせ考えれば、これらはすべて一括伝来の絵図と見るべきである。これら小田原陣関係の陣取図は、かつて平成元年（1989）10・十一月に神奈川県立博物館で開催された特別展「後北条氏と東国文化」に出陳され、私も一見した記憶があるが、特に「小田原陣仕寄陣取図」の描法と本図との間には共通性があり、本来一連のものであったことがうかがわれる。

次にその内容であるが、挿入図にみるように画面右半には西方から見た田中城の側面を描き、中央には堀をまわし、橋で囲まれた上にヤグラをあげた城の姿が明らかである。三つのクルワが認められるが、中央と北側のクルワに「和仁」、南側のクルワに「迎春」と記され、田中城主和仁氏と親族の迎春氏がそれぞれのクルワにいたことがわかる。クルワの下、西側の山腹には橋で囲まれた内側に合計18の「芥」のような形が描かれている。「小田原陣仕寄陣取図」と比考するに陣所か兵舎を示しており、田中城の麓城軍の駐屯地を示すものと見るべきであろう。

田中城の南側、深い堀切を隔てた山稜の頂点からやや下がったところにもヤグラか井楼とおほしきものが立上がっていて、「仕寄」と記されている。「仕寄」とはしより、又はしよせと読み、城攻めの道筋や方法のことを言う。今一つ、田中城北のクルワの北側にも「仕寄」と記され、W字型の線の南側に橋が描かれている。田中城北側のややゆるやかな二つの谷を攻め上がる攻め口と、それを防御する橋を示したものであろうか。

さて、田中城の西側に北から南へとつながる一本の線は、多分、今の和仁川の旧流路を示したものであろう。そして、田中城の周囲は大きく二重の橋で取り囲まれており、外側の橋の外側にはあわせて12の「芥」のような形が描かれている。田中城の陣所や兵舎の記号をさらに大きくしたような形であり、包囲攻撃の陣所を象徴的に示したものと考える。その外側に、攻撃軍の大名の名が、丸がこみの中に記されている。西の正面には主将とな

った小早川秀包、その南には軍奉行とも言うべき安国寺惠瓊以下、栗屋四郎兵衛・古志・日野、さらに小田伊勢、そして秀包の陣の北側には三吉と記されている。いずれも毛利・小早川氏家中の面々であり、「中国衆」とも呼ばれた。西北から東北方までは鍋島氏を中心とした「肥前衆」の陣所、そして東方から南方が筑紫・高橋・立花左近などの筑前・筑後の武士たちの陣所である。まさにアリの這い出る隙もないといわんばかりの包囲攻撃網を作ったの布陣である。

そして左半分には文字で

	一	一	一	一
	懸	喧	仕	諸
	引	嘩	奇	陣
付、	者、	停	四	大
普	安	止	口	廻
請	国	之		五
同	・	事	藝	十
前	秀	軍	州	町
之	包、	中	衆	
事	可	法	一	
	被	度	口	一
	任			城
	申	一	肥	ト
	分	押	前	陣
	事	買	衆	ト
		停	一	ノ
		止	口	間
		之		
		事	立	三
			花	・
			一	四
			口	・
				五
			筑	町
			紫	
			一	
			口	

と記されている。

包圍攻撃軍の陣所の周囲は五十町、それぞれの陣所の城との距離は、それぞれ三・四・五町とする。ただし絵図の陣所に記入された距離の数字では立花左近と高橋の陣は二町となっていて、この記載に合致しない。

次に、仕寄は四口となっているが、絵図に描かれている仕寄は二つだけで、陣所との位置関係から見れば藝州衆と肥前衆の仕寄だけが図示され、他の二つは示されていないことになるが、それが何故なのか明らかでない。

最後の軍中法度は注目すべき内容である。第一条の喧嘩の禁止令は、攻撃軍が諸大名の混成軍で各部隊ごとに独立性が強く、しばしば衝突しがちなので、それに対する統制令である。第三条の正文は、「懸引」、すなわち戦闘の際に攻めかかったり、後退したりする戦いの采配は安国寺恵瓊と小早川秀包の二人が指揮をとるということで、めいめいが勝手に戦ってはいけないと指揮官の権限を強調している。そして付則では「普請」、すなわち陣地の構築とか、付け城を築くなどの工事についても同様に恵瓊と秀包の二人の命令に従えとあって、攻撃軍の指揮・命令系統の確立に大変気を使っていることがよくわかる。また、形式上は秀包が主将のはずなのに、条文では恵瓊の方が上位になっていることも興味深いところである。

次に、第二条の「押買」とは、「押売」の反対に武士などが商人を脅かして強引に値切ったり、安く買い叩くことだが、軍中法度の中にこうした禁令が含まれていることに注目すべきである。現地の村々と結びついた国衆一揆と戦うためには、こうした商人への配慮が必要とされたのであろう。

さてこの陣取図に描き記された内容については、以上で一通りの解説を行った。現場に立って見られれば、すぐに納得されるように、その内容は今日残る現地の姿とよく合致し一見ただけでも信頼性は高い。天正十八年の小田原陣関係の絵図とともに本来、毛利家に伝来してきたという由緒からみても、本図は天正十五年当時の作と考えられる。私の知る限り、この種の城攻め陣取図としては現在最古のものであり、それ故、現地の案内板にも「日本最古の城攻め絵図」と題した次第である。

以上、本図自体について大体を概観したので、次には節を改めて現存する当時の関係古文書類の語るところを整理しつつ、さらに本図の内容を検討してみたい。

注1 これら陣取図の写真版については、とりあえず『特別展図録 後北条氏と東国文化』（神奈川県立博物館 1989年）図版77・78・80号を参照。

天正十五年三月、九州地方平定のために大軍を率いて大坂を出陣した豊臣秀吉は、五月はじめに早くも島津氏の本拠の薩摩まで進撃、島津義久を降伏させた。これによって全国統一の覇者に大きく近づいた秀吉は、従属した九州の大名・国人たちにそれぞれ旧領の一部を安堵したほか、小早川隆景に筑前・筑後、佐々成政に肥後を与え、六月には大坂に帰った。

しかし、肥後では新たに国主として隈本城に入った佐々成政と、従来からの地域領主として支配を続けようとする国衆（国人）との対立が激化し、七月末から国内には争乱状態が広がった。そもそも秀吉による国衆への所領安堵が従来の彼等の所領の全部でなかった上、成政がそのすべてを国衆に与えたわけでもなく、また、性急に検地を行おうとしたことが対立の原因だった。

まず蜂起したのが隈部氏を中心とする国衆のグループで、隈府城で挙兵、そこが落城すると山鹿の城村城に立てこもって以後、年末まで長期の戦いを続けた。田中城の和仁氏も近隣の辺春氏などとともに関に呼応、成政軍と戦った。肥後国衆一揆と呼ばれる、この戦いの重要な拠点の一つが、わが田中城なのである。ただ残念ながらこの戦いに関する同時代の史料は非常に少ない。その中で豊臣秀吉側の田中城攻撃軍の中心となった筑前・筑後の大名小早川氏に宛てた秀吉の文書は相当数が残っているため、以下はまず「小早川家文書」を中心に、その他の文書も利用しながら秀吉側の対応を跡づけ、田中城攻防戦の基本的な動きをとらえておきたい。テキストは『熊本県史料 中世編 第五』を主に利用する。

九月七日、秀吉は筑前の名島城の小早川隆景に対し、肥後国衆一揆に苦しんでいる成政救援のため、隣接諸国の武士を動員せよと命じ、豊前の黒田孝高（如水）・森吉成らにも出陣の準備をさせていると告げた（小早川家文書三号、秀吉直書）。さらに翌八日、七月廿三日付の隆景書状が今日、大坂に到着したが、すでに隆景が安国寺恵瓊を肥後国境まで派遣すると決めた由で満足だとした上で、さらに、小早川秀包（隆景の実の弟で、また養子。当時は久留米城主）を成政救援軍の大將、恵瓊をその相談役につけて筑後來・肥前來を指揮させよ、隆景は久留米城まで前進して戦況を判断し、なお軍勢不足のようなら黒田・森の軍に隆景手勢をも加えた第二軍をすぐに肥後に送れ、それでもなお不十分なら毛利輝元を呼び寄せて筑前の立花城におき、その上で隆景自身が第三軍となって肥後に入ると大動員計画を命じている（四号、秀吉直書）。

同時に秀吉は九月七日、筑後国柳川城主の立花宗茂に対し、国衆一揆によって隈本城への連絡が途絶えた状況なので、すぐにも出陣して隈本城に入り、成政と協議の上、一揆を鎮圧せよと命じた（『同上書』立花文書九号、秀吉朱印状）。そして同十九日には肥後一揆

鎮庄のため安国寺を特派したので、よく相談して行動せよと重ねて命じている（立花文書四号、秀吉朱印状）。

一方、小早川秀包・安国寺恵理らは、九月初めには肥後国境を越えて南関に着陣、やがて隈本城の成政と連絡を取りつつ一揆と戦ったようで、隆景も九月五日には久留米城に入城していた（小早川家文書五号、九月十九日秀包宛て秀吉朱印状。六号、同日宛て秀吉直書）。この時点で秀吉が、一揆蜂起の原因を成政が配下の国衆に対して秀吉の与えた朱印状通りに知行地を与えない上、突然に検地を申し付けたためだと述べていることは注目されよう（六号。及び七号、九月廿一日秀吉直書）。

十月になると国衆の蜂起は肥前・豊前にも拡大、秀吉は危機感を強めてその対策に追われるようになるが、一方では肥後での戦闘状況に触れる内容は乏しい。わずかに十月六日以前、成政が城村城攻撃のために築いた付城に対し、立花宗茂らが兵糧米を搬入、その際一揆と戦って勝利を収めたとみえる位である（十四号、十月廿二日秀吉朱印状）。

その間、秀吉の特命を受けた小西行長も九州に下向、各地の状況を視察している。そして十二月十日、帰京した小西の報告と十一月十五日付の隆景書状に対応した新たな指令が出された。Aは恵理・隆景宛ての秀吉朱印状（十六号）、Bは隆景宛ての秀吉直書（十七号）で、Bとほぼ同趣旨の立花宗茂宛て朱印状も伝存している（立花文書八号）。和仁・迎春城攻撃の労をねぎらった後、この戦いの勝利は隆景らの名誉にかかわる重大事であるから「仕寄」で攻め崩すか、さもなければ塀や雲雁（模雁とも書いているが、ふつう虎落と書き、竹を筋ちがいに組合わせ、縄で結いかためた柵のこと）を何重にも丈夫に取りまわして「干殺」にせよ、以後の九州への見せしめにするため、一人も逃さぬよう討ち果たせ、兵力不足であるなら隆景自身が大将となって肥後に入り、是非とも和仁・迎春は「干殺」にしてしまえ、という調子で作戦を指示している。田中城攻略に秀吉がいかに真剣になっていたかを示す史料である。

しかし、秀吉がやっきになって指示をしていた時、現地ではすでに田中城は落城していた。攻撃軍の中心人物恵理の書状等が、その間の事実を伝えている。まず十一月廿六日、島津氏の重臣新納忠元宛ての恵理書状に、以下のことが記されている（同上書、新納文書二号）。一揆に攻められて隈本城も危ないとのことだったので、われわれはまず南関からかけ下って隈本に打ち入り、成政との連絡交通路を確保した上で、今は和仁・迎春の籠もる城（田中城）を包囲しているが、あと五日の内には落城するだろう、その後は直ちに隈部・有動氏らの城（城村城）の攻撃に向う予定である、と。

その十日後、十二月五日に田中城はついに落ちた。その事実を伝える書状二通を以下に引用しよう。

（イ）は成政の近親者佐々政元が、肥後南部の大名相良氏の重臣らに宛てた書状で、田

中城陥落を報ずる惠瓊からの連絡を得て直ちに、相良氏に国衆の有力者阿蘇氏攻撃のための出兵を促している。十二月五日付となっているが、本文中「昨日五日」とあるので、実は六日の発信であろう。五日正午前後、「中国衆」中心の攻撃の末、ついに田中城は落城、城中の男女は残らず「撫斬」にしたという。大将秀包や惠瓊の旗本の軍が西南方からの「仕寄」でついに田中城を攻め落としたのである。

また、田中城ではなく「和仁城」と明記していることも注意される。さて、惠瓊からの第一報当時、城の中心部は落としたが、「二丸」はまだ頑強に抵抗していた。ところが追而書によると、その後ついに二丸の敵もみな討ち果たしたとの急報があったという。当時の書状で「二丸」と呼んでいたのは、果たして現在の城跡のどの部分であろうか。興味深い課題である。

(イ)

佐々政元書状

(惠瓊)

從安国寺書状、二丸雖相拘之由候、如

此申候内ニ、はや二丸討果候旨申来候、

以上

急度令申候、仍和仁城中国衆被入精、昨日五

日午刻被討果候、男女共不残撫切候、從此方

津曲与兵衛尉被差遣候、被碎手候、於時宜者

可御心易候、然上者到阿蘇口可被相働旨条、

為御心得如此候、恐々謹言

佐々平左衛門尉

政元 (花押)

(天正十五年)

十二月五日 (ママ)

深水三河入道殿

養田信濃守殿

(「鹿兒島県史料 旧記雑録後編 第二」巻二
一 卅号。「正文在加治木新納仲左衛門」とあり)

(ロ)

安国寺惠瓊書状（折紙）

当城之事、一昨日落去候、誠以御太慶、我等
安堵此事候、自明日普請可申付候、左候而番
衆等之事、近々談合可申候、（奉行）迎春事、忠儀仕
候間、是又本領半分茂可被遣候、さりとてハ
今度手柄仕候、猶杏存江可申候、恐惶謹言

（天正十五年）

十二月七日

安国寺

惠瓊（花押）

奥州様
（佐々成政）

参人々御中

〔熊本県史料 中世編 第三〕袖留木
文書四九号、ただし原本の写真によつ
て訂正）

次に（ロ）は、（イ）の翌日、七日に惠瓊から成政に送られた自筆書状である。「当城」が一昨日落ちたとしか書いていないが、その際、迎春氏が忠節を尽くした、大手柄だという記述から、田中城を指すとみて誤りない。明日から早速、城の「普請」にかかり、城を預かる番衆たちの人選も近々相談したいとあるから、城村城はじめなお残存する国衆一揆との対決に備えて緊迫した状況下にあることがうかがえる。（イ）・（ロ）二通の書状は、田中城落城直後のものだけに極めて重要である。陣取図との関連等を含めて、後にさらに検討を深めることとして、ここでは又「小早川家文書」の世界にもどると、十二月六日に隆景は秀吉に田中城落城を報告し、その書状は同月廿六日、大坂の秀吉のもとに届いた。

それを賞した翌廿七日の秀吉直書（十八号、隆景宛て）には、和仁・迎春らは一人も逃

さず首をはねよと命令しておいたところ早速に討ち果たし、一類四人の首を差し上げたとは手柄である、この戦いでは肥前の龍造寺や鍋島直茂も功績を挙げたとのことで、彼らにも早速に朱印状を与えた（これに相当する秀吉朱印状は、それぞれ鍋島・龍造寺両家伝来の文書が現存している）云々と記されている。また同日、立花宗茂・筑紫広門・高橋直次三名宛てに田中城攻撃の功を賞する朱印状が与えられた（十五号）。

三

以上、「小早川家文書」を中心に同時代の文書史料を収集、吟味しつつ、秀吉の肥後国衆一揆への対応策や田中城落城前後の状況の一斑を明らかにしてきた。しかし、田中城攻防戦の状況については、残念ながらあまり多くの情報を得たとはいえない。本稿の主題である陣取図の解明のためには、史料搜索の範囲をさらに広げ、後代の伝承までを視野に入れる必要があろう。

かつて、熊本県下で盛んに語られた肥後琵琶の「和仁城合戦」をはじめ、「和仁軍談」などの江戸時代に著された種々の軍記類、さらに地元の様々な伝承など、対象とすべきものは多い。ただし、私は不勉強のため、まだそれらを十分に把握するに至っていない。ここでは参考として和仁氏一族の後裔とされる、隣町南関町の田副家の伝承の記録の一部を紹介するにとどめざるを得ない。

(一) 和仁氏一族の構成



(二) 和仁氏の所領

天正十五年四月、秀吉から安堵された所領、本領玉名郡和仁十丁村・吉地村、山鹿郡芋生村、筑後国白木村等合百二十町、
或説百五十町、又一説には五十七町、

(三) 田中城籠城の手配り

日明口には和仁親範・松尾日向ら二百五十人、鉄炮三十挺、弓三十張、

北門（宮嶽口）には和仁親宗・松尾市正（日向の子）ら百余人、鉄砲二十挺、弓二十張、

新城口には中村治部少輔百五十人、鉄砲三十挺、弓二十張、槍二十本、

本丸には迎春親行・従士ら三百人、鉄砲百挺、弓八十張、槍五十本、

二ノ丸には大将和仁親実・従士ら百余人、鉄砲三十挺、弓二十張、槍三十本、浮武者頭草野準人・従士百余人、鉄砲二十挺、弓三十張、槍三十本、

合計一千余人、鉄砲二百三十挺、弓二百張、槍百三十挺、

（四）合戦の経過

天正十五年十月廿八日、佐々成政は八千余の兵に立花宗茂・鍋島直茂らの援兵を併せて一万の兵で攻撃、しかし失敗、六百余人が討死、

そこで作戦を転換して持久戦に持込み、矢文で城内の内応を誘う。迎春親行が本領の他に和仁氏一跡を加えて給与されるとの条件で内応。親実の近習鸞藏人を抱き込んで親実を暗殺。これによって十二月六日夜ついに落城、和仁氏一族は戦死、あるいは行方不明。

以上が田副家の記録の要点である。攻城軍の主力を成政軍とすること、落城の日を十二月六日とすることは、すでに述べた当時の文書の語る内容と明らかに異なり、誤りであろう。しかし、和仁一族三兄弟の名や迎春氏との関係などは、この種の伝承によってしか知り得ないところであり、田中城守備軍の配置や人数、武備など誇張や誤りも当然多からうが、興味ある伝承である。

同じ肥後国衆一揆の、田中城とならぶ重要拠点だった隈部氏の城村城箆城についての「城村守戦記」の記述を要約すると、

男女一万五千人余（男八千余人、女童七千余人）

侍八百余人

鉄砲八百三十挺（内百挺は浮武者に付）

弓五百五張（内百挺は浮武者に付）

以上である。田副家の記録には、城村城の「男女」に当る箆城者の人数が伝えられていない。しかし、二の（イ）書状に明記されているように、落城時に「男女共不残撫切候」という以上、田中城にも相当数の「男女」、周辺の村々の住民が箆城していたとみなくてはなるまい。また、城村城と田中城では、戦闘員と鉄砲・弓など武器の対比が若干異なるようだ。それは両者に共通して現われる「浮武者」が、城村城の場合は侍の外数なのに、田中城の場合は内数らしいことも関わるかも知れないが、そもそもそれらの数値に相当の誇張が想定される以上、これ以上立ち入った検討はあまり意味がないことになろう。

なお「浮武者」については、肥後国衆一揆の構造を考えるための重要な要素として森山

恒雄氏がつとに着目しておられる。森山氏によれば、「浮武者」とは正式の武士と一般の農民との中間層で、平時は農民で戦時に戦闘に参加する人々である。こうした中間層を含めて領地の村々の男女全てが籠城し、秀吉軍と戦ったところに肥後国衆一揆の大きな意味があったと考えられるが、田中城の場合にも田副家の記録の「浮武者」を手がかりとしてその背景をうかがうことができるのである。

なお、田副家の記録以外に今一つ、後代の伝承の一種として、江戸時代前期に完成した軍記『陰徳太平記』（巻七十四、肥後国和仁辺春落城事）をみると、田中城には「城中二弓・鉄砲ノ達者多カリケレバ、透間無ク射出シケル程ニ」、寄手の小早川勢の指揮者の朝枝右京亮は戦死、今一人の栗屋四郎兵衛も負傷したと記している。その他の『陰徳太平記』の記事は、辺春氏が開城して切腹、和仁氏は一命を助けられて何処かへ落ちていったなど、当時の文書の内容と異なる点があるが、城内に弓・鉄砲の名手が多く、寄手がかなりの損害を被ったとある点は、上述の籠城軍の武器の数ともあわせて注目すべき内容といえよう。

注1 三加和町 「田中城関係資料」コピーによる。

四

さて、以上三節に分って、本稿の主題である『辺春・和仁仕寄陣取図』の一応の考察、当時の文書にもとづく秀吉側の対応策や田中城落城前後の状況、さらに後代の伝承にもとづく田中城攻防戦の様相などを解明してきた。本節では、最後にそれらをまとめる形で、今一度、陣取図の内容と当時の文書や後代の伝承との対比を行ってみたい。

さて、本陣取図の中心に描かれた田中城の姿は、城の西方、あるいは西南方からの姿であり、ちょうど秀包や恵瓊の陣から城を望んだ形に見える。もちろん誇張されているとはいえ、田中城の基本的特徴をよく再現しており、単なる遠隔地での机上の産物ではありえない。おそらく秀包か恵瓊、攻撃軍の中枢部の目を以て、現地で作られたものと推定したい。それ故に後に所縁の毛利家に伝来したのであろう。

陣取図の記載と当時の文書との比較を、まず攻撃軍の大名、指揮官について検討する。図に記載された者は、

(イ) 中国衆

● (小早川) 秀包

● 安国寺 (恵瓊)

○ 栗屋四郎兵衛

古志

日野

小田伊勢

三吉

(ロ) 肥前衆

●鍋島(直茂)

(ハ) 筑前・筑後勢

●筑紫(広門)

●高橋(直次)

●立花左近(宗茂)

この中●印の者は、秀吉からの朱印状などで田中城攻撃に参加したことが明らかであり、○印の者は『陰徳太平記』に見えている。中国衆中四名以外は他の史料から裏付けが得られることになる。これは、この陣取図が他史料とよく符合することを示す一方、逆に秀吉朱印状を受けている龍造寺氏が「肥前衆」一般の中に埋没して、特に明記されていない事実と比較して、この陣取図が小早川氏関係者によって作成された故に、中国衆の指揮者が詳しく記されていることを物語ってくれる。

田中城を包囲する二重の櫓は極めて印象的であり、それ故に十二月十日付の秀吉の指令「重々塀・雲雁以下丈夫相付、干殺二成候歟」(A)の具体化と連断されやすい。その際は、この陣取図自体が、秀吉の本営で描かれた差図のためのものと思われかねず、現地から遠く離れた机上の作図と評価されかねない。

しかし、こうした「干殺」、兵糧攻めは秀吉軍の得意とした作戦であり、何も十二月十日の指令を待たずとも現地の攻撃軍には、そのノウハウが蓄積されていたに違いない。すでにそれ以前の十一月段階で陣取図のような状況が実現しており、それを忠実に記しとめたのが、この図であると考えておきたい。

さて本図では、田中城の南側に、深い堀を隔ててそびえる山稜の尾根に「仕寄」と描かれ、ヤグラあるいは井楼とおぼしきものがそびえている。まさに恵瓊・粟屋氏など中国衆の陣の正面であり、田中城落城に中国衆が大いに功績を挙げたとの(イ)書状の証言と一致する。ちょうどその向い側の田中城の南のクルワは辺春氏の陣であり、伝承にいうような矢文による内応工作にも便利であろう。十二月五日正午頃の落城は、まさにこの「仕寄」からの攻撃と内応の結果と判断できる。

では、その後にもなお和仁氏が抵抗を続けた「二丸」とはどこか。図に描かれた田中城の最北部のクルワに「和仁」とあり、ここだろうと推察する。現在の遺構からいえば、いわゆる本丸の西の出丸がこの「二丸」に当ることになる。

田副家の記録では菟城軍の配備で、辺春氏が本丸、和仁親実が二の丸とされている。和

仁氏の本城なのに、その中心の本丸に辺春氏が入るというのはどうもおかしい。しかし、陣取図で見る田中城中心部の二つのクルフでは、辺春とある方が少し高く、大きいように見える。そうすると陣取図と田副家の記録が、実は一致することになるのかもしれない。また一方では現在の遺構で、中心部が果たしてこのような二つのクルフに分割できるのだろうか。この点もお今後つめるべき大きな課題であろう。

陣取図の解説と解明にはなお多くの問題が残るが、田中城跡発掘が続けられた結果、この陣取図と見事に一致する成果が続々と出されていることは実に興味深いことである。城の西南部の山腹地帯に次々と発掘された連棟式兵舎の柱痕かと思われる遺構は、その第一であり、南の山稜の「仕寄」と描かれたヤグラか井楼の地点から発掘されたヤグラ跡の柱痕がその第二である。

現存する日本最古の城攻め絵図の現地から、発掘によってその絵図に描かれたものの遺構が次々とよみがえってくる。こうした幸福な瞬間には、めったに巡り合えるものではない。田中城の発掘調査は、その意味でまさに中世城館跡発掘の粋である。この困難な事業を推進しておられる三加和町当局や関係者の方々には心からの敬意を捧げたい。

なお、本稿の主題である「辺春・和仁仕寄陣取図」の存在を初めて「発見」されたのは森山恒雄氏の功績である。にもかかわらず種々の事情で、私がこのような駄文を綴ることになってしまった。誤解や不備の多からんことを恐れつつ、末筆ながら森山氏のお許しをお願いしたい。

【参考文献】

森山恒雄 「近世初期肥後国衆一揆の構造」

藤木久志・北島万次共編『織豊政権 有精堂 1974年 198-226頁（原載は『九州文化史研究所紀要』七号 1959年）

肥後国衆一揆顕彰会議『肥後国衆一揆シンポジウム完全収録集』 同会議 1989年
三加和町『〈豊臣秀吉軍勢と田中城攻防戦〉シンポジウム完全収録集』 同町役場
1991年

国武慶旭『天正時代と和仁一族——肥後国衆一揆』 熊本日日新聞情報文化センター
1993年

〈付論 2〉

「田中城跡の出土遺物について」

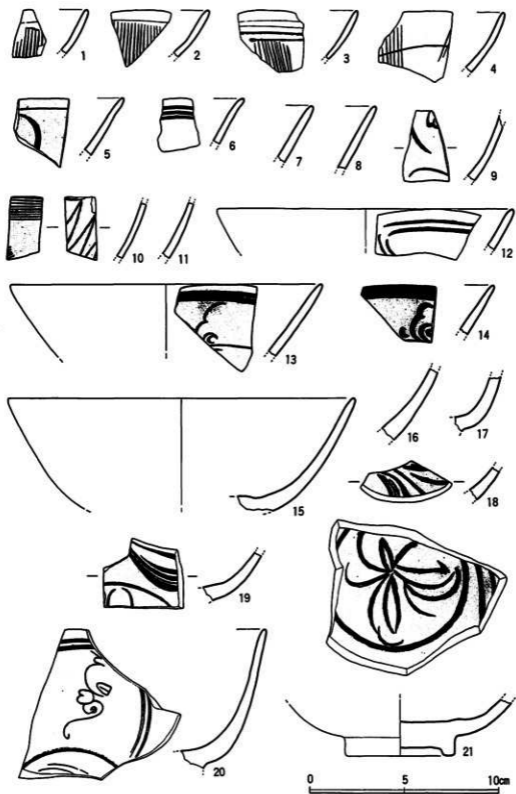
大 田 幸 博 (熊本県文化課主幹)

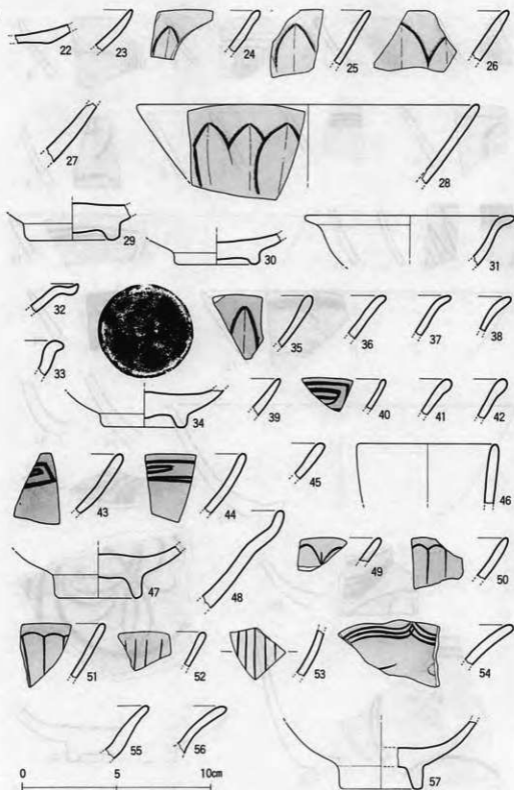
遺物名	産 地	実 年 代
青 磁	1～67は中国産	(上限)12C～13C、(下限)16C後半～17C前半。12C～14C・14C～15C・15C中葉～16C中葉・16C後半～17C初頭の4時期に細分される。竜泉窯系が中心をなすが、同安窯系を上限とし、福建省広東省窯系を下限とする。
	68～69は肥前系	17C～18C中葉。廃城後の持ち込みである。
白 磁	70～101は中国産	(上限)12C～13C、(下限)16C後半～17C初頭。12C～14C・15C末～16C・16C後半～17C初頭の3時期に細分される。景德鎮が中心をなす。
	102～105は肥前系・九州産	17C前半・18C～19C。廃城後の持ち込みである。
染 付	106～178は中国産	(上限)16C前半～中葉、(下限)16C末～17C初頭。時期的には16C前半～中葉と16C後半に集中する。16C前半～中葉までは総て景德鎮であるが、16C後半になると福建省広東省窯系が混じる。
	179～219は肥前系	(上限)17C中葉、(下限)19C末～幕末。この中に波佐見窯系がある。廃城後の持ち込みであるが、ある程度、まとまった量が出土しており、一考の余地がある。
陶 器	220は中国産と思われる	14C頃と推定される。220～225は田中城時代のものである。
	221はタイ産・222は朝鮮産と思われる	15C～16C。
	223～225は肥前系	16C後半～17C初頭。
	226～233は肥前系もしくは九州産	16C後半～17C前半。226～233は田中城時代の可能性がある
	234～239は肥前系もしくは九州産	17C～17C後半。234～248は、廃城後の持ち込みである。
	240～241は九州産	18C。
	242～244は在地もしくは九州産	18C～19C。
	245～247は関西系	18C後半～19C前半。
	248は産地不明	明治以降。

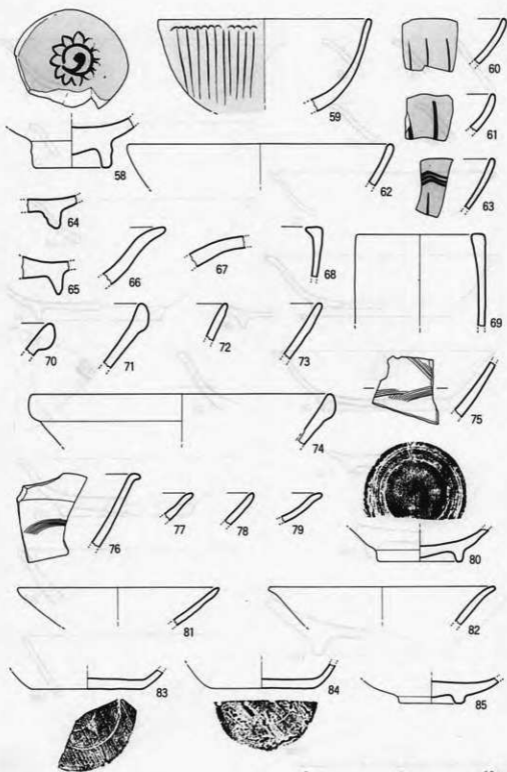
出土遺物に見る田中城跡の遺構実年代

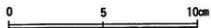
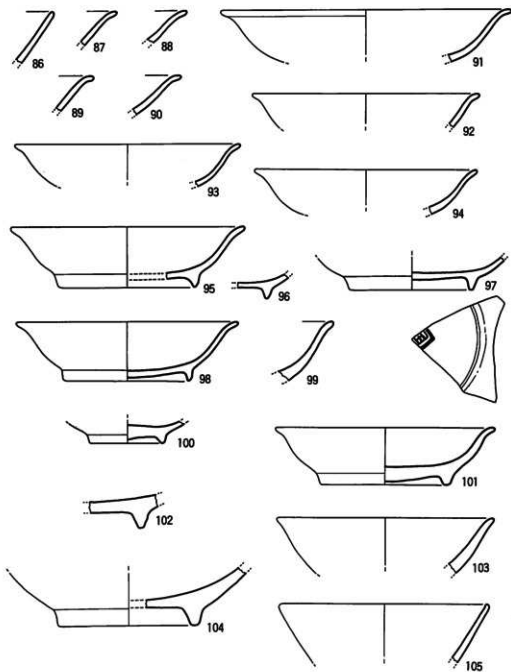
調査年度	遺構名	遺物実測番号	遺物の実年代	遺構の実年代
1987	Pit 40	134・141	16C前半～中葉	16C前半～中葉
	Pit 41	47	14C末～15C中葉	14C末～15C中葉
	SK-03	146	16C	16C
	SX-04	84	13C～14C中葉	13C～14C中葉
	SX-14	116・118	16C前半～中葉	16C前半～中葉
1988	SX-01-I	48	14C後半～15C	16C後半～17C初頭
		100	16C～17C初頭	
		108・131	16C前半～中葉	
		156・160	16C後半	
		170	16C後半～17C初頭	
		174	16C末～17C初頭	
		189	18C前半～中葉	
		220	14C?	
	SX-01-II	72	12C～13C?	15C末～16C
		89	15C末～16C	
		203	18C末～19C初頭	
	SX-01-III	7・15	12C～13C	16C後半～17C前半
		55	15C中葉～16C前半	
		126	16C前半～中葉	
		155・158	16C後半	
		168	16C後半～17C初頭	
		222 230	15C～16C? 17C前半?	
	SX-02	167	16C末	16C末
	SX-04	73	12C～13C?	16C後半
		162	16C後半	
	SX-05	58	15C中葉～16C中葉	16C後半
		165	16C後半	
	SX-01	67	16C後半～17C前半	16C後半～17C前半
		98	16C	
		101	16C後半～17C初頭	
		128・130	16C前半～中葉	
		153	16C後半	
	SD-01	127・144	16C前半～中葉	16C前半～中葉

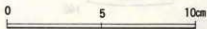
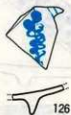
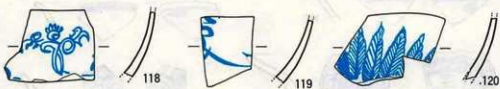
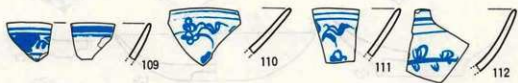
調査年度	遺構名	遺物実測番号	遺物の実年代	遺構の実年代
1988	Pit 4	154	16C後半	16C後半～17C初頭
		176	16C末～17C初頭	
1989	空堀	68	17C	16C末～17C初頭
		103	18C後半～19C前半	
		105	18C～19C	
		173	16C末～17C初頭	
		200	18C後半～19C初頭	
		213・214・ 217	19C中葉	
		1990	SX-01	
1995	SD-01(02)	5	12C～13C	12C～13C
		18	12C～13C	
		242	18C～19C	
	SD-03	6	12C～13C	15C末～16C
		53	15C中葉～16C前半	
		75	12C～13C	
		87	15C末～16C	
		187	18C前半～中葉	
		221	15C～16C	
	SX-01	30	13C末～14C	13C末～14C
	井戸跡	183	17C後半～18C前半	16C末～17C前半
		226	16C末～17C前半	
		235・236	17C後半	

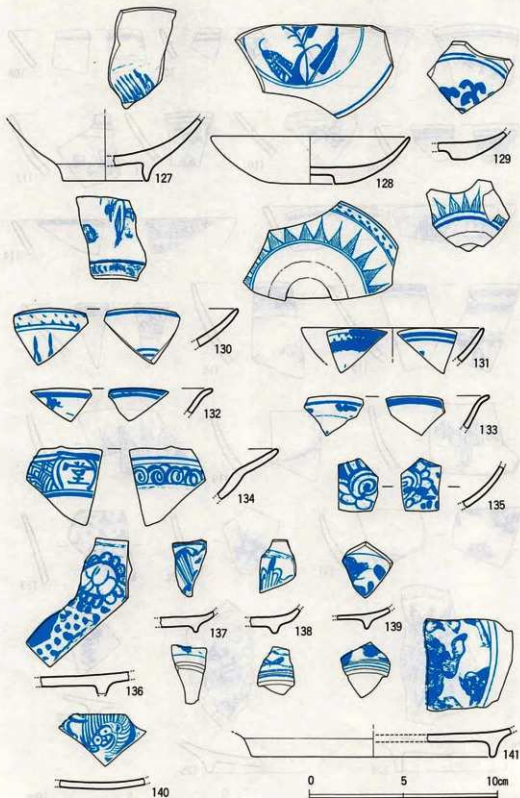


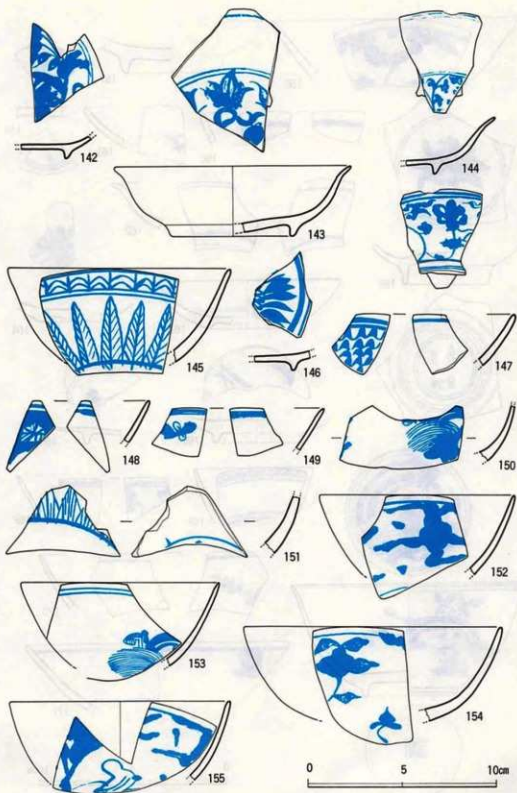


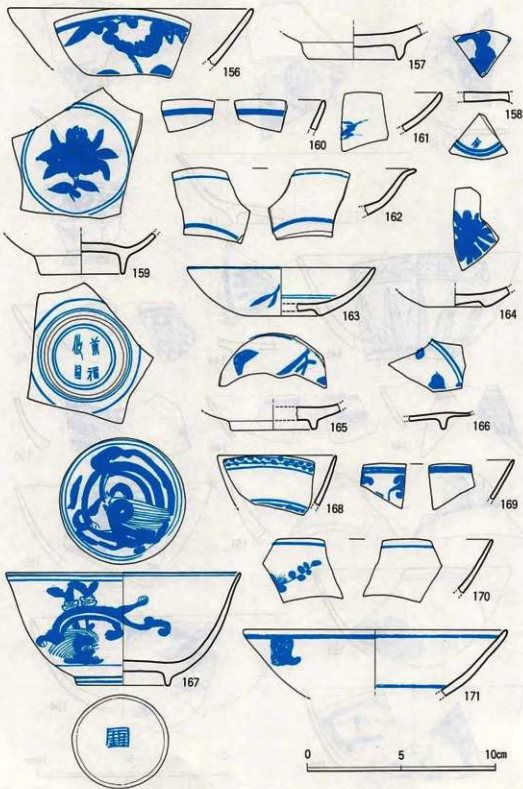


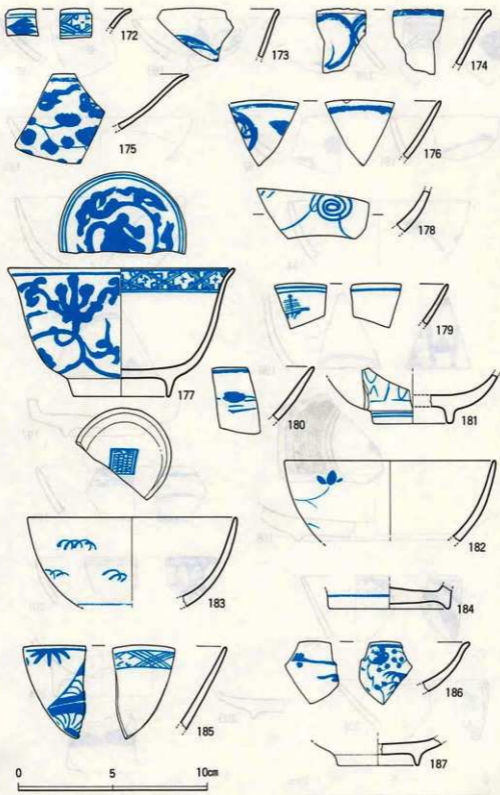


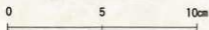
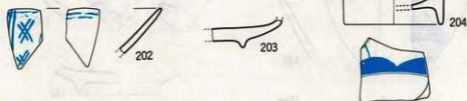
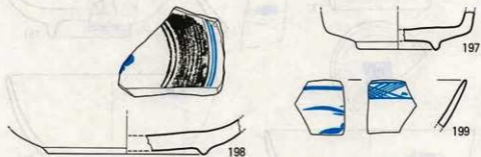
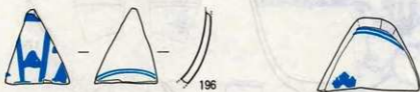


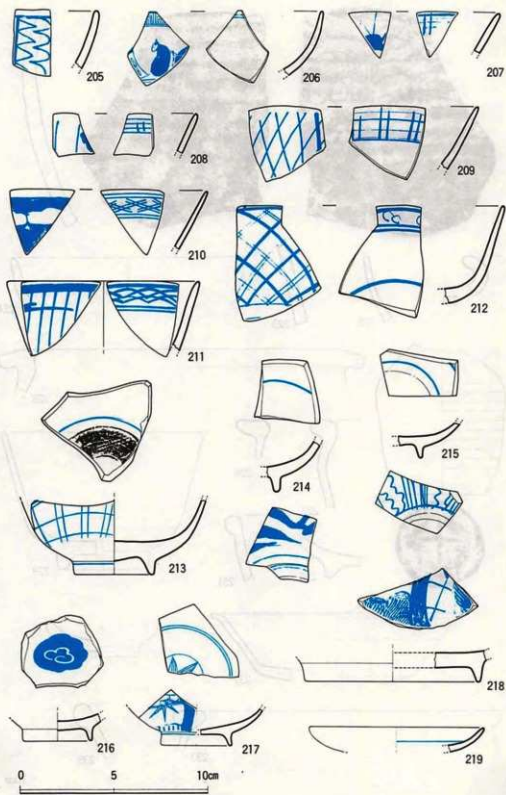


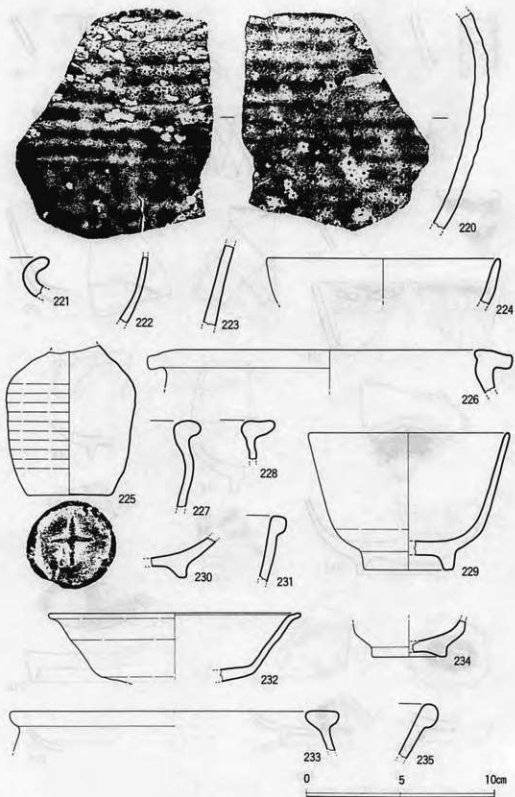


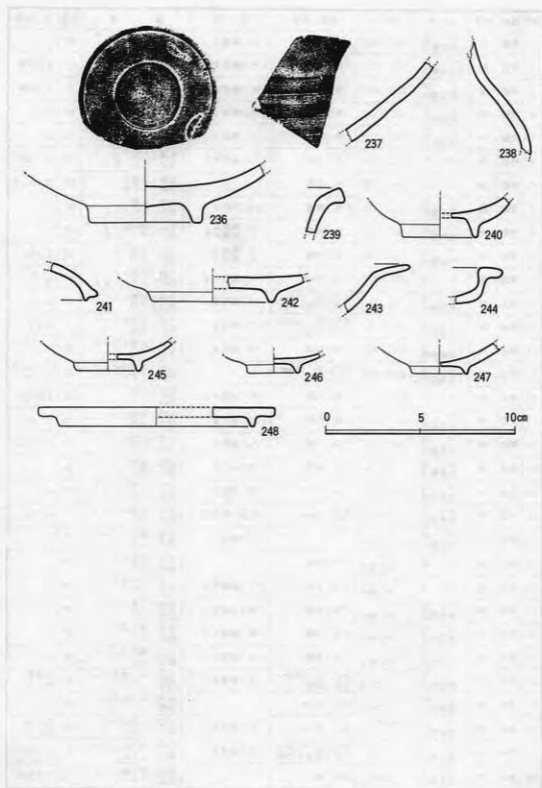












番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
1	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕佛指文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	95	
2	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕佛指文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	95	Ⅱ区西側
3	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕佛指文	{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	95	Ⅱ区西側
4	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕佛指文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢・貫入	95	No. 28
5	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕直線	〔内〕面花文	{色調 器面} 濃灰オリブ くすみ	95	SD-01
6	青磁	碗	中国	12C~13C	〔体〕外弯	〔内〕面花文?	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢・貫入	95	SD-03
7	青磁	碗	中国	12C~13C	〔体〕直線		{色調 器面} 灰黄オリブ くすみ	88	SX-01-Ⅱ
8	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕直線	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢がある	91	
9	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕内弯	{内} 面花文 {外} 簡蓮弁文	{色調 器面} 濃灰黄オリブ ややくすみ	95	
10	青磁	碗	中国 (同安系)	12C~13C	〔体〕内弯	{内} 佛指文? {外} 佛指文	{色調 器面} 灰黄白オリブ 光沢	95	Ⅱ区北
11	青磁	碗	中国	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰黄オリブ くすみ・貫入	91	No. 9
12	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	復元口径 15.8cm 〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	87	No. 14
13	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	復元口径 16.6cm 〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	93	Ⅱ区北
14	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕直線	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	91	No. 8
15	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	復元口径 18.4cm 〔体〕内弯		{色調 器面} 灰黄オリブ くすみ	88	SX-01-Ⅱ No. 209
16	青磁	碗	中国	12C~13C	〔体〕内弯	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰黄オリブ くすみ	95	Ⅱ区西側
17	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	88	No. 315
18	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	95	SD-01-02
19	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	95	
20	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	〔体〕内弯	〔内〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	87	No. 71
21	青磁	碗	中国 (竜泉系)	12C~13C	底径 5.8cm	〔内底〕面花文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	87	No. 220
22	青磁	皿	中国 (同安系)	12C~13C		〔内〕佛指文	{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	87	
23	青磁	碗	中国	12C~ 14C前半	〔体〕内弯		{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	87	
24	青磁	碗	中国	13C~ 14C前半	〔体〕直線	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰白青オリブ 光沢	90	
25	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C~ 14C前半	〔体〕直線	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢	87	
26	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C~ 14C前半	〔体〕直線	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 濃灰緑オリブ 光沢	90	No. 1
27	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C~ 14C前半	〔体〕直線	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	93	Ⅱ区
28	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C~ 14C前半	復元口径 18.0cm 〔体〕直線	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰白青オリブ くすみ	90	試掘Ⅱ No. 1
29	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C~ 14C前半	底径 5.1cm		{色調 器面} 濃灰緑オリブ 光沢	95	No. 25
30	青磁	碗	中国 (竜泉系)	13C末~ 14C	底径 4.5cm	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 灰白青オリブ 光沢	95	SX-01 No. 18
31	青磁	小鉢	中国 (竜泉系)	14C	復元口径 10.8cm 〔体〕大きく外弯	〔外〕簡蓮弁文	{色調 器面} 青白緑オリブ くすみ	87	No. 39
32	青磁	盤	中国 (竜泉系)	14C	溝縁口縁		{色調 器面} 青白緑オリブ くすみ	95	Ⅱ区西側

*〔体〕…体部 (口)…口縁部 (内)…内器面 (外)…外器面 (内底)…内底面 (外底)…外底面
*〔貞須〕…染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
33	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C	〔口〕外弯		{色調 器面} 灰黄オリブ 被熱・貫入	87	
34	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C前半	底径 4.6cm 内底面は無軸	{外}ヘラ描蓮弁文	{色調 器面} 緑灰白オリブ くすみ・貫入	93	Ⅱ区 No. 27
35	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C前半	〔口〕内弯 口縁部は肥厚	{外}ヘラ描蓮弁文	{色調 器面} 灰黄オリブ くすみ	90	
36	青磁?	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C前半	碗か鉢? 輪花口縁	{内}ヘラ彫り {外}ヘラ描文	{色調 器面} 緑灰白オリブ くすみ	90	試掘Ⅱ No. 23
37	青磁	碗	中国	14C後半～ 15C中葉	端反り碗		{色調 器面} 灰オリブ くすみ	94	
38	青磁	碗	中国	14C後半～ 15C中葉	端反り碗		{色調 器面} 緑灰オリブ くすみ・貫入	87	
39	青磁	碗	中国?	14C後半～ 16C中葉?	〔口〕内弯		{色調 器面} 灰白青オリブ くすみ・貫入	95	Ⅱ区西側
40	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C中葉	〔口〕内弯	{外}ヘラ描雷文帝	{色調 器面} 灰緑オリブ 光沢	88	I トレンチ
41	青磁	碗	中国	14C後半～ 15C中葉	端反り碗		{色調 器面} 灰緑白オリブ くすみ	91	表土
42	青磁	碗	中国	14C後半～ 15C中葉	端反り碗		{色調 器面} 緑灰オリブ くすみ	94	
43	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C中葉	{体}内弯	{外}ヘラ描雷文帝	{色調 器面} 緑灰白オリブ くすみ	95	
44	青磁	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C中葉	{体}内弯	{外}ヘラ描雷文帝	{色調 器面} 濃灰黄オリブ 光沢	87	
45	青磁?	碗	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C中葉	〔口〕内弯		{色調 器面} 濃灰緑オリブ くすみ	94	
46	青磁	香炉	中国 (電泉窯系)	14C後半～ 15C中葉	復元口径 7.5cm {体}直線		{色調 器面} 濃灰オリブ ややくすみ	88	No. 375
47	青磁	碗	中国	14C末～ 15C中葉	底径 4.6cm		{色調 器面} 濃灰オリブ 光沢	87	pit 41 No. 262
48	青磁	盤	中国	14C後半～ 15C	{体}内弯		{色調 器面} 白灰褐色 焼成不良	88	SX-01-I
49	青磁	碗	中国	15C中葉～ 15C末	〔口〕口縁	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 濃灰緑オリブ 光沢	94	
50	青磁	碗	中国	15C中葉～ 15C末	{体}内弯	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 濃灰青オリブ 光沢・貫入	95	Ⅱ区
51	青磁	碗	中国	15C中葉～ 15C末	{体}直線	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 灰緑オリブ くすみ	93	Ⅱ区北
52	青磁	碗	中国	15C中葉～ 16C前半	〔口〕直線	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 灰緑オリブ くすみ	95	Ⅱ区西側
53	青磁	碗	中国	15C中葉～ 16C前半	{体}内弯	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 灰白青オリブ くすみ	95	SD-03
54	青磁	皿	中国	15C中葉～ 16C前半	椀花形	{内}ヘラ描文	{色調 器面} 緑灰オリブ 光沢・貫入	88	Ⅱ トレンチ
55	青磁	皿	中国	15C中葉～ 16C前半	椀花形		{色調 器面} 白灰褐色 焼成不良	88	SX-01-II
56	青磁	皿	中国	15C中葉～ 16C前半	椀花形	{内}ヘラ描文	{色調 器面} 緑灰オリブ 光沢・貫入	93	Ⅱ区 No. 1
57	青磁	碗	中国	15C中葉～ 16C中葉	復元底径 4.5cm	{外}刺先蓮弁文 {内底}印花文	{色調 器面} 黄灰オリブ 光沢・貫入	88	No. 380
58	青磁	碗	中国	15C中葉～ 16C中葉	底径 4.2cm	{内底}印花文	{色調 器面} 灰黄緑オリブ くすみ・貫入	88	SX-05 No. 288
59	青磁	碗	中国	15C後半～ 16C中葉	復元口径 11.2cm {体}内弯	{外}ヘラ描刺先蓮弁文	{色調 器面} 灰白青オリブ 光沢・貫入	87	
60	青磁?	碗	中国 (福島の窯系)	16C後半	{体}内弯	{外}線描蓮弁文	{色調 器面} 灰黄オリブ 光沢・貫入	93	Ⅱ区北
61	青磁?	皿	中国 (福島の窯系)	16C後半	菊形皿 {体}内弯	{外}ヘラ描文	{色調 器面} 灰白色 光沢・貫入	88	Ⅱ トレンチ
62	青磁?	碗	中国 (福島の窯系)	16C後半～ 17C初頭	復元口径 14.0cm {口}内弯	{外}線描波状文	{色調 器面} 灰白青色 光沢・貫入	88	I トレンチ
63	青磁?	碗	中国 (福島の窯系)	16C後半～ 17C初頭	{体}内弯	{外}線描波状文	{色調 器面} 灰白青色 光沢・貫入	88	I トレンチ
64	青磁?	碗	中国 (福島の窯系)	16C後半～ 17C初頭			{色調 器面} 青白色 光沢・貫入	88	I トレンチ

* {体}…体部 {口}…口縁部 {内}…内器面 {外}…外器面 {内底}…内底面 {外底}…外底面

* {呉須}…染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土 年度	出土箇所
65	青磁?	碗	中国 (福建省広東省系)	16C後半~ 17C初頭			{色調} 青白緑色 {器面} 光沢・貫入	88	I トレンチ
66	青磁?	盤	中国 (福建省広東省系)	16C後半~ 17C前半	{口}大きく外弯		{色調} 白青灰色 {器面} 光沢	87	
67	青磁?	盤	中国 (福建省広東省系)	16C後半~ 17C前半	{体}外弯		{色調} 白青灰色 {器面} 光沢	88	SK-01
68	青磁?	肥前系		17C	香炉?		{色調} 灰緑白オリーブ {器面} 光沢	89	空堀
69	青磁?	肥前系		17C末~ 18C中葉	灰落とし? 復元口径 6.9cm		{色調} 灰白青オリーブ {器面} 光沢	95	II区西側
70	白磁	碗	中国	12C~13C	玉縁口縁		{色調} 灰乳褐色 {器面} 光沢	95	
71	白磁	碗	中国	12C~13C	玉縁口縁		{色調} 灰白色 {器面} ややくすみ	95	No. 26
72	白磁?	碗	中国	12C~13C?	{口}直線		{色調} 灰白色 {器面} 光沢・貫入	88	SX-01-II
73	白磁?	碗	中国?	12C~13C?	{体}直線		{色調} 灰白色 {器面} くすみ・貫入	88	SX-04
74	白磁	碗	中国?	12C~13C	玉縁口縁 復元口径 16.2cm		{色調} 灰乳褐色 {器面} くすみ・貫入	95	
75	白磁	碗	中国	12C~13C	{体}直線	{外}脚描文	{色調} 灰乳褐色 {器面} 光沢	95	SD-03
76	白磁	碗	中国	12C~13C	{口}外弯	{外}脚描文	{色調} 灰白色 {器面} くすみ	95	
77	白磁?	?	中国	12C~13C?	碗か皿?		{色調} 灰白緑色 {器面} くすみ	95	
78	白磁?	?	中国?	12C~13C?	碗か皿?		{色調} 灰白緑色 {器面} 光沢・貫入	94	
79	白磁	皿	中国	12C~13C	{口}外弯		{色調} 灰白緑色 {器面} 光沢	95	
80	白磁	皿	中国	12C~13C	{内底}蛇目軸刺ぎ 底径 4.6cm		{色調} 灰白緑色 {器面} 光沢	90	試掘II No. 40
81	白磁	皿	中国	13C~ 14C中葉	口壳付 復元口径 10.7cm		{色調} 灰青色 {器面} くすみ	95	II区北
82	白磁	皿	中国	13C~ 14C中葉	口壳付 復元口径 12.1cm		{色調} 灰白色 {器面} くすみ	87	
83	白磁	皿	中国	13C~ 14C中葉	復元底径 6.1cm		{色調} 白灰緑色 {器面} 光沢	87	
84	白磁	皿	中国	13C~ 14C中葉	復元底径 5.5cm		{色調} 白灰青色 {器面} 光沢	87	SX-04 No. 150
85	白磁	皿	中国	14C後半~ 15C中葉	復元底径 3.5cm		{色調} 白乳褐色 {器面} 光沢・貫入	93	I区 No. 10
86	白磁	碗	?	?	{体}直線		{色調} 白灰色 {器面} 焼成不良	95	
87	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	{口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} 光沢・貫入	95	SD-03
88	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	{口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} くすみ	87	
89	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	{口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} 焼成不良	88	SX-01-II No. 104
90	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	{口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} 焼成不良	88	II トレンチ
91	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	復元口径 15.3cm {口}外弯		{色調} 白乳褐色 {器面} 焼成不良	87	
92	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	復元口径 12.0cm {口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} 焼成不良	90	
93	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	復元口径 12.0cm {口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} 光沢	87	
94	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	復元口径 11.8cm {口}外弯		{色調} 白灰色 {器面} くすみ	88	No. 366
95	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C	復元口径 12.4cm 復元底径 7.2cm	器高 3.2cm {口}外弯	{色調} 白灰青色 {器面} くすみ	93	II区
96	白磁	皿	中国 (景徳鎮)	15C末~ 16C			{色調} 白乳褐色 {器面} くすみ	88	表土

* {体}…体部 {口}…口縁部 {内}…内器面 {外}…外器面 {内底}…内底面 {外底}…外底面
* {真須}…糸付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
97	白磁	皿	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 16C中葉	復元底径 6.6cm	{ 外底 } 染付銘あり	{ 色調 } 白灰色 { 器面 } 光沢	87	
98	白磁	皿	中 国 (景 徳 鎮)	16C	口径 11.8cm 底径 6.9cm 器高 3.1cm	{ 体 } 内弯 { 口 } 外弯	{ 色調 } 白灰色 { 器面 } 光沢	88	SK-01 No. 31
99	白磁	皿	中 国	16C	{ 体 } 内弯 { 口 } 外弯		{ 色調 } 灰色 { 器面 } 光沢 { 胎土 } 重い	87	
100	白磁	皿	中 国 (福建省広東省系)	16C～ 17C初頭	底径 4.1cm { 内底 } 無軸		{ 色調 } 白灰緑色 { 器面 } 光沢・貫入	88	SX-01-I No. 183
101	白磁	皿	中 国 (福建省広東省系)	16C後半～ 17C初頭	口径 11.8cm 底径 6.9cm 器高 3.1cm	{ 体 } 内弯 { 口 } 外弯	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢・貫入 { 底部 } 粉粒が堆積	88	SK-01
102	白磁	?	肥前系?	17C前半?	碗小皿?		{ 色調 } 白乳濁色 { 器面 } 光沢・貫入	95	表土
103	白磁	碗	肥前系	18C後半～ 19C前半	復元口径 11.6cm { 口 } 外弯		{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	89	空堀
104	白磁	碗	九州産 (在地?)	18C後半～ 19C	復元底径 7.4cm 白化藍+透明軸		{ 色調 } 白灰色 { 器面 } 光沢・貫入	91	No. 4
105	白磁	碗?	肥前系	18C～19C	復元口径 11.2cm { 体 } 直線		{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	89	空堀
106	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半	{ 口 } 外弯	{ 外 } 花鳥文? { 具須 } 薄青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	87	
107	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 口 } 直線	{ 具須 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	II トレンチ
108	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 口 } 直線	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	SX-01-I
109	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 口 } 内弯	{ 具須 } 青黒色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	88	表土
110	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 直線	{ 外 } 唐草文? { 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	88	II トレンチ
111	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 直線	{ 外 } 唐草文? { 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	87	
112	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	小碗 { 体 } 内弯	{ 外 } 花鳥文? { 具須 } 薄黒青	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	91	
113	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	復元口径 13.4cm { 口 } 直線	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	表土
114	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	復元口径 11.9cm { 口 } 直線	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青 { 器面 } 光沢	88	I トレンチ
115	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 外 } 波瀾文 { 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰青色 { 器面 } 光沢	88	I トレンチ
116	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯 途中で肥厚	{ 具須 } 青黒色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	87	SX-14
117	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 直線	{ 具須 } 青黒色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	88	表土
118	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 外 } 草花文? { 具須 } 薄青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	87	SX-14
119	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } ややくすみ	93	II区 No. 30
120	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 外 } 蕉葉文 { 具須 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	87	
121	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 外 } 唐草文? { 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	93	II区 No. 11
122	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 内弯	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 白青灰色 { 器面 } くすみ・貫入	88	No. 341
123	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	{ 体 } 直線	{ 具須 } 青黒色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	No. 342
124	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	底径 5.8cm	{ 具須 } 黒青色	{ 色調 } 薄灰オリブ色 { 器面 } 光沢	87	
125	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	菓子形 復元底径 5.8cm	{ 外 } 草花文 { 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	IIトレンチ No. 597
126	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	菓子形	{ 具須 } 黒青色	{ 色調 } 灰白色 { 器面 } 光沢	88	SX-01-II
127	染付	碗	中 国 (景 徳 鎮)	16C前半～ 中葉	菓子形 復元底径 4.6cm	{ 具須 } 薄黒青色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	88	SD-01

* { 体 } …体部 { 口 } …口縁部 { 内 } …内器面 { 外 } …外器面 { 内底 } …内底面 { 外底 } …外底面
* { 具須 } …染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
128	染付	小皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	香筒底皿 復元口径 10.5cm 復元底径 2.6cm 器高 2.5cm	{ 外口縁 } 波濤文 { 外側部 } 蕉葉文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	SK-01 No. 13
129	染付	小皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	香筒底皿	{ 外口縁 } 波濤文 { 外側部 } 蕉葉文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	95	Ⅱ区北
130	染付	小皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	香筒底皿	{ 外口縁 } 波濤文 { 外側部 } 蕉葉文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 光沢	88	SK-01
131	染付	小皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	香筒底皿 復元口径 9.7cm	{ 外口縁 } 波濤文 { 外側部 } 蕉葉文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰青色 { 器面 } 光沢	88	SX-01-I
132	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 口 } 外弯	{ 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	Ⅱ トレンチ
133	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 口 } 外弯	{ 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰青色 { 器面 } 光沢	88	Ⅱ トレンチ
134	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内外 } 銘蓮弁文 { 口 } 外弯	{ 内 } 金玉鳳凰の堂 { 外側部 } 黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } 被熱	87	pit 40
135	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内外 } 花唐草文 { 内側部 } 黒青色	{ 色調 } 灰青白色 { 器面 } くすみ	88		
136	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内外 } 花唐草文 { 内側部 } 黒青色	{ 色調 } 灰白青色 { 器面 } くすみ	87		
137	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内底 } 十字花文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	94		
138	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内底 } 十字花文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	95		
139	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉		{ 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	93	
140	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉		{ 内底 } 玉取獅子文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 白色 { 器面 } 光沢	95	Ⅱ区
141	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	復元口径 13.0cm	{ 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 被熱	87	pit 40
142	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉		{ 内底 } 草花文 { 内側部 } 黒青色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	87	
143	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	復元口径 12.6cm 復元底径 6.6cm 器高 3.7cm	{ 内外 } 唐草文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	90	
144	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C前半～ 中葉	{ 内外 } 花唐草文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	SD-01	
145	染付	碗	中国 (景徳鎮?)	16C	復元口径 11.8cm { 体 } 内弯	{ 外 } 蕉葉文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 灰乳褐色 { 器面 } くすみ・貫入	87	
146	染付	皿	中国 (景徳鎮)	16C		{ 内底 } 草花文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 灰白色 { 器面 } 光沢	87	SK-03
147	染付	碗	中国 (福建省東莞県)	16C後半	{ 体 } 内弯	{ 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 灰オリーブ色 { 器面 } 光沢	93	Ⅱ区北
148	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	{ 体 } 直線	{ 内側部 } 黒青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	表土
149	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	{ 体 } 直線	{ 内底 } 草花文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白青色 { 器面 } 光沢	87	
150	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	{ 体 } 内弯	{ 外 } 蕉葉文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	表土
151	染付	碗	中国 (福建省東莞県)	16C後半	{ 体 } 内弯	{ 外 } 蕉葉文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	87	
152	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	復元口径 10.4cm { 体 } 内弯	{ 外 } 飛雲・馬 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	表土
153	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	復元口径 10.6cm { 体 } 内弯	{ 外 } 龍文 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	SK-01
154	染付	碗	中国 (福建省系)	16C後半	復元口径 13.8cm { 体 } 内弯	{ 外 } 草花 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 白灰色 { 器面 } 光沢	88	pit 4
155	染付	碗	中国 (景徳鎮)	16C後半	復元口径 11.8cm { 体 } 内弯	{ 外 } 飛雲・馬 { 内側部 } 青黒色	{ 色調 } 白灰青色 { 器面 } 光沢	88	SX-01-Ⅲ No. 67・201
156	染付	碗	中国 (福建省東莞県)	16C後半	復元口径 13.0cm { 体 } 直線	{ 内底 } 草花文 { 内側部 } 薄黒青色	{ 色調 } 薄灰オリーブ色 { 器面 } 光沢・貫入	88	SX-01-I No. 167

* { 体 } … 体部 { 口 } … 口縁部 { 内 } … 内器面 { 外 } … 外器面 { 内底 } … 内底面 { 外底 } … 外底面

* { 内側部 } … 染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
157	染付	碗	中国	16C後半?	{内底}蛇目輪調子 復元底径 5.0cm	{呉須}薄青色	{色調}灰白色 {器面}光沢	87	
158	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C後半	饅頭心形	{外底}[長命富貴]の命 {呉須}青黒色	{色調}白青色 {器面}光沢	88	SX-01-Ⅱ
159	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C後半	饅頭心形 底径 4.5cm	{内底}花卉文 {外底}[萬福攸同] {呉須}青黒色	{色調}白灰青色 {器面}	87	
160	染付?	?	中国 (福建省広東系)	16C後半	碗か皿?	{呉須}黒青色	{色調}白灰色 {器面}光沢・貫入	88	SX-01-Ⅰ
161	染付	皿	中国 (福建省広東系)	16C後半	蒜筒底皿 {体}内凹	{呉須}薄青黒色	{色調}オリーブ色 {器面}光沢・貫入	95	
162	染付	皿	中国 (福建省広東系)	16C後半	{口}外凹	{呉須}薄黒青色	{色調}灰オリーブ色 {器面}くすみ・貫入	88	SX-04
163	染付	皿	中国 (福建省広東系)	16C後半	蒜筒底皿 復元口径 10.0cm 復元底径 3.2cm	{呉須}薄黒青色	{色調}灰オリーブ色 {器面}くすみ	88	I トレンナ
164	染付	皿	中国 (福建省広東系)	16C後半	復元底径 4.6cm	{内底}菊花文 {呉須}黒青色	{色調}灰白青色 {器面}光沢・貫入	88	II トレンナ
165	染付	皿	中国 (福建省広東系)	16C後半		{呉須}薄黒青色	{色調}灰オリーブ色 {器面}くすみ・貫入	88	SX-05 No. 287
166	染付	皿	中国 (景德鎮)	16C後半		{呉須}青色	{色調}白青色 {器面}光沢	95	II区
167	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C末 (1580~ 1600)	饅頭心形 口径 12.5cm 底径 5.0cm 器高 6.0cm	{内底・外}覆文 {呉須}青黒色	{色調}灰白青色 {器面}	88	SX-02
168	染付	小坏	中国 (景德鎮)	16C後半~ 17C初頭	復元口径 6.4cm {体}内凹	{呉須}黒青色	{色調}灰白色 {器面}光沢	88	SX-01-Ⅱ No. 66
169	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C後半~ 17C初頭	{体}直線	{呉須}青黒色	{色調}白青色 {器面}光沢	91	表土
170	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C後半~ 17C初頭	{体}内凹	{外}草花文 {呉須}青黒色	{色調}灰白色 {器面}光沢	88	SX-01-Ⅰ
171	染付	碗	中国 (福建省広東系)	16C後半~ 17C初頭	復元口径 14.0cm {体}直線	{呉須}薄黒青色	{色調}白乳褐色 {器面}くすみ	87	
172	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C末~ 17C初頭	{口}外凹	{内}四方樺文 {呉須}青黒色	{色調}白灰青色 {器面}光沢	95	
173	染付	碗	中国 (景德鎮?)	16C末~ 17C初頭	{体}直線	{呉須}薄群青色	{色調}白灰色 {器面}ややくすみ	89	空欄
174	染付	碗	中国	16C末~ 17C初頭	{口}外凹	{呉須}薄黒青色	{色調}灰色 {器面}光沢	88	SX-01-Ⅰ
175	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C末~ 17C初頭	{口}外凹	{外}唐草文 {呉須}青黒色	{色調}白灰青色 {器面}光沢	94	
176	染付	碗	中国 (景德鎮?)	16C末~ 17C初頭	{体}内凹	{呉須}薄黒青色	{色調}灰白青色 {器面}光沢	88	pit 4
177	染付	碗	中国 (景德鎮)	16C末~ 17C初頭 (1580~ 1610)	復元口径 12.0cm 底径 5.0cm 器高 6.8cm	{外}牡丹唐草 {内}四方樺文 {外底}[富貴佳器] {呉須}青黒色	{色調}灰白青色 {器面}光沢	90	SX-01
178	染付	碗	中国 (福建省広東系)	16C末~ 17C初頭	{体}内凹	{呉須}薄青黒色	{色調}灰白色 {器面}ややくすみ	88	No. 328
179	染付	碗	肥前系 (1650~1670)	17C中葉	{体}直線	{外}[寿]文字 {呉須}青色	{色調}白青色 {器面}光沢	94	
180	染付	碗	肥前系	17C後半	{体}直線	{呉須}薄青黒色	{色調}白灰青色 {器面}光沢	88	No. 388
181	染付	碗	肥前系	17C後半	復元底径 4.3cm {体}内凹	{外}網目文 {呉須}乳青黒色	{色調}乳褐色 {器面}ややくすみ	93	II区 No. 26
182	色絵	碗	肥前系	17C後半~ 18C前半	復元口径 11.2cm {体}内凹	{外}草花文 {呉須}紅灰色	{色調}灰白色 {器面}光沢	95	II区西側
183	色絵	碗	肥前系	17C後半~ 18C前半	復元口径 11.1cm {体}内凹	{呉須}紅灰色	{色調}白灰色 {器面}光沢	95	井戸跡
184	染付	碗	在地?	17C後半~ 18C?	底径 6.5cm	{呉須}薄青黒色	{色調}灰色 {器面}光沢	95	II区西側
185	染付	碗	肥前系	18C前半	{体}直線	{外}菊花文 {内}四方樺文 {呉須}青黒色	{色調}白灰色 {器面}光沢	94	

* {体}…体部 {口}…口縁部 {内}…内器面 {外}…外器面 {内底}…内底面 {外底}…外底面

* {呉須}…染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
186	染付	皿	肥前系	18C前半	輪花口縁	〔内〕梅・竹など 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	90	
187	染付	碗	肥前系	18C前半～ 中葉	〔内底〕蛇目輪刺ぎ 復元底径 4.4cm	〔具須〕薄青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	95	SD-03 No. 20
188	染付	碗	肥前系	18C前半～ 中葉	〔体〕直線	〔内〕四方博文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	95	
189	染付	皿	肥前系	18C前半～ 中葉	〔体〕内弯	〔内〕つる草文 〔具須〕青黒色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	88	SX-01-I
190	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	〔体〕内弯	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	94	
191	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	〔体〕内弯	〔具須〕黒青色	〔色調〕白灰褐色 〔器面〕光沢	94	
192	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	〔体〕内弯	〔外〕丸文? 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	90	
193	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	復元口径 9.7cm 〔口〕内弯	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	90	
194	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	復元口径 9.6cm 〔口〕内弯	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕くすみ	95	Ⅱ区西側
195	染付	碗	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	復元口径 9.0cm 〔口〕内弯	〔外〕草花文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕白灰色 〔器面〕くすみ	95	
196	染付	碗	肥前系	18C後半	〔体〕内弯	〔外〕人物文 〔具須〕青黒色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	87	
197	染付	小碗	肥前系	18C後半	筒型 復元底径 4.3cm	〔内底〕五弁花コニヤク 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕内灰白青 外灰白 〔器面〕光沢	95	Ⅱ区
198	染付	皿	肥前 (波佐見窯系)	18C後半	〔内底〕蛇目輪刺ぎ 復元底径 8.4cm	〔内底〕五弁花コニヤク 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕ややくすみ	94	
199	染付	碗	肥前系	18C中葉～ 末	〔体〕直線	〔内〕四方博文 〔具須〕薄黒色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	94	
200	染付	?	肥前系	18C後半～ 19C初頭	小碗小径口? 〔体〕直線	〔内〕四方博文 〔具須〕薄青色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	89	空堀
201	染付	小碗	肥前系	18C末～ 19C初頭	〔体〕内弯	〔外〕梅花に隣文 〔具須〕薄黒色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	94	
202	染付	小碗	肥前系	18C末～ 19C初頭	〔体〕直線	〔具須〕黒青色	〔色調〕白灰青色 〔器面〕光沢	95	
203	染付	碗	肥前系	18C末～ 19C初頭	筒型(湯飲み)	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	88	SX-01-II
204	染付	碗	肥前系	18C末～ 19C前半	広底形 復元底径 5.3cm	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	95	
205	染付	小碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	〔体〕内弯	〔外〕曲線文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕白色 〔器面〕光沢	95	Ⅱ区西側
206	染付	小碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	〔体〕内弯	〔外〕唐人文 〔具須〕青黒色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	91	表土
207	染付	小碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗	〔具須〕薄黒色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	94	
208	染付	小碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗	〔具須〕黒青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	87	
209	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗	〔外〕斜格子文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	91	表土
210	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗	〔内〕四方博文 〔具須〕青黒色	〔色調〕白乳褐色 〔器面〕ややくすみ	87	
211	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗 復元口径 10.2cm	〔外〕鶴文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	91	
212	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り碗	〔外〕斜格子文 〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	91	
213	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	〔内底〕蛇目輪刺ぎ 復元底径 4.3cm	〔外〕格子文 〔具須〕薄青色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	89	空堀
214	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	〔体〕内弯	〔具須〕薄黒青色	〔色調〕灰白色 〔器面〕光沢	89	空堀
215	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	〔内底〕蛇目輪刺ぎ	〔外〕よろけ鶴文 〔具須〕薄黒色	〔色調〕灰白青色 〔器面〕光沢	91	表土
216	染付	碗	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	底径 3.7cm	〔内底〕言文(墨押き) 〔具須〕青黒色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	94	
217	染付	皿	肥前系	19C中葉 (1820～1860)	端反り形 復元底径 3.8cm	〔内外〕竹文様 〔具須〕青黒色	〔色調〕白灰色 〔器面〕光沢	89	空堀

*〔体〕…体部 〔口〕…口縁部 〔内〕…内器面 〔外〕…外器面 〔内底〕…内底面 〔外底〕…外底面
*〔具須〕…染付磁器の藍色顔料。

番号	器類	器種	産地	時代	形態・特徴	文様	備考	出土年度	出土箇所
218	染付	皿	肥前系	19C中葉 (1820~1860)	蛇ノ目彫形高台 復元底径 9.4cm	〔具須〕青黒色	{色調} 白灰色 {器面} 光沢・貫入	91	No. 5
219	染付	小皿	肥前系	19C~幕末	{内底} 蛇目輪割ぎ 復元口径 9.3cm	〔具須〕薄青色	{色調} 灰白色 {器面} 光沢	94	
220	陶器	壺	中国?	14C? (室町時代?)	{外} 凹凸がある		{色調} 黒灰褐色(黒軸) {器面} ややくすみ	88	SX-01-I No. 176
221	陶器	壺	タイ?	15C~16C	{口} くの外弯		{色調} 灰茶色	95	SD-03
222	陶器	袋物	朝鮮?	15C~16C?	{体} 内弯		{色調} 灰黒色+乳灰褐色	88	SX-01-II
223	陶器	壺	肥前系	1580~1610	密雲類 {体} 直線	{内} 青海波の叩き痕	{色調} 乳灰褐色+灰黒色	93	II区
224	陶器	?	肥前系	1590~1610	碗か皿? 復元口径 12.4cm		{色調} 灰桃白色(灰軸)	88	表土
225	陶器	小瓶	肥前系	1580~1610	胴部径 上径 8.3cm 中径 8.4cm 下径 8.4cm 底径 4.5cm		{色調} 黒褐色(鉄軸) 乳灰褐色 {筋志} 小豆色 {器面} 顔かを貫入	91	No. 33
226	陶器	壺?	肥前系	1580~1630	叩き成形 復元口径 16.5cm		{色調} 灰乳褐色	95	井戸跡
227	陶器	鉢?	肥前系	1580~1630	{口} 外弯		{色調} 外: 灰桃褐色 内: 茶褐色	95	II区西側
228	陶器	鉢	肥前系か 在地?	1580~1630	片口鉢 口縁部に白灰軸		{色調} 灰黒小豆色	95	II区
229	陶器	碗	肥前系	1600~1630	復元口径 10.6cm 復元底径 4.8cm 器高 7.2cm		{色調} 灰白茶色 {器面} 光沢・貫入	93	I区
230	陶器	?	九州産?	17C前半?	砂目積み痕		{色調} 褐白灰色	88	SX-01-II
231	陶器	鉢	肥前系	17C前半	片口鉢		{色調} 外: 灰褐色 内: 灰茶色(褐軸)	95	
232	陶器	皿	肥前系	1600~1630	漆緑皿 復元口径 13.4cm		{色調} 灰白褐色 {器面} ややくすみ	93	
233	陶器	鉢?	九州産	17C前半	復元口径 16.3cm {口} 肥厚		{色調} 灰黒小豆色		
234	陶器	碗?	肥前系?	17C後半	復元底径 4.0cm		{色調} 黄緑オリーブ色 {器面} 光沢・貫入	88	No. 348
235	陶器	摺鉢	肥前系	17C後半	玉縁口縁 口端のみ鉄軸		{色調} 灰小豆色	95	井戸跡
236	陶器	皿	肥前 (内野山産)	17C後半	銅緑軸と直線の掛け分け {内底} 蛇目輪割ぎ 復元底径 6.1cm		{色調} 灰黒緑色 明褐色	95	井戸跡
237	陶器	皿	肥前系	17C	二彩手? (銅目の上・鉄軸取)		{色調} 緑黒灰色(鉄軸)	91	No. 17
238	陶器	瓶	九州産?	17C?			{色調} 灰黒褐色(褐軸)	93	
239	陶器	鉢?	九州産	17C?			{色調} 灰小豆色	95	II区
240	陶器	碗	九州産	18C	復元底径 4.0cm		{色調} 灰緑オリーブ色 {器面} 光沢・貫入	94	
241	陶器	蓋	九州産	18C?		{外} 竹? {具須} 鉄軸	{色調} 灰白褐色 {器面} 光沢・貫入	95	II区西側
242	陶器	?	在地?	18C~19C	碗か皿? 復元底径 6.6cm		{色調} 灰乳褐色 {器面} 光沢・貫入	95	SD-01-02
243	陶器	皿	在地?	18C~19C	{口} 外弯		{色調} 黄緑褐色(灰軸)	90	
244	陶器	蓋	九州産	18C~19C			{色調} 黒灰褐色(褐軸)	91	表土
245	陶器	碗	関西系	18C後半~ 19C前半	復元底径 3.0cm {体} 内弯		{色調} 白乳褐色 {器面} 光沢・貫入	93	I区 No. 9
246	陶器	小碗	関西系	18C後半~ 19C前半	底径 2.9cm		{色調} 灰白緑色 {器面} 光沢・貫入	88	No. 314
247	陶器	小碗	関西系	18C後半~ 19C前半	復元底径 3.0cm {体} 内弯		{色調} 灰白青色 {器面} 光沢・貫入	91	No. 6
248	陶器	蓋	?	明治以降	復元口径 12.5cm		{色調} 明緑色(緑軸)	95	

* {体}…体部 {口}…口縁部 {内}…内器面 {外}…外器面 {内底}…内底面 {外底}…外底面

* {具須}…染付磁器の藍色顔料。

出土年度別遺物一覧表

(単位：個)

出土年度 時代の大別	87年		88年		89年		90年		91年		93年		94年		95年	
	青	白	陶	白	陶	青	白	陶	青	白	陶	青	白	陶	青	白
12C~13C	5			3	2			1		3		1		1	11	7
13C~14C	1	3					3				1				1	1
14C~15C	4		1	2			2		1		1	1	3		4	
15C~16C	2	3	1	10	4	1		1			3	1	1	3	1	1
16C~17C	1	2	17	1	3	39	1	1	2	2	1	4	1	2		6
17C~18C					1	2				1	1	1	3	1	1	1
18C~19C	1			2	1	2	1	3	1	1	2	1	1	6	1	6
19C~20C		2							6					3		2
不 詳																1

* 器類 青…青磁 白…白磁 糸…灰付 陶…陶器

〔付論 3〕

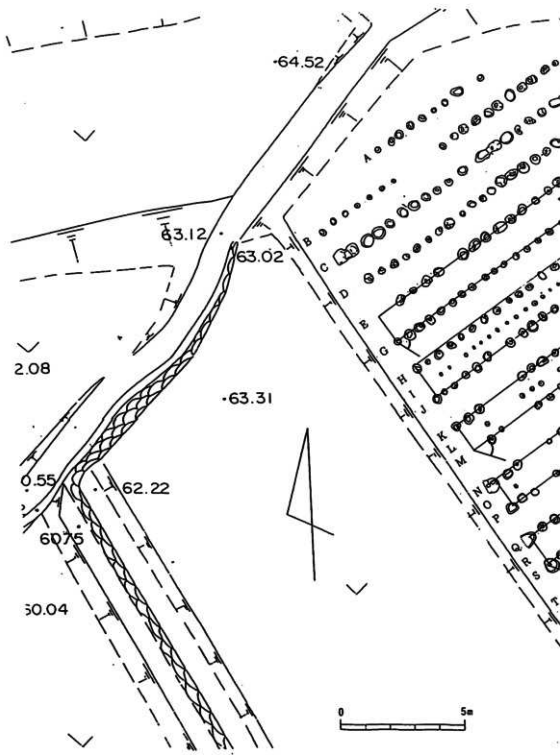
〔平成4年度調査で検出された柱列について〕

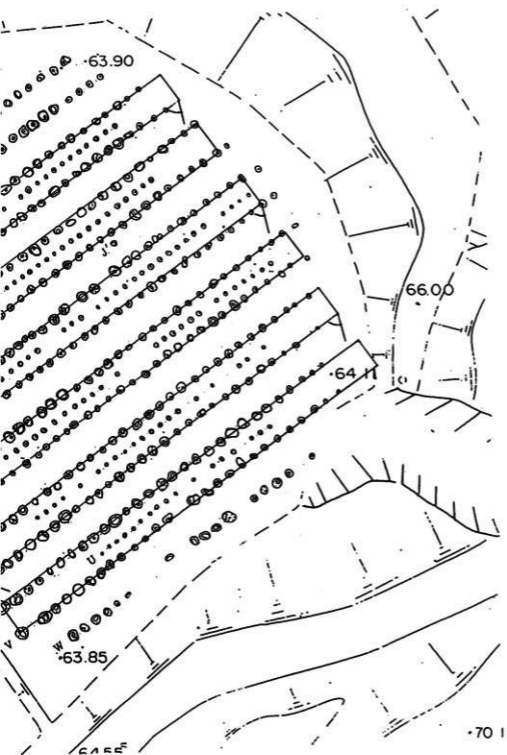
大三輪 龍彦（鶴見大学文学部教授）

平成4年度の発掘調査は城跡南西の裾部に当る平場について実施され、23の柱列が確認されている。三和町文化財調査報告第7集『田中城跡 VII』によれば「遺構としては整然と並ぶ柱列が23列確認されただけである。全てほぼ並行に並んでおり、N56°Eに主軸をとる。柱穴の大きさには大小二通りがあり、大きいものが17列、小さいものが6列で大きいものは長径16.0～127.0cm、短径10.0～58.5cm、深さ3.8～28.6cm、柱穴間隔約40～70cm、小さいもので長径12.0～26.0cm、短径9.5～22.5cm、深さ2.3～12.1cm、柱穴間隔約40～50cmとバラツキがある。さらに、大きな柱列の間隔は1.2～1.5mあり、この間に小さな柱列が並んでいる。いずれも、後世の耕作などで上部をかなりカットされており、底部のみが辛うじて残っていたという状況であるが、大きい柱穴の方には柱痕跡の底と思われるものが多数見られた。このことから何等かの構築物があったことは確実と思われる。」とされている。報告書の遺構配置図では、柱列を北から順にA～W列としている。そのうちA・B・C・D・E・G・H・J・K・M・N・P・Q・S・T・V・Wの17列が大きい柱列で、F・I・L・O・R・Uの6列が小さい柱列である。小さい柱列はFがE・Gの間に、IがHとJ、LがKとM、OがNとP、RがQとS、UがTとVの大きい柱列の中間に位置している。また、柱穴の残存状況は北側程悪いようである。さて、この23列の柱列をどのように考えるかであるが、可能性としては欄列あるいは建造物が考えられよう。まず欄列としてこれらの柱列群を見ると柱穴は平場の全面にわたって掘られており、しかも城の防備のためのものとする、この平場が西に向って開口する谷の裾部に位置することからして、南北方向の欄を想定せざるを得ない。とすると、欄と欄の間隔は40～50cmということになり、平場内での兵員の移動は不可能となってしまう。調査地内出土の遺物も小片とはいいながら染付や青磁といった中国磁器等や土師器片が多数出土しており、他に火舎の断片も3片認められる。これらの遺物は何れも生活道具であり、この平場において生活が営まれたことを示している。また、他に大小の鉄砲玉8個が出土しており、何らかの攻撃目標となっていたことが予想される。山口県立文書館蔵の毛利文庫絵図の中に『迎春・和仁仕寄陣取図』がある。この図は天正十五年（1587）の肥後国衆一揆の際の田中城攻めに関する仕寄陣取図で、攻撃の陣取と城方の様子が描かれている。この図によれば、柱列の検出された平場は豊臣秀吉軍の総大将小早川秀包陣の正面にあたり、そこには欄に囲まれた中に18棟の建物が描かれていて、何らかの建造物の存在が推測される。報告書でも「大きい柱穴には柱痕跡と思われるものが多数見られ、何等かの建物遺構であったことは確実であろう。」と柱列が建物の遺構の可能性が強いことを示す。また、同報告書では「専門調査

委員の意見は、和仁軍の連棟式長屋（兵舎）跡ではないかということでは一致しているが、どの柱列をセットとして考えるかで異なっている。基本的に2列の大きな柱列で建物を構成することに異論はないが、これと小さな柱列をどうからめるかということが問題である。今のところ、間に挟み束柱とする大2・小1の3列を1セットとする考えと両外側の受けとする大2・小2の4列を1セットとする考えがある。しかし、大きな柱列の間隔が1.2～1.5mしかなく、兵士が寝泊りするには狭すぎないか、また、柱穴と柱穴の間隔も非常に狭く、数が多すぎるのではないかなどの疑問が残る。」として連棟式長屋の可能性が高いことを指摘し、柱列の組合せを大2・小1と大2・小2の二通りの組合せを挙げるが、大きな柱穴の南北間隔が1.2～1.5mしかないことから兵士の寝泊りする長屋としては狭すぎるのではないかと疑問を呈している。確かに大2・小1の組合せではいかにも狭く、大2・小2の組合せでも狭いことに変わりはない。この疑問を解消するためには発想の転換、つまり柱列の組合せを大2・小1と大2・小2の組合せに限定せず、異なった組合せを考えてみる必要があるのではないだろうか。柱穴の残存状況は全て良好な状態とはいえないが、比較的残りが良いと思われるE列からV列について考えてみたいと思う。例えば、E・F・G・H・I・J列を1セット、K・L・M・N・O・P、Q・R・S・T・U・V列をそれぞれ1セットとして考えてみたらいかがであろうか。つまり、大4・小2の組合せである。仮にE～J列を例にとれば、E列とJ列が側柱、G列とH列を框柱、F列とI列を床束柱と考えられはしないか。つまり、E列・J列を側柱として外壁板を張り廻らす。E列とG列、H列とJ列の東と西の柱は壁板でつなぐ。G列とH列を束柱として框材を支え、E列とG列、H列とJ列の間には床板を張り、FとIの小柱穴列は床板を支える床束である。G列とH列の間は土間の通路と考える。こうして考えると、E～J列をセットとする建物は3.6m以上（12尺以上）×13.5m以上（45尺以上）で建物面積は48.6㎡以上（15坪以上）となり、決して狭い面積とはいえない。また、寝泊りに必要な床板を張った部分も32.2㎡以上（10坪以上）を確保することが可能である。

北海道江別市の野幌森林公園内に北海道開拓の村という野外博物館がある。この博物館では、広大な園地内に道内に遺されていた近代建築を移築して野外展示している。その一角の森の中に、かつて、北海道開拓の際に森林伐採の作業に従事した人々が寝泊りした作業小屋が移築されている。この小屋は切妻造の長屋状の建物で、片側の妻に片開きの戸が取り付けられ、内部は中央に土間状の通路部分があり、その両側に寝泊り部分の低い床が設けられている。屋根の高さはあまり高くない。田中城跡で確認された柱穴列をE～J列、K～P列、Q～V列をそれぞれ1棟の建物とすると、北海道開拓の村に移築されている森林伐採用の作業小屋に近い構造のものになると思われる。その場合でも、田中城跡建物は東西45尺以上と長い建物になるので、框束と考えているG・H・M・N・S・T列の何本





配置図

かは通し柱になる可能性は否定できない。それと同時に、側柱としているE・J・K・P・Q・Vの柱列の何本かは框束となる可能性がある。もし、E～J列、K～P列、Q～V列をそれぞれ1棟の建物とすると、この平場には少なくとも3棟の長屋の存在が考えられる。更に北側部分での遺構の残存状況があまり良くないことから考えると、A列とB列、C列とD列の間に小柱穴列が存在していた可能性も捨て去ることはできない。とすれば、A～D列で1棟を考えることもできる。また、V列の南側にW列があり、もう1棟長屋が増えるかもしれない。以上から、この平場には最低で3棟、多ければ4～5棟の長屋が建てていたことになる。

平成元年12月に山口県立文書館で発見された「辺春・和仁仕寄陣取図」は、天正十五年(1587)の肥後国衆一揆の際に田中城攻めに際しての寄手側で作成した図といわれる。この陣取図によれば、本丸西側堀の欄に囲まれた平場には18棟の建物が描かれている。建物の棟数は正確であるかどうかはわからないが、本丸の西堀の平場に建物が何棟か建てたことは事実であろう。そして、位置からいって、この東西に長い建物群が陣取図に描かれた建物である可能性は極めて高い。ただ、「田中城跡 Ⅵ」でいうように、この建物を連棟式兵舎と推定して良いかどうかについては問題がある。特に兵舎と位置付けても良いのだろうか。本丸西側山裾の平場に建物群があったことは、陣取図と発掘された遺構によって確認されたといえるが、陣取図も柱穴群もその建物群が兵舎であるという証拠を示してはいない。どちらかといえば陣取図から見る限りでは、辺春・和仁軍は本丸や二ノ丸といった田中城の高所に兵を集めていたと考えられ、この山裾の平場の建物群を兵舎と断定できるかは疑問である。秀吉軍の城攻めによって城内に避難した周辺住民の仮説住宅であったかもしれない。

〈付論 4〉

「田中城の建築について」

北野 隆（熊本大学工学部教授）

昭和61年度から始まった田中城の発掘調査のうち、主要な郭である昭和61・62年度の主郭・平成6年度の兵舎郭・平成7年度の弾正屋敷の建築を中心に考察する。

田中城は天正十五年（1587）の「肥後国衆一揆」として知られている。「肥後国衆一揆」とは、「迎春・和仁」軍と「秀吉」軍との戦いであり、当時の絵図が「迎春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵）として残されている。先ず、田中城を考える上で参考になると思われる「田辺御籠城図」・「有馬城攻図」と「御作事所積帳」を紹介する。

●近世初期の「陣取絵図」について

「田辺御籠城図」（細川家永青文庫蔵）は、慶長五年（1600）の「関ヶ原の戦」に際して、細川幽斎公の田辺城が石田三成軍に包囲された時の絵図である。この絵図によると、田辺城の廻りは石田三成軍に包囲され、更に城の南東隅まで攻め入り櫓が描かれている。この櫓について「寄手井樓ヲ揚、城中ヲ見ル」と記されている。すなわち、石田三成軍は田辺城の南東隅に矢来の櫓を作り、井樓櫓を設けて石火矢を打つ陣を構えていた（図1-1）（図1-2）。

「有馬城攻図」（細川家永青文庫蔵）は、寛永十四年（1637）の「島原・天草の乱」に際して、有馬城（原城）に立て籠もった天草四郎を老中・松平信綱ひきいる九州諸大名の連合軍が包囲した時の絵図である。この絵図によると、天草四郎を大将とする3万7,000人のキリシタンの人達が石垣で囲まれた本丸、二の丸、三の丸に籠城、その廻りに「松平右衛門佐」、「寺沢兵庫」、「細川忠利」などの九州諸大名が二重に包囲している。特に、「松倉長州勝家」、「鍋島信濃守勝氏」など数多くの諸大名の陣屋には一重櫓・二重櫓が描かれている（図2）。

さらに、この時の肥後藩・細川忠利公の本陣が「有馬陣屋」（細川家永青文庫蔵）として残されている（図3）。先の「有馬城攻図」によると、肥後藩・細川忠利公の本陣は有馬城（原城）の北西部・三の丸の南に位置し、「細川殿忠利公御本陣」と記されている。絵図によると、敷地は長方形になり矢来が廻され、東西に冠木門が設けられている。敷地内は大きく三つに分かれ、西側が忠利公の「御座之間」「御次之間」であり、東側が「台所」「馬屋」であり、そして有馬城（原城）に面する南側に櫓が設けられ、「物見矢倉」と記されている。これらの建物で特徴的な事はすべて掘立柱で梁間が二間からなっていることである。

●「御作事所積帳」に見る陣営について

「御作事所積帳」（細川家永青文庫蔵）には、「一夜泊御陣営」と「滞御陣営」が記され

ているが、田中城を考慮にいれて「滞御陣営」を挙げる。

一、御陣営

滞陣之節出来候御陣営、式間梁七百十間、柱梁桁棟木短共竹一式ニメ掘立ニ仕、棟通柱式間越ニ掘立、棟木軒桁中桁共結渡、垂木老間ニ中辛竹六本ニメ、割竹次五六寸間ニ搔合、家根藁葺之内を以さかわら葺ニ仕、腰高サ三尺通藁葺にして上縁三通五寸廻竹式ツ割ニメ縄結仕、日数四日ニ出来候

一、小荷駄小屋

滞陣之節出来候小荷駄小屋、式間梁ニ桁行四尺三寸間ニメ拾間、柱梁桁棟木家横短共六七寸廻竹を以掘立ニ仕、垂木老間ニ五本完結渡、割竹次小辛式ツ割ニメ五六寸間ニ搔合、藁葺之内を以さかわら葺ニ仕、老正完之中仕切竹屋ニ候、高サ三尺位ニメ梁行棟通共六七寸廻竹ニメ竹縄ニ仕候

一、兵糧小屋

兵糧小屋式間梁五間、柱梁桁棟短共六七寸廻竹を以掘立ニ仕、家根垂木中辛竹老間ニ六本完結渡、割竹次小辛竹式ツ割ニメ五六間ニ搔付、藁葺之内を以さかわら葺ニ仕、腰高サ三尺通藁葺ニ仕、下縁上縁共同竹ニメ結渡

一、内笹

内笹拾間強かり老間ニ四本立ニメ、下縁五通結渡、笹高七尺上辛竹式ツ切ニメ式本取ニ仕上縁六寸廻竹式ツ割にして、扣強かり雑木を以老間越ニ掘立竹縄ニ結

一、厩

滞陣之節出来候乗馬厩六尺五寸間ニメ老正立完作放之見込積ニメ外繋柱部柱共雑木を以掘立、衣掛同丸太ニメ引渡部先共竹縄結ニメ前通柱同梁桁棟木中桁共六七寸廻竹を以結渡垂木老間ニ六本完、割竹次小辛竹式ツ割ニメ五六寸間ニ搔付藁葺之内を以さかわら葺ニ仕

一、番所

右同所御番所老間半四方、柱梁桁短共六七寸廻竹を以掘立ニ仕棟立垂木中辛竹老間ニ六本完結渡割竹次五六寸間ニ搔合藁葺之内を以さかわら葺ニ仕、腰高式尺藁葺ニ仕上縁三通五寸廻竹式ツ割ニメ縄結ニ仕

一、総囲

御陣営総囲土居入口構向三間高サ、土上式間根入三尺五寸冠木打抜ニメ差合鼻専打堅折次戸横三間立幅式間四方框差廻中棧三通入輪釣ニ仕、折次戸竹六七寸廻竹式ツ割ニメ折合構打方之節は左右突上ケ棒頭次戸框へ寄縄渡リニメ、内ニ小柱立棒尻ニテ差専打仕

●田中城の主郭について

田中城の南西から見た「迎春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵）が残されている。この絵図によると、主郭は中央部に登り道が描かれ、道を挟んで両側に矢来が設けられ右側がやや高くなっている。そして、この矢来の上に三つの「物見矢倉」らしきものが描かれている。すなわち、中央の一つと東の一つ、そして西の一つである（図4）。

主郭については、昭和61・62年度に発掘調査が行われた。この発掘で数多くの掘立柱穴が検出された。これらの柱穴を検討して得られた建物が図5である。まず、主郭の南に道が設けられていた。この道を入ると右側に二間×五間の建物が見られる。この建物は細川忠利公「有馬陣屋」から察すると「番所（兵舎）」と思われる。その北の二間×五間の建物は「台所」で、中の溝は排水溝と思われる。さらに、その北の二間×四間は「御座の間」で西側に二棟の「馬屋」と「便所」が見られる。そして、「御座の間」・東に「物見矢倉3」、主郭の西に「物見矢倉2」、主郭の南西に「物見矢倉1」の三つの「物見矢倉」が設けられていたと思われる。発掘から得られた建物と先の絵図とを比較すると、発掘の南の道が絵図の中央部の登り道に、「物見矢倉1」が中央の「物見矢倉」に、「物見矢倉3」が東の「物見矢倉」に、「物見矢倉2」が西の「物見矢倉」に相当するものと思われる。

●田中城の兵舎・倉庫郭について

平成4年度に主郭の南西下の平場の発掘調査が行われた。この郭からは、大・小の柱列がほぼ並行に23列確認された。大きな柱列の間隔は1.2~1.5mであり、大・小の柱穴の間隔は40~70cmである。

この郭について、先の「迎春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵）には、数多くの茅葺きの家が描かれており、なんらかの建物があったものと思われる（図6）。発掘調査で確認された23列の内、大きい柱穴2列と小さい柱穴1列の3列が1建物と考えられる。このように考えると梁間1間弱であり、兵舎としては狭すぎるようにも思われる。先の「御作事所積帳」（細川家永青文庫蔵）によると、すべての建物が梁間2間であるから、大きい柱穴2列と小さい柱穴1列を2組で1建物と考えることも出来よう。また、兵糧小屋・武器庫などの倉庫と見ると大きい柱穴2列と小さい柱穴1列の3列が1建物と考えることも出来る。しかし、倉庫と見るとこれだけの規模が必要であったか疑問が残るように思われる（図7）。

●田中城の弾正屋敷について

平成7年度に兵舎・倉庫郭の南に位置する弾正屋敷の発掘調査が行われた。発掘調査の結果、掘立柱の跡が数多く確認され、特に石組みの井戸跡が見つかった。先の「御作事所積帳」（細川家永青文庫蔵）によると、すべての建物が梁間2間であり、井戸跡の西の二間×五間が「台所」、井戸跡の東の二間×五間が「御座の間」と思われる（図8）。

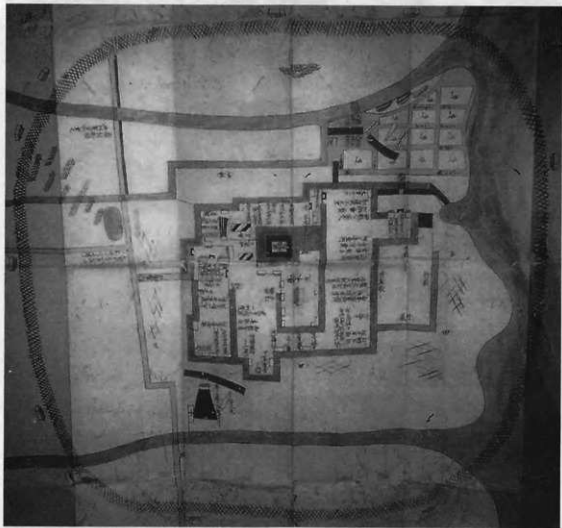


图 1-1 「田辺御籠城图」(全体)

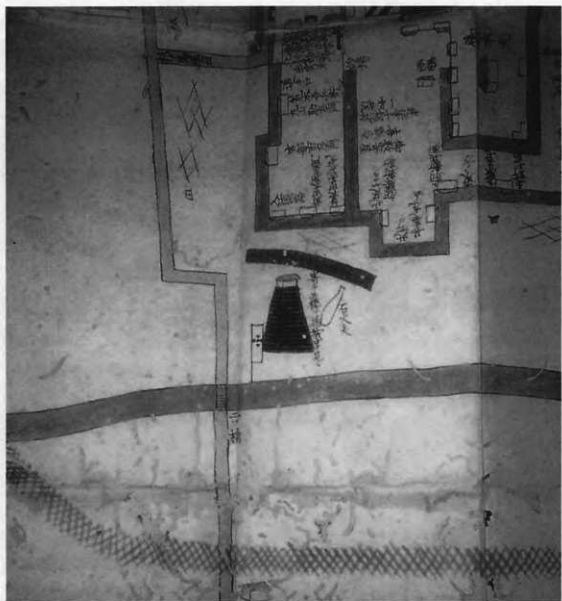


图 1-2 「田边御籠城图」(部分)

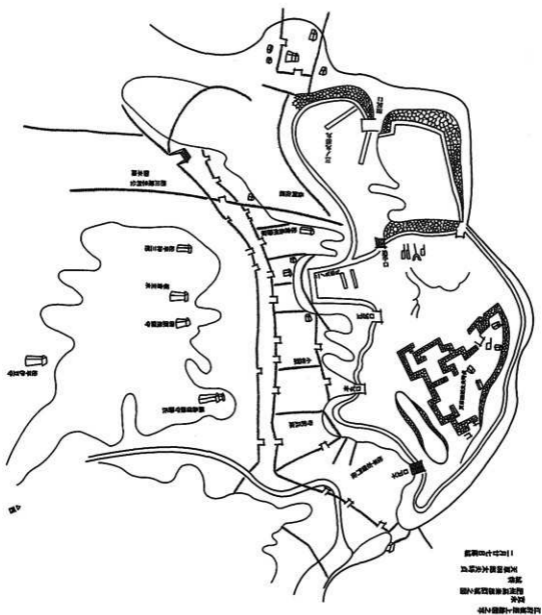


圖 2 「有馬城攻圖」

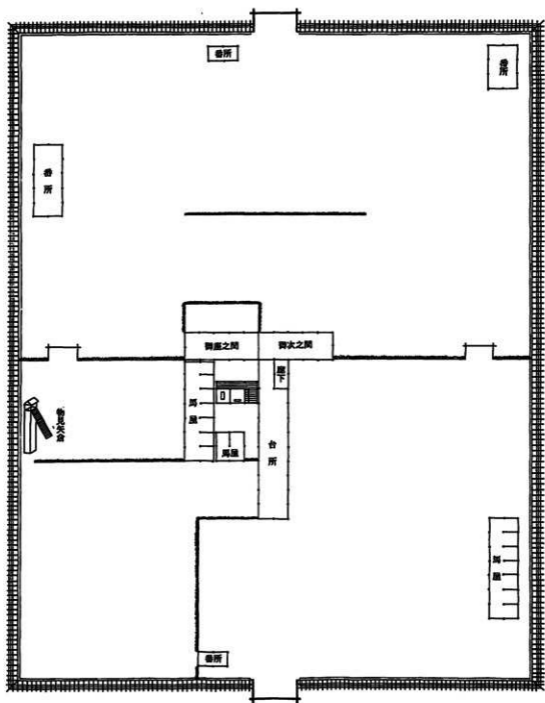


図3 肥後・細川忠利公・有馬陣屋

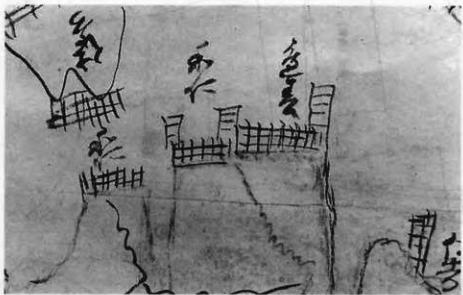


图4 「边春·和仁仕寄障取园」(部分)

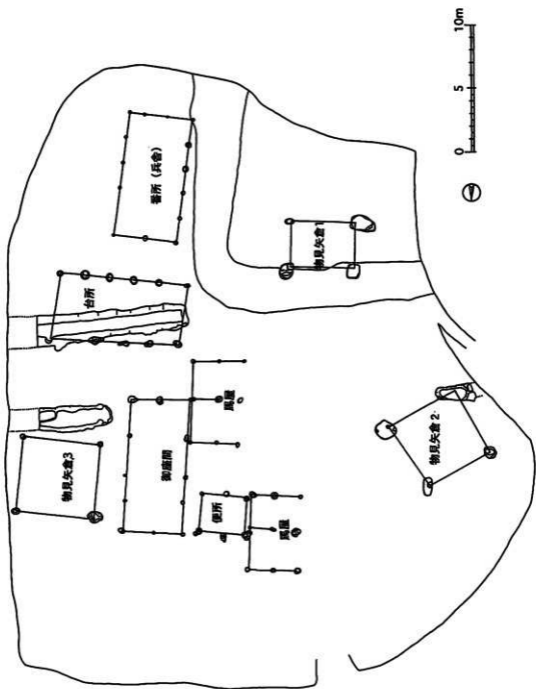


图 5 田中城・主郭

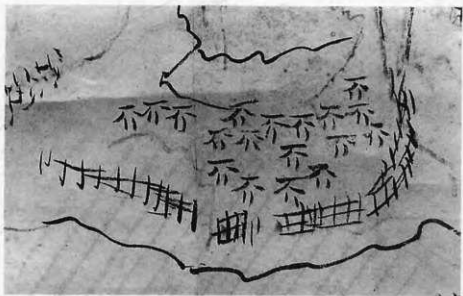


图6 「边春·和仁仕寄陣取图」(部分)

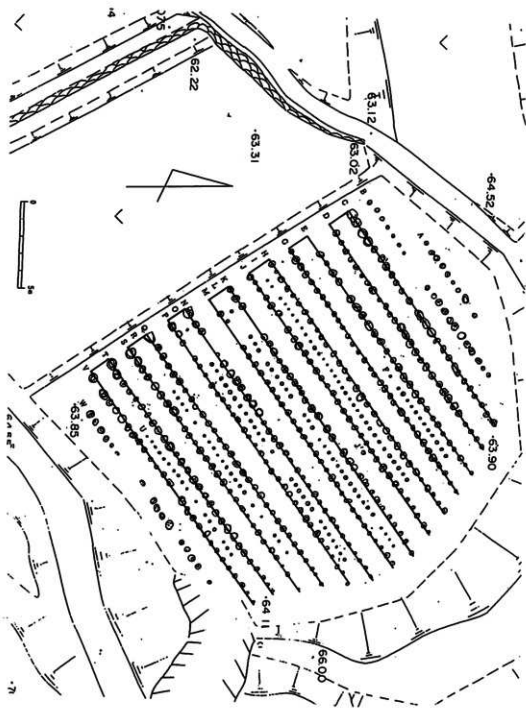


图7 田中城・兵舎・倉庫郭

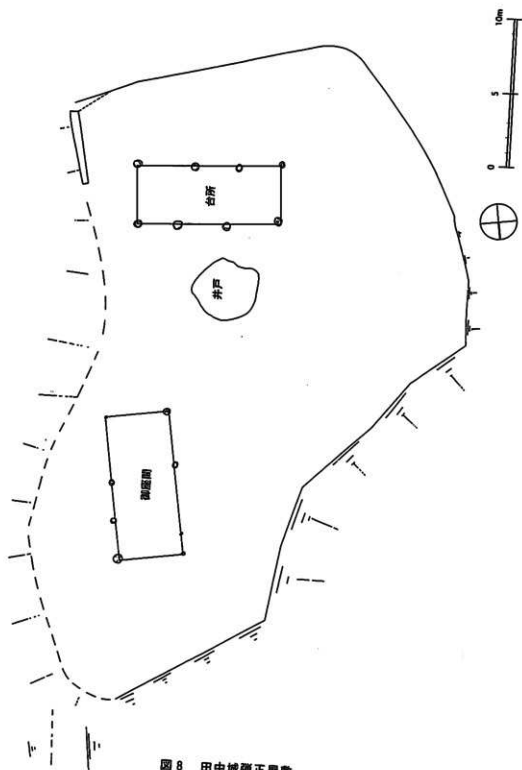


図 8 田中城正屋敷

写 真 图 版



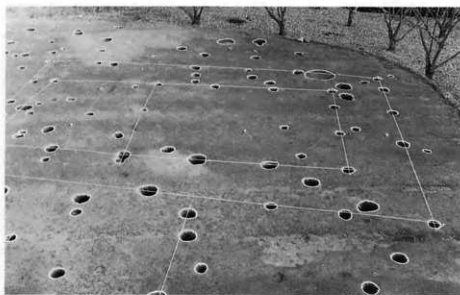
(1) 田中城跡遠景（北東より）



(2) 田中城跡遠景（西より）



(1) 主部遺構全景 (北より)



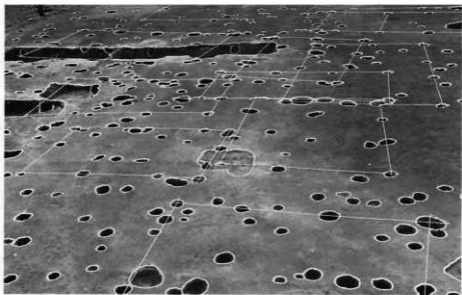
(2) 1号据立柱建物跡 (西より)



(1) 2・3号掘立柱建物跡 1号溝 (西より)



(2) 1・3・4・5号掘立柱建物跡 (北より)



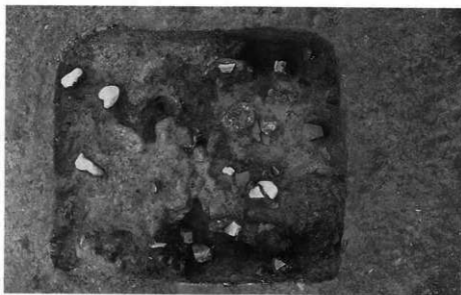
(1) 6～11号掘立柱建物跡（北より）



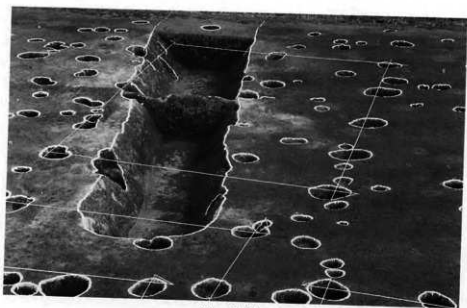
(2) 12・13号掘立柱建物跡（北西より）



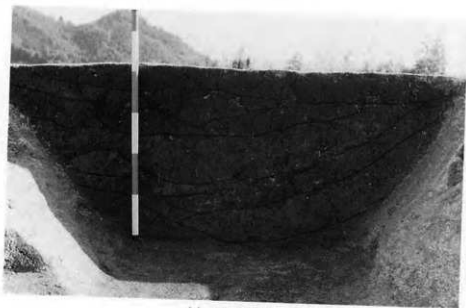
(1) 1号土坑（北より）



(2) 3号土坑



(1) 1号沟



(2) 1号沟断面



(1) 土鍾出土状況



(2) 青磁出土状況



(3) 土師器出土状況



(1) 昭和62年度調査区調査前状況（南西より）



(2) 遺構検出状況（南西より）



(1) 1号土坑发掘状况



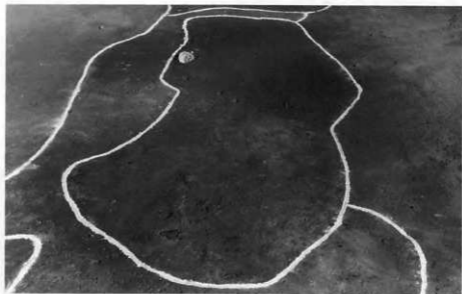
(2) 1号不定形土坑全景



1号不定形土壤遺物出土狀況



1号不定形土塊遺物出土狀況



(1) 2号不定形土壤檢出狀況



(2) 2号不定形土壤遺物出土狀況



(1) 3号不定形土壇発掘状況



(2) 3号不定形土壇遺物(すり鉢)出土状況



(1) 小札出土状況



(2) 甕の前丘出土状況



(3) 刀子出土状況

3号不定形土塊遺物出土状況



(1) 平成元年度調査区 調査前状況 (北より)



(2) 表土剥ぎ終了状況 (北より)



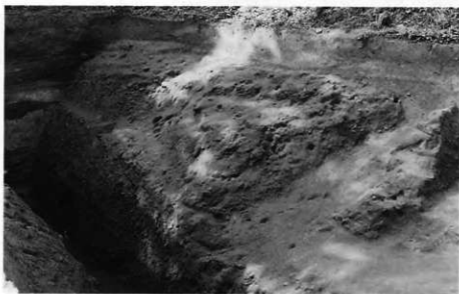
(1) 空堀南侧断面



(2) 空堀北侧断面



(1) 空掘東側壁面狀況



(2) 空掘西側壁面狀況



(1) 土 塙 (西より)



(2) 空堀底面状況



(1) 平成2年度調査区 調査前状況(東より)



(2) 遺構検出状況



(1) 柵列・堀跡検出状況(北より)



(2) 柵列・堀跡発掘状況(北より)



(1) 橫列發掘狀況



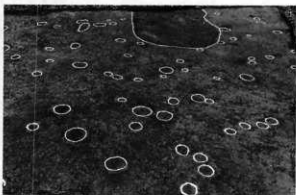
(2) 堀跡土層断面 (A-A')



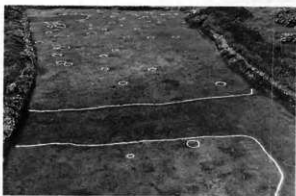
(3) 堀跡土層断面 (B-B')



(1) 试掘 I - I 区调查前状况



(2) 试掘 I - I 区遺構検出状況



(3) 试掘 I - I 区遺構検出状況



(4) 试掘 II 区発掘状況



(1) 平成3年度調査区遠景(北より)



(2) 近景(北より)



(1) 柵列 I 検出状況 (南より)



(2) 柵列 I 発掘状況 (南より)



(1) 柵列Ⅱ検出状況(南より)



(2) 柵列Ⅱ発掘状況(南より)



(1) 平成4年度調査区遠景(西より)



(2) 近景(北より)



(1) 遺構検出状況 (北より)



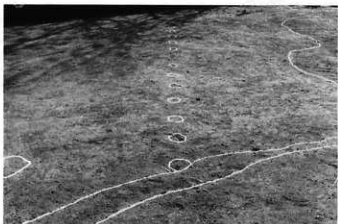
(2) 遺構検出状況 (南西より)



確認遺構全体写真（北東より）



(1) 平成5年度I区調査前(東より)



(2) 柵列検出状況(北東より)



(3) 柵列発掘状況(北東より)



(1) 1号石龕 (南西より)



(2) 2号石龕 (南より)



(1) 2号石倉と石切り場（南より）



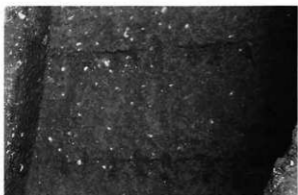
(2) 石切り場（西より）



(1) 石切り場の切り出し状況



(2) 壁面状況



(1) 工具痕



(2) 工具痕



(3) 調整痕



(4) 調整痕



(1) II区調査前(北より)



(2) 遺構検出状況(北より)



(3) 集石検出状況(北より)



(1) 平成6年度調査前(南より)



(2) 調査前(北東より)



(1) 発掘状況 (南西より)



(2) 発掘状況 (南西より)



(1) 平成7年度調査前遠景(北より)



(2) I区調査前近景(北東より)



(3) I区調査前近景(南東より)



(1) I区遺構検出状況（北より）



(2) I区遺構発掘状況（北より）



(3) 掘立柱建物跡（東より）



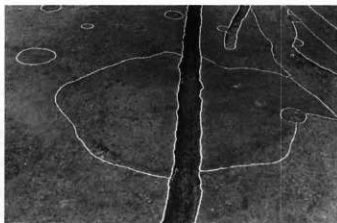
(1) II区遺構検出状況（北東より）



(2) II区遺構発掘状況（北東より）



(3) 1号溝発掘状況



(1) 井戸跡検出状況 (北より)



(2) 井戸跡発掘状況 (北東より)



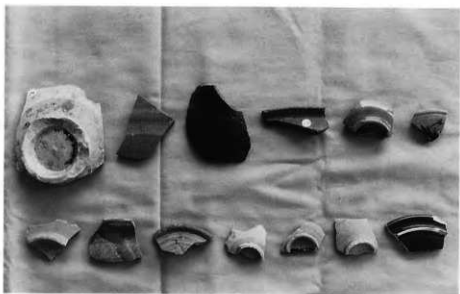
(3) 井戸跡石組み状況 (北東より)



出土遺物



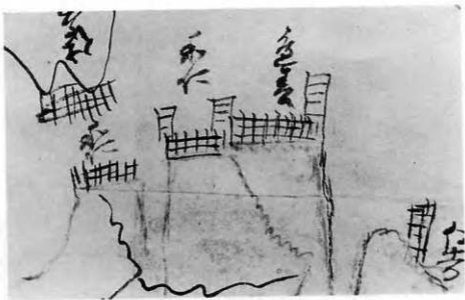
出土遺物



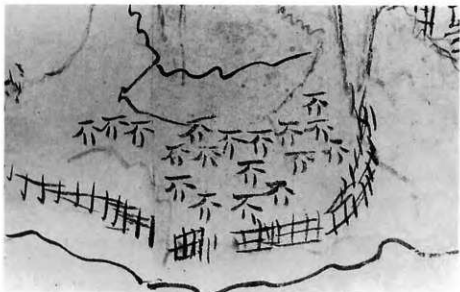
出土遺物



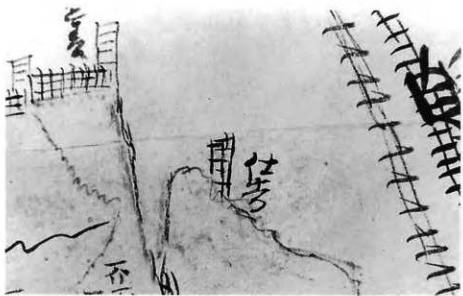
(1) 「辺春・和仁仕寄陣取図」全体



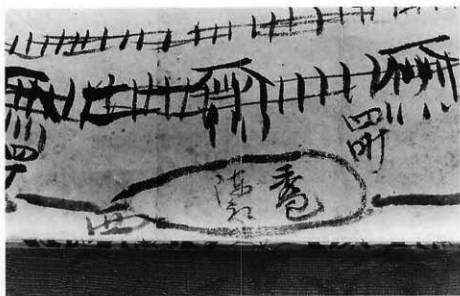
(2) 田中城主郭部



(1) 連棟式兵舎跡想定部分



(2) 南側「ヤグラ」想定部分



(1) 小早川秀包陣



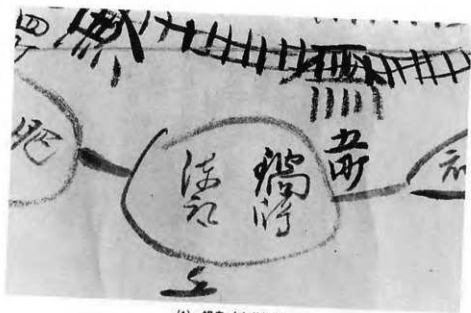
(2) 安国寺惠瓊・栗屋四郎兵衛・古志・日野陣



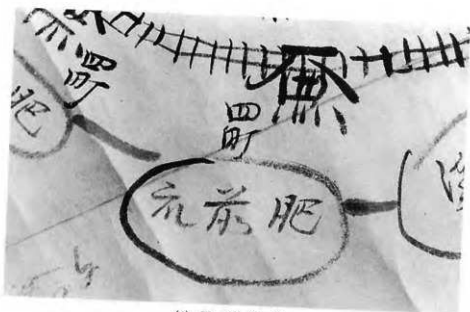
(1) 立花左近陣



(2) 筑紫(広門)陣



(1) 鍋島(直茂)陣



(2) 肥前衆陣

和仁・辺春氏關係史料

和仁・辺春氏関係史料

和仁・辺春両氏に関する文献が『三加和町史』作成の時に調査されているので、ここに記載しておく。

1 暦応三年十一月十日

少弐頼尚軍勢催促状

肥後国凶徒等(玉名郡)播籠同国鯉城之由、依馳申、為退治来五日所差遣筑後武藤次也、当日以前令上府、属彼手可抽軍忠、於恩賞者、可注進京都候、仍執達如件、

暦応三年十一月十日

大宰少弐(頼尚)(花押)

中村孫五郎殿

(『南北朝遺文 九州編 第二巻』 豊後広瀬文書)

2 天文十九年四月九日

大友義鎮書状

舍弟山城守事、至溝口薩摩守在所取懸打崩、引帰候之刻、和仁・辺春・本告以下、横相候之処、舍弟懸合、數度迷合戦、既及難儀候之跡、蒲池因幡入道・同息石見守懸付、敵悉追崩、山城守無越度着城之由候、高名忠貞誠無比類候、然者因幡入道・息石見守忠節之次第、感悦無極候、遣賀書候、從親種能入魂無申迄候、先書如申候、此節干戈之事者、每事可任下知儀指掌候、親類被官衆、聊爾之動不可然候、堅可被申付候、当城覚悟、無油断之由候、案中候、弥万端御才覚憑入候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

(天文十九年)

卯月九日

田尻伯耆守殿(義鎮)

義鎮(花押)

(『玉名市史資料編五 古文書』 筑後田尻文書)

3 天文十九年閏五月八日

大友義鎮書状

先月廿八、隈本衆少々、大津山・大野・和仁・辺春、殊三池引卒、至矣忠在所取懸候之処、(小代)
(裏子木)親員衆江馳向迷合戦、為始小山名字宗徒之者、數十人討捕、小代大利高名之次第、注進之趣得其意候、此等之軍勞祝着之段、急度以使節可申遣候、先以遣賀書候、徒其方早速可被付之候、然者志賀安房守・小原遠江守・吉岡越前守、前三日出張之条、諸勢於小国着陣候、於于今者、定而可有其開候、近々至小岳二重口可差寄候、其国衆被申談、溝口要害早々打崩、三池表発向肝要候、小代無越度様可被申談候、阿蘇・高知尾・五ヶ所衆・城・赤星、聊無別儀候之条、隈本退治之事者、不可移日候、每事在陳年寄衆三人可被申候、恐々謹言、

(天文十九年)

閏五月八日

(親補)

田尻伯耆守殿

義鎮 (花押)

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 筑後田尻文書)

4 天文十九年閏五月十五日

大友義鎮書狀

(重經)

先月廿八日三池上総介・大津山美濃守・辺春薩摩守・和仁彈正忠・東郷衆・大野上総介・田嶋宮内少輔・吉弘但馬守以下之者共、至当城取懸候之處、遂防戦、敵數十人被討捕、大
利之趣、預注進候、兼日度々承候首尾、毛頭無相違大忠之次第、異于他候、殊親類被官、
或者討死、或者被疵、分捕手負衆着到、銘々加披見、感悦之段、先々以袖判申候、追而一
入可顯其志候、就中井手中務少輔・中嶋佐渡守・雄方和泉守・宮崎修理亮戦死之由、寔不
便此事候、何様至彼子孫可賀之候、今後実忠御忠儀無比類之条、懇以使節可申候、将又方
々之儀、悉相調候間、爰元諸勢出張候、於于今者不日可越山候、被得其意、当城堅固之覚
悟憑存候、至其口小原遠江守一兩日中可為着陳候、每事被申談、可被勵計略候、委細鑑元
可申候、恐々謹言、

(天文十九年)

閏五月十五日

(真忠)

小代殿

義鎮 (花押)

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 小代文書)

5 天文十九年五月二十二日

大友義鎮書狀

(淵池)

前十五、至西牟田殘党等隠住之在所、鑑盛自身取懸、敵數十人類注文到来、加披見候、親
種舎弟山城守・同名又四郎、於同口分捕高名之由候、忠貞不始于今儀候、粉骨誠異于他候、
当城之事、三池・大津山・辺春、差向在所候之条、夜白無油断之由候、御氣仕察存候、然
者、從肥後國中茂種々申來候之条、諸勢可越山日限等之儀、昨日廿一、以真光寺申遣候、
城・赤星・内空閑・長野・小森田・五ヶ所衆、急度可現形之由候、小代事者如存知、從最
前之辻、毛頭無変化候之条、彼仕立之事者不及申候、弥每事可有入魂候、猶年寄共可申候、
恐々謹言、

(天文十九年)

五月廿二日

(親補)

田尻伯耆守殿

義鎮 (花押)

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 筑後田尻文書)

6 (天正七年。)十月十四日

大友義統感状

今度從最前舍兄親運忠貞之覚悟依不淺、其方別而碎手可被勵粉骨之由候、乍案中感悦候、
弥被申談馳走肝要候、仍刀一腰進之候、顯其志候之趣、猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

十月十四日

義統(花押)

迎春権介殿

(〔熊本県史料 中世編 第一〕 光照寺文書)

7 (天正十一、十二。)十月十五日

大友義統宛行状

対戸次丹後入道入魂之趣令承知、感悦無極候、偏其方才覚故候、然者、急度可被顯貞心事
肝要候、仍其国玉名郡之内板桶四十五町分之事預置候、可有知行候、恐々謹言、

十月十五日

義統(花押)

迎春常陸入道殿

(〔熊本県史料 中世編 第一〕 光照寺文書)

8 天正十二年十月一日条

上井覚兼日記

一、朔日、看経等別而仕候、各御礼など承候也、武庫様へ御礼二参候、衆中同心申候、皆
被懸御目候也、(島津忠長) 麟台御下二参 武庫様へ金瘡之区術得御意始候也、此日、御談合候、小
(肥後玉名郡、小代親善) 代落着之儀共也、先々押領之分者被召上、本領被下候而、今分二小代家被残候て可然之由
(親善) 出合候、(親行) 隈部殿・迎春殿自身被指出候、武庫様へ被参候、即御見参也、甲冑進上と見得候、
御酒御寄合也、我々にも礼也、太刀・百疋預候、留守にて対面不申候、從小代御礼二両
(寛和) 使指出候、(道治) 税所新介・白浜次郎左衛門尉意趣被聞候、迎春殿礼二被来候也、白麻甘帖預候
也、

(〔大日本古記録 上井覚兼日記])

9 天正十二年十月四日条

上井覚兼日記

一、四日、如常、和仁殿礼二被来候、白麻甘帖預候也、此朝一要へ御酒振舞候、座舩、客
(親実) 居一要・上原長門守・城外記、主居拙者・長野惟冬・(城) 奥之山左近将監・高山進士允、種々
会尺共申候、奥之山色々雑談などにて酒宴也、此晚、合志殿陳所へ武庫様御礼被成候、麟
台・我々も礼之志候処、能仕合と存御供申候、合志殿陳処川上にて候間、各舟より御出也、
船元まで親重出合也、先御三献也、御座、客居武庫様・拙者、主居麟台・合志殿也、三
献過候て、武庫様合志殿へ被進候太刀・織物、親重被請取候、忠長・拙者、持せ候太刀・
織物打続被見候、(武庫御太刀持) 従夫御湯漬参候、(奥之山方) 御座舩、客居忠平様・拙者・上原長門守・松尾与四郎・
川上大炊助、主居忠長・親重・吉田美作守・〇也、種々御会尺也、御点心之時、山鹿刑部

太輔又合志殿親類衆一兩人御座ニ被參候、親重御酌之時、馬・太刀・鎧甲・織物、此等を、三度ニ武庫様へ進覽也、奥之山・石原など狂言舞共候、奥之山・松尾・石原ニ親重より織物一ツ、被遣候、合志之大夫とて唄共申候、是ニ武庫様より織物ニ被下候、互ニ御酌なとにて御酒宴也、夜入候て御場宅也、

〔大日本古記録 上井覚兼日記〕

10 天正十三年九月六日条

上井覚兼日記

一、六日、合志へ被行候下知衆など被帰、彼方之様子物語候、哀なる事共也、此日、三池境へ軍衆少々被指登候、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守・此衆を始諸所之衆被指遣候、(筑後三池郡) 宇土(久春)、(有信) 隈本(信光)、(肥後宇土郡、名和領守) 大津山(北郷忠成、城一更)、(阿玉名郡、大津山家後) 和仁(阿玉名郡、和仁親實)、(阿八女郡、近春親行) 刃春(共ニ筑後三池郡)、(阿八女郡) 小代、右之衆也、御行ハ宇津・久我などへ、此方之衆取入、從夫山下里目刃放火させられ候て可然之談合也、左候ハ、とても江之浦・堀切之事ハ、難堪忍之由共也、しからハ秋月ニ取懸候晝後陣ハ、無程可引退かの由共也、

〔大日本古記録 上井覚兼日記〕

11 天正十三年九月二十五日条

上井覚兼日記

一、廿五日、天神へ別而看経申候、此朝、秋月・竜造寺・筑紫之使者へ、御酒寄合候也、稲新取成也、秋月殿より書状并片色一預候、竜より書状并織物一預候、筑より書状計也、使者前よりも銘々少祝物預候也、甲斐大和守へ新納縫殿助・稲富新介・柏原周防介にて被仰出候、今度熟談被成、阿蘇家御幕下被參、静謐之鉢候、雖然、頃諸方より申來候者、義統小国」堺へ被居、諸方計策最中候、然者、阿蘇殿ハ幼稚之仁と聞得候、悉皆親英下知まで之阿蘇家と聞得候間、此節者八城へ駭親英堪忍被成候て可然候、殊更神文などにて御下知之外有間敷通承候上ハ、御辞退候ましき由申候、種々辞退候つれ共、稠申取、如八城指遣候也、新納縫殿助・伊地知民部太輔・蒲生衆相添警固させ候て、甲斐大和守八城のこことく指越候也、甲斐長運・野尻名字之者、彼等も同前二可被召烈之由申候也、此朝、内空閑殿より使僧・使者兩人也、織筋ニ預候、趣者、前年已來山本郡捨護候、殊更去年吉利総州・伊集院野州取成故、各吉松二御在陣之刻、罷出申上候、然二頃」山本郡之内、城家來之者共少々押領共申候、異儀を可申候へ共、当時御弓箭繁多之最中に候儘、兎角用捨候、御判形被下置度由也、返事、吾々若輩計罷居候、迫而寄合中談合を以、委可申渡通申候也、此日、隈庄戰場にて大施餓鬼也、福昌寺御來儀にて執行被成、新納武州・有馬筑前守、諸篇被取成候、然間、彼兩人指遣候て成就也、此晚、仁田水左衛門大夫拙宿にて寄合候、稲富新・川上宮内少輔などと相伴二候候、種々酒宴共也、此座中、新武より、城一更まで近春方書信候、それを一更、新武迄持せ也、為」披見被持せ候、高良山北野之豊陣ニ当候て、火色顕然候、定而敗北候哉之由也、即秋月・竜造寺・筑紫之使宿へ、此状持せ見せ候也、此

12 天正十四年九月一日条

上井覚兼日記

一、朔日、出仕如常、^(八代、肥後八代郡)当所へ滞留之衆、御一門其已下不残出仕也、さて各罷帰、したゝめ候て^{(島津康久)(岡家久)} 祇候申候、終日御談合也、^(岡以久)金吾公・^(筑紫)中書公・^(筑前筑前郡)典殿公も、御談合二御參被成候也、其外昨日之衆也、^(肥前三榮基郡)広門、^(筑後八女郡、蒲池家祖)去廿七日被忍出、^(筑後三瀬郡西牟田)先一岳へ取乗、翌日勝尾へ被仕乗候、^(寛平、筑前早良郡)蒲池衆當番にて、迷惑仕由^(阿三并部)註進也、^{(親美)(肥後玉名郡)}西牟田方より註進ハ、安楽平之御番被仰付候へ共、私ニ一手替ニ談合申候て、^(高良山)高良山^{(親基)(阿三池郡)}麟圭ニ差替、^{(親譽)(肥後玉名郡)}罷帰候、^(筑前遠賀郡力)彼城も不番たるへく候由也、^(久春)和仁、^(宗茂)刃春、^(鎮風)三池、^(小代)小代 なんとより、追々右之註進也、若松と申切切、^(久藤)是ハ立花より^(長原)仕取由聞得候、^(肥後玉名郡、大津山家後)星野方當番にて、^(親集院)戦死之由聞得候也、伊集院肥前守・新納右衛門佐・^{(親行)(筑後八女郡)}稲富新介、^{(親基)(阿三池郡)}先々寄々之儀候間、^{(大友義統)(肥後阿蘇郡)}大津山迄被馳統、^(広門)彼表之様子、^(政家)爾々御註進可被申由 被仰遣候也、終日、各談合にて候、筑紫方如此之分別ハ、定而竜造寺一致候て、指立候て如此候らん、然者、各彼堺之様見申候分者、^(竜造寺政家)輒筑紫可召崩事可難成候、先日被仕崩候ハ、不慮之仕合候、^(親集院)刺、肥前と同意候てハ、容易難被攻候、^(筑後八女郡、蒲池家祖)左候て、^{(親走)(×之)}肥前へ御執懸候する事も」如何候する哉、^(高田孝高・毛利輝元等)題目浮合候て、^{(大友義統)(肥後阿蘇郡)}軍ハ不仕、居城閉籠候て、衆・兵糧過分二調義候ハ、^(仙石秀久・長宗我部元親等)是又年内中にも難事澄候、^(羽榮勢)左候ハ、中国ヨリ渡海候、又ハ豊後より阿蘇口へ取出候、又四国より日向表へ兵船指下候など雑説申候てハ、^(筑後八女郡、蒲池家祖)各在陣も難事成候、是非以、先筑紫御退治こそ可然候すれ共、^(親集院)是を被指捨、此間之如御談合、豊後へ被召入候て可然候歟、^{(親走)(×之)}其故者、^(阿蘇口)縦竜造寺、^(豊後大野・直入両郡)広門へ一致候て、^(阿南海部郡)御敵ニ罷成候共、^(同大野郡)三池・小代・大津山・上蒲池・高良山之座主、此等之質人然々此方へ被召置候ハ、^(親集院)御心遣入ましく候、然者、肥後口・日向口阿口より、^(阿蘇口)豊後へハ乱入有へく候、^(豊後大野・直入両郡)又兵船内端へ被指向候ハ、^(同大野郡)可容易各存候、^(羽榮勢)縦相支候共、^(親集院)此口者」^(阿蘇口)南郡通、^(豊後大野・直入両郡)日向口ハ 梅 三會辺まで山を越候ハ、^(親集院)京勢之与力候共、^(義入)御心遣有間敷候、各存分ハ如此之由、皆同ニ申上候也、即御返事、談合之趣、委被聞召候、^(親集院)順逆、筑紫を先御退治可然被思召候へ共、各彼方角を見申候て被申儀候、^(義入)御前ハ御不知案内にて、^(親集院)兎角と難被仰候、又豊後表之事、是ハ御圖などおり候条、可輒候歟併、此度筑前表様子等御思案候へハ、是も無取御覚候、^(親集院)題目、度々筑前表へ被罷居候衆へ被仰登候ハ、^(親集院)広門事、不被討果、中途ニ被召置候歟、言語道断、曲事ニ被思召候、せめて其分候ハ、早々如爰元被遣候て可然之旨」被仰候処、各帰陣之折節^(親集院)折烈候するなと被申候て、^(親集院)結句油断候て如此候、是を御思案候へハ、是程之事ヲ各油断申候する衆にてはなく候二、如此之義出来候ハ、^(親集院)必竟御家之煩たるへき基候歟、^(親集院)兎角此度之御談合を取覚被成候て、いつれとハ難被仰候、^(親集院)衆口次第、^(親集院)武庫様へ御談合可然之由上意候て、^(親集院)御機嫌不宣候、是者今度帰陣之衆油断故、如此之義出来候条、^(親集院)其人数へ御當被成、如此、上意候歟と、各推量申

たる迄候、明日御談合之由候て、各罷帰候也、

〔大日本古記録 上井覚兼日記〕

13 天正十五年三月十三日

大友義統書状

(小早川隆景)
前六中納言殿至小倉被成御署陣、諸軍依被仰遣、義統事、(孝高)黒田官兵衛尉方以同心、一昨日十一至由布院罷越候、然処野上へ滞在之悪党昨日十二敗北之条、急度府内取懸、薩摩之逆徒不洩一人、可討果覚悟候間、此節可被勸忠儀事肝要候、委細黒官被仰遣候間、不及口能候、猶重々可申候、恐々謹言、

(天正十五年)
三月十三日

義統(花押)

刃春能登守殿

〔熊本県史料 中世篇 第一〕 光照寺文書

14 天正十五年十一月二十六日

安国寺惠瓊書状

去七日之御音札到来、不異面調、再三披閱、歎拝至候、去夏者始而对談候之處、如旧識、于今御床敷候、併遠方、殊肥後錯乱付而、路次不入合期之故之故、乍存相過候、仍罷後一(佐々成政)揆動乱、既隈本難儀之由候条、懸下南関打入隈本、通路切明、(奥州)奥州抱所無著候、然者和仁・(義実)刃春(義行)播磨龍候一城取巻候、今日之内可為落去候、(隈部義安)隈明次第山鹿・(景元)有動城可取詰候、此節候(石田三成)条、京都於御下知者、一勢被指出隈本、御加勢肝要存候、将亦当夏御愁訴之地、石治少我等申定候之處、其以後相違候哉、不及是非候、何茂重而可申候、此口罷下候故、貴国御取成、疎略之段令迷惑候、何様連々之儀、不可存緩疎候、猶任察首座口上候条、不能詳候、恐々謹言、

(天正十五年)
十一月廿六日

惠瓊(花押)

新納武藏守殿

御返報

〔熊本県史料 中世篇 第五〕 新納文書

15 天正十五年十二月五日

佐々平左衛門尉政元書状

從安国寺書状、二九難相拘之由候、如此申候内二、はや二九討果候旨申来候、以上、急度令申候、仍和仁城中国衆被入精、昨日五日午刻被討果候、男女共不殘撫切候、從此方津曲(ママ)与兵衛尉被差遣候、被碎手候、於時宜者可御心易候、然上者到阿蘇口可被相働旨条、為御心得如此候、恐々謹言、

(天正十五年)
十二月五日

深水三河入道殿
養田信濃守殿

佐々平左衛門尉
政元(花押)

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 薩藩旧記雜錄後編卷二十一)

16 天正十五年十二月七日

安国寺惠瓊書状

当城之事、一昨日落去候、誠以御太慶、我等安堵此事候、自明日普請可申付候、左候而番衆等之事、近々談合可申候、^(難行)迎春事、忠儀仕候間、是又本領半分茂可被遣候、さりとてハ今度今度手柄仕候、猶以存江可申候、恐惶謹言、

(天正十五年)
十二月七日

安国寺
惠瓊(花押)

(佐々成政)
奥州様

参人々御中

(〔熊本県史料 中世篇 第三〕 袖留木文書)

17 天正十五年十二月十日

羽柴秀吉朱印状

其面令在陣、色々入精被申付之趣、小西^(行長)撰津守申上之處具聞召候、寒天之刻長々苦勞痛被思食候、城井事取詰落居不可有幾程之由尤候、将亦、肥後表之事、和仁迎春取巻之由候、自今以後為見懲候之間、一人茂不通可責殺候、殘党之事者、迎明春御人数被差遣、無残所可被仰付候条、可成其意候、何も追々可有言上候也、

(天正十五年)
十二月十日
(秀吉朱印)
(元長)
吉川治部少輔とのへ

(〔大日本古文書 家わけ 第九〕 吉川家文書之一)

18 天正十五年十二月十日

豊臣秀吉直書

九州儀、小西^(行長)撰津守罷上、言上之通、具聞召候、其表有居陣、入精被申付之由、尤候、然者、肥後表之一揆、和仁、迎春取巻由、寒天之刻、痛入雖被思召候、併其方外閉候之間、以仕寄責崩候歎、又者重々擲雲雁以下丈夫相付、干殺ニ成共、何之遣ニも、自今以後見^(懲)こり之ため候間、一人茂不通様可被申付候、

一右之取巻之人数迄にてはか不行候者、久留米ニハ留主居丈夫残置、其方事肥後表へ被相越、和仁、迎春儀、是非干殺ニ可被申付候、

一残城を相拘、一揆於楯籠者、自是御人数被遣、可被仰付候事、

一国々置目等、猥候由、被聞召候間、不斗乍御遊山被成御座、弥御改候て、可被仰付候、
来春先為先勢二三万御人数被遣、残党一々可被刎首候、猶追々可有言上候也、

(天正十五年)
十二月十日 (秀吉花押)

小早川左衛門佐とのへ

(『大日本古文書 家わけ 第十一』 小早川家文書之一)

19 天正十五年十二月十日

豊臣秀吉朱印状

去月十五日書状、被加披見候、并小西摂津守罷上、言上候通、一々被聞召候、和仁迎春取巻之由、寒天之刻、痛入雖被思召候、併隆景外聞実儀候間、以仕寄資崩候歟、又者重々塀雲雁以下丈夫相付、干殺二成候歟、何之道ニ成共、九州自今已後之為見懸候間、一人茂不通様可被申付候、残党之儀者、迎來春御人数被差遣、一々可被刎首候条、可被得其意候、誠打続在陣、苦勞感被思召候、委細者小西かた迄被仰出候間、定而可相違候也、

(天正十五年)
十二月十日 ○ (秀吉朱印)

安国寺

小早川左衛門佐とのへ

(『大日本古文書 家わけ 第十一』 小早川家文書之一)

20 天正十五年十二月十日

豊臣秀吉朱印状

九州之儀、小西(行長)摂津守罷上申上候趣、一々聞召候、然者和仁・迎春執巻由、寒天与云、別而痛入被思食候、併後之為見懸候間、仕寄を以て資崩候歟、又者重々(鹿藩)塀模雁已下丈夫相付、干殺二成候歟、何之道にも一人も不通様可申付儀専用候事、

一、残城を相拘、一揆於楯籠者、自是御人数被遣、可被仰付候事、

一、国々置目等猥り二候由被聞候之間、乍御遊山不図被成御座、弥御改候て可被仰付候、

来春先為前勢二三万御人数被遣、残党一々可被刎首相定候条、可被得其意候事、

一、取巻衆兵無之者ニハ、申上次第可被下候間、可成其意候也、

(天正十五年)
十二月十日 ○ (秀吉朱印)

(宗茂)
立花左近将監とのへ

(『玉名市史資料編五 古文書』 立花文書)

21 天正十五年十二月十日

豊臣秀吉朱印状

(親実) (親行)

九州之儀、小西摂津守罷上申上之趣、逐一聞食候、然者、和仁・辺春執卷由、寒天与云、別而痛入被思食候、併後々為見懲候之間、以仕寄資崩候歟、又者重々屏模雁已下丈夫相付、干殺成歟、何之途にも、一人も不通様可申付儀、專要候事、

一、残城を相拘、一揆於楯籠者、自是御人数被遣可被仰付事、

一、国々置目等猥二候之由被聞候之間、乍御遊山、不図被成御座、改御改候て可被仰付候、来春先為前勢二三万御人数被遣、残党一々可被刎首相定候之条、可得其意事、

一、執卷衆兵糧無之者二ハ、申上次第可被下候之間、可成其意候也、

(天正十五年)

十二月十日

(秀吉朱印)

(直茂)

鍋島飛騨守とのへ

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 鍋島文書)

22 天正十五年十二月十日

豊臣秀吉朱印状

九州之儀、小西摂津守罷上、申上之趣、逐一聞食候、然者、和仁、辺春執卷由、寒天与而別而痛入被思食候、併後々為見懲候之間、以仕寄資崩候歟、又者重々屏模雁已下丈夫相付、干殺成候歟、何之途にも、一人も不通之様可申付儀、專要候事、

一、残城を相拘、一揆於楯籠者、自是被遣御人数、可被仰付事、

一、国々置目等、猥二候之由被聞候之間、乍御遊山、不図被成御座、弥御改候て可被仰付候、来春為先勢二三万御人数被遣、残党一々可被刎首相定候之条、可得其意事、

一、執卷衆、兵糧無之者二ハ、申上次第可被下候之間、可成其意候、次其方所勞得驗氣候由、被聞召候、尚以無由断養生肝要候也、

(天正十五年)

十二月十日



(秀吉朱印)

竜造寺民部太輔とのへ

(〔佐賀県史料集成古文書編 第三巻〕 竜造寺家文書 第十一軸)

23 天正十五年十二月二十四日

佐々成政書状

度々預御使札候之處、余無沙汰之条、令啓達候、仍当表之様子、和仁・山鹿一着之響以所々懇望仕候間、令赦免属一篇候、自然相支儀於有之者、從京都御人数早速可被差下之旨、追々被仰下候、隨而仕置為調談、安国寺其外中国衆歴々、到隈本被相越候之間、令懇談候、弥可為平均候、委曲自西堂可被仰入候、恐惶謹言、

(天正十五年)

十二月廿四日

(佐々)

成政(花押)

(義弘)
嶋津兵庫頭殿

人々御中

〔玉名市史資料編五 古文書〕 薩藩日記雑録後編卷二十一

24 天正十五年十二月二十七日 豊臣秀吉朱印状写

去十四日書状、昨日廿六至大坂到来披見候、城井表付城丈夫申付中、豊前野中家来挿籠候、犬丸城吉兵衛尉取巻則時實崩、数百人討果、首進上候、別而被悦思召候、吉兵衛尉雖若輩候、入精候故、早速令成敗儀神妙候、其方仕たるよりも満足ニ可存と被思召候、為御褒美吉兵衛尉ニ御秘藏之御馬被下候、相殘二ヶ所城、吉川其外婢元人数申取巻由、尤雖可為辛勞候、弥可入精候、次肥後表之儀、和仁・辺春城實崩悉刎首候、彼一類首到来候、然者過半雖一篇候、御置目等為可被仰付、御人数貳万余、来正月廿日被差遣候条、其刻以御一書可被仰出候間、存其旨、諸事可申付候也、

(天正十五年)
十二月廿七日 (秀吉公御朱印)

(孝高)
黒田勘解由とのへ

〔玉名市史資料編五 古文書〕 黒田文書 東京大学史料編纂所藏謄写本)

25 天正十五年十二月七(二十七。)日 豊臣秀吉朱印状写

今度至肥後国早速相動、小早川相談、和仁(親実)(親行)・辺春悉令誅伐段感思召候、寔粉骨儀無比類候、然者彼国殘党被逐御札明為可被仰付、来正月廿日為上使貳万余被仰付候条、可成其意候、猶小早川左衛門佐可申候也、

(天正十五年)(廿七カ)
十二月七日 (関白朱印)

(宗茂)
立花左近將監とのへ

(広門)
筑紫左馬頭とのへ

(直次)
高橋弥七郎とのへ

〔玉名市史資料編五 古文書〕 立花文書)

26 天正十五年十二月二十七日 豊臣秀吉朱印状

今度至肥後国早速相動、小早川相談、和仁(親実)(親行)・辺春悉令誅伐段、感思召候、寔粉骨儀、無比類候、然者、彼国殘党被逐御札明、為可被仰付、来正月廿日為上使貳万余被仰付候条、可成其意候、猶小早川左衛門佐可申候也、

(天正十五年)
十二月廿七日 ○ (秀吉朱印)

(統虎)
立花左近將監とのへ
(広門)
筑紫左馬頭とのへ
(統増)
高橋弥七郎とのへ

〔大日本古文書 家わけ第十一〕 小早川家文書之一

27 天正十五年十二月二十七日 豊臣秀吉直書

去六日書状、昨日廿六日、於大坂加披見候、

(親実) (親行)

- 一、和仁、迎春事、一人も不通可刎首旨、被仰出候処、即時討果、彼等一類四人首差上候、誠粉骨段、感悦不淺候、殊其方精入付而一着儀、為向後尤之儀候事、
- 一、於宇土忠節之族、申越候通、被聞召候、追而可被加御意候事、

(兼元)

- 一、有動事者、今度一揆張本人儀候間、悉可被加誅罰候条、一人も不漏候様可申付候、然者、肥後国人科之輕重、其外知行方、為御札明、人数二万余、正月廿日可罷立旨、早最前被仰出候、今以同事候、相越上使次第、遂相談、有動可刎首候、但百姓として、有動一類首をきり出候二付てハ、百姓之儀者可被助置候歟、猶御上使二可被仰合候事、
- 一、阿蘇事、神主若輩候間、下々獲可有之与被思食候、是又上使相談、遂札明、一揆張本人成敗候者、をのつから不可有異儀候事、
- 一、肥前西目者共事、申越候通、具被聞召候、被迷御札明、可被仰付候間、成其意、竜造寺申談、弥不可有緩候、是も今度被遣候もの与被申談、遂札明、それへ二可被申付事、肝要候事、

(直茂)

(統虎) (広門) (直次)

- 一、竜造寺同鍋嶋精入由、神妙被思召候、則被遣、御朱印候、立花、筑紫、高橋かたへも被成 御朱印候事
- 一、猶以、逆意之族尋搜、悉可有成敗候、国郡荒候ても不苦候之間、逆徒之儀者不及申、今度精をも不入、出陣をも不仕、世間之鉢見合候族共、悉為可被加御成敗、御人数被遣候間、被得其意、上使遂相談、可被申付候、寒天之刻、辛勞痛入候、併先手二も被居候へハ、難遣儀候之間、弥可被入精事專一候也、

(天正十五年)

十二月廿七日 (秀吉花押)

小早川左衛門佐とのへ

〔大日本古文書 家わけ第十一〕 小早川家文書之一

28 天正十五年十二月二十七日 豊臣秀吉朱印状

(隆景) (親実) (親行)

今度至肥後国早速相動、小早川相談、和仁・迎春悉令誅伐事、感思召候、寔粉骨段無比類

候、然者彼国残党被逐御札明、為可被仰付、来正月廿日、為上使貳万余被仰付候間、成其意、西郷事、弥不通様堅可申付候、不可有由断候也、

(天正十五)
十二月廿七日 ○ (秀吉朱印)

(直茂)
鍋嶋飛騨守とのへ

(〔五名市史資料編五 古文書〕 鍋嶋文書)

29 天正十五年十二月二十七日 豊臣秀吉朱印状

今度、至肥後国差遣鍋嶋飛騨守、精を入故、和仁、迎春早速誅伐段、感恩召候、彼国残党被逐御札明、為可被仰付、来正月廿日、為上使貳万余被仰付候条、成其意、西郷事、弥不通様堅申付、可刎首候、不可有由断候也、

(天正十五年)
十二月廿七日 ○ (秀吉朱印)

竜造寺民部太輔とのへ

(〔佐賀県史料集成古文書編第三巻〕 竜造寺家文書 第十一軸)

30 (永禄八年以降) 由布美作入道雪下大神惟信戰場覚次第

油布美作入道雪下大神惟信戰場覚次第不同

永禄八年五月 永禄十一年四月廿四日

一、筑前国立花

一、天正七年三月始
同好士岡

一、天文十五年 永禄十年
同秋月 古所山

一、天正七年十月下旬
同石垣山麓

一、永禄十年七月七日
同電門山麓

一、永禄十年九月三日
同休松

一、同宝満

一、永禄十二年五月十八日
同長尾

一、永禄十年八月十四日
同生松原 葦屋合戦トモ云

一、永禄十二年七月廿八日
同多々良浜

一、同八岳

一、同高浜

一、天正七年八月中旬ヨリ
同箱崎

一、同賀摩郡

一、天正十一年
同穂波郡

一、天正七年十月十一日
同太宰府

一、(荒味)
同葱平

- 一、同早良
- 一、同田藏筑前
- 一、同粥田庄
- 永祿十二年六月廿二日
- 一、同鳥飼
- 一、同長者原
- 天正十年十一月
- 一、同石坂
- 一、同九山段
- 一、字美
- 一、須古
- 一、高国府口 国不知但肥後
方、後ノ巻入
- 一、豊前国千手
- 永祿元年六月
- 一、香春城
- 天正十二年四月十二日
- 一、武藏 筑前
- 弘治三年 肥前
- 一、五箇山城 筑紫惟門
- 天正八年十月上旬十一月迄
- 一、岩戸 筑前
- 天正十二年八月中旬
- 一、黒木猫尾城 筑後
- 一、城嶋 同
- 天正十三年四月十八日
- 一、明見
- 一、筑後川
- 一、井上 同
- 一、肥前神崎
- 天正十一年
- 一、同清水原 小金原合戦トモ云
- 天正十(調略)
- 一、同潤野原
(ママ)
- 一、同九条
- 一、同庄内
- 天正十四年八月廿五日
- 一、同高島居
- 一、同鷲岳
- 一、同石栗岳
- 一、同桑古
- 一、嶽摺
- 天文廿三年十月三日ヨリ
- 一、同豊前大妻津柳浦 毛利
- 同(調略)
- 一、小能
- 一、木原 国不知
- 天正十二年四月十六日
- 一、久辺野 同
- 天正十年二月十日
- 一、山戸 筑前
- 一、山下 筑後
- 一、高尾 同
- 一、西牟田 同
- 一、草野 同
- 天正十二年十月四日
- 一、発心岳 同
- 一、違手村 肥前
- 一、筑後国耳納山

- 天文十七年 (ママ)
- 一、筑前国許斐城 一、肥後車返 菊池一族赤星隈等
- 一、肥後国有勳 一、肥後和仁

- 天正十五年
- 一、同大田黒 一、鷹取 筑前

右六十五ヶ処、此外於ニ所々ニ場数不_レ及_レ印_ニ、感状有_ニ数通_一、被_レ疵事六十五ヶ所也、
 (〔玉名市史資料編五 古文書〕 由布文書)

31 天正十六年一月十九日 豊臣秀吉朱印状

去十二月九日書状、於京都披見候、肥後和仁・辺春令誅罰之趣、被聞召候、誠抽粉骨付而、
 早速属平均、悦思食候、先書如被仰遣候、為御上使四国之者共、浅野彈正少弼・加藤主計
(長吉) (清正)
(行長)
 頭・小西以下被差遣候条、各迷相談、弥無由断、可入精事專一候也、

(天正十六年)
 正月十九日 (秀吉朱印)

(直茂)
 鍋嶋飛騨守とのへ

(〔玉名市史資料編五 古文書〕 鍋嶋文書)

報告書抄録

ふりがな	たなかじょうあと							
書名	田中城跡 X I							
副書名	10年間の調査報告							
巻次								
シリーズ名	三加和町文化財調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	黒田裕司							
編集機関	三加和町教育委員会							
所在地	〒861-09 熊本県玉名郡三加和町大字板桶76 TEL 0968-34-3111 内線55							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 みかわまちおおあざ 三加和町大字 わにあざふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	19860801 ～ 19960331	約8,000	整備に伴う範囲および遺構の事前確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田中城跡	城館	戦国時代 末期	掘立柱建物跡・ 欄列・空堀・連 棟式兵舎跡・石 倉・石切り場・ 井戸跡など			10年間の調査で 様々な遺構・遺 物が確認された。 なかでも「辺春・ 和仁仕寄陣取園」 の信憑性が高まっ てきたことと、 石倉など新たな 遺構の確認が目 される。		

あ と が き

平成8年度は、短期間の調査を行い、それと並行しながら10年間の調査報告をまとめようと、はりきって新年度を迎えたが、調査の方が思わぬ展開になってしまい、途中から大それた考えをしてしまったと後悔するようになってしまった。

いろいろ考えてはいたが、過去の報告書の再録を中心にする羽目になってしまい、特に陶磁器については大田先生に原稿をいただいたが、その他の遺物については、全く手付かずの状態となってしまった。いつになるかはわからないが、まとめる必要性を痛感している。

田中城跡の調査と整理に関して、専門調査委員の先生方をはじめ、多くの方々にご協力をいただいているが、ご期待にそえなかったと反省しているところである。

(黒 田)

三加和町文化財調査報告 第11集

田 中 城 跡 XI

1997年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会

〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー

〒862 熊本市鹿畑瀬町496-1

この電子書籍は、三加和町教育委員会が発行した『三加和町文化財調査報告 第 11 集 田中城跡 第 11 巻』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

菊水町と三加和町は、西暦 2006 年に合併して和水町となりました。調査記録及び出土遺物は、和水町教育委員会が保管しています。

書名：三加和町文化財調査報告 第 11 集 田中城跡 第 11 巻

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠 76 番地

TEL 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024 年 2 月 28 日